THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附錄號

第廿五年 第四號

此廣告により御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

歐米に於ける最近流行の空中飛行機は日本に於ける紳士貴婦人の愛用せるダイヤモンド入人身裝飾の如く流行せり

今般新荷着ダイヤモンドは純白色にして無疵なり

價格壹個に付

金百八拾圓より

金壹千五百圓まで

外に金參拾圓以上各種

東京市京橋區八官町

小林時計店

電話新橋一〇〇三



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

クツとカバン

●●市内は御一報次第店員參堂御用向を伺ふべく●●●

安心の出來る
クツとカバンは
アヲキに限る

●●地方は御注文次第早速定價表發送仕るべく候●●●

東京市京橋區南傳馬町二丁目

アヲキ商店

電話本局一三八二番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

[illegible]にして本誌は實に其噴火口なり

本誌の如く活氣の横溢せる文學雜誌他に在りや

藝文第壹年第壹號　四月一日發行（本號に限り特價金貳拾錢）

要目

發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　開成館出版部　【振替貯金口座】東京五[illegible]番

大賣捌所　東京堂、東海堂、北隆館、其他各地書店雜誌店

本誌には會員外者の作品をも掲載すべし

[illegible]店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

●世界名著の好譯本出づ●

新渡戸稲造先生新著

ファウスト物語

洋裝全一册定價金壹圓七十錢　内地小包送料金十二錢　清韓小包料金三十六錢

●菊判形　美麗箱入天金裝釘頗優雅　口繪原色版挿畫十二葉コロタイプ印刷

本書は世界の文豪ゲーテの一代傑作ファウストを博識宏才なる新渡戸博士が譯述せられたるものにして特に佳句妙文は一々之れを優雅なる邦語にして流麗明晰而かも能く原著の精神を傳へ又その大思想を捉へ來つて縱横に論評す實に博士獨特の平易にして機智に富める文章は趣味津々として紙上に横溢し毫も飜譯物語の感なく婦女老幼と雖も開卷一讀手を離す能はざるべく此世界的大著を吾讀書界に紹介し悉くして些の餘す所なし今や陽春駘蕩の候に方り效に新を粧凝らして江湖に見ゆ冀くは諸賢の一讀を賜らんことを

●發行所　東京市日本橋區鐵砲町角　振替口座東京一二五五〇番　合資會社　六盟館

●賣捌　杉本、目黑、榊原、其他全國各書店

綱島榮一郎著　ポケット總布綴美本

古今漢文評釋

定價金六拾五錢　郵稅金六錢

文聲一世に高かりし我梁川先生が古文眞寶を主として古今和漢名家の漢文の粹を蒐めて之に評釋訓讀を加へたるもの即ち是也先生が平常を知るもの本書が群を拔いて異彩を其取材の撰擇と評釋に放ちたる他の企て及ばざるものあるを信ずべき也先生が文才に私淑せる諸君は勿論文學の士の逸すべからざる和漢作文の良參考寶典也加之釘裝輕便美麗にして散策の好伴侶として又絶好の書也乞ふ愛讀を玉へ

發兌　東京京橋區中橋廣小路　大阪市東區北渡邊町　杉本梁江堂（振替口座東京二八二三番）

綱島梁川遺稿完成廣告

我觀錄　箱入布綴　口繪二葉　壹圓廿錢　小包料八錢

寸光錄　箱入布綴　口繪一葉　壹圓廿錢　小包料八錢

病窓雜筆　箱入布綴　口繪二葉　金壹圓　小包料八錢

書簡集　上巻　下巻　箱入布綴　口繪各二葉　一冊金一圓十錢　小包料各八錢

歐洲倫理思想史　總クロース綴　菊版四百頁　金一圓五十錢　小包料八錢

發兌　東京京橋區中橋廣小路　大坂市東區北渡邊町　杉本梁江堂（振替東京二八二三番）

今後の讀賣新聞

◎文學哲學科學美術等に關する記事論文常に紙上に滿載せらる

舊藩と新人物

（四月一日より連載）黑頭巾

著者獨得の取材法に依り立論正大に文字絢爛たり

◎お伽脚本 **小公子** 巖谷小波

（三月廿五日より掲載）

明治七年創刊以來新聞界の老舗として幾多の特色を有せる我讀賣新聞は今春來家庭及學校之敎育なる一欄を設けたるが今般更に此種の記事を擴張せん爲め前文部次官澤柳政太郎君に敎育顧問巖谷小波君に家庭顧問を囑托せるのみならず大に紙面を刷新して記事の正確嚴正を期せん爲め富井梅高田の三博士に乞ふて編輯上の評議員とし且つ法、理、文、工、醫、農等の專門博士及大家數十氏を贊助者として各方面の協力を得る事となれり讀者乞ふ其材料の如何に豐富にして趣味の如何に多方面なる乎を見よ

▲近日より連載の物別記の如し

日曜附錄

面目一新。評論創作悉く文壇の珍

◎長篇小說『家』島崎藤村 目下掲載中

五面六面

讀賣新聞の五面六面は趣味の頁也文學科學宗敎園藝詩歌名流の消息碁將棊其他一般の娯樂細大洩さず

通俗 育兒談

醫學博士弘田長氏は小兒科の泰斗にして通俗講話の名人なり兒を愛する者は之を讀まざるべからず

續きものは溯りて御注文に應 見本進呈

定價一ヶ月卅五錢郵稅十五錢三月稅共壹圓四十五錢

發行所 東京銀座一丁目一番地 讀賣新聞社（振替口座六壹貳番）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

絢爛櫻花を壓す

文藝倶樂部

四月一日發行　第五號　正價廿五錢　税二錢半

● 調子の變つた女　臥牛山人
● 魚河岸の隱れたる職業　秀峰子
● よし原の夜の物賣　胡蝶園
● （大阪）帝國座側面觀　贅七
● 樂屋談語　黒法師
● 落花樓禪記　魯洒奈佛

■ 小説　痕……山崎紫紅
■ 小説　奉公人……小山集川
■ 喜劇　役者きらひ……松居松葉

● 豆腐屋の裏面　迎生
● 上野の茶店　本田齡成
● 花見の仕度（新流行）　近藤蕉雨
● 講談　義兄弟　田邊南龍
● 落語　夢屋　三遊亭圓橘
● 募集落語　古代雛　歌舞丸

（東京本町）　博文館發行　（振替貯金口座二百四十番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BUMMEI-DO & CO.

ENGLISH, JAPANESE BOOKS & STATIONERIES

1750 Sutter Street, S. F., Calif., U. S. A.

Books by Mail. To any portion of Japan. Please remit with order for prompt attention.

The following is a list of the books published by American Academy of Political and Social Science. By Mail, $1.10 each :—

1. The Improvement of Labor Conditions in the U. S. (May, 1906)
2. The Business Professions (July, 1906)
3. Woman's Work and Organizations (September, 1906)
4. Municipal Problems (November, 1906)
5. Railway and Traffic Problems (March, 1907)
6. Child Labor (January, 1907)
7. Tariffs, Reciprocity and Foreign Trade (May, 1907)
8. American Colonial Policy and Administration (July, 1907)
9. Bonds as Investment Securities (September, 1907)
10. Social Works of the Church (November, 1907)
11. American Waterways (January, 1908).
12. Lessons of the Financial Crisis (March, 1908)
13. Control of Municipal Public Service Corporations (May, 1908)
14. Federal Regulation of Industry (July, 1908)
15. Tariff Revision (September, 1908)
16. Regulation of the Liquor Traffic (November, 1908)
17. Industrial Education (January, 1909)
18. Labor and Wages (March, 1909)
19. Conservation of Natural Resources (May, 1909)
20. Race Improvement in the United States (July, 1909)
21. The Chinese and Japanese in America (September, 1909)
22. American Business Conditions (November, 1909)

書　　肆

文　明　堂

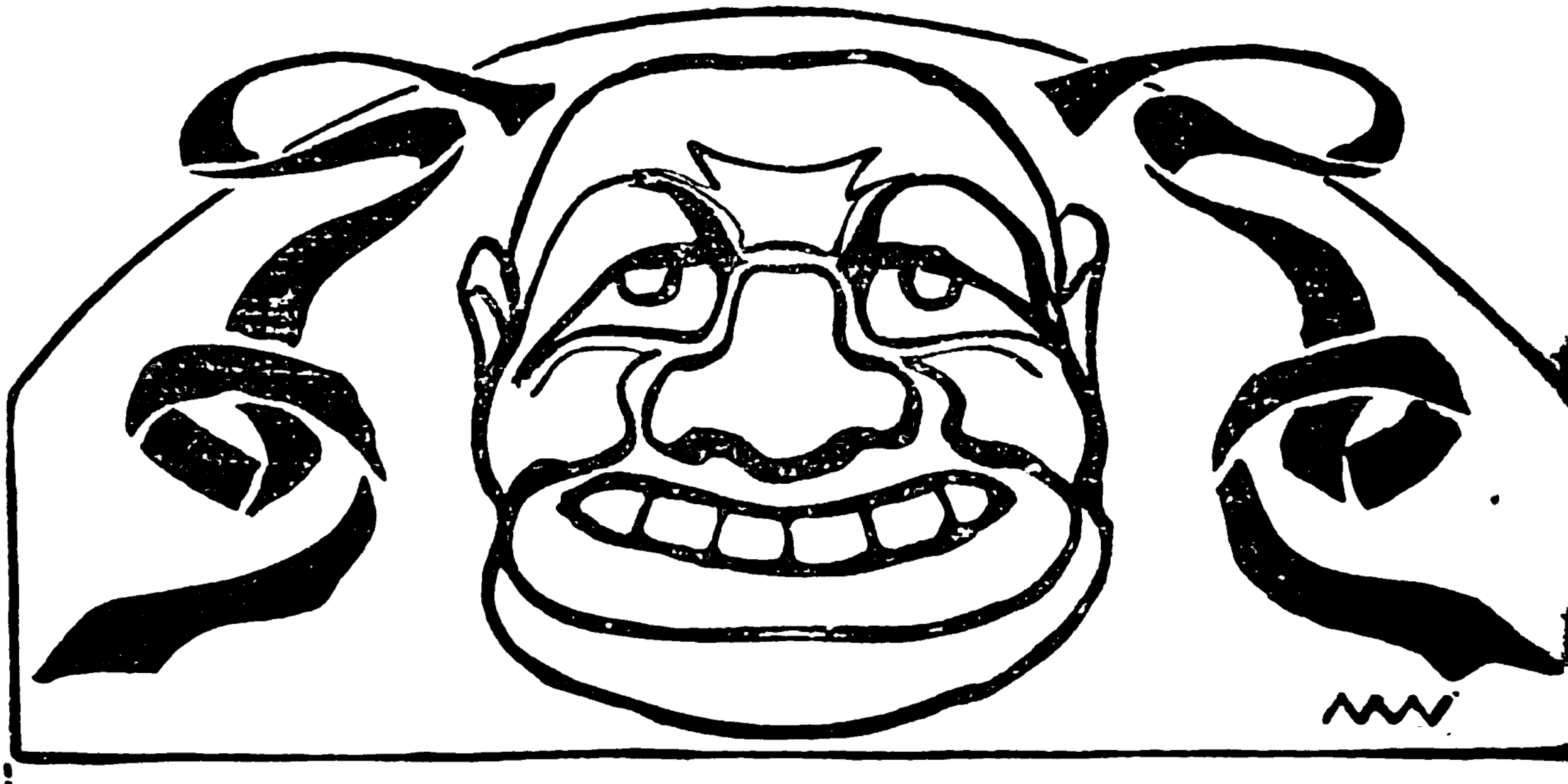
米國加州桑港サター町一七五〇

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



(色の二)

中央公論第廿五年第四號春期大附錄號目次



松林伯知口演

徳川榮華物語

前篇（松の巻 竹の巻 梅の巻）
後篇（櫻の巻 藤の巻 菊の巻）
續編（椿の巻 萩の巻 楓の巻）

定價各冊金五拾錢〇郵税各冊六錢

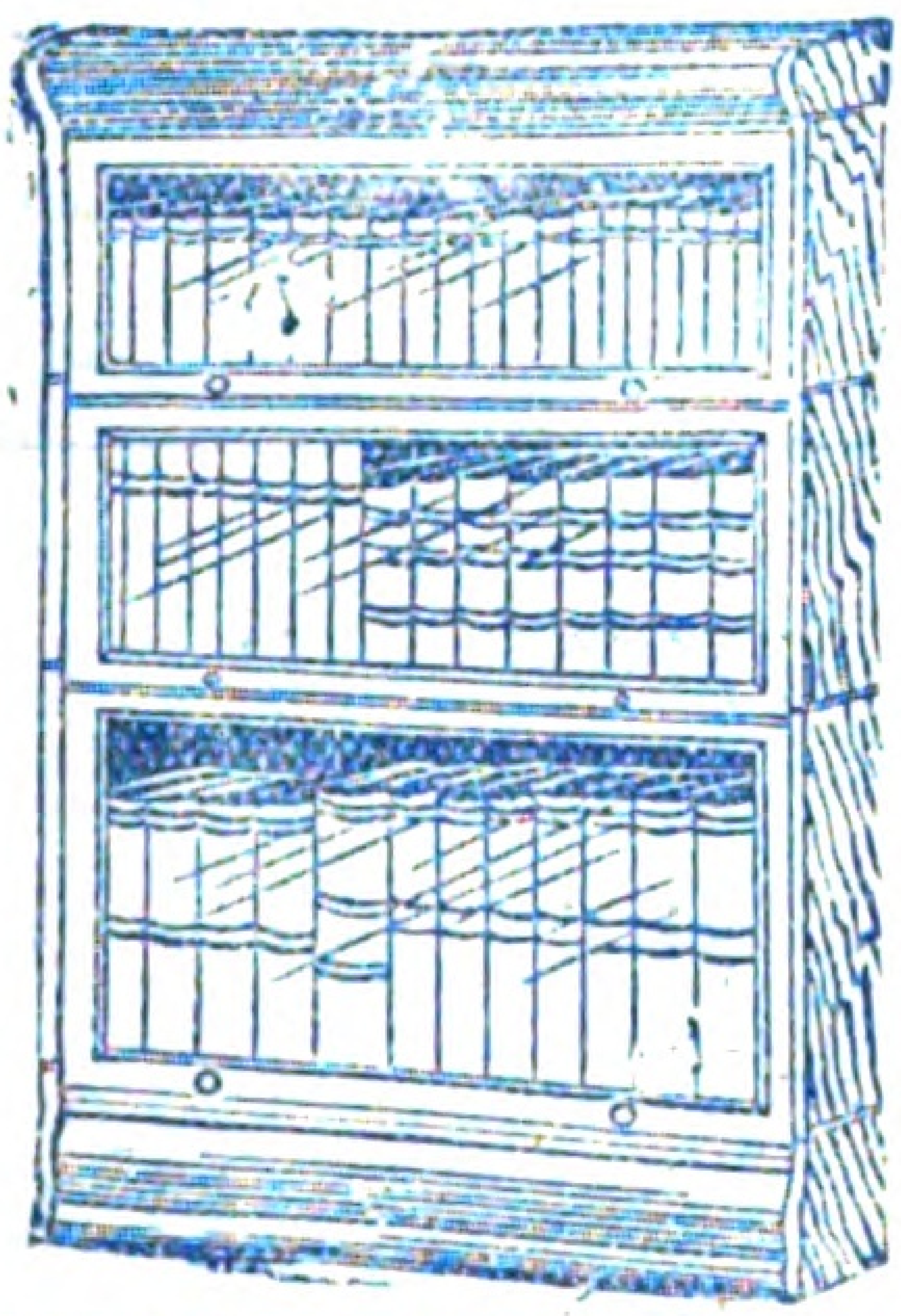
（色の四）

組合セ本箱（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナルブックケースよりも數等進歩したる者にして其特徴左の如し

〇材料は櫻欅ナラ樫等を精選し堅牢此上なし〇形狀は優美にして色彩美麗〇在來の本箱と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり〇壹組の組合本箱は積み重ねたる三ヶの段函とトップ（屋根）ベース（脚底）の組合せより成る〇藏書の增加に從ひ段函の數を增加してこれを上部に積み重ね四段五段の本箱と爲すことを得

一組（總高サ三尺九寸五分、奥行九寸四分、間口三尺櫻製金參拾圓欅製金貳拾八圓、ナラ樫製金貳拾六圓荷造費各壹圓地方運賃御自辨



理想のデスク（本箱と机の兼用）

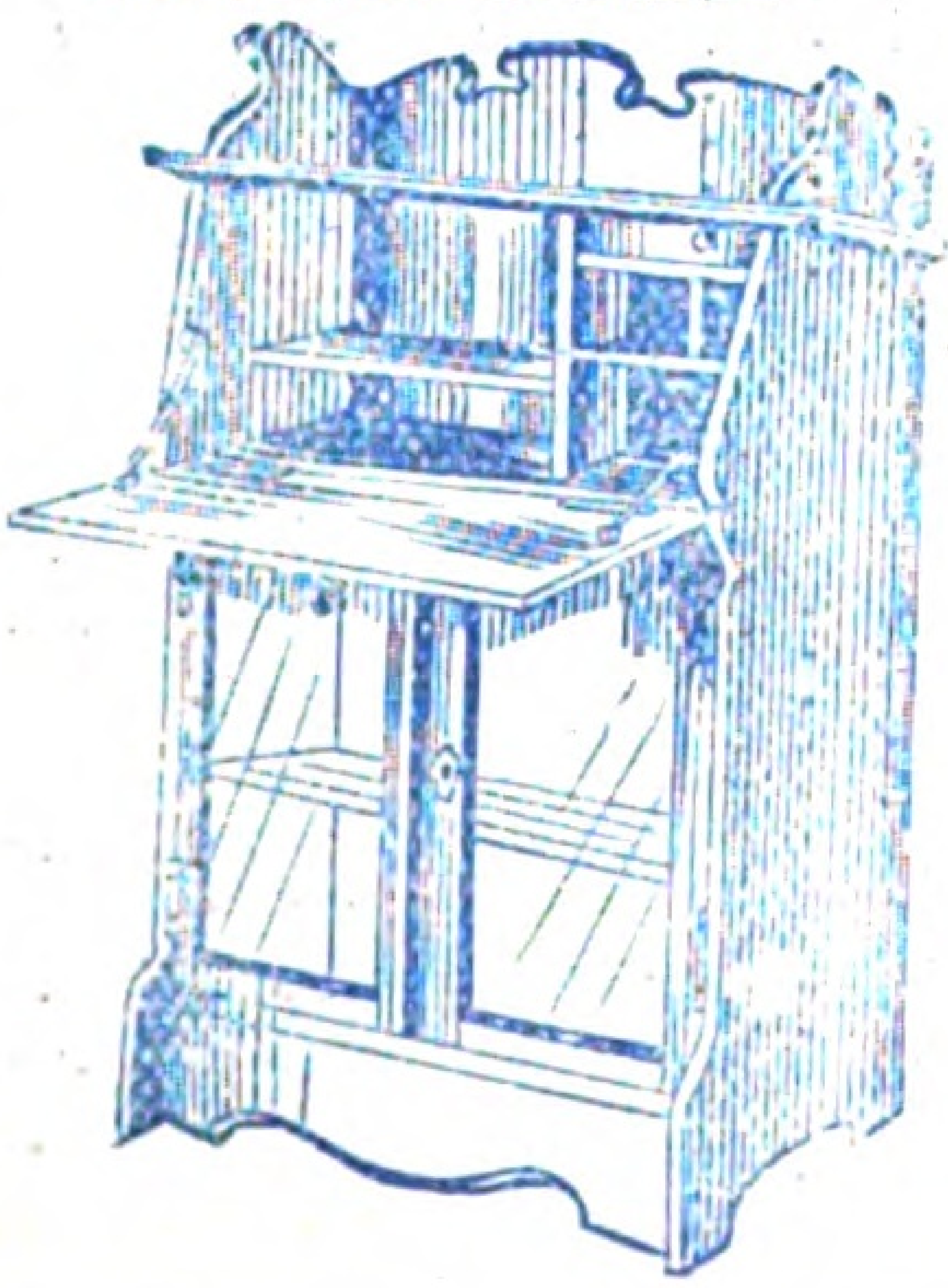
〇本箱一個の價を以て机をも併せ得らるゝ者なれば最も經濟的也

〇上部本棚の戸は開閉自由にして開けば机板となり、用終りて閉づれば元の戸となる故、如何なる狹小の場所にも用ひられ室内面積上の經濟最も大なり

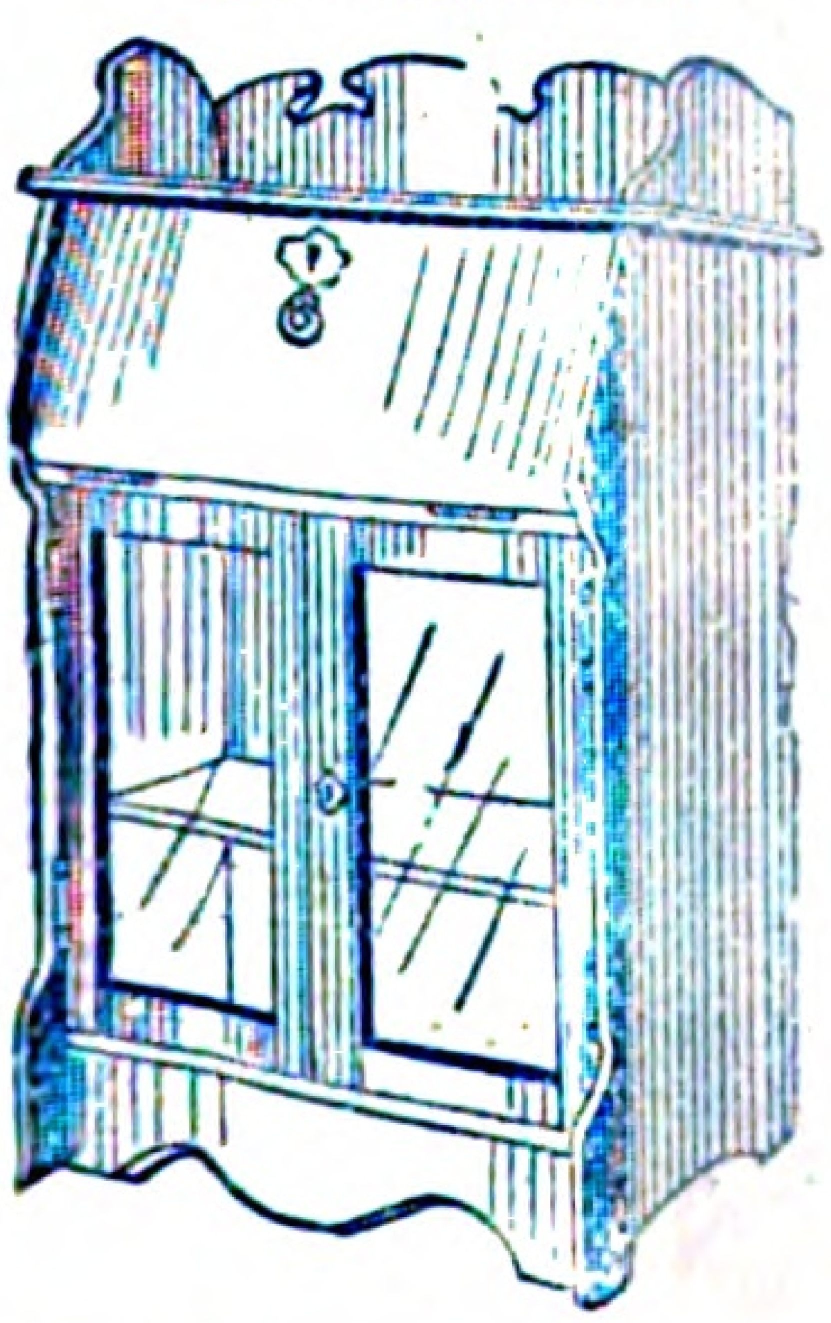
〇本箱に藏するものは机上に備ふると同じき故、日常必要の書冊帳簿書信材料其他一切の物を最も手近に排置し得て之を他より持來る勞と時とを節する事著し

〇實用的なると同時に色形狀頗る美麗にして優に室内裝飾たるに足る

〇一個高サ四尺四寸、奥行一尺、間口二尺二寸、櫻製紫檀塗金貳拾圓ナラ樫製ラック塗金貳拾圓ショージ製ラック塗金拾七圓荷造費各壹圓參拾錢地方運賃御自辨



（本箱と机に兼用の圖）



（本箱に專用の圖）

各種本箱製作の御注文に應ず

東京銀座大通新橋際（電話新橋三六七七 振替貯金口座二百番）

新橋堂書店 發賣

Innocence or a Girl with Doves.



By JEAN BAPTISTE GREUZE.

中央公論



第二十五年第四號
春期大附錄號
第二百五十三號

政黨界の分野

（一）

今春の政治期節の極めて平板なる間に於て、多少世間の注目を惹けるは、政派の離合これなるべし、曾て新政黨合同の計畫屢々試みられて屢々敗れたりしが、又新會の所謂十一人組なるもの先づ分れて無名會を組織するや、進步又新の合同談切迫すると共に、大合同論また內部に行はれ、兎角する間に大同俱樂部の全部と戊申俱樂部の大半と無所屬の數人と合同して中央俱樂部を組織せるより、黨海の波動甚だ激しく、戊申俱樂部に殘れる土佐派の斡旋に由て、進步黨、無名會の全部と、又新會の一部分と戊申

倶樂部、無所屬の殘部と相合して、立憲國民黨を成立せしめたり、其の全部を纒めて寸分の別離を見ざりしは唯だ進歩黨と大同倶樂部とのみにして、戊申倶樂部と又新會とは幾んど七花八裂し去りたるが如し

即ち又新會よりは國民黨、政友會中央倶樂部に入れるものと、殘存して舊又新會と稱するものとあり、戊申倶樂部よりも中央倶樂部、國民黨政友會に赴むき、又無所屬に入れるものあり、隨つて衆議院に於ける現在の黨派別は下の如し

政友會	二〇四人	立憲國民黨	九二人
中央倶樂部	五十人	舊又新會	一八人
無所屬	一五人	計	三七九人

此の黨界の分野は、斯くして定まれりと謂べき乎、若し動搖不定ならば、竟に如何か定まるべき乎。

（二）

曾て計畫せられし新政黨合同の失敗したる主なる原因は、素より犬養氏處分問題にあり、當時進歩黨の中に在ても、新政黨合同に贊成するもの實に多數なりき、故に若し穩かに合同の勢ひを進め犬養氏が餘儀なく隨ひ來るか、若くば自ら脱會し去るに任せたらば、代議士の大多數も、地方支部の幾んど全部も、皆合同を助成したりしなるべし、事茲に出でず、何等理由の明白なるもの無くして咄嗟に犬養氏を除名し、痛く天下の同情を喪へるがため、形勢は全く一變したりき、犬養氏を處分したりし目的は、素より

犬養氏の性質の狷介なる、各派の領袖に忌まれて、痛く其の指彈を受け居たるが故に、之を斬て以て各派の感情を融和し、以て合同の成立を容易ならしむるに在りしと論を待たずと雖も、犬養氏の在ると否とは、未だ必らずしも合同の成否に主要なる關係なかりしは蔽ふ可らず、當時犬養氏は孤立無援の地位に立て、殆んど如何ともす可らざる境遇に在りたれば也、合同を悅ばずんば、自から脫會し去るの外なき狀態に在りたれば也、且つ犬養氏の如き改進黨創立以來の元老にして、常に黨の領袖たりしものに加ふるに、政治的生命を絕つに均しき除名を以てする場合に於ては、天下萬人を首肯せしむべき明白なる理由を具へざる可らず、何人をしても、洵に除名の外なき所以を納得せしむるに足るの事情を明かにせざる可らず、唯だ曾て政敵たりしものと合同するがため、其の感情を好くせんとして、無造作にも黨の元老たる首領に加ふるに、最大懲罰たる除名處分を以てす、苟くも義俠自ら許すもの、如何ぞ之を默止せんや、進歩黨の地方支部員は殆んど總て蹶起反抗したりき、而して犬養氏に隨ふもの事實五六人に過ぎずと視られし豫測は全然外れて、却つて四十人近き過半數以上なりき、而して天下の同情も亦擧げて犬養氏に歸したるがため、又新會中の非合同論者たる十一人組は、極力合同を妨害して、竟に又新會を掣肘し得たりき、又新會が自から合同の媒介を爲さんとして而して成らざりしは、實に此のためならずや、

（三）

犬養氏處分者たりし大石氏等が、形勢の飽くまで非なるを視て、竟に隱忍して犬養氏に降伏し、進歩

黨中の融和を求めて擧黨一致の態度を取りたるは天下の齊しく同情を吝まざりし所、形勢も亦實に一變化を來せるや論無かるべし

犬養氏は流石に作戰に巧妙にして、彼の大同倶樂部及び其の一味に冠するに官僚なる名稱を以てしたりき、今更藩閥黨と稱するのも餘りに陳腐なるを思ひ、更に新らしき官僚黨なる名稱を撰びたるは智と謂べし、蓋し官僚なる名稱の無意義にして識者の一笑に附する所なるに拘らず、世上の多數は尙ほ此の名を喜びて而して官の名を好まざる俗情を脫却するに至らず、殊に新聞紙の如き好みて此の官僚の名を用ふるがため、犬養氏の作戰其の圖に中り、其の一味は、大同倶樂部の一連をも包容するを以て、官僚黨に擬する所以なりと揚言して、以て豫め大合同の起るを防止せんと努めたりき。現に河野氏島田氏の如きすら、屢々官僚黨たるの稱呼を冠せらるゝに至りし也。

大合同論者が官僚黨なる名稱を浴せられて屛息せるに乘じ、一擧して進步又新の兩黨を合同せしめて、所謂純民黨なるものを作らんとしたるものあり、又新會中の所謂十一人組なるもの是れ也。

彼等十一人組の中には、坂本金彌氏の如き眞に純民黨と自信して、必らず所謂官僚一派と鬪はざる可らずとするものあり、其の思想陳なりと雖も、操貞の堅實なる言を要せずとす、別に進步黨に入らざれば撰擧區との關係上其の立場を失するものあり、又坂本氏の庇護を受けたる恩誼上、必らず氏と進止を同くせんとするものあり、相率いて進步又新の合同を行はんとしたるが、又新會中には、素より大合同を欲するもの多し、即ち單に進步黨のみならず、大同、戊申の兩倶樂部をも包容して以て一大黨を作らん

とし、前期議會中また之を企てたりしも、犬養派の巧妙なる作戰と、此の十一人組とに妨害せられて果さゞりしかば、今や十一人組の計畫に對しては、寧ろ之を阻止する情勢なりき、蓋し又新會員の如き議論を好みて而して名分に拘泥するものは、純民黨なる名を喜ぶは人に過ぐと雖も、然かも少數黨の能く爲すことなきを知るが故に單に進歩黨のみと合するよりも、寧ろ大合同を望まざる能はず、然れども進歩黨との合同に就ても、之を拒否すべき口實を有することなし、故に一面十一人組の提議を容るゝが如くして、一方密かに大合同を夢想するも、然かも官僚黨なる名に怯ぢて踏躇逡巡決する能はず、其の態度恰かも二心ありて而して曖昧を極むるが如くなりしかば、十一人組の十人は竟に去りて無名會なるものを組織し、盛んに其聲を又新會に放つに至れり

茲に於て又新會は動搖を免かれざりき、河野氏は脱會を提出して又忽ち撤回するが如き窮狀をも暴露したりき

又新會が踏躇逡巡する間に、戊申倶樂部と大同倶樂部とは咄嗟に合同を敢てして中央倶樂部を作れり、二派合同が若し各派合同の階級たりとせば、彼等は稍々其の目的を達したりと視て可なるも、若し大合同に逡巡するものを促がして、茲に走り來らしむるに在りとせば、彼等は失敗者たるを免かれず、彼等に與みせるものは、戊申派の大半と無所屬の數名に過ぎずして、又新會の大合同論者をすら網羅するに至らざればなり

中央倶樂部の成るや、戊申派より之に加はらざりし土佐派は、更に又新進歩の合併に全力を傾注したりき、又新會中の大合同論者は、此の合同の結果、徒らに犬養派の勢力を加へば、却つて大合同の妨害たるべきを掛念して容易に決する能はず、河野氏は意を決して合併に左袒せしも、島田氏一派は然かする能はず、玆に於て島田氏を除外するの議起るや、角田氏强ひて島田氏を勸めて合併に加はらしめ、竟に立憲國民黨を結成するに至れり、然れども大竹氏一派の大合同論者は、全く之に參加せずして舊又新會なる殘壘に據守せり

吾人の信ずる所によれば、土佐派の意向は一方に立憲國民黨を作れると共に、更らに機會を待つて中央倶樂部と合同を策するに在るもの丶如し、故に犬養派の勢力を加へて、却つて大合同の妨げを爲さんといへる掛念に對しては以爲らく、若し大合同の機熟する時、犬養依然として之に反對せば、其の時こそは彼れを除外しても可なるべし、我等は必らず之を斷行すべしと、角田氏の島田氏を說くや、また此の意を以てし、且つ今にして決せざれば更に孤立奈何ともするなき不便の地位に墜つべきを切言したりしといふ

今の黨人、殊に進歩又新一味の人々の弊は、餘りに議論と名分とに拘泥するに在り、然り譬ばしからざる議論と無意義なる名分との悖々焉たるは、彼等に於て拔く可らざる固癖たり、彼等が年を逐ふて其の黨形を縮少するは此のため也、屢々合同を企つるも、また漸を以て一人去り二人去り、折角合同して大を成せるもの何時しかまた元の杢阿彌となりて、始終同一事のみを繰返すは此のため也

既に政治界に立つ以上、全く理想を没却するは非也、然れども政治は議論にあらずして實行也、立憲代議政する言論政治の下に、殊に政黨の必要を見るは、多數の團結を勢力として實行に便ならしむるにあり、換言すれば政黨なるものは、代議政治の議論倒れと爲らんとする弊流を救ふべき一種の實行機關に外ならずとす、若し代議政を以て、議院を以て、言論のみを主とするものとせば、政黨は絶對に之を禁止するに如かず、黨議を以て他の議論を束縛し、多數を以て少數の議論を壓するが如きは、全く議論を重んずる所以の精神に反すれば也、議論を重んずれば、銘々勝手に、思ふまゝの議論を逞しくするに如かざれば也、但だ政治は實行にして、代議政治の動もすれば空論に走るの弊あるがため、議會に政黨を要するのみ、故に既に政黨を作る以上、力めて頭數を多くして以て勢力を大ならしめざる可らず、然るに常に議論にのみ齷齪し、恰かも議論を以て政黨唯一の職分とす、思はざるの甚だしき也、然かも況んや更に陳腐にして而して無意義なる名分に拘泥するをや

此の點に於て政友會は洵に能く政黨存立の大趣旨を解するもの也、彼等は積極主義てふ大旗幟の下に集合し、小異を捨て、區々の議論を止めて力めて頭數を包含し、來るものを待つに重禮を以てし、悦んで其の用を爲さしむ、茲に於て年毎に勢力を加へて今や、衆議院に過半數を領有するに至れり、而して進歩又新の諸黨人が、多年政黨界に生活して未だ此の趣旨を解せざるは、頑迷竟に濟す可らざる乎

若し又新會中の大合同論者にして、眞に政黨の意義を知らば、而して機會を捉ふるの明あらば、彼の十人組の脫會したりしに乘じ、蹶然起つて大合同の提議を公表せしなるべし、會中素より絶對に政黨を

好まざるものあり、此等をも大合同に加へんとするは、猶ほ酸素を炭素に變せしめんとするが如し、酸素は酸素として措て可也、幸ひに大合同を極力妨害せる十一人組の去れる以上、宜しく堂々として大合同論を唱ふべし、大同倶樂部、戊申倶樂部（實業組は或は逡巡すべきも）は勿論、進歩黨中の多數と雖も之を拒むの辭を有せざりしなるべし、犬養派なるもの若し之に反對せば、其の勢力思ひの外に縮小して、僅かに十一人組と共に政界の片隅に孤立すべきのみ、進歩黨の大多數は必らずや大合同に加はらざるを得ざるべし、吾人は又新會の人々が之を斷行するの勇と智とを欠けるを嘆惜す、蓋し大同倶樂部を包容するを以て官僚黨と稱せらるゝを恐れしなるべし、即ち名分に拘泥せし也、嗚呼彼等にして議論と名分とに拘泥する間、到底其の大を成す能はざる也

（五）

立憲國民黨を以て、純民黨と爲すは皮相の見也、淺薄の見也、少くも無意義也、其の代議士が總て國民より撰出せられて國民の意思を代表すべき地位に立つ以上、代議士の組織せる政黨は民黨也、政友會は素より、最も政府に緣故深しと視らるゝ大同倶樂部と雖も亦民黨也、若し野に在りて政府に反對するが故に民黨なりとする乎、然らば則ち立憲國民黨は全く政權を執るの意思なき乎、政黨として多年一日朝に立つの時來らば、純民黨一變して純官黨と爲るべき乎、純民黨なる名稱の無意義なる知るべきのみ

試みに立憲國民黨の顏觸れを看よ、此の顏觸によつて、仔細に其の徑路を討尋せば、所謂純民黨の名の實に適はざるを知るに餘あるべし、吾人は素より一々之れを指摘するの勞を敢てせざるも、所謂純民

黨と稱するの皮相淺薄の見たるや分明なるべし、之を純民黨と稱するが如きは、畢竟天下を愚にする一種の術略か、然らずんば眞の瞶々者流のみ

彼の中央倶樂部は曾て大合同を計畫したりしもの也、苟くも他の許すあらば、而して爲すべくんは、何時にても大合同を爲すものなるや明らけし、隨つて一の疑問も此の一派に存するとなし

立憲國民黨を以て、其の團結鞏固なりとするは、猶ほ純民黨の呼ぶと齊し、其の實に非ざる也、彼等は噴火山上に舞踏するもの也、爆裂彈を抱いて雜魚寢するもの也、非改革派と改革派とは、外和して而して内相和せず、犬養坂本の諸氏と其の股肱腹心の一味は、素より中央倶樂部と合同するを欲せざるべし、然れども大石派を始め、河野氏も島田氏も、仙石片岡の諸氏も皆大合同を欲するもの也。否、仙石氏片岡氏の如きは、大合同の階梯として國民黨の成立を謀れる也、其の向ふ所の一致せざるや知るべきのみ、試みに彼等の發會式に於ける演說に看よ、又公表せる政談演說會に看よ、其の不一致の兆證炳々として掩ふ可らざるにあらずや

然らば則ち立憲國民黨の前途は如何、吾人をして遠慮なくいはしむれば、當分一種の暗鬪を持續すべし、暗鬪とは他なし、大合同派と非大合同派と、互ひに其の勢力消長を爭ひ、互ひに其の領域を擴張するを競ふと是れ也、黨戰に巧みにして而して剛强鐵の如き犬養氏は、不斷不撓の力を以て、一人も多く自家の味方を作るに鋭意すべく、大石氏の一派また勢を按じ機を察して、自派の勢力扶殖に鋭意し、一旦大合同の時到らば、犬養派を除外しても、大多數を率いて大合同を爲さんとを企圖すべし、彼等は斯

くして相鬩ぎ、相爭ふものにあらずして何ぞや、噴火山上に舞踏するものにあらずして何ぞや、爆裂彈を懷きて雜魚寢を爲すものに非ずして何ぞや、今は相擁し相抱きて一黨を成すもの何時粉碎するや實に測る可らず

犬養氏の偏狹なる素より多言を要せざるべし、島田氏去り、河野氏飛び、中村氏（彌六）の除名せられし、各々相當の理由あるべし、然かも多くは犬養氏と相容れざりしが故ならずや、曾て莫逆の交なりし尾崎氏の去れるに至ては、犬養氏の狷介また其の極なりと謂べし、尾崎氏の去らんとする、自から去るべき情勢ありしを否む可らず、然れども犬養氏にして親交を續け、己れを空ふして之を留めば、曾て莫逆の交友たり、尾崎氏と雖ども何ぞ相去るに忍びんや、大西郷の德は、一身を擧げて私學校黨に與へたるにあり、政黨の首領たるもの時に此の精神なかる可らず、己れを全ふするがため、己れの意を徹するが爲め、曾て枉屈する所なきが如きは、理性冷靜といふと雖も、實は狷介の極也、到底黨人たるに適せず、最も黨首の器に非ず、然れども犬養氏自身が、其の南進の意見を包みて露さゞるを視れば、また聊か苟合を主とする所なきにしもあらず、或は傳ふ、犬養氏が新政黨大合同に與みせざるは、桂侯等が黑幕を撤して自から陣頭に立たざるを快しとせざるが故也、侯等出でずんば大合同の到底成らざるを豫斷せし故也と、吾人敢て其の眞僞を知らざるも、侯等の一味淡泊犬養氏と握手を求めば、氏も亦强がちに之を峻拒せざるべき乎、乃ち形勢の推移する處、竟に氏をして飜然として大合同を叫ばしむるに至るなきを必す可らず

若し犬養氏にして頑然として永く大合同を拒否せん乎、再び大石、河野、島田、仙石、片岡の諸氏と

相爭ふや必然にして、國民黨動搖し、延きて政黨界に波紋を生ずべし、其の機會は蓋し次期議會の頃ならん

（六）

政界の觀測者或は謂らく、桂内閣は今期議會に於て政友會と妥協したるを以て頗ぶる不本意とし、次期議會に於ては必らず斷乎たる措置を執るべし、乃ち議會解散を敢てするまた測る可らず、形勢の必逼茲に至らば、政友會の少くも一角に龜裂を生ずるや言を俟たず、而して大合同を促すの機運必らず熟すべしと、中央倶樂部の多數は勿論、立憲國民黨中の大合同派も、亦斯く期待するもの丶如し

桂侯等が陰にも陽にも政友會と握手するを便なりとする間は、政黨界に大なる變化を生ぜんと期す可らず、侯等果して次期議會には政友會と提携を絶つの勇ある乎、吾人は未だ俄かに之を信ずる能はざる也、而してまた之を否定すべき理由をも有せざる也、然れども政黨中には、徒らに坐して侯等の動くを待たず自から進んで形勢を推移せしめ、政友會をして斷然桂侯等に反抗せしむるか、然らずんば侯等をして握手を斷たざるを得ざらしめて、以て政黨界の分野を變化せしめんとするもの絶無ならざるべし、而して是れ次期議會に於て先づ一着に試みらるべき一策なりとす

桂侯等は陸軍大將の軍服を纏ふ以上、輕々しく政黨首領たるを得ざるべし、假令政黨首領たる決心を爲すとも、政友會に入るか、非政友派に入るか未だ俄かに判知す可らず、但だ侯等及び侯の腹心にして非政友派を作らんと欲せば、大合同或は成りて、政友會の一角また來り投じ、茲に政黨界の分野に大變

を呈するも亦知る可らず、此の時に方つて、非桂黨たる政友會が竟に犬養坂本派と握手するに至るも亦測る可らず、政友會の一部には、其一角の必らず崩さるゝ時あるを豫期し、犬養派坂本派と相結んで之れに抗するの策を立て、暗に此の一派を援くるもの絶無に非ず、吾人は次期議會以後に於て、其變化の成行を注目するに多大の興味を覺へざる能はざる也

公論

伊藤公を論ず

池邊吉太郎

私はまだ伊藤公のやつた事蹟をよく知らない。だから伊藤公についてお話をする資格がないものと思つて居る。然し生前には隨分いろ〳〵と言つて居ながら死後に頌德ばかりしても居られない、此頃「伊藤公實錄」といふ本を讀んで多少公の事について考へたこともあるから、お話しいたしませう。

伊藤公の事を書いた結構な本が、將來は澤山出るだらうと思ふが、今日の所では餘り見當らない。「伊藤公實錄」は中原邦平といふ人の著で、中原といふ人は毛利家の歷史編纂掛長で、專ら長州の勤王の事蹟を調べることに盡力して居る人である。此本を讀んで見ると面白いから結尾まで讀んで了つた。けれども此本は名は「伊藤公實錄」とはいふものゝ、いはゞ維新前の長州の運動を主として、其運動と伊藤公との關係を書いたものと認めなければならぬ。維新後の公の事蹟については全く書いて無い。然し此本を讀んで見た丈けでも伊藤公の一生の解釋は多少附くかも知れない。雀百まで踊を忘れずで、若い時に踊つた踊を伊藤公は一生踊つて居たかも知れない。

伊藤公の生れ立ての事から書いてあるが、それを讀むと、日本でこういふ立身出世をした人が外にあるとすれば、それは太閤さんの外にはないと思ふ。太閤さ

んは尾張中村の百姓の家に生れ、伊藤公は長州荷束村百姓十藏の一子、十六七の頃から來原某や桂小五郎の若黨となり、やがて長州の侍分に取立てられ、風雲に際會して到頭總理大臣――昔の關白になつた。元老といふものにもなつた、元老は攝政關白といつてよいかも知れない。尤もこゝに攝政といふのは今の憲法にある攝政でないことはいふまでもない。百姓の子からそこまで立身出世した跡形は實にエライ。太閤さんを除いては日本には餘り例が無からうと私は思ふ。只太閤さんと違つた所は、太閤さんは餘り上手ではなかつたがなか〱機敏な軍大將であつたが、伊藤公は軍の事については全く之を味ふことがなかつた。軍事上の趣味は伊藤公の性質の中に全く缺けて居つたでなかつたかと思ふ。高杉晉作と一所に仕事をする時に一寸兵隊を募つた事がある。一體長州では維新の革命前に自分の藩丈けて一回革命を遂げたものと見えて、萩の士族を外にして、そこいらの若い者共を集め、之を訓練して兵隊として使うた。其中から立身出世したものが比々皆然りだ。伊藤公も此兵隊の中に交りて、自身にも何か小さい兵隊を作つて一寸隊長になつたらしく思ふ。そこで若し伊藤公が軍が好きであつたら、大に軍をしてゐたに違ない。けれども戰場の功名は無いやうだ。馬から落ちたとか、其兵隊が逃げてしまつたとか書いてある。それてとう〱死ぬまで軍隊といふ事に緣はなかつた、之は深く立入つて考へたならば、伊藤公といふ人は、本來勇を好む人でなく、勇者とか剛者とかいはれる方に緣のない人といふ事になりませう。勿論勇氣もないぢやない。然し外の技能と比較して見ると、勇氣の分量がいくらか少かつたらうと私は信ずる。それて一生を通じて見た所て、此勇氣の缺乏といふ事が或は伊藤公の人望を充分に得られなかつた本になつて居るだらうと思はれる。又崇拜せられなかつた本になつて居るだらうと思はれる。どうも人間が英雄を崇拜するのは、多く其英雄の勇氣を崇拜するので、勇氣の分量が多ければ多い程、其崇拜の熱度も高いものらしく思はれる。不幸にして伊藤公には其勇氣

が少々ばかり缺けたが爲めに、人望については維新前後の西郷などには到底比べものにならなかつた。人望の番付を作つたら、伊藤公は餘程下に就くでなからうかと思ふ。之は畢竟比較的勇氣の缺乏に原因することゝ私は信ずる。要するに伊藤公は人望ある經世家ではなかつた。其原因が今一つあると思ふ。それは「伊藤公實錄」ではよく分らない。けれども一生の事を通じて見た所て、公はエライ功名心家であつたやうだ。公の詩にも英雄とか豪傑とかいふ字面はよく見へて之を慕ふ意味の、が澤山ある。詰る所功名を立てたい、名譽を得たいといふ心の動機からしてエライ働きをやり出したといふ事が隨分ありませう。處が元來政治に關係してゐる人間の働の動機になるものは種々あらう。けれども功名心といふものは其等の動機の中で餘り高尙なものではない。尤も伊藤公のは少々リヂキユラスな點もあつて、愛嬌には十分なつて居る。勳章を作つたのも伊藤公、貴族を作つたのも伊藤公、詰り伊藤公は名譽を表彰する器具を澤山に作つて、それを自身で澤山に戴いた。その中で貴族を作つた事などは政治上の必要といふ理窟もあるさうだ、けれども私は淡泊に見た方が然るべきであらうと思ふ。其證據には晩年には貴族院は丸て伊藤公に背いた。若し貴族院を以て自分の政治上の手足にしようとの考から貴族を作つたものとすれば、其結果は全然伊藤公の失敗と見るの外はない。けれども私はそれはさうでないと見て居る。若しさうであつたならば伊藤公でも今少し貴族を世話したであらう。詰る所伊藤公は名が好き、與が好き、其名と譽を華々しく飾り立てることが大好きだ。陽氣な性質だ。罪はない。太閤さんもさうで有つたからイヽにはイヽが、然しそれが又一方に於て伊藤公の人望を得られなかつた一原因をなして居ると私は思ふ。人望といふものも人を飾り立てる一つの器具であるが、公は人望を待たずして手細工で以て其身を飾り立てるから、人望のくつつく餘地がない。公に人望のつかぬのも止むを得ぬ事であらう。それから今一つは伊藤公は智惠才覺の働いた政治家である、が、此智惠才覺とい

ふものは時と場合によつて色々に變化するもの故、一を守て十も百も律するといふ譯には行かぬ。何時も變化する餘地を存して、旋轉して行く。そこで人に當てにならぬといふ考を抱かしめる。是も亦人望のつかぬ一原因てある。あの人に賴めば詰度出來るといふのは當てになる人てある。政治上ては當てになる政治家である。當てになる政治家は必らず人望がある。伊藤公には一貫した主義もあつた。意見もあつた。然し公は決してそれを一直線に行かぬ。必らず四圍の境遇狀勢を顧みて、蛇の歩くやうにウネリ〳〵行く。直前邁往は公のなし能はざる所てあつて、之が即ち公が進步主義の人てあるに拘らず漸進主義の人ともいはれ、又八方美人主義の人ともいはるゝ、かと思へば又壓制家の樣にも言はるる所以てあらう。實際に又超然主義が政黨主義になつて、政黨內閣を建てるといふ樣な事もする。それは無論惡い事てはなく、智惠才覺を働かす人は誰てもやる所てあるが、然しそれには人望は決して附きはしない。如何なる事があつても何處までもやるといふ人の方が何時も人望が強く、又何時も人望が附いて來る。之が伊藤公の人望がなかつた他の一原因をなして居る。公には若い時から多少其傾があつた事は此本にも見えて居らぬとがない。公の缺點を拾へばさういふ缺點がある。今後と雖も伊藤公はさう、少年とか生徒とか又は普通一般の人から有頂天になつて崇拜さるゝとはなからうと思ふ。公が死なれた後に、確か文部省から伊藤公の事を題にして話をするやうに學校生徒に訓令したが公を崇拜するものは割合に少かつた模樣だ、今後も恐らくさうだらうと思ふ。殊に今一つの缺點は所謂寡人有ㇾ疾、寡人好ㇾ色だ。之も太閤さんに似てるかナ。私は餘り罪しはしない。いはゞ一種の風潮に浮かれて居るまでゝある。此風潮はあながち御維新のみに起つた事でない。國の爲め君の爲めに何か現狀を破壞することを策する人々が、其形跡を晦ます爲めに料理屋や女郎屋を選ぶことは近世では大石內藏之助が其模範を示して居る。實にいゝ面白い隱れ場所だ。あゝいふ所て天下國家の事を議するといふ事は、面白

くもあらうし、又存外かくまはれる事もあらうと思ふ。今でも大きな泥棒などは必らず色男だ。女にかくまはれるでなくては大仕事は出來ぬさうである。電小僧とか何とかいはれた山邊音槌などもなか〳〵の色男らしい。閑話休題。此隱家に隱れたものが大石内藏之助より前にあるかも知れぬが私は知らぬ。私の知つて居る範圍では大石が其手初めだ。流石に大石はエライ事を發明したものだ。日本の歷史を通觀するに、大化の革新――これは明治維新と相並ぶべき二大革新であるが――此時に天智天皇即ち當時の中大兄皇子が藤原鎌足と相談して曾我入鹿を殺してクーデターを行ふた。其時に鎌足の權謀術數を回らした場所は品がよい。即ち蹴鞠の會に中大兄皇子の靴が脱けたのを恭しく捧げて交りを結び、南淵先生の會讀の場所で國家の大計を協議したらしい。品のよい隱れ場所である。其次は建武中興、即ち後醍醐の高時征伐である。太平記にある天皇御謀反の事である。これも亦品がよろしい。資朝俊基などが無禮講といつて、讀書の會果てゝ後、酒を置いて御謀反の相談をした。處が明治維新の大計は女郎屋の中から若くは料理屋の中から産み出されたといふ傾きがある、餘り品のよい處ではない。然し前に述べた通り之は維新志士の新發明にはあらずして大石内藏之助から教はつたのだ。而して藍より出て、藍より靑きに至つたから、遂に之も或は伊藤公などの不人望の本になつてゐる。歷史の上から言へば面白い事で、後世の史家は明治維新と御茶屋の關係といふ一篇を非常に味はつて書くかも知れぬが、道德の點から見ればどうであるか、誹議すべきものかも知れない。文部省から生徒に伊藤公の事を話すやうにと訓令した時に、或視學官は伊藤公は何もかも手本になる人であるかと伺ひ出たといふ事を聞いて居る。其眞僞は分らぬが、ありさうな事のやうにも思はれる。

伊藤公の立身出世の形跡は太閤さんと似て居て其嗜好も少々似て居るが、其やり遂うせた事蹟は鎌足と大いに似て居る。大化と明治とは日本歷史中の二大段落であつて、其性質が似て居る故、其れに參畫した人

ふものは時と場合によつて色々に變化するもの故、一を守て十も百も律するといふ譯には行かぬ。何時も變化する餘地を存して、旋轉して行く。そこで人に當てにならぬといふ考を抱かしめる。是も亦人望のつかぬ一原因である。あの人に賴めば詰度出來るといふのは當てになる人である。政治上では當てになる政治家である。當てになる政治家は必らず人望がある。伊藤公には一貫した主義もあつた。意見もあつた。然し公は決してそれを一直線に行かぬ。必らず四圍の境遇狀勢を顧みて、蛇の歩くやうにウネリ〳〵行く。直前邁往は公のなし能はざる所であつて、之が即ち公が進歩主義の人であるに拘らず漸進主義の人ともいはれ、又八方美人主義の人ともいはるゝ、かと思へば又壓制家の様にも言はるゝ所以であらう。實際に又超然主義が政黨主義になつて、政黨內閣を建てるといふ様な事もする。それは無論惡い事ではなく、智惠才覺を働かす人は誰でもやる所であるが、然しそれには人望は決して附きはしない。如何なる事があつても何處までもやるといふ人の方が何時も人望が強く、又何時も人望が附いて來る。之が伊藤公の人望がなかつた他の一原因をなして居る。公には若い時から多少其傾があつた事は此本にも見えて居らぬとがない。公の缺點を拾へばさういふ缺點がある。今後と雖も伊藤公はさう、少年とか生徒とか又は普通一般の人から有頂天になつて崇拜さるゝとはなからうと思ふ。公が死なれた後に、確か文部省から伊藤公の事を題にして話々するやうに學校生徒に訓令したが公を崇拜するものは割合に少かつた模様だ、今後も恐らくさうだらうと思ふ。殊に今一つの缺點は所謂寡人有ㇾ疾、寡人好ㇾ色だ。之も太閤さんに似てるかナ。私は餘り罪しはしない。いはゞ一種の風潮に浮かれて居るまでゞある。此風潮は、あながち御維新のみに起つた事でない。國の爲め君の爲めに何か現狀を破壞することを策する人々が、其形跡を晦ます爲めに料理屋や女郎屋を選ぶことは近世では大石內藏之助が其模範を示して居る。實にいゝ面白い隱れ場所だ。あゝいふ所で天下國家の事を議するといふ事は、面白

くもあらうし、又存外かくまはれる事もあらうと思ふ。今でも大きな泥棒などは必らず色男だ。女にかくまはれるでなくては大仕事は出來ぬさうである。電小僧とか何とかいはれた山邊音槌などもなか〳〵の色男らしい。閑話休題。此隱家に隱れたものが大石內藏之助より前にあるかも知れぬが私は知らぬ。私の知つて居る範圍では大石が其手初めだ。流石に大石はエライ事を發明したものだ。日本の歷史を通觀するに、大化の革新――これは明治維新と相並ぶべき二大革新であるが――此時に天智天皇即ち當時の中大兄皇子が藤原鎌足と相談して曾我入鹿を殺してクーデターを行ふた。其時に鎌足の權謀術數を回らした場所は品がよい。即ち蹴鞠の會に中大兄皇子の靴が脫けたのを恭しく捧げて交りを結び、南淵先生の會讀の場所で國家の大計を協議したらしい。品のよい隱れ場所である。其次は建武中興、即ち後醍醐の高時征伐である。太平記にある天皇御謀反の事である。これも亦品がよろしい。資朝俊基などが無禮講といつて、讀書の會果てゝ後、酒を置いて御謀反の相談をした。處が明治維新の大計は女郎屋の中から若くは料理屋の中から產み出されたといふ傾きがある、餘り品のよい處ではない。然し前に述べた通り之は維新志士の新發明にはあらずして大石內藏之助から敎はつたのだ。而して藍より出て藍より靑きに至つたから、遂に之も或は伊藤公などの不人望の本になつてゐる。歷史の上から言へば面白い事で、後世の史家は明治維新と御茶屋の關係といふ一篇を非常に味はつて書くかも知れぬが、道德の點から見ればどうであるか、誹譏すべきものかも知れない。文部省から生徒に伊藤公の事を話すやうにと訓令した時に、或視學官は伊藤公は何もかも手本になる人であるかと伺ひ出たといふ事を聞いて居る。其眞僞は分らぬが、ありさうな事のやうにも思はれる。

伊藤公の立身出世の形跡は太閤さんと似て居て其嗜好も少々似て居るが、其やり遂うせた事蹟は鎌足と大いに似て居る。大化と明治とは日本歷史中の二大段落であつて、其性質が似て居る故、其れに參畫した人物

が似て見えるのかも知れない。兎に角此二人者は其時の日本の制度文物を一新した。大化の時は支那から來た文明を日本に同化さして在來の制度文物を一新し、維新の時は歐米から來た文明を日本に同化さして在來の制度文物を一新した。文明の出所の區別はあるが、性質は甚だ似て居る。處て鎌足はクーデターを自ら行つてゐる。伊藤公にはそれがないやうだ。維新の大業、といへば詰る所德川征伐、慶喜追討てあるが、伊藤公は之に間接には關係があるかも知れぬが、直接の關係はないやうだ。慶應三年のクーデター運動の中心は矢張り岩倉公て、最も力を振つたのは西郷南洲のやうだ。西郷、大久保といふが大久保よりも西郷の力が大きいやうだ。そこて維新の革命の際に鎌足と同じやり方をしたものは岩倉公か西郷てあつて、勿論伊藤公てはない。只鎌足が―其子や孫の事業も多いが―支那の文物を日本に同化さしたやうに、伊藤公は後になつて歐米の文物を日本に同化さしたといふ、其點が似て居るのだ。尤も其點が似て居れば大いに似て居るといつてよからう。只鎌足と似て居るといつた丈けても其エライ事は推して知るべしと思ふ。

美點をいへば、伊藤公の勤王の志は間違なかつたものと思ふ。松陰門下の人は皆此點には間違ひはない。又どうしても伊藤公は開國論者であつたに相違ない。一寸攘夷黨に與した事があつた。けれども其れはガヤ〱仲間に捲入れられた丈けであるらしい。開國はなか〱熱心であつた。是れは公の立身出世の第一の緒を開いたものだ。一體開國といふ事は、誰が考へ附いて、誰が唱ひ初めたものか、これは歷史上研究して見たら、開國論の金鵄勳章を誰れに與へてよいか餘程の疑問であらう。井伊直弼も其親玉にはなれず、伊藤公も勿論其親玉にはなれない。けれども伊藤公が洋行の先驅者の一人であることは疑ひない。伊藤公以前に吉田松陰が洋行を企てたが成功しなかつた。松陰は大に攘夷を唱へて居たが、あれは爲にする所があつたので腹の中はどうてあつたか。佐久間象山の開國說には參つて居たに相違ない。それだから洋行をも企てたのだ

らう。其松陰の弟子たる伊藤公が第一に西洋に行きたくなつたのも因縁はあらう。勿論其時は西洋の文明などいふ抽象的の考はなく、只軍艦や大砲や器械などいふものを見て、實にエライものだ、あれをどうかして學びたい位に思ふてゐたのてあらう。失禮ながらさう想像する外はない。制度文物などいふ事には氣がついたかつかぬかは疑問だ。私はさう見て居る。處で井上聞多の勸誘に應じていよ〳〵洋行することに決した。當時文久三年の朝議一變所謂薩賊會奸が跋扈して、七卿都落の後てあつて、下關には攘夷が初まり、長州は内外多事の秋てあつたが、伊藤公はそれを後にして洋行した。要するに攘夷には餘り熱心てなかつたに相違ない。尤も此時に西洋に出て行くといふ事は大したエライ事てないかも知れぬ。が、西洋から歸つた時の事は實にエライ。彼地でタイムスを見て、下關攘夷の結果、歐米諸國聯合して長州を叩き潰しに行くといふ記事を讀み、これは大事件である。本などは見て居られぬ。長州が潰れる。延いて或は日本が潰れる。一身を國家に捧ぐる。身命を賭してやらうといふので井上侯と二人て彼地から歸つて來た。こういふ消極的の勇氣は伊藤公にもなか〳〵あつた。但し其發議者は伊藤公か井上侯かよく分らぬ。私は井上侯であつたらうと思ふ。井上侯は已に洋行の途上で上海に於て攘夷は駄目ぢやと喝破した相だ。其時は伊藤公はなか〳〵同じなかつたと書いてある。歸つて來て攘夷論者との爭も井上侯の方が手強かつた樣だ。それは井上侯は嘗てお小姓として毛利公に接近もし又執政のものとも伊藤公よりは知合が多かつた爲めもあつたらう。が兎に角井上侯の方がエラかつた樣だ。といつて伊藤公も決してエラクない事はない。共にエライに相違ない。長州の開國論を二人て背負つて立つた。長州の開國を背負つて立つたのは、日本の開國を一寸背負つて立つた事にもなりませう。それが留學あがりの青年の事業だ。今は日本の形勢が變つたからでもあらうが、日本の國政上の事について外國から飛び出して還る留學生などはもうあるまい。大隈伯の條約改正の時か何かに秋月左都に

氏がやつて來た事があつた。これからはもうなからう兎に角國の爲めに殉ずるといふ覺悟でやつたのだから立派な行動である。之と同時に伊藤公の外交上の智惠才覺が盛んに出て來た。文久三年に行て元治元年の初に歸つて僅か半年位しか英國に居らなかつたが、モー歐米の事を盛んに說き立てるだけの智識を仕込んで居る。勿論洋行の先輩なる福澤先生の西洋事情の著述は彼時に在りては實にエライものであらう、けれども伊藤公が行きなり西洋で得た智識を長州の國政に應用したのが亦エライ。それで長州では馬關戰爭後の外國との平和談判を伊藤公が引受けた。當時の通辯は卽ち公使の如きものであつて、主もなることは皆伊藤公が井上侯と共に其意見を出し、長州の廟議を決定させた。長州の廟議決定には井上侯の力が大きかつたらうが。談判には伊藤公の方がエライ働をやつて居るやうだ。そして維新後になつてからも何時も〳〵歐米通であつて、とう〳〵歐米の制度文物を日本に同化させることに成功した。是れ皆智惠才覺の働である。

伊藤公が維新前よりして外交上の智惠才覺を働かした事は此外にも「伊藤公實錄」にも見えて居る。又私が他の本でも讀んだ事があるやうに記憶して居る。それは外でもない。維新前に幕佛連盟に對抗して薩長二國が英國に結んだ一件に付いてゞある。此前にも薩摩は獨立國の樣な體裁で外交をやつた事がある。那翁二世の時に薩摩が自國の國旗を用ひて佛蘭西の大博覽會に出品をした事がある。それで英國に結んだのも薩州の方が先だ。それに伊藤公の智惠で長州も加はつた。何も協約が書き物になつたのでも無からうが、口約束位はしたらうと思はれる。慶應元年か二年に島津家へ先パークスを鹿兒島に連れて行て廿一發の祝砲を放つて國使待遇をした。此計畫の本になつたものは五代才助といふ人のやうだ。此本にも確かさう書いてある。五代が薩州を代表して巴里大博覽會に往つて居る比、不思議な事で幕府が佛國と結んで勢力ある西南の國主大名を征伐するといふ事を聞き出した。それはかうである。巴里の政治ブローカーのモンブランといふ奴が

幕佛同盟の發頭人であるのに別に佛蘭西の駐日公使ロッシュが那翁の内命を受けて幕佛同盟――書いたものがあるや否やは疑はしいが、口約束は確かにあつたらう――を作つた。それで佛國政府でも幕府でもモンブランを拔きにした。モンブランが怒つて、幕佛の秘密を五代に告口したから、五代は驚いて薩摩に之を通じた。そこで薩摩が堪らないといふので英吉利と結んだ、乃ち長崎の商人でこれも一種の政治ブローカーなるグラバに話をしてパークスを動かした。伊藤公は其話を悉皆聞いたかどうか知らぬが、兎に角グラバから其事を洩れ聞いたので、直に長州も之に加はるといふ策を建てた。桂小五郎が最も熱心に此策に賛成して長州公が英吉利の旗艦に行て艦長と手を握るといふ事になつた。これも伊藤公の外交術の作用の手ほどきだ。しかし危い事でした。那破翁三世は其比既に運傾きて頻りに外國と事端を啓きて功を貪つて居たから、若し幕佛同盟がいよ〳〵事實の上に働く事となりでもして有つたら大變で、他の一方では薩長が英國を引ひて來て之と戰爭したらうといふ日本分裂の破目だ。これは一ノ御免を蒙りたい事でした。それから伊藤公が外交的の智惠を振つた事は今つあるやうだ。それは外國とではない。詰り薩長連合の端緒を作つた事件だ。幕府征伐といふ事の原動力は何といつても薩長の同盟運動であるが、其薩長の連合については土州の坂本龍馬が中岡愼太郎と骨を折つたのである。然し長州では其前に一回薩州から裏切されたと感じて居る。文久三年の京都のクーデターの一件からである。そこで長州では薩賊會奸といつて薩摩を惡んで居る。それに拘らず坂本が西郷を說き、又桂にも說き、桂は意大に動いて居るが、薩賊との連合は容易でない。少々坂本をも疑つて居る。長州では已に一度幕府征討軍を引受け、今や正に第二回目のを引受けんとして困んで居る。だから出來ることなら薩摩と手を握りたいが、薩摩は權變計るべからずといふので實行しにくい。そこで伊藤公がいふた。證據を見るより外はない。果して薩摩が信ずるに足るか足らざるかは證據を見るより外はない。

府に抵抗するには兵器も彈藥も蒸汽船も要する。然し幕府の敵である所の長州では之を買ふことが出來ぬ。そこで此事情を打明けて麑島に相談し、麑島の名義を以て長崎か或は上海で買つて貰はう。若し薩摩に慶喜征討の決心があつたならば長州の申出に援助を與へるであらう。それを一つ試めして見やうといつた。一寸面白い智惠と思ふ。其役目には自分が當り、長崎に出掛け、そこでグラバと會ひ、(五代も其處に來て居たらうと思ふ)それから薩摩に談じて、目的通り軍艦、兵器彈藥を買ひ込み、薩州の旗を立てゝ幕府の目を免れ、長州に持歸つた。そこから薩長聯合の端緒が開けたらしい。一寸面白い氣附といつてよからうと思ふ。公は直ぐに飛び込まない。一段づゝ段を上つて堂に入るといふ事をやる。

「伊藤公實錄」を見た所て、伊藤公に財政の頭が豐かにあつたといふ事は一寸證據が取れない。之も或は後々までも伊藤公に財政の智識が乏しかつたでなかつたかと思ふ。若し其の頃伊藤公が財政の運用が甘かつたら、長州は其智惠を利用して外國から借金をしたてあらうが、それが見えて居らぬ。一體長州の維新前の財政のやり方は全く疑問である。長防二國土地大なりと雖も一藩に外ならない。文久三年から元治元年、それに慶應が三年、前後五年間、外には攘夷の運動をやり、内には幕府に對抗し續けた。兵器、彈藥、蒸汽船を買入れる丈けでも、一藩の力ではエライ出費である。その上長州藩では已に一革命をやり、國の壯丁から兵隊を作つて、其れに別に費用をかけて居る。毛利家の三百年來養成した藩士は矢張り外々の藩士と同樣で尊王攘夷黨の思ふやうには働かない。然しそれにも拘らず祿を與へて居る。つまり新舊二つの兵隊の爲めに二重に費用をかけて居た。あれやこれやの費用は實に莫大なものであつたらうが、それを立派にやつて行つた。此財政を誰がどうやつたか。餘程の疑問だ。今の政黨の財政よりももそつと大きな疑問だ。これは伊藤公の傳でも解けず。井上侯の傳でも解けるかどうか。多分秘密から秘密に葬らるゝであらう。伊藤公は後に大藏

少輔にもなり、造幣一件で米國にも行き、又西南戰爭後大隈伯の財政に多少の批難をやつて居る樣だがタイした事はない。

それから伊藤公がエライ制度學者、政治の大組織家になつた。それは何時頃からか「伊藤公實錄」では分らない。土州の豪傑達は後藤象次郎さんを代表者として維新當時から上下兩院の制度建立を謀り、大西鄕を驚かしたが、洋行歸りの伊藤公が其時此論を何と見たか分らない。公が制度に手を入れ出したのは私は多分明治七八年以後の事ではなからうかと思ふ。あの頃伊藤公は大久保木戸の間に立つて、二人を調和さして主もに木戸の氣に入るやうな案を立てゝ木戸を長州から引張出した。其時に初まつたのは大審院だ。つまり三審制度を立てた。それから元老院を開いて議院組織の要素を作つた。それから地方官會議を開いて、後來の民選議員の下稽古をせしめやうとした。此等の發案者は伊藤公であるから、其頃から制度に力を注がれたやうに思はれる。そしてやがて自分が法制局長官になつた。參議で法制局長官であるから餘程權力があつたに相違ない。其頃から制度學者になつた樣だ。やがて參事院議長にもなつた。それから樞密院議長にもなつた此等は伊藤公の一番エライ智惠才覺を働かした効績であつて、鎌足に比せらるゝ本であつて、憲法に對して異論ないと同じく何人も異論ない所であるから、私が別に之を論じ立てる必要もない。公が陛下の御親任を受けて日本の政治全體について最も重きを置かれた原因も、あのあたりの働き振りにあらう。然し或人は陛下の御親任をあれ丈け受けたのは岩倉公の死際の推薦であつたらうといつてゐた。政治全體については伊藤博文にお任せになつて然るべきだと申上げたといふ事である。尤もそれと同時に軍事については山縣とか西鄕とか、又財政については松方とか井上とか申上げたてあらうが、政治全體については伊藤公を推したといふ事である。私もさうてはないかと思つてゐる。然しながらその眞僞は分らぬ。所謂ステート、セークレットである。岩倉公は大體の上で、思慮を忠實に運用し

た人で、死際には自ら社稷の臣を以て任じて居たであらう。御維新以來二十年間御親任を受けた御恩報じに死後の事を申上げたかも知れない。さう見れば後々の元老制度の根元は此邊に胚胎して居ませう。私は見た事はないが岩倉公の傳が內閣で出來て居るやうである。然し其傳にも此事は書いてないだらう。

御維新から今日までの四十年間に、日本の政治の局面に當つて最もエライ力を振つた人を數へて見ると、先づ第一には西鄕、大久保を擧げねばなるまい。西鄕大久保、木戶の三人は一口にいはるゝが、矢張り西鄕が一番の兄貴なやうだ。岩倉公は朝廷の中心になつて陛下の御前の事は三條公と共に萬事引受けて居た。此人の力は非常なものである。三條公は征韓論の時などは優柔な人の樣に言はれたが、どうですか、私は恐ろしい果斷のある人で、其點では岩倉以上と思ひますが、しかし群雄を取扱ふ雄才大略は岩倉の方が上だ。此人は長く薩長土肥、先づ主として薩長の上に立つて其人物の政治的行動の變化して行くのを或は許し或は許さずして行つた所に其効績があるのだから、三條公と共に、之を一段上の方に置くとして、其下で先づ明治初年から明治六年の征韓論までは西鄕時代。六年より十一年までは大久保木戶時代といはねばならぬ。木戶が臺灣征代に不平を起して引込んだのを、伊藤公が前述の次第で引張り出したが、間もなく死んで了つた。其後は大久保時代になるべきであつたが之も間もなく殺された。其後中心點は極まらなかつたが、十四年までの四年間は大隈伯が大いに勢を振うた。伊藤公は一方の大勢力であつたが、十四年に大隈伯を蹴飛ばしていよいよ政府を薩長で受持つことにした。そして自分は憲法取調の爲めに十六年に外國に行つた。其頃から伊藤時代が初まりかゝつた。いよ〳〵三條公の勇退で日本の政治局面が伊藤時代になつたのは十八年からで、三十四年政友會內閣が引くり返るまでは先づ伊藤時代といはなくてはなるまい。足かけ十七年間だ。其間局內に居りしことも半分以上であるし、局外に居つても樞密院議長か何かで元老で、特旨を以て內閣に列して居た

――最初は元老の名が無かつたかも知れぬが事實は確かに元老であつた。勿論伊藤入道は元老寺の開山だ。內閣活殺の權を持つて居た。黒田伯の網羅內閣も山縣公の第一回の妥協內閣も、――少々やり口は違つて居るが矢張り妥協て憲法實施後の第一議會を切り拔けた――松方侯の選擧干涉內閣も、其終始の由緣を伊藤公は皆與り知つて居ませう。そも〳〵元老といふ字は憲法にもないが、政治上に於ける伊藤公の世界的新發明は此元老制度其ものであらう。其他のものは大抵西洋に種があつたのだ。何も取調べて元老制度を立てたても無からうが、公があゝして居ると、自然に元老制度が成立つのだから妙だ。伊藤公を知るものも元老制度にして、伊藤公を罪するものも亦元老制度乎といはねばなるまい。けれども私は、元老政治といふものも伊藤公が亡くなつては、もうおしまいだらうと思ふ。今の元老連には政治上全體について勢力を持てゐる人がゐない。軍事については勿論山縣公が任じてゐるであらうが、政治のことは、自分は一介の武辯であるから分らん〳〵といつてゐる。陛下にも勿論さう申上げてゐることであらう。井上松方の兩侯は財政について誰にも讓らないといふ抱負があらう。然し政治全體については矢張り口は利くまいと思はれる。西園寺桂兩侯は政治全體について意見を持てゐるであらうが、どうも元老を以て任ずる人てはなからう。元老の役割には今の所大いなる缺陷がある。私は伊藤公の死と共に元老政治も死んだものと見て居る。或は桂侯が第二の伊藤となつて躍出るかも知れないが、侯に其氣があるや否やまだ分らないと申して置きませう。國際上の大事件、國の興廢に關する大問題、擧國一致を要する非常の場合、かういふ時には元老といふものも誠に必要なものであらう。然し平日は私は其必要を認めない。ある方がよいといふよりも寧ろない方がよいといひたい。從て私は之まで伊藤公の元老政治に對して伊藤公を褒めるといふ人間ぢやない。生きてゐた中も褒めた事はないが、死んだ今日ても褒めやうとは思はない。

伊藤時代は明治十八年から卅四年に終るとしても其前後はある。明治の初まりから明治四十二年まで外國關係について伊藤公の關係しない事は餘り無かつたらう。處で之は私が伊藤公から直接に聞いた事であるが公は明治政府の外交關係で自分に分らぬことが二つある。それは臺灣征伐の起りと明治十七年の朝鮮京城の變であるといはれた。——征韓論破裂と西郷大久保破裂に關して公が何と言ふか聞き漏したのは殘念だ。いろ／＼の説があるけれども正鵠を得て居ると思はれない——然しさういひながら、伊藤公は嘗て、臺灣征伐は己れがしたと岩倉公がいひ出したと話された事がある。大抵見當はついて居たのだ。あれは詰る所、大西鄕に對する仲直りの芝居を一寸仕組んだものと思はれる。朝鮮征伐がオヂャンになつたから、外國に對して事を起してはいけぬと決心して居る政府でありながら、あと口直し、あれを芝居的に初めたのだ。て大久保は之を非として早速長崎に飛んで之を止めたが、西郷從道は聽かずに行つて了つた。それて大久保は北京に行て辛やく收まりをつけた。處で之れは餘り高くはいはれぬ事だが、日本の御維新後の外國との戰爭——臺灣は外國とはいはれぬかも知れぬが臺灣征伐も外征の一つと見れば——は皆不議思な動機から出て來たものである。其後の日淸戰爭も日露戰爭も實をいへば、政府の決斷の動機は餘りよい所から出たとは思はれない。內が治まらぬから外に力を向けやうとした處から出て居るらしい。それが仕合せになつて日本が大きくなつたから、今更ら兎や角いふ迄もないけれども、若し間違つたら大變な事になつたかも知れない。決斷の動機の如何を問はないて、日本國民が擧國一致て、國民的戰爭にして仕舞つたから、而して軍人と共に、勝つて仕舞つたから、イヽ様なもの丶、事件を初めた政治家連の心の置所は私は充分とは思つてゐない。が一つ明治十七年に井上外務卿、今の井上侯のやつた朝鮮京城の變は一寸不思議な此例外なものであつた。伊藤公はあれは己れには分らぬといつてゐたが、充分分つてゐたに違ひない。伊藤公井上侯の關係といふものはど

すしても離れられないもので、後來伊藤公の傳記を書くは人は井上侯のもそれに合傳すべきであらう。ある場合には井上侯が伊藤公を動かした事もある。倫敦から攘夷運動を止めに來た事を初めとしてまだ〳〵大分あらう。此人は伊藤公と違つた性質の一種の勇氣を持つてる人だ。どうしても中心を保つことの出來ぬ人だ。極端から極端に行く。だから政治の中心には立てぬ。だが自分が極端に居て其方に他人を惹附ける力はなか〳〵強い。一旦やり出した事は如何なる事があつても必らずやる。此人が外務卿の時に京城の變が起つた。伊藤公はよく分つて居るが親友井上侯の失策であるから分らぬといつておいたのであらう。私の聞いて居る所では其時の井上侯の政略といふものは實に突飛なものだ。佛蘭西と同盟して支那をやり付けようといふのであつたらしい。佛國てガンベッタ以後の豪傑フェリイの印度支那經略の末佛清の外交が斷絕して佛公使が北京を引上げ横濱に來た時に井上外務卿と話したものらしい。さうしておいて井上外務卿は巴里に行て居た代理公使光明寺三郎に訓令して支那を挾打しようといふ密約を結ばうとした。光明寺が其頃憲法取調で歐洲に居た伊藤公に其訓令の事を相談したら、伊藤公は之を採消したとやらに私は聞いて居る。けれども井上外務卿はなか〳〵止まない。極端まで行く。そこで支那と戰爭する事端を朝鮮で開かうとした。それが十七年の朝鮮京城の變、即ち金玉均の變である。伊藤公も陰に陽にいろ〳〵な人と喧嘩した。大隈伯ともやり、板垣伯ともやり、山縣公とも陰にやつた。若し山縣公と陽にやつたら西郷大久保の二の舞に似た事となつたかも知れない。松方侯とも同樣である。只井上侯と丈けはずつと仲がよい。政治上の意見も大した相違がなかつた。けれども此十七年の時は衝突した。感情の衝突ではないけれども意見には大相違が出來た。ソコで井上外務卿の指圖で竹添公使は變端を啓き朝鮮王の親書を貰つて、日本の兵を王城に入れた。敏早な袁世凱が何でタヽ坐つて見て居やう。直に支那兵を指向けたから日本の兵は多勢に無勢支那の兵に負けて仁川に引上

た。おれは王樣の依賴によつて王城に兵を入れたのに何故之を討つたかと理屈をつけねばならぬ事になつた。此時のことを私は伊藤公から聞いた事がある。かうだ。「井上は伊豫の道後の溫泉に入浴に行て居た留守を私が預つてゐた。そこへ竹添からの親展書が來た。金玉均を助けるか助けないか、助けた方がよからうといふ文面だ。何の事だか分らぬが片寄つた事をしてはいかぬといふ電報を打つてやつたが間に合はなかつた。其翌日支那公使館から京城有變、中日接伏といふ電報が横濱の清商の處に來たが、何て有りませうと尋ねてよこした。それを見て驚いたが、竹添の親展書の事を思ひ合せたのでハヽア之だなと思つた。そこで井上に電報を打て早く歸れといつてやつてもなか〱歸らない。仕方がないから、歸らなければ己れの意見通りにやるぞといつてやつたら井上はノコ〱歸つて來た。そこで自分は井上毅、伊東己代治を連れて井上を横濱に迎へた。船は夜半過ぎに着いた。直ぐに富貴樓で議論を初めた。すると、井上は日清開戰論を初めた。內を省みると薩州の親玉黑田清隆も開戰論だ。陸海軍皆それだ。山縣に聞くと、劍を下げて居るからには戰爭は嫌とは言へぬといふ。中々治りが付きさうにない。それで井上ととう〱夜の明けるまで論じたが決着がつかない。自分の論は一本槍だ。己等は何の爲めに西鄕と大久保の爭の時に大久保に贊成して西鄕を捨てたか。其後先輩のやり出した仕事はまだ〱纏まりがついて居ない。それだのに外國に手を出すなどは間違つてゐるといふのだ。井上はどうしても聽かない。聽かない筈だ。後で聞くと井上は佛蘭西公使と密約までもしてゐたんだもの」と話された事がある。これは伊藤公の話てあるが、其當の相手の井上侯はまだ生きて居らるゝから聞いて御覽なさい。其時の井上侯の決斷の動機は何てあつたか。伊藤公が分らぬと言ふ位だから分り樣もないが、內が治まらぬからといふので無かつただけは確だ。何て征韓論に輪をかけた征淸論を突飛に極端に相談も熟せずにやりかけたか。面白いには面白いが、どうも怖い樣だ。そこで伊藤公が其時井上侯

に向つていつた。戰爭するにしてもせぬにしても、どちらにしても、何故己れの兵隊に鐵砲を打つたと支那を責めるのが第一着手である。それには井上侯も同意して井上毅氏を横濱から直に武裝した船に乘せ、袁世凱に突込めといふ事を竹添公使に傳へしめた。其時の論は伊藤公の方が木戸大久保の衣鉢を傳へてよく一貫して居るには違ひない。が伊藤の腰拔け暗殺して了へといふものもあつたらしい。そこへ飛び出したのが西郷從道侯である。此人は大久保の止むるのも聽かずに臺灣征伐に出掛けた人であるに拘らず、其時は正々堂々たる論をして、『國は信義がなくては立たぬ』、支那が佛國と戰爭をして弱つて居るのに乘じて叩きつけるのは宜しくないと言ひ出して、陸海軍の開戰論者を抑えた、而して伊藤公が熱海か箱根かに逃出して居た處へ尋ねて行つて、よろしい。あなた戰爭をしない方にお極めなさい。それには榎本公使に談判させたのではどうかと思ふ。あなた一層の事支那にお出掛なさい。私も一所に連れて行て下さい。といつた。つまる所其意味は、支那と戰爭せぬ責任をあなたと私と二人で負ひませう。といふのである。尙西郷侯はいふた。私は談判などには要のない人間だ。然し歸つて來て陸海軍を取鎭める時にはいくらかお役に立つかも知れないといつた。そこで二人で行て李鴻章と談判を初めて天津協約を結んだ。此天津協約は後の日清戰爭を開く端緒を與へて居る。大分李鴻章が馬鹿にしかけたのを踏みこたえて伊藤公が成功した。此時の談判の事は伊東巳代治子が最もよく知つて居るだらう。西郷侯の死んだ時に伊藤公は眞面目になつて、あの人は私の恩人だといつたと聞いて居る。山縣公も多分西郷侯をさういふだらう。西郷侯は人と責任を分つことに於ては實に妙に堪能な人だ。要するに伊藤公は此時一人立てあつたが馬關の攘夷を喰ひ留た以來の消極的勇氣を振ひ起して、昔の相棒であつた井上を抑え付けた。けれども其翌年内閣總理大臣となつては矢張り井上を外務大臣として立つた。

處て其次は日清戰爭。これは天津協約のお蔭に出來

た。おれは王樣の依頼によつて王城に兵を入れたのに何故之を討つたかと理屈をつけねばならぬ事になつた。此時のことを私は伊藤公から聞いた事がある。かうだ。「井上は伊豫の道後の温泉に入浴に行て居た留守を私が預つてゐた。そこへ竹添からの親展書が來た。金玉均を助けるか助けないか、助けた方がよからうといふ文面だ。何の事だか分らぬが片寄つた事をしてはいかぬといふ電報を打つてやつたが間に合はなかつた。其翌日支那公使館から京城有變、中日接伏といふ電報が横濱の清商の處に來たが、何て有りませうと尋ねてよこした。それを見て驚いたが、竹添の親展書の事を思ひ合せたのでハヽア之だなと思つた。そこて井上に電報を打て早く歸れといつてやつてもなか／＼歸らない。仕方がないから、歸らなければ己れの意見通りにやるぞといつてやつたら井上はノコ／＼歸つて來た。そこて自分は井上毅、伊東己代治を連れて井上を横濱に迎へた。船は夜半過ぎに着いた。直ぐに富貴樓て議論を初めた。すると、井上は日清開戰論を初めた。內を省みると薩州の親玉黑田淸隆も開戰論だ。陸海軍皆それだ。山縣に聞くと、劒を下げて居るからには戰爭は嫌とは言へぬといふ。中々治りが付きさうにない。それで井上ととう／＼夜の明けるまで論じたが決着がつかない。自分の論は一本槍だ。己等は何の爲めに西郷と大久保の爭の時に大久保に贊成して西郷を捨てたか。其後先輩のやり出した仕事はまだ／＼纏まりがついて居ない。それだのに外國に手を出すなどは間違つてゐるといふのだ。井上はどうしても聽かない。聽かない筈だ。後で聞くと井上は佛蘭西公使と密約までしてゐたんだもの」と話された事がある。これは伊藤公の話てあるが、其當の相手の井上侯はまだ生きて居らるゝから聞いて御覧なさい。其時の井上侯の決斷の動機は何てあつたか。伊藤公が分らぬと言ふ位だから分り樣もないが、內が治まらぬからといふので無かつたゞけは確だ。何て征韓論に毛をかけた征淸論を突飛に極端に相談も熟せずにやりかけたか。面白いには面白いが、どうも怖い樣だ。そこて伊藤公が其時井上侯

に向つていつた。戰爭するにしてもせぬにしても、どちらにしても、何故己れの兵隊に鐵砲を打つたと支那を責めるのが第一着手である。それには井上侯も同意して井上毅氏を横濱から直に武裝した船に乘せ、袁世凱に突込めといふ事を竹添公使に傳へしめた。其時の論は伊藤公の方が木戸大久保の衣鉢を傳へてよく一貫して居るには違ひない。が伊藤の腰拔け暗殺して了へといふものもあつたらしい。そこへ飛び出したのが西鄕從道侯である。此人は大久保の止むるのも聽かずに臺灣征伐に出掛けた人であるに拘らず、其時は正々堂々たる論をして、『國は信義がなくては立たぬ』、支那が佛國と戰爭をして弱つて居るのに乘じて叩きつけるのは宜しくないと言ひ出して、陸海軍の開戰論者を抑えた、而して伊藤公が熱海か箱根かに逃出して居た處へ尋ねて行つて、よろしい。あなた戰爭をしない方にお極めなさい。それには榎本公使に談判させたのではどうかと思ふ。あなた一層の事支那にお出掛なさい。私も一所に連れて行て下さい。といつた。つまる所其意味は、支那と戰爭せぬ責任をあなたと私と二人で負ひませう。といふのである。尚西鄕侯はいふた。私は談判などには要のない人間だ。然し踏つて來て陸海軍を取鎮める時にはいくらかお役に立つかも知れないといつた。そこで二人で行て李鴻章と談判を初めて天津協約を結んだ。此天津協約は後の日淸戰爭を開く端緒を與へて居る。大分李鴻章が馬鹿にしかけたのを踏みこたえて伊藤公が成功した。此時の談判の事は伊東巳代治子が最もよく知つて居るだらう。西鄕侯の死んだ時に伊藤公は眞面目になつて、あの人は私の恩人だといつたと聞いて居る。山縣公も多分西鄕侯をさういふだらう。西鄕侯は人と責任を分つことに於ては實に妙に堪能な人だ。要するに伊藤公は此時一人立てあつたが馬關の攘夷を喰ひ留た以來の消極的勇氣を振ひ起して、昔の相棒であつた井上を抑え付けた。けれども其翌年内閣總理大臣となつては矢張り井上を外務大臣として立つた。

處で其次は日淸戰爭。これは天津協約のお蔭に出

たものだ。日清の一國が朝鮮に出兵すれば他の一國も出兵するといふ事に天津協約で定めてある。此時の戰爭の趣向立は武人の方では、支那を相手に陰に軍備をやつてゐた其頃の參謀次長川上操六子、政治家の方では其頃の外務大臣陸奥宗光伯である。一體伊藤公はどちらかといへば其時も戰爭の主動者では有るまい。目を閉ぢて富士の山から飛び下りるやうな事は不得手だ。モー其時になつては、支那と共に朝鮮に於て兩立し難い事は見て居たに相違ない、又支那と戰つて負けぬといふ事は信じて居たに相違ない。しかし他の列國との關係、即ち第三國との關係の葛藤を切り拔ける事には最初から見込がない。見込がないのを、餘儀なくされたのは、所謂對外硬の爲めに內が治まらなくなつたので之を外に轉じやうとしたのに原因すると見る外はあるまい。其對外硬の起りが亦井上侯の失策から出て居る、即ち明治二十年の條約改正の失策から出て居る。彼の混合裁判制度に歐化主義て、ボアソナードや谷干城子から突込まれ、自由黨と保守黨から散々攻擊せられ、第一次伊藤內閣は井上の辭職と共に仆るゝことゝなつて、其次の黑田伯の元勳網羅內閣も大隈伯が井上侯の二の舞ひをして脚が無くなると共に足が折れ、其次の第一次山縣內閣は第一回帝國議會で憲法第六十三條の論で豫算の上に衝突をして、やつと一種の妥協で切り拔けたが、又其次の松方內閣となつてはどうもこうも始末がつかぬ。明治二十五年の選擧干涉のあとはあの通りで、伊藤公はソット松方內閣を潰して自ら起つた。即ち第二次伊藤內閣だ。其時の內閣組織の手際は隨分素張らしいものであつて、一夜に出來上つて勢ひよく始まりは始まつたが、さて其內閣が所謂超然主義の內閣であつて、衆議院が治まらない。改進黨は大隈伯の足の折れた以來微々として振はぬが、大同團結後の自由黨一派は保守黨と一所になり盛んに對外硬を唱へる、條約勵行を唱へる。それで軍備擴張には反對する、豫算でも政府をいじめる。とう／＼打續いて二回も解散をした。時は明治二十七年六月二日、將に解散後の二度目の解散奏請を仕樣といふ閣議の日。陸奥

外務大臣は朝鮮の代理公使杉村濬の報告を懐にして登閣した。報告はかうだ。東學黨の亂が起つて、朝鮮が支那に出兵を乞ふたとある。天津協約の手前、我日本も夕ゞ見ては居られない、我亦出兵しやうと陸奥が發議した。ソコで參謀總長軍令部長を召び出した。川上大將が出て來た。朝鮮に日本も出兵するからには支那との戰爭衝突の覺悟が入用だが、支那と一戰爭が出來るかと問うた。川上はよろしう御坐いませうと答へたので、即日議會解散と朝鮮出兵とを同時に奏請する事となつた。どうです。どうも此出兵も内を治めるための決斷であつたといふ外は有りますまい。それて外交の事は始めから目を眠つて盲進したのだが、仕合せに馬關條約締結まてはタイした事が無かつた。勿論牙山の開戰の始まらない前に、露國の干渉だけはやつて來て、流石の陸奥もギヨッとしたが、然し先生勇氣を振ひ起して、目を閉つて富士の山を飛び下りた。其時の露國の干渉は矢張り忠告書の形をとつたもので、日本も支那も東洋の平和を保つ爲めに兵隊を朝鮮から引上げなさい。それを引かなければ、朝鮮に兵を置いた爲めに生ずる變化の責任を日本が負はねばならぬといふやうな意味であつたらう。其頃は支那に對してよりも日本に對して各國共壓力を加へた。支那が朝鮮に兵を出すことは各國共怪まないが、天津條約があるに拘らず、日本が兵を出すのは可笑しいと思うてゐた。其忠告書を陸奥が伊藤公に持て行て何ともいはずに默つて見せた。そして伊藤公が何といふかを窺つた。伊藤公も騎虎の勢である。斷ぜざるを得ない。仕方がない。今さら徒爾に兵隊を引上げる譯に行かぬといひ出したなぜ行かぬかの説明は問ふまでもない、いよ〳〵内が治まらなくなるからだ。そこて陸奥がホッと息を吐いたと「蹇々錄」に書いてあつたやうに思ふ。若し總理大臣が露國の一言に屈したならばどうなつたかと今から思つてもゾッとするとやうにも書いてあつた。陸奥伯はよく伊藤公を知つて居たのだ。いゝ具合に露國の干渉も、陸奥のいゝ加減な答辯を聞いて止んだ。つまり止めなくては仕方がなかつたのてあらう。當時の露國は

東洋に餘り兵力もなかつたから干渉も出來なかつたらう。それで日本が支那に勝ちつゝある間に軍艦を東洋に廻しておいて、遂に馬關條約の時にあの干渉をやり出したのだ。それも單獨ではない、獨佛連合でやつて來た。餘程日本が手強いと見たからだ。　あの時には伊藤公がどういふ事をいひ出したらう、陸奧伯がどういふ事をいひ出したらうといふ事は誰も考へる所であるが、「蹇々錄」を見れば、陸奧伯は兎も角も三國の干渉を拒絶して其變化を見やう。其上に外交のやり方があるといふ意見を出した。其時陸奧伯は廣島に居らず京都あたりから電報を以て伊藤公に提出したらしい。處が伊藤公は列國會議を開いて問題を決しやうと提唱した。これは其節一應御裁可になつて居ると云ふ事だ。さういふ所はどうしても伊藤式だ。何でも新らしい仕組を立案して、それで事をやつて見たい。勿論列國會議が開ければ自ら乘り込んで行て一つやつて見やうといふのでありましたらう。其勇氣は亦エライ。然し陸奧伯の如き勇氣は伊藤公にない。それは伊藤公にないのか、或は當時の陸軍大臣山縣公、海軍大臣西郷侯になかつたから伊藤公になかつたのか、よくは分らない。たとひ陸海軍大臣が三國干渉に對して日本の兵力が堪えられぬといつたにしろ、伊藤公が御批准濟の馬關條約維持に就て國民と共に力の盡く限りやらうといふ決心をしたら陸海軍大臣も其命を聞くの外はなかつたらう。首相が其御決心ならば國と共に陸海軍が全滅するまでやりませう、といつて遣つたに違ひない。其處は劒を下げてる人間だ。それ位の決心はつける。然し詰る所軍事上の狀態からいへば、當時の日本は、角力でいへば腰が伸び過ぎてゐる。普通の軍事上では進んで行かれぬといふのも無理のない說だ。其無理のない說に伊藤公が同意して、列國會議說を唱へたのであらう。だから陸奧伯の一應拒絶說には伊藤公は贊成しなかつた。拒絶したら直に破裂だ。其中間に外交上の手腕を施す餘地がない。といふのであつた。そこになると陸奧外務大臣の外交手腕を信じないといふ事になる。又陸奧伯にも一應拒絶して効を奏しなかつた時はどうす

るといふ具體的の成案もなかつたのであらう。陸奥伯の一應拒絶説は伊藤公が毀したが、其代り伊藤公の列國會議説は陸奥が毀した。其理由は僅かに三國の意志があらはれた丈けでも下關條約が毀れた。其上に列國を加ふれば又色々の注文が出て益々完膚がなくなり、結局虻蜂取らずになる。といふのだ。之には伊藤公も敵しかねた。そして見事に遼東還附となつた。どうしてもあゝいふ場合には勇氣あるものは勇氣を出し、智慧あるものは智慧を出して、總て廟堂の上に集る。しかし集るものは其人相應のものより集らぬに極まつて居る。精一杯が集まつてあゝなつたのだが、私は今一つ陸奥説で以て富士の山から目を閉つて飛び下るといふ事も、一國の高等政治として決して無謀とばかりは言はれぬと思ふ。暗中飛躍といふ晴れの業を一つやつて見るのも男の意地だ、國の精神だ。あの時の事についてカーゾン卿が當時の倫敦駐劄公使加藤高明氏に向て、日本は實に用心深い決斷をなされた。間然する所がない。と賞賛しておいて、時に加藤さん、あの時三國を拒絶したら三國の軍艦から直に日本の軍艦に彈丸を打つたでありませうか。これは歷史上に屬する興味ある疑問ですな。といつた相だ。成程之は興味ある疑問に違ひない。犬と猿との間柄の獨佛が並んで大砲を打つといふこともどうであらう。尤も露佛同盟は其頃チャンと出來てゐた。露西亞がやれば佛蘭西もやつたに違ひがないが、然し第一露西亞がどういふ決斷をしたか是れ亦疑問である。脅かしが利き過ぎて、三國政府共に意外の感があつたかも知れぬ。又伊藤公の其時の列國會議説も實行さして見たかつた。陸奥伯が肺病で死にかゝつて居なかつたら、モー御裁可にもなつて居た事だから、同意したかも知れませんよ。行ける處まで行かないと、いつも日本國民は承知しない。遼東還附一件で、折角治まりかゝつた內政が、却つて前よりも治まりにくゝなつたのは是非もない。

其後陸奥伯が死んで、伊藤公も內閣をやめた。其やめる頃に山縣公との意見の不一致が初まつたのであらう。伊藤公は最早超然主義を撤して、どうしても自分

東洋に餘り兵力もなかつたから干渉も出來なかつたらう。それで日本が支那に勝ちつゝある間に軍艦を東洋に廻しておいて、遂に馬關條約の時にあの干渉をやり出したのだ。それも單獨ではない、獨佛連合でやつて來た。餘程日本が手强いと見たからだ。あの時には伊藤公がどういふ事をいひ出したらう、陸奥伯がどういふ事をいひ出したらうといふ事は誰も考へる所であるが、「蹇々錄」を見れば、陸奥伯は兎も角も三國の干渉を拒絕して其變化を見やう。其上に外交のやり方があるといふ意見を出した。其時陸奥伯は廣島に居らず京都あたりから電報を以て伊藤公に提出したらしい。處が伊藤公は列國會議を開いて問題を決しやうと提唱した。これは其節一應御裁可になつて居ると云ふ事だ。さういふ所はどうしても伊藤式だ。何でも新らしい仕組を立案して、それで事をやつて見たい。勿論列國會議が開ければ自ら乘り込んで行て一つやつて見やうといふのでありましたらう。其勇氣は亦エライ。然し陸奥伯の如き勇氣は伊藤公にない。それは伊藤公にないのか、或は當時の陸軍大臣山縣公、海軍大臣西鄉侯になかつたから伊藤公になかつたのか、よくは分らない。たとひ陸海軍大臣が三國干渉に對して日本の兵力が堪えられぬといつたにしろ、伊藤公が御批准濟の馬關條約維持に就て國民と共に力の盡く限りやらうといふ決心をしたら陸海軍大臣も其命を聞くの外はなかつたらう。首相が其御決心ならば國と共に陸海軍が全滅するまでやりませう、といつて遣つたに違ひない。其處は劒を下げてる人間だ。それ位の決心はつける。然し語る所軍事上の狀態からいへば、當時の日本は、角力でいへば腰が伸び過ぎてゐる。普通の軍事上では進んで行かれぬといふのも無理のない說だ。其無理のない說に伊藤公が同意して、列國會議說を唱へたのであらう。だから陸奥伯の一應拒絕說には伊藤公は賛成しなかつた。拒絕したら直に破裂だ。其中間に外交上の手腕を施す餘地がない。といふのであつた。そこになると陸奥外務大臣の外交手腕を信じないといふ事になる。又陸奥伯にも一應拒絕して効を奏しなかつた時はどうす

るといふ具體的の成案もなかつたのであらう。陸奧伯の一應拒絕說は伊藤公が毀したが、其代り伊藤公の列國會議說は陸奧が毀した。其理由は僅かに三國の意志があらはれた丈けでも下關條約が毀れた。其上に列國を加ふれば又色々の注文が出て益々完膚がなくなり、結局蝱蜂取らずになる。といふのだ。之には伊藤公も敵しかねた。そして見事に遼東還附となつた。どうしてもあゝいふ場合には勇氣あるものは勇氣を出し、智惠あるものは智惠を出して、總て廟堂の上に集る。しかし集るものは其人相應のものより集らぬに極まつて居る。精一杯が集まつてあゝなつたのだが、私は今一つ陸奧說で以て富士の山から目を閉つて飛び下るといふ事も、一國の高等政治として決して無謀とばかりは言はれぬと思ふ。暗中飛躍といふ晴れの業を一つやつて見るのも男の意地だ、國の精神だ。あの時の事についてカーゾン卿が當時の倫敦駐劄公使加藤高明氏に向て、日本は實に用心深い決斷をなされた。間然する所がない。と賞賛しておいて、時に加藤さん、あの時三國を拒絕したら三國の軍艦から直に日本の軍艦に彈丸を打つたでありませうか。これは歷史上に屬する興味ある疑問ですな。といつた相だ。成程之は興味ある疑問に違ひない。犬と猿との間柄の獨佛が並んで大砲を打つといふこともどうであらう。尤も露佛同盟は其頃チャンと出來てゐた。露西亞がやれば佛蘭西もやつたに違ひがないが、然し第一露西亞がどういふ決斷をしたか是れ亦疑問である。脅かしが利き過ぎて、三國政府共に意外の感があつたかも知れぬ。又伊藤公の其時の列國會議說も實行さして見たかつた。陸奧伯が肺病て死にかゝつて居なかつたら、モー御裁可にもなつて居た事だから、同意したかも知れませんよ。行ける處まで行かないと、いつも日本國民は承知しない。遼東還附一件で、折角治まりかゝつた內政が、却つて前よりも治まりにくゝなつたのは是非もない。

其後陸奧伯が死んで、伊藤公も內閣をやめた。其やめる頃に山縣公との意見の不一致が初まつたのであらう。伊藤公は最早超然主義を撤して、どうしても自分

東洋に餘り兵力もなかつたから干渉も出來なかつたらう。それで日本が支那に勝ちつゝある間に軍艦を東洋に廻しておいて、遂に馬關條約の時にあの干渉をやり出したのだ。それも單獨ではない、獨佛連合てやつて來た。餘程日本が手強いと見たからだ。あの時には伊藤公がどういふ事をいひ出したらう、陸奥伯がどういふ事をいひ出したらうといふ事は誰も考へる所であるが、「蹇々錄」を見れば、陸奥伯は兎も角も三國の干渉を拒絶して其變化を見やう。其上に外交のやり方があるといふ意見を出した。其時陸奥伯は廣島に居らず京都あたりから電報を以て伊藤公に提出したらしい。處が伊藤公は列國會議を開いて問題を決しやうと提唱した。これは其節一應御裁可になつて居ると云ふ事だ。さういふ所はどうしても伊藤式だ。何でも新らしい仕組を立案して、それで事をやつて見たい。勿論列國會議が開ければ自ら乘り込んて行て一つやつて見やうといふのでありましたらう。其勇氣は亦エライ。然し陸奥伯の如き勇氣は伊藤公にない。それは伊藤公にないのか、或は當時の陸軍大臣山縣公、海軍大臣西郷侯になかつたから伊藤公になかつたのか、よくは分らない。たとひ陸海軍大臣が三國干渉に對して日本の兵力が堪えられぬといつたにしろ、伊藤公が御批准濟の馬關條約維持に就て國民と共に力の盡く限りやらうといふ決心をしたら陸海軍大臣も其命を聞くの外はなかつたらう。首相が其御決心ならば國と共に陸海軍が全滅するまでやりませう、といつて遣つたに違ひない。其處は劒を下げてる人間だ。それ位の決心はつける。然し當る所軍事上の狀態からいへば、當時の日本は、角力ていへば腰が伸び過ぎてゐる。普通の軍事上ては進んで行かれぬといふのも無理のない說だ。其無理のない說に伊藤公が同意して、列國會議說を唱へたのであらう。だから陸奥伯の一應拒絶說には伊藤公は贊成しなかつた。拒絶したら直に破裂だ。其中間に外交上の手腕を施す餘地がない。といふのであつた。そこになると陸奥外務大臣の外交手腕を信じないといふ事になる。又陸奥伯にも一應拒絶して効を奏しなかつた時はどうす

るといふ具體的の成案もなかつたのであらう。陸奥伯の一應拒絶説は伊藤公が毀したが、其代り伊藤公の列國會議説は陸奥が毀した。其理由は僅かに三國の意志があらはれた丈けでも下關條約が毀れた。其上に列國を加ふれば又色々の注文が出て益々完膚がなくなり、結局蝱蜂取らずになる。といふのだ。之には伊藤公も敵しかねた。そして見事に遼東還附となつた。どうしてもあゝいふ場合には勇氣あるものは勇氣を出し、智惠あるものは智惠を出して、總て廟堂の上に集る。しかし集るものは其人相應のものより集らぬに極まつて居る。精一杯が集まつてあゝなつたのだが、私は今一つ陸奥說で以て富士の山から目を閉つて飛び下るといふ事も、一國の高等政治として決して無謀とばかりは言はれぬと思ふ。暗中飛躍といふ晴れの業を一つやつて見るのも男の意地だ、國の精神だ。あの時の事についてカーゾン卿が當時の倫敦駐劄公使加藤高明氏に向て、日本は實に用心深い決斷をなされた。間然する所がない。と賞賛しておいて、時に加藤さん、あの時三國を拒絶したら三國の軍艦から直に日本の軍艦に彈丸を打つたでありませうか。これは歷史上に屬する興味ある疑問ですな。といつた相だ。成程之は興味ある疑問に違ひない。犬と猿との間柄の獨佛が並んで大砲を打つといふこともどうであらう。尤も露佛同盟は其頃チャンと出來てゐた。露西亞がやれば佛蘭西もやつたに違ひがないが、然し第一露西亞がどういふ決斷をしたか是れ亦疑問である。脅かしが利き過ぎて、三國政府共に意外の感があつたかも知れぬ。又伊藤公の其時の列國會議説も實行さして見たかつた。陸奥伯が肺病て死にかゝつて居なかつたら、モー御裁可にもなつて居た事だから、同意したかも知れませんよ。行ける處まで行かないと、いつも日本國民は承知しない。遼東還附一件で、折角治まりかゝつた內政が、却つて前よりも治まりにくゝなつたのは是非もない。

其後陸奥伯が死んで、伊藤公も內閣をやめた。其やめる頃に山縣公との意見の不一致が初まつたのであらう。伊藤公は最早超然主義を撤して、どうしても自分

で政黨を持たねばならぬと考へた。伊藤公を其考にしたのは私は陸奥伯であると信じて居る。陸奥伯が長生したならば、政友會などももつと旨く行つたらうと思ふ。それに賛成しなかつた山縣公の理由はどういふのであるか、私にはよく分らない。多分己れには政黨のことはよく分らぬし、君がやるならやつて見るもよからうが、やめたらどうか位の事であつたらう。しかし政局は政黨なしては到底やつて行けぬ勢ひとなつて、進歩黨が松方伯につかまつて、松隈内閣が出來た。伊藤公は山縣公の不同意に拘らず、いよ／＼政黨論に傾いて、どうでも遣るといふ事になつたと見へる。處がコヽで日本政局に於ける伊藤公の地位が一大變した。遼東返附一件で國民の人望がすつかり離れたばかりでなく、今まで伊藤公の下にあつた貴族院がすつかりひつくり返つて山縣黨になり、官僚黨にも澤山伊藤公反對が出て來た。そこで伊藤公は局外で元老としての勢力を使ふことは出來たが、モー政府の當局者としては六つかしくなつた。其後二回局に當つたがどうも旨く行かぬ。行かぬのが當り前かも知れぬ。何故なれば、一度敬服したものが其敬服を取り除けば、其反動で隨分勝手な事をやるもので、あちらからもこちらからも反抗するものが出來るものだ。况んや伊藤公の最後の政友會内閣は準備がよく整はぬ中に出來たので、政黨夫自身も伊藤公に不服だらけであつたのだ。星亨が山縣内閣と肝膽相照して金を貰つて、金の縁が切れると其山縣内閣を引くり返して其政黨と共に伊藤公に獻上したから堪らない。あれから後は伊藤山縣兩公の間に陰に政爭が初まつて死ぬる迄旨く行かなかつた。然しながら伊藤公の勢力が山縣一派の爲めに最も薄弱になつたのは日英同盟の出來た時である。あれは山縣一派、桂内閣の成功であつて、一面には伊藤公の失敗を意味して居る、どうも一獨立國の政治家は外交上に成功したものが成功者であつて、それに失敗したものは又内政上にも失敗するを免れぬ。私の聞く所によれば日英同盟は其實伊藤公の政友會内閣の時に端緒を開いたものであるのに、そして伊藤公が又英國好きであるの

に、なぜ公が此同盟を冷眼視したか。少しは山縣一派が憎いので、それで日英同盟までがつまらなく見へたからでは無からうか。日英同盟が伊藤内閣で始まつたといふのは、かうだ。時の外務大臣加藤高明氏は倫敦駐劄公使林董伯、當時の林子から報告を得た。最初獨逸の代理公使ハッガースタインが林公使に一つの書類を渡して、かういふ條件で日英同盟をやつて御覧なさい、多分出來ませうといふ事である。最初の日英同盟協約の中には此ハッガースタインの案出した條件が大分入つてゐるさうです。例へば同盟活動の範圍を限る一件などがそれだ。ソコで之れは勿論ハッガースタイン一個人の考にあらずして獨逸の命を受けてやつた事であらうが、何の爲めに獨逸が日英同盟の橋渡しをしたかゞ分らない。多分一方に露佛同盟があるから一方に日英同盟を作り、極東に於て露佛、日英の對立を計り、其間に立つて利益を占め、且つ獨墺伊三國同盟に對する露佛同盟の心を外に轉じさせて息を拔かうといふのであらう、位の想像は付いたらしいが、或は又ビスマルクの所謂オネストブロオカアをやるのかも知れぬ、而して英國政府の意を聞いて言ひ出したのかも知れぬ、といふので公は加藤外務大臣に命じ、林公使に少し突込んで英吉利の底意を探らせて見た。が英吉利の方での手答えが十分でなかつた。そこでそれより踏込む譯に行かず、加藤外務大臣も林公使も頗る熱心であつたに拘らず三十四年の秋迄日英同盟は進まなかつた。若もこれが進んで居たらば、伊藤公は彼の時七重の膝を八重に折つて貴族院の前に頓着せぬでも濟んで居たらうに、外交が振はぬばかりでなく、財政の整理が旨く行かず、心機一轉の渡邊國武子が又もや心機一轉して政友會内閣の終りを告げた。然し元老として、且つ政友會總裁としての伊藤公は中々ジッとしては居られない、功名心をお供につれて露國に乘り出して、日露協約の談判をやつた。一方に日英同盟をやりかけてゐる話を聞きながらやり出した。これは今の露國外務大臣イヴオルスキイの考が本でなかつたかと思ふ。そして此話には井上侯も加つてゐるだらう。又井上侯と

イヴォルスキイの間には或は都築馨六氏が入つて居るかも知れない。イヴォルスキーも亦平和の政治家だ。三十三年の北清事件で露國が滿洲を占領して居る之には日本の國民が折合はない。そこで此折合をつける爲めに滿韓交換。此考には日本の政治家中にも澤山に贊成者があり、露國でも武斷派以外のものはこう考へたものが尠くなかつたらう。イヴォルスキーも其一人だ。そこで井上侯と話して遂に伊藤公と會見することになつた。桂侯も之を聞いて伊藤公に賴んだ一人であらう。其の時までは桂侯も日英同盟について十分の成算が立たなかつたのであらう。伊藤公にいはしむれば、日英同盟は支那大陸のことである。朝鮮についてはどうしても露西亞と話をつけねばならぬといふ言譯がある。しかしこれは如何で有りませうか。朝鮮だけで纒りが付けばイヽが、滿韓交換となると、支那大陸にも關ることゝなる。而して支那全體を保全しやうといふ日英同盟には兩立せぬ事となる。少々無理で有つたとおもひます。が伊藤公は兩手に花を握らうと考へてゐたらしい。それで露國に行くと豫てイヴォルスキイから言つてやつてあつたものと見え、ウヰッテが伊藤公に逢つた。其時の露國の外務大臣はラムスドルフだ。露國に行く前伊藤公は英國に寄てチャムバレンと話してゐる。朝鮮問題について露西亞と話をつける積だ位の事を言ひ出して、それは結構だ位の返事を受取つて居たんだらう。然しながら英吉利は内心餘り好んではゐない。其れにも拘らず伊藤公は乘り込んで、先づウヰッテに話をして、朝鮮を日本の指導に任して呉れろ、詰る所日本の保護の下において呉れろといふ話をした。ウヰッテは餘り不同意でもなかつたらしい。伊藤公はウヰッテに向ひ露國は滿洲をどうする積かと訊いた。するとウヰッテはなに永遠に占領する氣はない。然しこれまで滿洲鐵道にウンと金を注ぎ込んだ。あれを役に立つやうにするには今少し注ぎ込まなくてはならぬ。それを利用すれば澤山だといつた。要するに鐵道一點張であつた。そこで伊藤公は話が出來ると思うてラムスドルフと協議を初めた。處がラムスドルフは

提案を書いて見せて下さいといふので、朝鮮を日本の勝手にさして呉れといふ一件を主もに提出したらしい。處がラムスドルフは其れは差支ないが、朝鮮の或一點丈けは除いて呉れといふ。それは馬山だらうと伊藤公がいつた。さうだとラムスドルフが答へた。あれは東洋のジブラルタルだ、あれを失ふのは朝鮮全體を失ふのだから、それは駄目だといつた。ラムスドルフは此提案は日本の言分丈けしかないぢやないかといつた。伊藤公はそれは日本の提案ぢやから當り前だ。露西亞の方の言ひ分はあなたの方から出して貰はうといつたすると、今度はラムスドルフの方から切り出した。それは朝鮮の共同保護だ。又露西亞と支那の境と接する所には露西亞のフリー、ハンドを許して呉れといふのであつた。少し虫がよ過ぎた。そこで伊藤公は話をやめて歸つたといふ事だ。けれども伊藤公は話を進めれば出來ると信じてゐたらしい。然し其中に一方に日英同盟が出來て了つた。御裁可になつて調印濟になつた。そこで伊藤公は話をほつたらかして歸つて來た。桂侯の日英同盟に御裁可が下がつて伊藤公の日露同盟策の破れたのは伊藤公最後の失敗であらう。それから歸つて來て、暫らくの間は先づ失意境に立つた。此間の失意は、伊藤公の失意の中で最も甚しい失意であつたと思ふ。ソコで時の桂内閣と反對して大隈伯と手を握つて、續租問題で以て衆議院で突贓した。此時は三菱が後推しになつて伊藤大隈聯合軍が出來たのだ。然るに桂侯は奮闘し出してドッコイさうはさせない。桂侯の後立ては山縣公だ。しかし解散で治まりが附かぬから山縣公が泣を入れて妥協といふ事になつた。が不思議な事には妥協の出來た日が日露開戰の極まつた日。

どうも内治が出來なくなると、何時も外征に人心を轉じさせる奴サ。しかし此時のは伊藤公ぢやない、桂侯だ。三十六年の大阪博覽會の開場式に政府の人も大抵出かけて、伊藤公も出懸けた。之を機として山縣公が中に立て桂侯と伊藤公が直接に妥協の緒まりをつけた。けれど其れと同時に露國がいよ／＼アグレッシブにやつて來た、露淸密約談判の報告が北京の内田の手

から恰も廻つて來て、そこでお互に内で爭うて居る中にこういふ事になつては堪まらない、一つ此内輪喧嘩をやめて、外國を相手に踏張らうといふ事になつたらしい。それで四月の十一日、山縣公の南禪寺の別莊で、妥協の手打もやり、同時に又滿洲一件は支那と露西亞のみに任せておかれないといふ相談が持上つた。それて伊藤公の方は治まつたが、桂侯の方はまだ治まらないて、一方は日露談判中、辭職を申出して、伊藤公を餘儀なくして樞密院議長にした。政友會總裁をやめさした。實は伊藤公の傳も此邊になると、氣の毒になる。桂侯辭職の理由は、伊藤公が元老として政黨首領を兼ねて居て、前者の資格で自分を指導して、後者の資格て自分を脅すから、勤まりませんといふのではありませんでしたか。其處で伊藤公は陛下からお召出になつた。此時は伊藤公も見當が附かなかつたらしい。まさか桂の後をやれといふのでもあるまいし、見當がつかぬので餘程苦悶したらしい。其時伊藤公が御思召に從ひ、政黨首領と共に樞密院議長の命も辭し奉りて、閑雲野鶴に伴うて眠るとしたら、第二の西郷南洲であらう。然し伊藤公は西郷でない。此處で又智惠才覺を振ひ起して、自分と共に山縣公も松方侯も井上侯も皆樞密院に引き入れて、自分は其上に立つて、政友會總裁は西園寺侯に讓つて、矢張り日本の政局に於ける其地位を保つた。がそも／＼末だ。日露戰爭中は伊藤公は大した働きをしなかつた樣だ。最後のポーツマスには山縣公も桂侯も伊藤公に行て貰ひたかつた。然し伊藤公は逃げた。實際之を望む方が餘り虫がよ過ぎた話だ。そこで小村伯が行つた。尤も露國に提出する案には伊藤公も相談を受けて居つたに違ひない。然し結局あゝいふ事になつたのは、伊藤公の責任でない。山縣公の方に責任が餘計にある。それから朝鮮行。それから滿洲視察。そして哈爾賓の暗殺。

日清戰爭の時に三國干涉を受けてあゝいふ纏まりをつけて、其後に露西亞に散々我儘をされて、獨逸にも隨分馬鹿にされて、癪に障つて居るのは日本國民全體だ。伊藤公も確かに癪に障つてゐたらう。其後政府と

維持する上に於て政黨に力を用ひねばならぬといふ事の外に、日本全體の高等政治の方針としては、どうしても國民は露西亞に對して爭はねばならぬといふ決心を朧氣ながらも持たぬものはなかつた。其決心の上に乘かかつて、影になつても日向になつても、是非露西亞を叩きつけたいといふ日本政治家としての意地が伊藤公にあつたかなかつたか、私には分らない。只軍事といふ事については、いつも伊藤公に充分見當がつかないから、日清戰爭後、軍備と財政の調和が取れずして、一方には財政の紊亂も來たし、又一方には政黨の方も旨く行かずして、不人望の上塗をして非常の苦境に陥つた。そして爲すことが多くは齟齬。只政黨の方は一旦は政友會にどうかかうか纒りをつけたが、軍備と財政の調和といふ事は最後まで伊藤公の手におへなかつた樣だ。畢竟最初から伊藤公が軍事に向かなかつたと同時に財政にも注意が疎であつた爲めであらう。つまる所伊藤公は劒と算盤とが不得意であつた。これが得意であつたら太閤以上鎌足以上だ。此位でやめます。我輩の如き後輩が勝手な事をいふのは妄言多罪だ。私は大隈伯若くは山縣公に伊藤公の傳記を書かしたら餘程面白いものが出來るだらうと思つて居る。(完)

談者付言、昨夜ある處で聞いた話で、早速此中の一點を訂正せねばならぬ、それは維新前の長州の財政に關する事だ、あれは疑ひを挿む餘地がない程、明白な取調書があるさうです、外にも無識な談者が誤つて居る處が有りませう、是正をまつ。(三月二十二日)

或は日米戰爭か

憂國生

日米戰爭談は、恰も飛行器の發明の如きもので、初め有り得べからず、有り得ぬと云ふことから段々進化して、有り得べし、有り得ざるべからずと進みつゝあることは甚だ慨嘆に堪えぬ次第である、予は日本人として最も戰爭を厭ふ一人であるが、殊に亞米利加に對しては三十年來厚意を有し、且つ未來と雖も有せざるべからずと論ずる者であるが、今日に至つては殘念ながら、日米戰爭有り得べしと云ふ結論に歸着せねばならぬことになつたことを告白するの巳を得ぬ。

抑七八年前より、米國の、東洋に於て利權を擴張せむとする傾きを生じて來た時に當つては、何人も之を意に介せず、寧ろ文明の勢力が東に及ぶことを歡迎する者すらあつた、予は確に其の一人であつた、然るに此の文明の勢力は、四五年前より一轉して日本に對する抵抗力となつて、或は日米戰爭を生ずるのではないかと云ふ疑を懷かしめたのであつたが、予の如きは斷々乎として此の日米戰爭談を一場の譫言、若くは國際的策士の製造したる風說に過ぎずと排し去つた一人であつたが、天下の事、往々意外なることあり、今や予は、日米戰爭も亦或は之れ有らむと言はねばならぬやうになつた。但し予は、日本より此の危險が起るとは言はぬ。決して此事有り得べしとは言はざる一人である。併ながら此の危險は米國より來るべしと信ずる者である。

抑、日米の間に橫はる種々の問題を玆に列擧すれば、實に管々しきものであるが故に、之を列擧することは避ける。縱し此の事實を列擧した所が實に詰らぬものである。最も大なるは米國が滿洲に於て利害を有する

而して此の利害を日本が脅すと云ふことであるが、是は實に夢の如き話であつて、亞米利加の利益が如何に滿洲に於て脅かされて居るかと云ふことは、殆ど亞米利加人自身すらも證明の出來ぬ程のものである。又滿洲に於ける亞米利加の利益なるものは幾許あるか、殆ど亞米利加の利益なるものを證明することが出來ぬ位の些少なるものである、若し亞米利加が此の地方に於て利益を有すると云はゞ开は想像に過ぎぬ。恰も太平洋の下に無數の黃金がある、此の黃金は予の物であるのに、日本政府が採掘せしめぬと云ふが如き譫言に過ぎぬのである。其の大なる利益すらも此の如し。小なる問題に至つては、日本人を亞米利加に於て勞働せしむるや否やと云ふが如きケチな問題である。併しながら世間、豆粒に躓いて三井の屋根を飛越すと云ふが如き諺さへもある。國際の事は往々にして此の如き出來事なきにあらず。兩國は互に疑心を懷き、互に暗鬼を生じ、今や兩國の神經が極めて過敏となつて、一新聞の論說、一無賴漢の擧動すらも、往々にして兩國人民の神經を鼓舞するに足る時節となつた。

此の如く米國が、日本に對して疑心を懷くに至つた原因を論ずれば、蓋し多々之れ有らむ。予は其の最も有力なる一原因として造船所及兵器製作所の機密金を數へざるを得ないのである。即ち米國をして或國に對して怖れを懷かしめ、之に備へるには大軍備を要すると云ふ議論の下に、ドシ〳〵と軍艦兵器を製造せしめ、而して其の軍艦兵器の請負をするものは造船所、兵器製作所であるが故に、彼等は尙武論を唱へて而して之に依て利益せむとするものである。上下兩院の間には兵器製作所、造船所の機密費が多數に振撒かれてあり、而して多くの新聞紙が是等の金に依て動きつゝあると云ふことは最早疑ふべからざる事實である。米國の近年の軍備擴張に依て各製造者が得た黃金は、尠からざるものであつて、甚しきは名義上造船所あつて、設備未だ成らざるものにすら、政府は軍艦の製造を命じ、而して其の製造所は、請負を命ぜられて初めて眞正の設備をすると云ふ程のものすらあつた。蓋し米國の軍

艦は、英國若くは佛國の軍艦に比して非常に製造費の高さに拘らず、米國政府が之を歐羅巴に註文せずして內地に註文すると云ふことは、米國の識者の間に非常に議論あるに拘らず、政府が斯くせねばならぬと云ふことは、即ち其間に、軍備に依て利益せむとする者の勢力の甚だ多いと云ふことを證明して餘りあると思ふのてある。又此外に、米國に於てジャーマンジユーの多いと云ふことも原因てあつて、彼等が事に觸れ、機に乘じて日本を排斥せむとするが如きは是亦一の原因と言はねばならぬ。が其の原因の如何に拘らず、兎に角亞米利加人の神經は極めて過敏となつて、日本の軍備の目的を疑ひ、日本國民發展の將來を憂へ、初めは田舍出の、正直にして勤勉なる少年愛すべしとなして頭を撫てしものが、今は偉大なる丈夫となつて、彼等の意の儘にならざるを見て頗つて之を嫉まむとするが今日の情態てある。是に於てか勞働問題が出、是に於てか滿洲問題が出、是に於てか太平洋問題が出んとするのてある。

之に對して日本人は極めて冷靜に構へて居る。又予は構へなければならぬと云ふ論者の一人てある。日本人は事每に、四十年來の米國の厚意と云ふことを繰返し、如何に歐洲の列國が、日本に於て暴力を以て臨まんとする時、米國が稍寬仁てありしかと云ふことを回顧して、常に亞米利加を自由寬大なる國として記憶し、此の記憶に依て聊か現在の不平を忘れむとするものてある。恐らくは日本が古來如何なる外國に對しても、亞米利加に對するほど寬大に、且つ友愛的に出た時はあるまいと思ふ。加之日本は日露戰爭の後、軍艦戎器其他の瘡痍甚だ多く、且つ大戰の後を承けて經濟上に大變動を生じたるが爲め、朝野ともに財政に窮すると云ふことを自覺して居る故に、今日は翼を收めて起つべき時てないと云ふことを自覺するが爲に、面を和らげ、言を叮嚀にして米國と應接することに努めて居る。是れ單り政府の議論のみならず民間に於ても亦此の調子が見える。併ながら米國の近日のやり方を見れば、果して日本國民が何時まで忍耐し得るや、予は甚だ憂

惧に堪えぬのである。桑港に於ける日本人の排斥は、初は職工の仕事と知られて居つた、日本政府も亦斯く信じたいと思つた時があつた。其後は、或部分は政治家の仕事と思はれて居つた。日本政府も斯く信じたいと思つた時があつた。其後漸くにして、此事たるや單り政治家のみならず、全國に此の感情が充ちて居ると云ふことを發見せられて、而して日本政府は之を信ぜざらんと欲した。併ながら今日に於ては最早疑ふべからざる事實となつて來た。即ち滿洲中立問題の如き、最近に至つてはジッフ氏が日米戰爭を論じたるが如き、或は前の大藏大臣が日米戰爭を論じたるが如き、如何に、米國の下等社會のみならず、上流社會に於ても日米戰爭談が燃えつゝあると云ふことを證明するに餘りあると思ふのである。併ながら日本國民は今尙忍耐しつゝある、若し今後六七年を經過して、我軍備既に成り、我財政既に十分に、國民自身の力漸く生じた時に當つて、米國の態度猶今日の如く傍若無人の問題を提出するに於ては、予は虞るゝのである、日本國民は最早忍ぶべからず、宜しく米國を挫くべしと云ふ議論が出ないとも限らぬのである。此時に當つて恐らくは一波動きて萬波生じ、到底已むべからざる勢ひになつて、國民の感情が燃え立つた時には、如何なる事が生ずるてあらうか。米國の新聞紙は之を見て、愈々日本は本色を現はしたと云ふやうなことて、必ずや又此の議論を相應接するてあらう。而して其の議論を相鬪はした結果、恐らくは意外の變が生ぜぬとも限らぬのである。此時に於て日米兩國の間に、果して此鬪牛の角を抑へて之を引留める力のある政治家があるや否や、日本に於ては或は之れ有らん、米國に於ては、予は其人無きを斷言する者である、此時に當つて兩國の間に如何なる事を生ずべきかと云ふことは唯上帝のみ之を知る。

世間、ジッフ氏の言は南滿鐵道に對する中立問題に失敗したる餘憤を漏すのであると言ふ者がある、夫れ或は然らん。併し餘憤にせよ餘憤ならざるにせよ、此の如き人が日米戰爭を論じたと云ふのは容易ならぬこ

とてあると言はねばならぬ、抑も米國が一時、日露戰爭に付いて日本の味方をしたるが如き情態あるは、實は米國人自分の同情のみでない、米國に於けるジュー人が露西亞に對する惡感を有つて居ると云ふことが其の原因であつた、予の信ずる所に依れば、紐育に於けるジュー人は殆んど全市の三分の一を占めて居ると思ふ、紐育の新聞の大なる花客は、即ち最も多くはジュー人が相手である。故にジュー人の御機嫌を取る爲に、一時紐育の新聞は筆を揃へて露西亞を罵つたものである。併し之を以て單にジュー人の御機嫌を取らむとする爲のみとするは或は無理かも知れぬ、米人は元來壓制政府を憎むものであるから、壓制政府に對する反抗の情も亦手傳つて居るであらうが、併ながら兎に角ジュー人の機嫌を取ると云ふことが原因の一であつたと云ふことは蔽ふべからざる事實である。是が爲に紐育の新聞は日々日本を賞めて露西亞を罵つた、是が殆ど全國の新聞紙を風靡して、一時國民の感情を日本に向はしめた原因であつて、當時紐育在留のジュー人は、相合して一艘の軍艦を造つて日本に贈らむと企てた程であつた、以て當時ジュー人の勢力が、如何に米國をして、日本に向つて露西亞と爭はしめむとするに與つて力があつたかと云ふことが分るのである、ジュー人の勢力此の如し、今や日本が露西亞と相接近したと云ふことに依り、南滿鐵道を經營する方法が露西亞の壓制時代と大差無しと云ふことに依て、漸く米國に於けるジュー人の心を失つたと云ふことは、即ち此次には米國の人心を靡然として日本に背き去らしむる原因であると云ふことは、是亦忘れてはならぬことである。米國はジュー人ならざるも既に勞働問題に依て漸く日本と相背き去らんとして居るのである、今やジュー人の勢力に依て更に日米の間が割かれむとするのである。此間に國際的策士の術策が試みられたならば、如何なる情態になるであらうかと云ふことは智者を俟たずして知るべしてある。予は是が果して何人の責任であるかを論ずる暇がない、此の如き情態に在つては、如何なる明敏なる外交官ありと雖も之を恢復するは容易で

ない、況や之を前にしては傲岸にして禮無く　事態に通ぜざる村夫子の如き靑木大使あり、之を次にしては耳遠くして偏狹なる高平大使あり、此次には內田大使であつて、比較的彼等よりは優れりと雖も、併ながら小細工にして自ら用ゐるの外何の長なき人が、果して日米の間に如何なる働きを爲し得るかと云ふことは、吾々が初めより疑つた所である、水既に勢ひを決した以上は如何なる智者ありと雖も之を恢復することは出來ぬ。況や智者ならざるものをやである、日米の間は今後必ず險惡になると云ふことは已むを得ざる勢ひである、此の險惡の間より如何なる形勢が生じて來るかと云ふことを知るものは、唯上帝のみである。

予は日本在留の米人に對しては滿腹の敬意を表し、彼等が日本の文明を進むるに貢獻したものであることを認むるに躊躇せぬものである。又彼等の人物、彼等の心事、眞に公明にして我友として恥かしからぬ人の多いと云ふことも亦之を認めねばならぬ。又米國に在つても人道の上より日米の間事無かれかし、日米の親交あれかしとして居る者も少なからざることを認めねばならぬことは猶ほ日本に之れ有るが如し、併ながら大勢は如何ともすべからず、滔々として險惡に赴きつゝあるのである、此の險惡の間に如何なる情態が出るかと云ふことは、唯歲月之を說明すべきものである、故に予は今日に於ては、日米戰爭を一個の夢想なりとして蔽ふことの出來ざるものであることを告白し、我國民と米國人が深く此間に付て相戒めむことを望む者である、此事に付て日本人は餘りお座なりである、日米戰爭と云へば直に之を笑ふことを習慣として居る、併ながら笑ひの裡より往々血の出ることがある、日本人は此點に付て深く相戒めざるべからざることを信ずるものである。又米人は日本の笑ひの裡より一の冷酷なる事實あることを見出さむことを望むものである、日本人は猶巴里人の如く乾いたる淚を持つ者である、笑の裡に悲壯なる事實を包む者である、叮嚀なる禮節の裡に極めて深き憤慨を包む者である、今日然るべき人の間に一の日米戰爭を語る者が無いと云ふことは、

とてあると言はねばならぬ、抑も米國が一時、日露戰爭に付いて日本の味方をしたるが如き情態あるは、實は米國人自分の同情のみでない、米國に於けるジユー人が露西亞に對する惡感を有つて居ると云ふことが其の原因であつた、予の信ずる所に依れば、紐育に於けるジユー人は殆んど全市の三分の一を占めて居ると思ふ、紐育の新聞の大なる花客は、即ち最も多くはジユー人が相手である。故にジユー人の御機嫌を取る爲に、一時紐育の新聞は筆を揃へて露西亞を罵つたものである。併し之を以て單にジユー人の御機嫌を取らむとする爲のみとするは或は無理かも知れぬ、米人は元來壓制政府を憎むものであるから、壓制政府に對する反抗の情も亦手傳つて居るであらうが、併ながら兎に角ジユー人の機嫌を取ると云ふことが原因の一であつたと云ふことは蔽ふべからざる事實である。是が爲に紐育の新聞は日々日本を賞めて露西亞を罵つた、是が殆ど全國の新聞紙を風靡して、一時國民の感情を日本に向はしめた原因であつて、當時紐育在留のジユー人は、相合して一艘の軍艦を造つて日本に贈らむと企てた程であつた、以て當時ジユー人の勢力が、如何に米國をして、日本に向つて露西亞と爭はしめむとするに與つて力があつたかと云ふことが分るのである、ジユー人の勢力此の如し、今や日本が露西亞と相接近したと云ふことに依り、南滿鐵道を經營する方法が露西亞の壓制時代と大差無しと云ふことに依て、漸く米國に於けるジユー人の心を失つたと云ふことは、即ち此次には米國の人心を靡然として日本に背き去らしむる原因であると云ふことは、是亦忘れてはならぬことである。米國はジユー人ならざるも既に勞働問題に依て漸く日本と相背き去らんとして居るのである、今やジユー人の勢力に依て更に日米の間が割かれむとするのである。此間に國際的策士の術策が試みられたならば、如何なる情態になるであらうかと云ふことは智者を竢たずして知るべしてある。予は是が果して何人の責任であるかを論ずる暇がない、此の如き情態に任つては、如何なる明敏なる外交官ありと雖も之を恢復するは容易で

ない、況や之を前にしては傲岸にして禮無く　事態に通ぜざる村夫子の如き靑木大使あり、之を次にしては耳遠くして偏狹なる高平大使あり、此次には內田大使てあつて、比較的彼等よりは優れりと雖も、併ながら小細工にして自ら用ゐるの外何の長なき人が、果して日米の間に如何なる働きを爲し得るかと云ふことは、吾々が初めより疑つた所である、水旣に勢ひを決した以上は如何なる智者ありと雖も之を恢復することは出來ぬ。況や智者ならざるものをやてある、日米の間は今後必ず險惡になると云ふことは已むを得ざる勢ひてある、此の險惡の間より如何なる形勢が生じて來るかと云ふことを知るものは、唯上帝のみてある。

予は日本在留の米人に對しては滿腹の敬意を表し、彼等が日本の文明を進むるに貢獻したものであることを認むるに躊躇せぬものてある。又彼等の人物、彼等の心事、眞に公明にして我友として耻かしからぬ人の多いと云ふことも亦之を認めねばならぬ。又米國に在つても人道の上より日米の間事無かれかし、日米の親交あれかしとして居る者も少なからざることを認めねばならぬことは猶ほ日本に之れ有るが如し、併ながら大勢は如何ともすべからず、滔々として險惡に赴きつゝあるのてある、此の險惡の間に如何なる情態が出るかと云ふことは、唯歲月之を說明すべきものてある、故に予は今日に於ては、日米戰爭を一個の夢想なりとして蔽ふことの出來ざるものであることを告白し、我國民と米國人が深く此間に付て相戒めむことを望む者てある、此事に付て日本人は餘りお座なりてある、日米戰爭と云へば直に之を笑ふことを習慣として居る、併ながら笑ひの裡より往々血の出ることがある、日本人は此點に付て深く相戒めざるべからざることを信ずるものである。又米人は日本の笑ひの裡より一の冷酷なる事實あることを見出さむことを望むものである、日本人は猶巴里人の如く乾いたる淚を持つ者てある、笑の裡に悲壯なる事實を包む者てある、叮嚀なる禮節の裡に極めて深き憤慨を包む者てある、今日然るべき人の間に一の日米戰爭を語る者が無いと云ふことは、

彼等は語ることを好まざる爲めであると云ふことを米國人が認識せむことを望む者である、若し今日の如く無禮を重ね、不法を重ぬる結果は、此の忍耐が一時に破裂する時が來ると云ふことを認めねばならぬのである。又日本人も深く亞米利加の新聞紙、及び亞米利加の國民的心性を了解せねばならぬと思ふ、亞米利加人はアラバマ事件の、百姓一揆の如き騷ぎから南北戰爭の如き大事件を生じたる騷動好きの國民である、紙に火を點けたるが如く、最初は小事件であるが瞬く間に大事件を出す傳染性のモッブの集まりてあると云ふことを了解せねばならぬ。即ち西班牙と相爭ふ時に當つて、何等戰爭せねばならぬ程の事實ありしや、今日に於て見れば何等戰爭の原因は無かつたのである、唯新聞紙がメイン號事件を誇大に書立てたと云ふことが即ち米國人を皷動せしめてあれ程の大事件を生じたのである。桑港事件の如きも然り、僅に三四の學童の學校に入ると入らざるとが、亞米利加人にとつて果して如何の利害ありや、然るに彼等は殆ど戰爭を賭するが如き勢ひを以て、あれ程の騷ぎを起したてはあるまいか、亞米利加人はモッブの凝りてあつて、新聞紙はモッブを鼓舞する機關であると云ふことを了解したならば、恐らく今後如何なる重大なる事件を生ずべきかと云ふことも亦略〻想像するに餘りあるのである、予は日米兩國の政治家が、日米戰爭談は最早一二の黄色な新聞の議論に止まらずして、稍怖るべき現象となりつゝあると云ふことを認めて、深く相戒めて平和を維持するの途を攻究せねばならぬと云ふことを考へて貰ひたいと思ふ。

干渉と放任の二思想

鎌田榮吉

學問は無形、有形共に近時非常の進歩をなし、殊に有形學の方は着々と其實効を現はして居る、併し性理道德、政治、經濟等の無形學に於ては昔からの疑問で、今猶ほ極らないのみか、將來にも容易に解決せらるべき望のないものも多い、昔から爭つて居る論點は今日でも矢張り爭つて居る、唯其爭ひ方が益々秩序正しく益々綿密になつて來た丈である、それも哲學上の唯物唯心兩論の如き極めて實際に縁の遠い無形の事は兎も角も、現に浮世の人事に直接の關係を持つ問題、就中社會主義と個人主義との爭の如きは其最も大なる根本的爭點であるが、差當りもつと直接、保護主義とか、放任主義とかも之から出て來る譯で、事實の上に大に當惑することが少くない、今その一例を擧げると大分以前の話であるが、墺都維納市で家屋の建築方を改めなければならぬといふ議が起つた、今の維納市は大した立派な者になつて居るが、五六十年前は隨分穢かつたらしい、そこで市中の家屋をもつと空氣や光線の能く這入る立派な者にせぬと、市民の衞生に有害であるといふ事から、頗る綿密なる建築條例を立てゝ、彌よ之を發布した、所が其條例通りの家を建てるには、中々の金が要るから屋賃が高くなる、貧民は據なく一つの部屋に數家族雜居する樣な事になつた、成程家はよくなつたけれども、無暗に狹い内に多勢雜居する樣な譯では市民の衞生を進めんとして却つて不衞生にもなり、又道德上風紀上、有害な事も起るといふ所から今度は數家族の雜居を禁じた、そこで貧民共は或は公園や火除地に行つて寢る、それを巡査が追ひ出す、其中に追々そら寒くなつて來た、今度は如何樣なことをす

るかと見るに、到頭家畜の糞を積んである上に寢る樣な事になつた、成程家畜の糞からは煙がぽか／＼起つて居る位だから非常に暖いには暖いが、抑もの初は衞生の爲に作つた所の建築條例、此建築條例が遂に市民を驅つて牛や豚の糞の上に寢させるやうな不衞生な結果を來したといふ矛盾を見た、が兩論者の意見は之に付いても全く正反對である、放任主義の人はそれだから打擲つて置くが宜い、さういふ餘計な事をするから人を救はんとして却つて人を苦める樣な事になる、衞生を進めんとして却つて不衞生な結果を來すのであるから全く自然に放任するが宜いといふに對し、干渉主義のものはその反對にそれは條例を作つたのが惡い譯じやない、世話の燒方が足りない、も一歩進んでやらなければならぬ、若し糞の上に寢る樣なものがあればその貧乏人の爲には御救ひ小屋を建てて遣るが宜い、錢の取れる仕事が無いといふなら、公共の勞働場を立てゝ賃錢の取れるやうにして遣るが宜いと主張した相だ、全體此二つの議論は古より今に至るまで政想界に存する二潮流、唯双方のいふ所が時代を追ふて益々巧者になつて愈よ進んで居るといふのみで中々勝負は付かぬ、放任論者の方は成るべく政府の干渉を省いて人民の自治に任ずべし、政府の本務は消極的保護に止まる。外は外敵の侵入を防ぎ、内は各人の權利を保護するの外には何事もせぬが宜い、政府は積極的の仕事をする筈てないといふのを以てその主張とする、併し此內にも色々階級があつて、その甚しきは尙ほ數歩を進めて大に政權の區域を狹めんとする議論を生じ、遂に絶對的無政府主義の極端論を生み出すに至つた、彼等の說によれば、政治機關は人文完全の社會には勿論不用であるが、現時の社會と雖も世人の思ふ程消打のあるものではない、又法律もそれ程効力のあるものでない、假令立法者の考で事を定めたにしても、輿論に背き民情に悖つた者は何の効も成さぬ、世の中の安寧を保ち秩序を保つのは偏に政治法律の効力であると思ふのは、畢竟今日の現狀に欺かれて居るので、假に其法律が無くなつたと假定しても今の人の想像する程に

決して世の中は紊亂しない、其の一例をいへば恩借の金、即ち抵當もなく只其人の名譽を信じて貸した金の方は能く返濟され、印形を捺したり證文を取つたり、加判人を立てたものは却つて貸倒れになる割合が多い、これて見ると法律の力は皆無である、否、假令幾分の効力があるにしても、亦之より生ずる害もあるといふ。即ち彼のプルドンやバクニン一派のいふ如くに政府を消滅せしめた曉には人心の内部に潜在する自治心は天然の約束のまゝに發達し、政治的外部の機關に代りて社會の秩序を保ち、人生の福祉を全うする事が出來ると主張する所のアナアキズムは是であるが、此極端なる無政府主義に至る迄には猶ほ其説に澤山の階級がある、之に對して他の一方には保護主義干渉主義なるものがある、それは君民の間柄は恰も慈母の赤子に於けるが如く、政府が一切の世話をして人民を育てるといふに濫觴して居るが、此幼稚な社會が段々進歩するに從ひ、次第に政權の區域を擴張し、遂に國家社會主義を立つるに至る迄には、同じく其說に澤山の階級がある、此主義になると國家が諸般の事を經營し何事も個人の經營競爭に任せぬといふ正反對の流儀である、素より、此主義の理想とする政府は、今日の樣に閥族だの政黨だのといふ或る一部分のものが黨派を組み、權謀術數の結果自分の味方の方に勢力を握つて作り上げた樣なものでなく、より大に進歩した政府、即ち國家即政府といふ樣なものとなし、其政府即ち國家は夫々各方面に於ける經驗、智識ある一粒撰りの人物が、各部の事を支配し經營するといふ樣な具合にする、此理想的政體の下には何も蚊も一個人の經營競爭に任せずして皆國家社會がやる、銀行でも鐵道でも飯屋でも酒屋でも一切社會團體て經營して行く、各個人は皆其指定せられたる業務に從事して、政治もすれば勞働もする、丁度社會を以て實業的徴兵組織とでもいふ如くにするので、これが此論者の理想である、一は文明の極度は政府萬能であるといひ、他は開化の絶頂は無政府の社會であるといふのである。そこで今日の文明諸國の有樣を見ると、獨佛は稍々前者を代表し、英米は稍

々彼者を代表して共に未だ其極所に至らない。此正反對の理想に基づく社會黨と無政府黨とが時々親類の樣に結び付いて色々の騷動を引起し、現政府からは同樣に睨まれては居るけれども、其實は正反對で、一方は政府を無くしやう、一方は政府を萬能にしやうといふ流義である、それ故非常に緣が遠いけれども、現在の樣な政府を顚覆せんと企つるところ丈は同樣である。がその根據とする主義に至つては實に何處までも正反對のものである事を思はねばならぬ、此二主義の爭は單に西洋許りでなく、支那の昔からの事を考へても矢張り同樣である、只支那の方は其言ふ所か漠然として西洋人の如くに正確な理屈が附かない丈である、先づ支那のオルソドックススクールともいふべき儒敎、即ち聖人先王の道を尊崇する孔子の道も、又荀子、韓非子、申不害抔いふ刑名學派の說も、共に國家主義、社會主義の範圍に這入つて居る、全體兩派の相違をいへば、此儒敎の趣旨は人を善くするにあるといつて間違ない、人といつても國家全體でなく、只社會の在上者を以て德を備へた立派な人となし、其德望に依つて天下の人心を收攬し、人民を懷柔しやうとするもの、所謂民を視る赤子の如くする慈母政治が其理想である、それから刑名の桊を唱へた韓非子、申不害抔は總て法律規則を綿密にし、水も洩らさぬ樣にして天下を支配しやうといふのを其主張として居る、がこれは時世の變化に依る事で夏殷周三代の世迄は社會も單純であり、殊に周代は封建制度で僅に一地方〳〵の政治だから、儒敎主義でも宜かつたけれども、秦以後は天下を郡縣にし、四百餘州統一の政治ですから仲々人君の德に依つて治めるなどは出來る話ぢやない、嚴密なる法律を作り、社會に法律の網をかぶせて、その規程や罰則や權限によつて支配しやうといふ流義になる、畢竟其時の事情に迫られ時勢の必要に應じて刑名の學も興つた事であらう、そこで儒敎主義と刑名主義とは大に違ふ、一は禮樂を以て感化して行かう、德を以て懷けて行かうといふので、即ち德化主義恩威政治とてもいふべきもの、之に並ぶ刑名論は法律主義威服主義であ

るから、一寸見た所全く反對の樣ではあるが、矢張り等しく政府の干渉保護を以て行かう、制度法律典禮を以て治めやうといふのであるから、共に取りも直さず國家主義、社會主義の範圍に這入るべきものである、然るに之とは全く反對なる老子の敎といふものがある、老子は周末に生れて無爲の說を唱へた人、孔子も周に行つて此老子に禮を問ふたといふ話がある、丁度プラトーがソクラテスの所へ行つた樣な譯で門弟子が其後に老子の人と爲りを問うた所が、孔子は嘆じて鳥は我れ能く其飛ぶを知る、獸は我れ能く其走るを知る魚は我れ能く其躍るを知る、躍る者は網すべく走る者は捕ふべく、飛ぶ者は射るべし、龍に至つては我れ之を如何ともする能はずといつたとやら、老子の龍の如き者といふことを窃に意味した所から考へて見ると、老子は非常な偉人であつたに違ない、此偉人が無爲の道を唱へたのである、一言にいへば各種の政治の中で何も政治をしないのが一番宜い政治だといふ事を主張したのである。尤も書經に舜垂拱して天下治まる、又中庸に舜篤恭にして天下治まる、又論語にも無爲にして治まる者はそれ舜か、己を恭しくして正しく南面するのみとある、一寸思ふと是れも矢張無爲の樣であるが、老子の無爲とは大分違い保護干渉を全くやらぬといふ譯ではない、夫々適才を適所に任じ、それ等が政務を怠らねば、天子は一々細事に干渉せずとも宜しい天子は只德を以て臨みさへすればそれて天下は治まるものだといふのである、矢張りこれは英國の "King does not govern, but reign" 王者は治むれども施さずといふ意味であるらしい、老子の無爲は根本的放任にあるので、殆んど無政府主義といつても宜い、老子の言に大國を治むるは猶ほ小鮮を煮るが如しとある、それは無鹽の小魚を煮るに無暗に箸でいぢくると形を失つて御馳走にならぬ、鍋に入れたら煮える迄は其儘にし、煮へるのを待つて食するといふ事なので、餘計の干渉を試みたり、下らぬ法律を拵へたり樣々な事をすると却つて毀して仕舞つて可けないとの意である、此人は周の末の亂世に生れたのだが、此時代には色々な

說客が出て樣々な事をいつたもの、すると又大名諸侯進は其說客の說を聽き、斯うもしたら富國强兵が出來はせぬか、あゝもしたら天下に覇たることが出來はせぬかと色々な事を行つては失敗つて國を失ひ、或は臣子の爲に殺されるといふ樣な者が多かつたから、時勢に感じて斯かる說を唱へられたに違ない、所謂末學拘儒汗說を吐き治官煩擾下民を勞するの弊に感じて起つた說に違ない、然るに之が周の末に止まらずして後々迄も此無爲主義の系統を引いて居る人が少くない、漢の高祖を輔けた彼の有名なる蕭何といふ宰相が死んだ後に、曹參といふ人が漢の宰相となつた、曹參は元と齊の宰相であつたが、後に天下の大臣となり、此無爲の道を以て治國の要を得たるものとした、曹參は始め蓋公といふ道人に從つて老子の道を學び、遂に此無爲を以て天下を治めたといふ、支那の歷史には多少嘘も混つて居るか知れぬが、曹參といふ總理大臣は朝夕酒を飮んで何時でも醉ひ倒れて居る、役人共が何か政治上の意見を言はんと思つても役所には出て來ない、宅に行つても必ず客と酒を飮んで居る、隙を窺つて說を言ひ出さうとしても曹參の方ではコリヤ何か面倒な事を言ひに來たなと思ふから、マア一つ飮むが宜いといふ、一つ飮んで言ひ出さうとすると又酒を注ぐ、到頭醉つて了つて共に歡を盡して去るといふ樣な始末、それが爲に役人共が策を献ずることも亦法律案を呈出することもなく、每日役所に往つて煙草を飮んで無事に遊んで居たから、天下は仲々旨く治まつたといふ事だ、馬鹿々々しい話だが能く翫味して見るとまんざら理屈の無いことでもない、それから續いて景文帝も無爲の說を以て天下を治めて成績頗る好良であつた、武帝に至つて種々な仕事をしたから失敗したといふ樣なことが漢書などにも載つて居る、夫から東漢の汲黯、東晋の謝安も無爲の說を喜んで之を以て天下に臨んだが、其時にも政府が旨く行つたといふ。此樣な事は今日から言ひますとアナアキズムといつて宜しい、決して唯放任主義位の事でない、之に依つて考へると何れの世にも自由放任と保護干涉との二潮流は思想海に流

れて居るものといつて宜しい、政想界に自由放任の説ある如く、恰も醫學界に於てもヴクス、メヂカトリツクナチリー、即ち「天然は己れを療治する」といつて病は自然に治る、藥を用ひずに一切打擲つて置くが宜いといふ説が起つた、醫藥の力、療治の力で病を治さうといふ醫藥萬能の干渉説が盛に行はれた後には、その正反對に自然療法の放任説が起る、支那に於ても時々名醫が出て壞病即ちクロニツクヂシースになると藥石では治らぬ、穩和なる運動、滋養、通風、採芝の自然の療法で癒す外はないといふ事を唱へた、國政と醫藥の間には一種の類論法が往々用ひられるものであるが、大抵人の思想の潮流には二派あるもので、始終斯かる波動が起つて居る、只東洋の議論は西洋の如くに正確詳密には行かぬけれども、矢張り此二個の思想が始終戰つて居つたらしく見える、私はその孰れかの一方に偏して極端なる説を立つるを喜ぶものではない、只活眼達識の士のみ能く其權度を知り用ひて能く過らざるを得るものと思ふが、今日の我國政の狀態は果して宜きを得て居るであらうか、一念を此處に深く潛めたならば大に蒙を啓くものがあらうと思ふ。

財政より觀たる母國と臺灣の關係

ドクトル、ヲブ、フイロソフイー　佐久間秀雄

臺灣に於ける日本殖民政策の成功は、倫敦タイムスの東京通信員が激賞したる如く、隨分世界に誇示するに足るものであつた。然しながら此の成功が果して根本政策の確立より生じたりや、或は單に當局者が必要

の前に叩頭したる偶然の結果なりやと問へば、予輩は淺からざる疑問を抱くを禁じ能はぬのである。既に健全なる根本政策が確立されたりとせば、予輩は臺灣の前途亦憂ふべきものなしと云ふ事が出來る。反之若し偶然の成功であつたとすれば、彼等が何時如何にして健全なる其の筋道より外れて邪道に陷らぬ危險がないとも限らぬ。而して予輩は過ぎし議會を通過したる豫算案に於て、殖民地經營の前途を危ぶむべき、一の重大なる事柄の存在するを認むるのである。其は桂内閣が四十二年度よりして臺灣の輸入關税を中央政府に沒收するの案を立て、議會が之れに協賛を與へた事を指すのである。

* * * *

臺灣の輸入關税額は毎年多少の増減はあるが、大抵百廿四萬圓許を得べき確實なる財源であつて、同島の租税中砂糖消費税及び地租に次ぐ主要なる税である。臺灣の經常歳入は約二千五百萬圓見當のものであれば、輸入税の沒收に由つて大約二十分の一の收入を失ふ概算となる。其の臺灣經營の前途に對して非常なる打撃を與ふるものたるは云ふまでもない事であるが、特に此擧に向つて反對すべき最も重大なる理由は、その臺灣に行れつゝあつた特別會計制度の根本を破壞すると云ふ點に存するのである。予輩は豫ねてより此の特別會計制度の設けられた事を祝しつゝあつた一人である。臺灣が今日の如き成功を見るに至つた最も重なる原因は、實に特別會計の制度を取つた事であつた。今や桂内閣は此の成功の最大要素を滅却したのであるが、彼等は果して其の所業が、若干の意味を有するかを知つて居るであらうか。一歩を遡つて云へば、彼等は果して、臺灣に施されたる特別會計制度なるもの、意義と目的と運用とに就ひて、明確なる意見を有して居るであらうか。予輩は彼等の臺灣に向つて爲したる跡に徴して否と答へねばならぬ事を悲しむものである。桂内閣は普通の道理と人情よりすれば、少くとも殖民地經營に對しては、何れの内閣にも越へて、大なる興味と熱心とを有すべき筈である。其任期は短く、

且つ其の施設は何等見るべきものなかりしにせよ、桂首相は兎に角臺灣總督の印綬を帶びた人である。彼れは又東洋協會の會頭として殖民經營には當然熱心なるべき人であると世間よりは見られて居る。最近に於ては彼れは東洋拓殖會社を創立するに最も力を致した人として知られて居る。此の如き人が内閣の首班に座し且つ大藏大臣をも兼ねて居るのみならず、其下には現内閣の花形役者を以て目せらるゝ後藤遞相が居る。後藤氏が後藤男となつたのは、彼れが長く民政長官として臺灣に殊功を樹てた故であるが、彼れは滿洲鐵道の總裁となりて後も、尙暫く臺灣總督府の顧問を命ぜられて居た。之れと同時に彼れは又關東都督府の顧問をも兼ねて居たが、此は彼れの臺灣に成功せし殖民經營の智識と技倆を借りんが爲めと云ふのが、兎も角表面の理由となつて居たのである。乃ち後藤男は殖民地政治家であつて、殖民地經營は彼れの政治的資產である。彼れが如何に此事に對して熱心なるかは、其の大學に殖民學の講座を設けし一事に由つて明かに之れを知り得るのである。是れだけの役者が揃つたる桂内閣は定めし殖民地の事には明るいてあらう、殖民地の利益を踩躪するような事はせぬてあらう、殖民地に就て列國は如何なる經驗をしたか、如何にすれば殖民地を發達せしめ得るてあろうか、凡べて十分に諒解して居るてあらうと考へるのは當然の話である。然るに事實は却つて其の反對に出てた。殖民地政治家と目されし彼等は今や何等の思慮分別もなく、勿論一の理由らしき理由をも有せずして、臺灣の特別會計制度を破壞し、其の輸入税を奪取したのである。實に沙汰の限りと、唯管惘るゝの外はない次第てある。

* * * *

抑々桂内閣が突如此擧に出てたるは、四十二年度の豫算を編成するにし兼ねて四苦八苦したる結果であつた。彼等は外交財政の刷新整理を以て、西園寺内閣を顚覆すべき二つの攻道具となし、先々首尾克く其の目的を達したのであるが、偖彌々自ら其局に當るに及んで、財政整理は抑々思ふようになり兼ねた。色々とな

い智恵を振り絞つた結果は、一方に事業繰延を行ひ、且つ各省に渡りて五分減を行はしむると云ふ奇妙千萬なる案を立てたのてある。而して彼等は臺灣總督府を強ひて此の御招伴をなさしめたのてある。是れが抑々間違てある。臺灣の歳入總額は經常臨時を合して約三千萬圓なれば、其の五分は百五十萬てある。單に五分減の方針を臺灣に適用するなれば、それだけ總督府が儉約すれば濟む譯てある。然し之れては中央政府の財政には何等の難有味もないのてあるが、若し是れだけを中央政府て沒收するとすれば甚だ助かる次第てあつた。彼れは臺灣の諸收入中に於て端なくも輸入税額が唯此の五分減額に近き事を發見し、手を拍つて喜んだのてある。彼れは關税統一なる名義の下に之れを捲き上げに取掛つて、其由々總督府に傳たへのてあつた。今迄特別會計制度なる城壁に據つて安心し、後藤男の爲めに銅像を建てるなど〻騒ひて居つた臺灣の當局者は、明ひた口も塞がらぬ程にアキレたのてあつたが、かくてあり得べきに非れば、彼等は桂首相の勸辨を請ひ、且つ一方には後藤男に縋つて然るべく沙汰止みにせられん事を哀訴に及んだのてある。彼等の哀訴も懇願も總べて美事に刎ねつけられた。若し此上にも抗論するなれば臺灣當局者の頭を刎ねても內閣は此案を遂行すると云ふ意氣込てあつた。賴む木蔭と思ふた人々も見離されたる彼等は、人情の機甚だ計り難きを歎息しつ〻、泣々其れに服從したのてある。

* * * *

かくて臺灣の輸入税を沒收して中央政府のものとなしたる豫算案の議會に提出せらる〻や、殖民に關する智識少き議會は、何等有力なる質問をなすものなく、僅にスラ〳〵と之れを通過したのてある。勿論一二の議員は之れを難じはしたが、彼等の聲は反響を喚起するだけの力を有しなかつた。而して豫算編製當時多少此事につきて消息を傳へし因緣ある新聞紙も亦之れを默殺し去つた。多くの問題が雜然紛然として一時に湧起する時に、此の如き直接の利害なく、又特殊の色彩を帶びざる問題が衆目を惹かぬのは、今更是非もな

い事である。然しながら此の問題たるや實に殖民地財政制度の根本に觸るゝ重大なるものである。六三問題が臺灣の法制に關し重大視さるゝなれば、此の問題も亦同程度の注意を拂はなければならぬ性質を帶びて居る。其の質實にして人の眼を惹かぬだけそれだけ心を用ひて其成行を凝視すべきものである。桂內閣は既に特別會計制度を傷けた。議會は之れに協賛を與へた。然し此の問題は此のまゝには濟まされぬのである。議會は此問題を其の墳墓より喚起して、桂內閣の悔心を求めねばなるまい。然しながら何故に予輩が然かく此問題を重要なりとするかに就ひて、一應の說明を下すに非れば、予輩の論旨は透徹しまいと考へる。

* * * *

夫れ臺灣は一の殖民地であつて、決して本國の一州同樣に見做すべきものでなく、何處までも殖民地として取扱はなければならぬ我領地である。臺灣の總人口は四十年末に於て三百二十二萬人餘であるが、其內本邦人は七萬八千人弱で、支那人は實に三百萬人餘を占めて居る。之を比數に現せば臺灣の人口千人中九百卅六人强が支那人であつて、其間に二十四人强の日本人と、三十五人强の生蕃人と、三人强の外國人が居る割合である。故に人種の上よりすれば臺灣は一個の支那人島である。且つ島の東半山岳地方には蕃人が棲息して王化に霑はぬのみならず、其の風土の異なれる事と云ひ、其の社會狀態の相違せる事と云ひ、臺灣は決して本國の一州と見るべからざる一の殖民地である。特に同じ殖民地としても其人口には既に我九州四國位に稠密なるを以て、到底本國人の移住に適する移住殖民地（コロニー、ド、ペープルモン）たる要素を具備して居ぬ。臺灣は長く少數の日本人が政治產業上の統治に任ずる開發殖民地（コロニー、デキスプロアタシヨン）であるであらう。予輩が臺灣の事を論ずるに當つては、如何なる場合にも此の事實を看過してはならぬのである。然るに現在臺灣は法制上如何なる地位にあるかと云ふに、一の鵺である。一面より見れば本國の一州の如く、一面より見れば殖民地の如く、佛人の所謂除外國（ペー、デキセプシヨン）の觀を呈しつゝある。此の曖昧なる制度が生み出したる

最も重なる問題としては、一時世間を騷がし、又將來にも禍根を殘した彼の六三問題がある。此の六三問題たるや、實に臺灣に向つて地方命令制度を許可したるを非難するより生ずるものであるが、世界の殖民史を研究したるものは却つて此の制度を是認し、之れを永續するに躊躇せぬ筈である。然るに必要に逼られ姑息にも此制度をば年期附にて繼續せしめねばならぬような姿になつて居る。此點に於て予輩は明確なる根本制度が確立されて居ぬのを恨とするものであるが、然し臺灣に於ける政治は兎角にかゝる缺點あるを免れぬのであつて、彼の殖民地財政制度の如きも、亦之と同一の禍根を藏して居るのである。

* * * *

抑々殖民地に於ける財政制度は、本國の殖民政策に依つて定まるのである。而して近代に於ける殖民政策が往時の牽束誅求の弊より脫して自由自治を主とするに至れるは、ロッシエルが其の殖民論に云へる通りである。從つて殖民地の財政の如きも、今日に於ては往時の如く母國の利益を專一として、殖民地より貢納金を誅求せんとするものは殆んど其跡を絕つた。又實際かゝる政策は遂に終を全ふするものでない事は、クーバに於ける西班牙及瓜哇に於ける和蘭に依つて之れを知り得るのである。（和蘭は今や瓜哇に向ひ補助金を出しつゝあり）而して殖民地の行政に同化制度を行ふて、本國の一州同樣に取扱ふの非なる事も、佛國が經驗して之れを知つた處である。佛國では殖民地の財政にも同化主義を適用して、殖民地の經費を中央政府及び殖民地自身の經費に區別し、其の收入に於ても關稅其他の數稅を中央政府の歲入とし、其他に殖民地自身の收入を設け、各別に歲出入の途を立てたのであるが此の制度は單に復雜なるのみならず、殖民地に苛重の負擔を課する結果となりたるが爲めに、一九〇〇年以降は自治主義に近き財政制度を取るに至つたのである。

然らば自治主義の財政とは如何なるものであるかと云ふに、ジエンクスが英國殖民地の財政に就ひて敘したる處のものを以て具體的の說明となすのである。彼

れの日く、「英國は假令其の殖民地が小く、又十分發達して居らぬとしても、之をして自給自營せしむる、或場合に於て母國政府は公債の方法に依つて之に補助を與へる、フヰジーの如き其の一例である。然し是等の公債は殖民地から償却される見込を以て與へらるゝ、モーリチアスの場合には母國政府は、同地に起つた颶風の災害に應ずる爲めに募られた公債の保證をした事がある。母國は又殖民地が軍事費に對し寄附せん事を望むが、之は殖民地自身の利益を防禦する爲めに要せらるゝ費用を辨ずる爲めである。然し大英帝國全體の利益を計る爲めに、港灣の防備をする場合に於ては、母國が其費用を負擔する。即ち他國に對して防禦し、秩序を保つ外には、母國は殖民地を助けない。之と同時に母國は殖民地よりして何等の寄與をも求めぬ。其の關稅の如きも英國の競爭者に對し偏頗な利を立てぬのであつて、殖民地の市場に於ける英國通商上の優先的地位は、全く母國と殖民地との間に存する自然の關保並に英國が他國よりも便利に貨物を供給し得るより生ずるものである。若し偏頗なる事がなければ、他國は英國と同様に殖民地の市場に入る事が出來る（加奈陀互惠條約は異例とす）。母國は普通には各殖民地の制度を決定する最後の權力を有して居る。然し非常の場合を除けば、其地の官吏を通じて、殖民地は殖民地自身の制度を決定し得る。勿論此の官吏は小殖民地に在りては大概本國政府の任命にかゝるのである。如何なる場合にも殖民地の制度は、地方の必要と其の事情とに適應したるもので、各殖民地に一律の制度を布かんなどの企をなした事はないのである」と。

是れ實に殖民學者のメツカたる英國殖民地に行はるゝ自治制度にして、ルロア、ボーリエーの如きは、其の近世殖民論に於て、之れこそ理想的の政制である、假令全部之を適用し能はぬとするも、成るべく此の原則に違はざらん事を期せざるべからずと叫んで居る。實際此の自治制度は、歐州の殖民國が殖民地誅求系束の迷夢より覺め、又一方には殖民地放擲論と云ふが如き悲觀說に陷らずして、中正を保つより生じたるもの

てあつて、一面に於ては先進國は未開國の統治に任ぜなくてはならぬ事を識認すると同時に、殖民の利益は殖民地の發達に伴ふ自然の結果でなからねばならぬ事を悟つたる結果である。此故に徒らに將來の大利益を豫想して、所謂贅澤政治を殖民地に施す事も避けるのである。

* * * *

左れば自治財政々策の目的は實に自給自營にあるのである。即ち殖民地の收入を以て其の支出を辨ぜしむるのである。勿論殖民地の未だ幼稚なる時代には或程度までの補助は與へるであろう。然し成るべくは殖民地をして獨立の財政を有せしむるを期するのであつて、母國は何等の寄與をも殖民地より希はぬのである。既に獨立の財政を許す以上は、其の財政に就ひては飽迄殖民地の事情と必要とに應じたる制度を立てしむるのであつて、全く本國とは此點に於ては別樣のものとして取扱ふのである。殖民地の自治財政々策なるものは、大槪此の如きものであるが、往年米國經濟協會にて殖民地財政に關し調査委員を設けた時の如き、委員は此の政策を用ふべしとなして、次の如き報告をなしたのである。

一、各殖民地の財政は專ら殖民地及び其の發達の爲めに經營せらるべく、決して母國の利益の爲めにせらるべからざる事、

二、世界の異なれる數殖民地に向つて、一律一體、綿密に規定されたる制度を立つる能はず、各殖民地は別々に研究し、其の制度は其地の狀態に適應するを期せざるべからざる事、

三、各殖民地は出來得るだけ自給自營せしめざるべからず、然れども母國は或は殖民地の財政上の信用を保證し、又は後來の償還の見込あれば債務を起すも妨げざる事と、

是れ實に今日に於て殖民學者が、殖民地財政の原則とする處であつて、爲政者は唯此の原則に向つて土地の狀況に鑑み、多少の加減をなすべきである。而して我臺灣の特別會計制度は大體に於て此の原則を實行し來つたるものであつた。

* * *

明治卅年度より施行されし臺灣の特別會計制度は、臺灣と本國の財政を分離し、臺灣の經營は臺灣自身の

收入を以て之を支辨せしむる、即ち臺灣として獨立財政をなさしむる目的を以て設けられたのである。而して臺灣に獨立財政を認むる原則は、數個のコロラリーを有して居たのである。第一は臺灣の財政計畫は臺灣に於ける必要を標準とし、本國政府の財政計畫に由りて動搖されぬ事である。第二は臺灣の財政は同島の狀況に適應したるものとし、必しも本國の稅制に準據するの必要なき事である。第三は臺灣は本國に向つて何等の貢納其他類似の寄與をなさぬ事である。而して第四には臺灣は、母國補助を受けぬ方針に向つて進む事てある。此の最後の一項は臺灣が未だ幼稚なる時代には嚴守する事は出來ぬのてあつたが、去る三十八年度以降は立派に此條項も現實にされつゝある。

顧つて臺灣が占領されし當時の狀態を思へば、誰しも十年餘にして今日の盛況を致すべしとは豫期しなかつたてあらう。臺灣の統治に手を燒きし濟國の李經芳は、割讓當時日本に取つて此島は厄介なる長物たるべしと告げた。事實に於て初めて殖民事業に着手したる我邦人は、恐らく前途に對し暗中摸索の感なきを得なかつたてあらう。此時に當つて早く特別會計制度即ち自治財政制度を造つたのは、甚だ大膽千萬なる擧てはあつたが、然かも此の制度は三重の利益を齎らしたのてある。第一には臺灣の經營上本國財政狀況の影響を蒙らなかつた事てある。第二には獨立自營の目標を立てたるが爲めに、臺灣に於いて本國に依賴せぬ精神を强からしめた事てあつて、此結果として獨立の域にも早く達したのてある。第三には自給自營の標準あるが爲めに、本國よりの補助金なるものが明白に別勘定に現れ、從つて本國をして此の補助金を與ふるに當つて十分の注意をなさしめた事てある。個人の經濟も、會社の經濟も、國家の財政も、會計面の明白なる時には驚くべき利益を蒙るものてある。日本は臺灣の爲めに幾干を費すべきか。又費し得るか。是等の問題は此特別會計制度の故に容易に解決されたのてある。

* * * *

卻說特別會計制度が設けられて後、兒玉總督の二十

年計畫なるものが立てられた。此は三十一年以後國庫より毎年一定の補充金を受くるものであつて、四十二年度に至れば臺灣は彌々自給の域に入りて、又補充金を要せざる計畫であつたのである。然るに臺灣に於ける財政は案外急速なる進歩をなし、其他自身の收入は特別會計制度創始の時の五百萬圓より、加速動の勢を以て增加して累年七百萬、千萬、千三百萬、千百、千二百、千六百となり、三十八年度には二千萬圓許となつた。茲に於て臺灣は三十八年度に於ては豫定補充額の略半額弱を國庫より受け、同年を以て補充金の打切を宣言した。之れ實に臺灣が母國に向つて、見よ、予等は既に一人前の自給殖民地となれりと告げたるものて、豫定年期に先つ事五ヶ年である。今假りに二十九年度以降の補充金を總括して二十年計畫の補充金額豫定額を擧ぐれば、四十二年迄に本國は三千七百四十八萬八千七百五十九圓を臺灣に支給しなければならぬのであつた。然るに臺灣が實際受取つたのは三十七年度を最後として總額三千四十八萬八千六百九十一圓て、差引七百萬圓餘だけ豫定額より少き勘定である。臺灣が豫定通りに自給の域に入りしとするも予輩は其の成功を祝せざるを得ぬ。況んや其の豫定に先つ五ヶ年なるに於てをやである。而して我々は此の成功を見て益々甲の緒を締めねばならぬと信ずるのである。

* * * *

勿論此の外にも臺灣の事業公債なるものがある。之は日本政府の信用を以て臺灣の爲めに募集する公債であるが、是等は三十二年度を始として三十九年度迄に鐵道建設、土地調查、基隆築港、大租權整理、官廳舍新營の爲めに三千五百萬許を發行し、又四十年度以降水利事業、打狗築港、臺灣鐵道等の事業に對し、十六ヶ年間に三千九百圓許の公債を起すの計畫をした。是等の公債は表面中央政府の公債であるが、事實之を償却するものは臺灣であつて、其の爲め年々特別會計より一般會計に繰入金即ち償却金を支拂ひつゝある左れば本國に於て飽迄非募債主義の財政策を取りし時に當

つても、臺灣の財況を見たる本國政府は其の爲めに事業公債二百十萬圓を四十二年豫算に計上し、議會も亦之れに協贊を與へたのであつて、此の爲めに臺灣の獨立財政が傷けられて居るとは云はれぬのである。特に臺灣總督府は法制上府縣等の地方自治體の如く募債の資格を有して居ぬ。又縱令此の資格ありとするも、帝國政府の信用に依つて募債するを便とするのであつて、此の如き方法に依る事は、嚴密なる自營獨立財政を主張する殖民學者も許容して居るのである。

* * * *

臺灣の特別會計制度は此の如く自給自營の獨立財政を成功せしむるを得た。若し此の制度がなかつたなれば、國費多端なる日本の財政では、或は臺灣をして今日までの進歩をなさしめなかつたかも知れぬのである。現に北海道の經營に就き、臺灣流の財政制度を立てんと欲するものあるが如き好個の例證を示すものと云はねばならぬ。過去に於て特別會計制度が個樣の成功を見たりとすれば、現在及び將來に對しても、亦此の制度の必要なるを知るのである。然しながら此の獨立財政制度の殖民地に必要なる責に右の如く重大なるものなる事は果して十分に諒解されて居るであらうか。而して此の制度の原則は果して其のコロラリーの總べてを具備して居るであらうか曰く否である。

予輩は先に獨立財政制度のコロラリーを擧げた。第一のコロラリーたる本國財政の如何に由りて、殖民財政に影響を及ぼさぬ一點は、特別會計制度創始以來本年度までは嚴重に守られて居たのである。然るに桂内閣が本國の財政を遣繰する必要よりして、所謂各省五分減の御招伴を臺灣に强ひて、其の關稅總額を掠略したるが如きは、正しく此の主義を破壞したものと云はねばならぬ。此の如くんば特別會計制度の妙用は其大部分を失ふのである。第二のコロラリーに從へば、殖民地の財政制度は、其地の狀況に準ずべきものであつて、決して本國同樣にする必要はないのである。臺灣に於て本國に先ちて樟腦專賣、鹽專賣を行ひ、今ては中止されたりと雖も本國になき官營富籤を許可し、又

地租の税率を異にするが如き、孰れも土地の狀況に應じたるものである。最近に於て南臺灣地方より輸入する數種税目の除外例を設けたるが如きも、亦其の顯著なるものと云はねばならぬ。殖民地の財政制度が本國より獨立せる如く、其の税制等も本國と獨立して自由に定めらるゝに非れば、自給財政主義を完美する事は出來ぬのである。然るに臺灣に於ては其の收入を增減する必要なきに、本國にて新税が起されたり迚、之を臺灣にも設け、本國にて廢税されたりとて之れを廢したるが如き、實に其の趣旨を諒解するに苦まざるを得ぬ。此の如きは臺灣が法制上鵺であると均しく、其の獨立會計制度も根本より諒解せられて居らぬよりして生ずるのであつて、同化主義の名殘を留めて居ると云ふべきである。予輩は本國の税制に連れて殖民地の税制を變動させねばならぬ必要を認め能はぬ。

第三の殖民地より本國に向つて貢納金其他類似の寄與をなさぬと云ふ主義は、是又今年度までは守られて居たのであるが、關税奪略に由つて、今日では日本々國は、臺灣より年々百數十萬圓を貢納せしむる事となつたのであつた、之れ實に公然殖民財政の主義を蹂躙したものである。政府は之れを辯明して關税を統一せんが爲めなりと云ひ、流石に五分節減案を巧に臺灣に適用して、其の財源を奪略したとは云はなかつた。が、彼等の辯明は不幸にして少しも辯明にはならぬのである。如何となれば關税統一に於て(此の如き必要ありや否やは別として)最も必要なるは何ぞと云ふに、税目税率の統一である。此の統一さへ出來れば何の統一すべき必要あるか。大藏大臣が監督しつゝある臺灣の税關吏は、大臣の訓令を守るが故に、課税上不統一の虞はないのである。然るに臺灣の輸入税には土地の必要に餘儀なくされて除外例を設けて居る。統一を叫ぶ政府は何故之を看過したるか。予輩は殖民地の關税制度は税率統一主義でなからねばならぬとは信ぜぬものであるが、税率統一以外に關税統一には何等の意義なしと信ずるのである。故に政府の關税統一は、臺灣の税關に入りて税金を、中央政府の所有とすと云ふを意

味するに止まる。輸入税は外國品に課するものなるが故に、之を負擔するものは外商なりと思ふ勿れ。大概の**場合に於て關税の負擔者は臺灣の住民である。**即ち臺灣の人民は本國政府の爲めに高き物品を購ふべく餘義なくされつゝあるのであつて、中央政府が臺灣人に百數十萬圓を課すると何の擇ぶ處はないのてある。故に予輩は今年度より始まれる關税奪略を以て、日本が殖民地誅求主義に逆戻りしたるもの也と論斷するに躊躇せぬのてある。

＊　＊　＊　＊

政府は關税の外には今後此の如き手段には出てぬと誓つたやうてある。が、予輩は此の誓言に重きを置かんと欲するも能はざるを遺憾とする。彼等の所爲は臺灣の財政には手を觸れぬと云ふ特別會計の約束を破つたものてあつた。一度約束を破りしものは、再度之を犯すに躊躇せぬてあらう。若し彼の如き統一の名の下に關税の沒收が出來るとすれば、地租の統一も行はれるてあらう。砂糖消費税の統一も行れるてあらう。千丈の堤も蟻の一穴より壞るとかや、予輩は桂内閣の所爲を見て彼等が殖民地財政に對し、甚だ無識無謀てあるに驚かざるを得ぬ。**此の如き人々の内に殖民地政治**家たる後藤男を數へねばならぬのは、如何にも奇妙なる運命のアイロニーと云はねばならぬ。予輩が殖民地財政の將來を憂慮するには此の如き理由があるのてある。

＊　＊　＊　＊

思ふに桂内閣は其の標榜したる財政整理に苦しみて此擧に出てしならば。若し然りとせば予輩をして茲に一の提案をなさしめよ。即ち臺灣其ものゝ爲めのみに要すと算せらるべき軍費を臺灣にて負擔せしむるのてある。此の如くせば特別制度を破る事なくして、本國の負擔を減ずる事が出來よう。或は臺灣の生産力を標準として、國防の負擔をなさしむるも一策てあらう。然しながら此案を實行するに當り、予輩の一考すべきは、臺灣が果して此負擔をなし得るだけに發達し居るや否やてある。臺灣の縱貫鐵道は昨年漸く完成したの

みてあつて、理蕃と云ひ、水利灌漑と云ひ、築港と云ひ、臺灣には尙幾多の急設を要する事業が多い。且つ臺灣の土人は新附の民であつて、彼等の內には日本の版圖に歸して以來、殖産興業は勿論文明的施設の進步したる事には注意せず、却つて租稅の舊代に比して重きを訴ふるのもある。而して臺灣の財政の現況は如何と云ふに、本年度の豫算參考書は、樟腦に於て二百六十萬圓許の減收なる事を記して居る。是れ同專賣制度に對し强敵の現れたる爲めてある。今收入增減の差引をなせば增加の部には砂糖消費稅を筆頭として、四百萬圓許、減少の部には樟腦、關稅を主として、五百四十萬圓許なるが故に、略四百四十萬許の減收となるのてある。此の減收額なくば臺灣の開拓にそれだけの費用を投じ得るのてある。左れば臺灣今日の財政狀況は尙假すに數年を以てし、其の裕に軍費の適當なる負擔をなし得る時を待つを至當とすると考へるのてある。

要するに桂內閣の關稅奪略の擧は、殖民地誅求の精神を以てしたとの譏を免れぬは勿論、彼等が殖民地の健全なる財政制度の如何なるものてあり、又如何に之れを守らねばならぬかを證據立つるものてあつて、彼等は特別會計制度の城壁を破壞したのてある。かくして彼等は臺灣の財政並に經營の前途に、一の危險なる種子を蒔いたのてある。然しながら特別制度は尙現存しつゝある以上、予輩は桂內閣の破壞したる處を修復し其蒔ける危險なる種子を萌芽の內に摘むを以て、殖民地の開發を希望する政治家の任務となさねばならぬと思ふのてある。知らず今期議會は本問題に對して相當の處置を取るや否や知らず彼等は關稅收入を其本に還さしむべく政府に迫るや否や。

學制改革問題

文學博士　上田萬年

學制改革問題は十數年來の問題で、特に今年になつては學制研究會の意見發表となり、衆議院では根本氏抔から帝國學制法案の提出となり、同時に政友會の幹部連からは學制改革に關する建議案の提出等があり、一つの大きな國家問題となつて來て居る、文部省に於ても此側の刺激を受けて種々の調査が遂げられ、一定案が出來、近々高等敎育會議に付せらるるとの事である、尙ほ斯かる事に就いては諸新聞にも諸名士の意見が發表され、少からぬ社會の注目を惹く樣になつたのは事實である。

一體學制改革問題なるものの起つたのは明治卅三年と記憶するが、當時の伊藤內閣で高等學校及び大學の增設を必要と認めて次期の議會に其決行を約束した事がある、即ちそれは時の松田文部大臣が伊藤總理大臣と相談されて、其宣言を議會に向つてされたのであつた、其時分に一方では學制の改革を必要とする論者があり、例へば其著名なるものを擧ぐれば久保田前文部大臣の如き人がそれで、盛に貴族院で其意見を發表された、此に於て學校增設問題と學制改革問題なるものは其前後を爭ふ問題となり、伊藤內閣が倒れて桂內閣の成立すると共に、桂內閣では先づ以て學制改革問題を片付け、然る後に增設問題に進むといふ順序を取られた樣に想はれた、然るに此學制改革問題を片付けることが容易に出來なかつた、即ちその有力なる宣言者であつた久保田前文部大臣の如き人が要路に當られても其決行は出來なかつた、勿論當時は日露戰爭等も有つたのであるけれども、何しろ其決行は出來なくて荏苒今日に迄及んだのである、其間に菊池文部大臣や牧

野文部大臣の時代に實業學校の如きは漸次增設せられ、又大學の增設、高等學校の增設等の如きも無いではなかつたけれども、全體に於ては矢張り地方の寄附に待つか、若くは個人の寄附によつて出來るといふ樣な姑息な方法て出來たので、國家が自ら其增設を爲す樣なことは無かつた樣に思はれるそれ故全體からいへば、學校增設の方針と學制改革の方針とては、學制改革の方に重きが置かれて今日に迄進んで來たものと言つてよからうと思ふ、斯樣な關係から見て此改革問題が種々の方面から至急の解決を促されるものは、決して無理ては無いと信ずる。

併し私個人の意見から言へば、此學制改革問題が學校增設問題の前に議定されねばならぬといふ必要は無いと認める。その理由を茲に少し語つて見やうと思ふ

先づ第一に、今日の學制は何れだけ不完全かといふ事を調べて見ると、決して世間の論者の言ふ樣な不完全なものては無い、又修業年限等の上ていつても、これは今日の日本の世界に對立して行く必要上如何しても斯く無ければならぬと思ふ、即ち日本は今日東洋の學問の上に西洋の學問を併せて研究せねばならぬ地位に立つものて、西洋人の如く短き年月て一通りの學問をするといふ域には達して居らぬ、又東洋流の昔の考て西洋の學問をせずに進み行くといふ事も到底出來ぬ事てあつて、此東西の文明を折衷し教育の方針を立つる以上は、勢ひ今日の如き學制に依るの外無いと信ずる、又卒業した人が社會て地位を占むる上からいつても、今日の修業年限は決して長いとはいへぬもので、其卒業した人の社會に於て與へらるゝ待遇の上から見ると、日本人の方が遙に歐米人よりは若くて比較的に好き地位を得られる境遇に居る、此事に就いて言へばまだ色々語るべきことがあるけれども、これは他日の論としよう。

一體學制問題を八釜しく言つて一年二年の修業年限を短縮するとか、減少するとかいふ事よりも、まだ今日の日本の教育の上からいへば、前に誠心誠意議さなければならぬことがないては無からうかと思ふ。それ

は何かといふに、現行の學制を其學制の理想通りに實行して居るか如何か取調ぶることである。例へば小學校でする事が理想通りに小學校で行はれて居るか、中學校でする事が理想通りに中學校で行はれて居るか、將た高等學校でする事が理想通りに果して高等學校で行はれて居るか、此等は一方文部大臣を始め、地方長官などが十分に監督を嚴にして其實行を期し居るかを問ふと同時に、他の方面に於ては各學校の校長を始め敎授連が天を仰ぎ地に俯しその良心に少しも恥づる事なく實行しつゝあるかといふ點を尋ねたくなる、更に具體的にいふならば、右樣の各學校に於て第一に、人才登庸の法などいふものは果して宜しきを得て進んで居るか如何か、第二に其人才を待つ方法即ち敎員待遇に關する方法は少しも遺憾なく行はれて居るか如何か、第三に、此等の各學校に於て、敎科の如きは十分の調査を爲し、其上で遺憾の點なく配當されて居るか、又其敎科の間の聯絡の如きは絕えて遺憾無く行はれつゝあるか如何か、第四に此等の學校に於て各敎科の敎授法の如きもそれぞれ十分に調査され、又十分に聯絡され、續いては小學校より高等學校迄の直系的の聯絡が十分に着き居るか如何か、此等の事を考へて見るに今日我々は決して滿足の意を表することは出來ぬのである、即ちまだ採るべき方法爲すべき方法が各方面に於て十分に在ることを認めるのである、

斯かる狀態であるのに此樣な側の調査をするとか、整理をするとか、改良をするとかいふことをせなくて、只學制の如き單なる形式上の問題にのみ汲々し居るのは識者の甚だ惜む所である。

考へて見るがよい、小學校を六年にしても其小學校の卒業生が以前の高等小學校の一年の生徒の學力ほか持たぬといふならば、それは六年にしたとて効は無いので、寧ろ前の如くにして五年にする方がましではないか、中學校を四年にしてもその生徒の學力が現在の中學校の生徒の三年生に當る位のものなら、それは四年にする必要がない、又中學校を五年にして置くも其卒業生が學力がなかつたならば、四年にして置くも三

年にして置くも同じ事ではないか、つまり年限などいふものは如何樣にもなり又如何樣にも見得らるゝもので、歸する所は其出來上つた効果に在る、換言すれば其實力如何に在る、其實力如何を調べなくて只學年の長短を論ずるなどいふは實につまらぬことである、扨て實力如何から見れば如何かといふに、甚だ遺憾であるけれども我々の聞き居り、又知り居る材料からして言へば、現在の制度でも其學力は實際所期の學力よりは劣等であるではないか、此劣等といふことは本づくところ生徒の心身の發達の度に伴ふと見るなら、これは已むを得ぬ事であるから、同時に學校の修業年限を延ばしても其所期の學力迄は養成しやらねばならぬ事と思ふ、斯樣な基礎から論ずれば、修業年限延期論と唱ふるが至當である、若し此事の原因が不幸にして尙ほ其他に在りとするならば、それは學校の責任になるか、將た學生の責任となるか、或は又監督者の責任となるかといふ事になる、私の見る所によれば、今日の通弊は寧ろ前者ではなくて後者ではないかと想ふ、後者といつても其原因は特に具體的に前に陳述し列擧した四個の點に存するのではないかと思ふ。

然らば先決問題は先づ十分に此等の四個の問題に注目し、それ等の點を改良してから後に、果して五年のものが四年で十分の効果を擧げ、若くは十二年のものが十年で出來るといふならば其時に始めて年限短縮を規定するのが順序である、然るに此重要なる研究を爲さずに、卓上の議論で直に年限短縮などを論ずるのは甚だ早計だと思ふ。好し一歩を讓つてさる四個の點に就いて十分改良が出來るとしても尙ほ且つ現在の年限は必要で、之を短縮するなどいふことは不必要である、寧ろ其年限内に尙ほ一層の練習彫琢をさせることが必要だと私には思ふ、併しそれは又他日の論として宜い。

つまる處私の主張する點は、學制に就いて論ずる人に取つては、現在の諸學校の實況を熟知すること、特に諸學校に於ての諸教科目の知識を具備する事、此等が一番必要な事で、此實況を知らず、此知識を持たな

くて、所謂量の上の水線を試み、方案とか規則とか、早く法律的の議論をするのは甚だ危険の事である、議論に勝つて一個の成案が出來、一個の成案が聽て又法律若くは勅令となつて世間に發表されることは困難て無いか知らぬけれど、右の如き精神て進めばその結果の教育全體に及ぼす上に於て、甚だ險惡なるべきは豫想するに難くない、尚ほ細目に就いて論ずれば幾らも言ふべきことがあるけれども、今はそれには言ひ及ばぬ、約して上述の要旨を言へば、單なる此學制改革問題ならば、より一層急務とすべき學校整理問題がある、續いては現行法の下に於て學校增設問題がある、學制問題の如きは時と場合により少しづゝの變化を許して進めばよいもので根本的の治療をしやうといふことは少くも今日の急務てないと思ふのてある。換言すれば私個人としては學制改革の如き問題は今年位て全く打切つて仕舞いたいものと思ふ。（談話筆記）

憲法政治と貴族院

子爵　秋元興朝

日本の現今の政治を議するに就いて、今更責任内閣といふやうなことを唱へるのは、非常に古めかしい時勢遲れのやうな話て面白くもなからうが、已を得ずそれを繰返さなければならぬやうな譯てあるから、玆に話をするのてあるが、憲法政治は言ふまでもなく、封建政治にあらず、郡縣政治てもない、則ち國民に參政權を與へて、自由に國政を議さしめるといふことてある。尤も欽定憲法と民定憲法との區別はあるが、何れにしても國民に政治を議するの自由を與へたといふことは疑のないことてある。されば國民が代議士を選出

し、其代議士が議會に立つて法律案を議するといふ以上は、所信に依つて立つ所の主義政見が無ければならぬ。喩へて見れば、彼の佛教にしても、眞言宗とか天台宗とか、或は禪宗、法華宗など、宗派のあるのは、各其所信に依つて立つた主義主張が有つて、セクトが分かれて居るのであらう。耶蘇教にしても、プロテスタントとかカソリックとか、グリーキとかいふやうに大體三つに分れ、又其プロテスタントがメソヂストとかバプチストとかいふ百五十の小異がある如く、これも各所信に依つて分れて居る。又直接の利害關係のない藝術のやうなものでも、例へば東洋畵殊に日本畵て言つて見ると、土佐とか、狩野とか、圓山とか、四條とか、各其流派があるのも、やはり其所信に依つて流派が分れる、さういふやうな譯で政治も主義主張がある以上は、黨派の出來るといふことは、已を得ない事だらうと思ふ。故に立憲政體の下に政黨のあるといふことは已を得ざる自然の趨勢である、唯大政治家があつて、それを善道に指導して行くといふ事が肝要の點であらう。現今所謂官僚派なるものは、唯善政といふ好名目の下に、政黨を嫌ふ如き傾があるやうに見受けるが、善政と云へば言葉のエキステンションの極めて廣いものであつて、無論封建政治でも郡縣政治でも、立憲政治であらうとも何であらうとも、惡政て宜いといふ氣遣のないことは分つて居るが、立憲政治である以上は、立憲的善政でなければならぬ。それを曖昧たる好名目の下に、所謂換骨脫體の政治を行はうとするのは、甚だ面白からざることだと思ふ。

代議士があればどうしてもマジヨリテイー(多數)に依るといふことが基礎とならなければならぬとて、國民の多數を有つて居る者を先づ輿論の代表者と看做してそれて國民の意志の多數を有つて居るものならば、必ず政治の運用が圓滑に出來るてあらうといふことを御信じになつて、大權の下に内閣組織の命令が下つて、而して多數を有つて居るものゝ首領が内閣を組織する。民意の多數を有つて居る間は内閣を繼續出來る。若しそれを失へば則ち責任を帶びて他の者に内閣

を讓り渡すといふのが、今更事新らしく言ふまでもなく立憲の本旨だらうと思はれる。さうすると內閣と衆議院とは、同主義で同政見を以て、行政と立法の兩府に立つて政治を行つて行くものである。然らば貴族院はどう云ふものであるかといふと、是は無論國民多數の意思を尊重することは、やはり衆議院と同樣でなければならぬが、又是は國家恒久といふことの目的も有つて居るものであるから、國家恒久となると內政ばかりでなく、軍事、外交等、種々世界の趨勢に就いて――是は固より貴族院ばかりでなく、總てさうであるが、殊更に貴族院といふものは、國家恒久の目的から深く其邊に注意しなければならぬ譯であるから、萬事國民の意思に迎合して居るといふ譯にも行かぬ。內閣と衆議院とが一致のものであるとすれば、時によつて軍事外交の直接間接の關係上から、或は內閣或は衆議院の反省を求め、或は不幸にして反對もせんにやならぬ場合がないとも限られぬ。それが則ち二院制度の實であらう、官僚派は二院制度の精神とか何とか口では唱へるが、所謂辯護士が僅か法律のきつかけを捉へてそれを口實に辯護すると同口調で、大に輕薄なる精神であらうと思はれる。現今の如く、國民多數の意思の上に立たざる內閣がある以上は、二院制度の實を擧ぐるといふ場合は、殆ど實際に起る氣遣はない。始終內閣に盲從して居れば、始終國民の意思に背かねばならぬ、さうかと云つて其他の途を取れば、始終內閣に反對ばかりして居らなければならぬ。固より立法府は法律案を議する處であるから、提出されたる案に就いて、可否さへ唱へて居ればそれて宜いといふ論もあるかも知れぬが、それては所謂主義も主張もない人間になつてしまふ。唯可ければ之に贊成し惡ければ之に反對するといふことは、一見都合の好いやうな話てあるけれども、世の中の事は到底左樣な淺薄なことて行けるものてはない。やはり已の所信によつて立つた主義主張があつて、それに適つた政見に依つて贊否を決するといふことてなければ、唯其處に湧いて來た事實に就いて判斷を下すといふだけて、決して事の宜を得たもの

てはなからうと思はれる。さうして見ると前に言つた通り內閣に盲從するか、若くは常に正反對の地位に立つて居なければならぬといふことになる。此の如きは決して眞に憲政の運用を盡すものではなからうが、現今の有樣ではどうもそれより外に遣り樣のないやうな工合になつて居る。吾々のは條文の如何を玆に決するのではない、日本の憲政の實を着々擧げて行くことを希望するので、條文如何に良しと雖も實が擧らぬければ眞に空文に歸する。

それから政黨上下院縱斷といふことは、二院制度の精神から見ると、極めて能く其精神に副ふた事でもないやうに見えるけれども、併し是は勢である。物には皆勢といふものがある、其勢たるや結果が非常に惡いことであれば、努めて之を防遏もし避けもしなければならぬのであるが、此縱斷といふことの實に就いて批難する者の言に依つて見ると、貴衆兩院縱斷すれば、如何なる專橫の事でも出來る、それ故に危險であるといふのが唯一の批難のやうであるが、是は曲學者の常に用ゆる常套手段であつて、唯裏面から之を解釋して、表面からの解釋を殊更に閑却した論であらうと思はれる。表面から解釋すれば、貴衆兩院縱斷すれば、如何なる善い事でも必ず貫くことが出來ると解釋する方が正しい解釋である。併し前述の通の譯であるから、それを又裏面から解釋すれば、如何なる善き事でも必ず貫くことが出來る代りに、又如何なる惡い事でも出來るといふ危險の伏在して居るものであるといふ解釋の出るのは、强ち無理ではなからうと思はれるが、併し其如何なる善い事でも出來る代りに、惡い事も出來るかも知れぬといふ危險の伏在して居ることを行ふ方が宜きか、又格別善き事は出來ぬでも、危險の少しもない方の途に出づるが宜きかと云ふことは、それは時勢の如何を見て適用するのが、爲政者の働きである。過去の日本の鎖港時代でもあれば、日本をして短日月の間に、之を內にしては敎育を盛にして文明の程度を進める、殖産興業を益發達せしむる、或は國防を嚴にするとかいふやうな事は、非常な必要もなかつたらうか

ら、それよりは寧ろ少しも危險の無い安全な途に依つて、民心を穩かにすると云ふ方便を執つた方が宜かつたかも知れない、現今は時勢がまるで違つて、或外國の如きは排日說を唱へて居る、又或外國は現今は協商が出來て非常に親密であつても、近き過去に於ては相互の間に大戰爭を交へたと云ふやうな事もあるので、今に於て日本は最も警戒を要すべき時期で、上下を擧げて國民が成べく短日月の間に、教育の發達、殖產興業の發達を第一として、所謂富國强兵を圖らなければならぬ、各々其のベストを盡さねばならぬ時期である。さうして見ると如何なる善い事でも自由に出來るといふ方法を採るのが、最も能く現今に適して居るであらうと吾々は考へる。それには貴衆兩院縱斷といふことが最善の方法で、憲政の圓滑を計るには最も適したる方法であらうと思ふ。故にそれを唱へるのである。

それから貴族院に政黨はいかぬといふ論を頻りに唱へて居つて、其證據として、貴族間に政黨熱の非常に勃興したのは、西園寺內閣で研究會より堀田子爵を拔き、木曜會より千家男爵を拔いたのが動機になつて、貴族間に政黨熱が盛になつて實に困つたものであると斯う云ふけれども、是は自家撞着を自證して居る論である。何が故に西園寺內閣で研究會より堀田子爵を拔き木曜會より千家男爵を拔いたかといふと、即ち研究會木曜會が一種の無名の政黨であるから、其政黨を操縱する爲に拔いたのである、さうして見ると拔かない以前に既に研究會木曜會といふ一種の無名の政黨が貴族院にあつたといふことは、自證して居る譯であらう。彼等の希望の如く、貴族間の政黨が若し惡いとすれば其根本より倒す外に好い方法のあるべきものがない。假に同志會談話會を撲滅して見た所が、根本が已に存在して居れば、百の同志會千の談話會といふものは、名こそ撲滅されても、實に於て必ず續々出來るものであらう。此根本は何であるかと云へば研究會である、さまで貴族院に政黨が惡いと云ふならば、第一の方法として研究會を撲滅さへすれば、當分の間貴族院に政

黨熱は或は熄むかも知れない。併しそれとても、是は自然の趨勢であるから、將來は必ず起るだらうと思ふ。他の者の政黨を唱へるのを否認して、自らの政黨のあることを忘れて居るかの如きは、實に笑ふべきの甚しきものである。

もう一つは衆議院の者などゝ交際して、政黨の間に奔走すると、多く財產を失ふと云ふ論を以て、其實證として前には西鄕侯品川子の例を擧げ甚しきに至つては伊藤公の事までも云爲する者もあるが、是は非常な間違である。衆議院の政黨と交るから、多く資產を失ふと云ふことは決して無い。吾々の如きは、政友會創立以來今日に至るまで滿十年であるが、其爲に幾千の財產をも投入したことはないので、西園寺侯の如きも總裁をせられて居るけれども、其爲に非常な財產を失はれたといふことは聞かぬ。尤も創立者といふことになると費用を多く要するものであつて、西鄕侯、品川子の如きも創立者の地位に立たれ、伊藤公は現に大政黨たる政友會の總裁となられた。衆議院と云はず貴族院と云はず、總て創立者指導者たる者は、相當に多ゝの費用を要することであらうと思はれるが、金錢ばかりで創立者にもなれず、力量と名望とがなければ到底創立者になれる譯でないから、一方に金錢で失はれても一方に又大に得る所もあつて、決して深く憂うるに足らぬだらうと思ふ。創立者でない限は貴族院と云はず衆議院と云はず、決してそれが爲に多くの金錢などを失ふべきものでないのは、多く實證のある譯である。是も唯さう云ふことを唱へて、貴族院間に政治に奔走することを止めさせたいといふ、一の奸策に過ぎないものであらうと思ふ。彼等の論ずる所は、皆爲にする所あるの論であつて、眞に國家憲政の爲に忠實ならざる輕薄なる議論として遺憾ながら我々は悉く之を排斥せざるを得ない譯である。

今一遍

（昨今の政局）

福本日南

前號に昨今の政局について一場のお話をした。其際に今暫らく沈默して時機を見て居やうと申上げた。處を又々公論の諸君から責められて、有りもしない考を今一遍繰り返すの災厄に出逢うた。實は大閉口、お話する種はないのである。さりながら政雲の旋轉して極まらざる、先きにお話した時からこゝ僅かに三旬の間に大分樣子は變つて來た。止むことなければ此間に於て少々觀察を申し述べやうか。世の中に有難いものは經驗である。三つ子も二三度赤い火に手を觸るれば火の熱さを知つて以後は復之を摘まうと試みぬ。志の黨の旗頭連も二期の議會開會間に頗る悟つた處があると見える。一騎打て如何に三尺の寶刀を揮廻しても、目に餘る大軍を切り離けることの出來ないのに忽然として悟入したものと見える。之れは至極の大頓悟てある。立憲國民黨なるものゝ兎にも角にも成立したのは、此頓悟の結果といはねばならぬ。從て此國民黨は昨今の政局に於て比較的健全な分子と認める。（勿論雜駁であるが）。今此政黨下に驅集つたものは九十二名と註せられる。九十が百若くは百以上になるのは左まで難事でもなからうと思ふ。而して牛は牛連れ、馬は馬連れ、他の一方に於ては中央倶樂部が成立して此方面にも五十四名の代議士の一結合を見た。それて少々面白くなつて來たのは天下稍々三分の形勢を呈して來た。曹魏と孫呉と劉蜀の面影を現出して來た。扨この三國の形勢は今後如何に成り行くてあらうか。芝居心を以て之を見れば頗る趣味のあることであらうと思

黨熱は或は熄むかも知れない。併しそれとても、是は自然の趨勢であるから、將來は必ず起るだらうと思ふ。他の者の政黨を唱へるのを否認して、自らの政黨のあることを忘れて居るかの如きは、實に笑ふべきの甚しきものである。

もう一つは衆議院の者など丶交際して、政黨の間に奔走すると、多く財產を失ふと云ふ論を以て、其實證として前には西鄉侯品川子の例を擧げ甚しきに至つては伊藤公の事までも云爲する者もあるが、是は非常な間違てある。衆議院の政黨と交るから、多く資產を失ふと云ふことは決して無い。吾々の如きは、政友會創立以來今日に至るまで滿十年であるが、其爲に幾千の財產をも投入したことはないので、西園寺侯の如きも總裁をせられて居るけれども、其爲に非常な財產を失はれたといふことは聞かぬ。尤も創立者といふことになると費用を多く要するものであつて、西鄉侯、品川子の如きも創立者の地位に立たれ、伊藤公は現に大政黨たる政友會の總裁となられた。衆議院と云はず貴族院と云はず、總て創立者指導者たる者は、相當多くの費用を要することであらうと思はれるが、金錢ばかりで創立者にもなれず、力量と名望とがなければ到底創立者になれる譯でないから、一方に金錢で失はれても一方に又大に得る所もあつて、決して深く憂うるに足らぬだらうと思ふ。創立者でない限は貴族院と云はず衆議院と云はず、決してそれが爲に多くの金錢などを失ふべきものでないのは、多く實證のある譯である。是も唯さう云ふことを唱へて、貴族院間に政治に奔走することを止めさせたいといふ、一の奸策に過ぎないものであらうと思ふ。彼等の論ずる所は、皆爲にする所あるの論であつて、眞に國家憲政の爲に忠實ならざる輕薄なる議論として遺憾ながら我々は悉く之を排斥せざるを得ない譯である。

今一遍

(昨今の政局)

福本日南

前號に昨今の政局について一場のお話をした。其際に今暫らく沈默して時機を見て居やうと申上げた。處を又々公論の諸君から責められて、有りもしない考を今一遍繰り返すの災厄に出逢うた。實は大閉口、お話する種はないのてある。なりながら政雲の旋轉して極まらざる、先きにお話した時からてゝ僅かに三旬の間に大分樣子は變つて來た。止むことなければ此間に於て少々觀察を申し述べやうか。世の中に有難いものは經驗てある。三つ子も二三度赤い火に手を觸るれば火の熱さを知つて以後は復之を摘まうと試みぬ。志の黨の旗頭連も二期の議會開會間に頗る悟つた處があると見える。一騎打て如何に三尺の寶刀を揮廻しても、目に餘る大軍を切り靡けることの出來ないのに忽然として悟入したものと見える。之れは至極の大頓悟てある。立憲國民黨なるものゝ兎にも角にも成立したのは、此頓悟の結果といはねばならぬ。從て此國民黨は昨今の政局に於て比較的健全な分子と認める。(勿論雜駁てあるが)。今此政黨下に驅集つたものは九十二名と註せられる。九十が百若くは百以上になるのは左まて難事てもなからうと思ふ。而して牛は牛連れ、馬は馬連れ、他の一方に於ては中央倶樂部が成立して此方面にも五十四名の代議士の一結合を見た。それて少々面白くなつて來たのは天下稍々三分の形勢を呈して來た。曹魏と孫吳と劉蜀の面影を現出して來た。扨この三國の形勢は今後如何に成り行くてあらうか。芝居心を以て之を見れば頗る趣味のあることてあらうと思

ふ。勿論此三黨中でも當分政友會が大多數で、議會に於ける場を専らにするは申す迄もない。今の所では政友會全盛の時代である。さりながら此形勢は何時が何時までも繼續しようとも思はれない。政友會の注文通りに現内閣の後釜を西園寺侯が相續すると極まつてゐればそれは政友會萬々歳であるが、どうやら政局の樂屋の方面を裏面から窺へば、左様注文通りに參りさうでもない。之れは我々がいふよりも政友會の二三領袖連の方が最もお委しいので、昨今頗る御苦心のある所であらうと拜察する。どうやら元老連のどん底の意志は跡目相續を順養子にとらせたくはないやうではありませんか。實子の家督相續人は勿論の事、妾腹の庶子でも我子は我子に相違ないから、一、二、三位の二三實子に順番に家督を相續させようぢやないかとの家憲が出來てはゐませんか。若しも此家憲通りに行はれるとすれば、政友會の前に依稀したる天下の影も、次第々々に薄らいで海上四月の雲霞の觀あるではなからうか。こゝが即ち同會首領の諸先生の最も頭痛に感ぜらるゝ處であらうと思ふ。此處ぢやで。これが斯様に實現せらるゝとなつた日に今の尨大なる政友會が依然として現在の頭數を議會に維持することが出來やうか。隨分六つかしい問題であらうと思ふ。是に到ると立憲國民黨の黨上に立戻つて再び之に一觀察を加へねばならぬ。黨結晶の昨今の意氣、此意氣を失はず、猛然として宣言の如く彼の政綱によつて直前するとすれば先づ彼には一百の議員を有する、他の政友會に比すれば僅かに其半數にも足りないが、今此に二倍する政友會其ものを精細に解剖して見たならば、之も眞に頼とすべき所のものは先づ一百位としなければならぬ。殘る一百は概ね、壬、癸に生れた連中である。流動性の連中である。して見ると實質に於ては大抵伯仲の間に見るのであらうと思ふ。そこで論が生ずるのである。この内閣が上に申す通り果して政友會に讓渡さるゝものとすれば流動性の連中も依然固形體を失はずして政友會員たることを繼續しようが、次の選擧に當つて官僚黨の本家本元に於て順養子に天下を渡さぬ、此家は實子

乃至庶子に相續させるといふ趣意の本に選擧を行ふとすれば、政友會の前途岌々乎として危い哉といはねばならぬ。若しも官僚黨の本家本元が此方針を取るとする時は、或は恐る、今の中央俱樂部と政友會の一半とが抱合して純粹の官僚黨を形成するやも計られぬ。かくなつたとすれば我政界には更らに新らしき現象が生ずるてあらう。若し又之に反して今の政府の當局に於て脫然として從來の謬想を拋つて一國の大政を國民的に運用しようといふ考を起したとすれば更らに又他の異つたる結合を見ないとも限らない。(此方は餘程六つかしい注文であるけれども)。兎にも角にも今後の政局は此二つの一つに出づるの外はなからうと思ふ。實は我々はどちらてもよろしいと思ふ。兩者の何れに出づるも我憲政の一進歩であると思ふ。若しも前者に出づるとすれば、昨今こそ睚眥の間に相見てゐるけれども今の國民黨の全部と政友會の分子たる一半とが手を執りて政局にあらはるゝといふ事にならうし、後者に出づれば、今の官僚と目せらるゝものと國民黨とが存外手を携へぬとも限らない。そこて其前者たると後者たるとを問はず、こゝまて漕ぎ附ければ、政治は兎も角も國民的基礎の上に運用せらるゝのてある。歐洲の社會に於ては近頃クレマンソリズムといふ言葉が流行する。それは佛蘭西共和國の前內閣首相クレマンソーの議會に於て不用意の戰爭をなし、一朝何の惜氣もなく首相の冠を掛けた謂てある。あれは餘りに不用意な擧てはあつたが、然しながら其意氣は誠に嘉すべきものてある。クレマンソーの眼中には當時の議會に於て自家の政策が行はれるものと見て居て不用意に出掛けたのてある。而して不用意に戰つて意外にも失敗をとつた。此處は出來損ひてあつたけれども、根本に於て面白いのは自家の政策が行はるれば何時〱までも內閣を持たうし、行はなれなければ投出すまでの事だ。一朝戰つて見て多數に破られた、それは失敗てあつたが何のその、此敗局をもり返す位のことは朝飯前の仕事だ。明日は又天下の輿論を後援として取戻して見せませう。それて今日は此處て御免を蒙るといふ位の處

てある。此邊からクレマンソリズムといふ言葉が出來たのである。內閣の屢々更迭するのは國にとつて餘り好ましい事てはないが、政治家の意氣は斯くありたいものてはないか。國家は公物にして私物てない。國事は公事にして私事てない。一國の政軸を旋轉するものはかくありたいものてはないか。今日の吳魏蜀の鼎立はどちらかといへば此方面に向ふ初級の初學德に入るの門てはなからうか。それて此初級に於て或學年間の修業中には今の三國に屬せざる河北の袁紹や袁術や或は公孫瓚や黃祖や劉表や此等の連中も又大悟徹底して三國の何れかと合するやうになるてあらう。此學年を卒業して來た時は初めて憲政の階段に政治なり政黨なりが足を立てる時てあらうと思ふ。

（完）

文藝取締問題

文學博士　坪內逍遙

此問題に關しては嘗て「早稻田文學」て「三つの異れる標準」と題して話した事があつた。それは「倫理と文學」といふ書物の中に載せてあるから、見てくれたまへ。然し話の順序として雜と其事も言ひませう。

僕は、文藝上の作物に對しては、少くとも三の截然として異れる標準が成立つと思ふ。已に截然として異る以上は、時にそれが相衝突することあるを免れない、三標準とは、第一は文藝家及び專門の文藝鑑賞家の奉ずる標準。第二は普通公衆の奉ずる標準。第三は俗に其筋と稱するオーソリチーや敎育家や宗敎家や凡そ實際に社會の經營や風紀の振肅に當つてゐる人々の奉ずる標準。くはしいことは前にいつた書物にあるから、今

は只要點のみをいはうに、所謂其筋及びそれとインテレストを同じうする手合は專ら現下目前の功過利害を標準と立てゝ文藝を取締り、文藝家は主として藝術上の本能滿足を標準として、言はゞ藝術絶對觀に住して製作し、世間普通の玩賞家は千差萬別の心を以て之に望む。第一は實利主義、第二は要するに本能滿足主義、第三は詰り娯樂本位。作者の本領は自己を發揮するにあるのだから成るべく奇拔に、成るべく斬新にと狙ひを附けて作するでもあらう。而して世間の玩賞家は兎角陳いものには饜く習ひだから、是れ亦成るべく奇拔なもの、成るべく斬新なものをと望むでもあらう。是に於てか、作者と普通の公衆とは、其目的や見識やは恐ろしく違つてゐるにも拘らず、又其標準の本來が同一てないにも拘らず、其結果に於ては時に全く一致することもある。獨り其筋や敎育家や道德家等は成るたけ「事勿れかし」本位だから兎角奇拔なものや斬新なものを忌む傾がある。何となれば奇拔とか斬新とかいふ色を帶んだものは兎角從來の習慣や風俗と背馳し若くはそれを危うする傾向があるからである。斯樣に標準が異つてそれ〳〵のインテレストが一つてない以上は、時に取締問題の起るのも止むを得ない次第である。

蓋し如何に世の中が進んだとても社會に人格の階級は盡きない。先づ老少の別がある。智愚、學不學の別がある。病的な感情を持つたものもあれば、健全な生れつきのものもある。意志の薄弱なのもあれば堅固なのもある。思想や、好尙や、敎育や、遺傳や、境遇や、周圍との關係やが異れば、同一のものに對しても聯想や解釋が違つて來る。さすれば同一物が與ふる感化影響が人によつては大變な相違てあることを思はねばならぬ。現下目前の風紀を取締ることを責任とする手合が機に臨み變に應じて何等かの取締法を講ずるの必要を感ずるは當然の事てあらう。

然し是は抽象的にいふので、今日の取締法が當を得て居るか否かは全く別の問題である。

そこて、文藝品から生ずる危險といふは一體どんな事てあらう。取締らずに打捨てゝ置いたらどういふ弊

てある。此邊からクレマンソリズムといふ言葉が出來たのである。内閣の屢々更迭するのは國にとつて餘り好ましい事ではないが、政治家の意氣は斯くありたいものではないか。國家は公物にして私物でない。國事は公事にして私事でない。一國の政軸を旋轉するものはかくありたいものではないか。今日の吳魏蜀の鼎立はどちらかといへば此方面に向ふ初級の初學德に入るの門ではなからうか。それで此初級に於て或學年間の修業中には今の三國に屬せざる河北の袁紹や袁術や或は公孫瓚や黃祖や劉表や此等の連中も又大悟徹底して三國の何れかと合するやうになるであらう。此學年を卒業して來た時は初めて憲政の階段に政治なり政黨なりが足を立てる時であらうと思ふ。

（完）

文藝取締問題

文學博士　坪内逍遙

此問題に關しては嘗て「早稻田文學」で「三つの異れる標準」と題して話した事があつた。それは「倫理と文學」といふ書物の中に載せてあるから、見てくれたまへ。然し話の順序として雜と其事も言ひませう。

僕は、文藝上の作物に對しては、少くとも三の截然として異れる標準が成立つと思ふ。已に截然として異る以上は、時にそれが相衝突することあるを免れない、三標準とは、第一は文藝家及び專門の文藝鑑賞家の奉ずる標準。第二は普通公衆の奉ずる標準。第三は俗に其筋と稱するオーソリチーや敎育家や宗敎家や凡そ實際に社會の經營や風紀の振肅に當つてゐる人々の奉ずる標準。くはしいことは前にいつた書物にあるから、今

は只要點のみをいはうに、所謂其筋及びそれとインテレストを同じうする手合は專ら現下目前の功過利害を標準と立てゝ文藝を取締り、文藝家は主として藝術上の本能滿足を標準として、言はゞ藝術絕對觀に住して製作し、世間普通の玩賞家は千差萬別の心を以て之に望む。第一は實利主義、第二は要するに本能滿足主義、第三は詰り娛樂本位。作者の本領は自己を發揮するにあるのだから成るべく奇拔に、成るべく斬新にと狙ひを附けて作するでもあらう。而して世間の玩賞家は兎角陳いものには堅く習ひだから、是れ亦成るべく奇拔なもの、成るべく斬新なものをと望むでもあらう。是に於てか、作者と普通の公衆とは、其目的や見識やは恐ろしく違つてゐるにも拘らず、又其標準の本來が同一でないにも拘らず、其結果に於ては時に全く一致することもある。獨り其筋や敎育家や道德家等は成るたけ「事勿れかし」本位だから兎角奇拔なものや斬新なものを忌む傾がある。何となれば奇拔とか斬新とかいふ色を帶んだものは兎角從來の習慣や風俗と背馳し若くはそれを危うする傾向があるからである。斯樣に標準が異つてそれ〳〵のインテレストが一つでない以上は、時に取締問題の起るのも止むを得ない次第である。

蓋し如何に世の中が進んだとても社會に人格の階級は盡きない。先づ老少の別がある。智愚、學不學の別がある。病的な感情を持つたものもあれば、健全な生れつきのものもある。意志の薄弱なのもあれば堅固なのもある。思想や、好尙や、敎育や、遺傳や、境遇や、周圍との關係やが異れば、同一のものに對しても聯想や解釋が違つて來る。さすれば同一物が與ふる感化影響が人によつては大變な相違であることを思はねばならぬ。現下目前の風紀を取締ることを責任とする手合が機に臨み變に應じて何等かの取締法を講ずるの必要を感ずるは當然の事であらう。

然し是は抽象的にいふので、今日の取締法が當を得て居るか否かは全く別の問題である。

そこで、文藝品から生ずる危險といふは一體どんな事であらう。取締らずに打捨てゝ置いたらどういふ弊

が生ずるてあらうか。先づそれから考へて見る必要がある。普通言ふ所によると、秩序破壊とか治安妨害とか風俗壊亂とかいふ言葉て蔽はれて居る。是丈けては少々漠然に過ぎて内容が分りかねる。「危險なる思想」「不健全なる感情」などゝいふ名稱も同じく抽象的て漠としたものだ。所謂「危險」「不健全」の定義を聞かぬうちは議論のして見やうがない。成程政治上の或目的を以て綴られた著作物などには確かに治安防害の虞のあるものもある。其等は秩序破壊とか危險なる思想とかいふのは當嵌まる。又或種の繪畫並びに著作は、餘りに露骨て、グロッスて、誰が見ても明かに風俗壊亂と認められる。然しそれらは皆文藝品て無い類ひてある。近頃禁止せらるゝ小説類、雜誌類に至つては、或は一二の例外はあるかも知れんが、僕の見た限りては殆んどどれもさういふ定義には當嵌まらないものと思ふ。イブセンやメーターリンクやショウの中にも、知つての通り、一時興行を禁止せられたり、禁止同様の運命に出逢つた作もあるが、あれらも無論のことさういふ定義には嵌まらない。イヤ、大概の禁止せられた作が(古今内外)此定義には外れてゐると思ふ。さればこそ作者側及び批評家側から種々の激烈な抗議が起るのである。何を標準にして危險と認め、不道德乃至不健全と呼ぶかと反問するのも尤てある。然るに當局者側ては兎角此漠然たる目安だけを主張して其他を發表しないのを例として居る。或は秘訣として居るのかも知れない。理屈一點張の法律問題丈けに餘りに要領を得た時分には後になつて動きが取れぬゆゑ、そこて議會に於ける大臣の答辯並に不得要領にしておくのでもあらうか。さりとは如才の無いことだが、文藝家に取つては迷惑千萬てある。併しさう思ふのは或は買破りて實はそれ程親切には、精細には考へてゐないのかも知れん。

僕の考ふる所ては、文藝品から生ずる弊は(專ら目前の利害のみを標準としていつたら)非常に瑣屑な複雜なもので前に擧げた目安即ち秩序破壊とか治安妨害とか風紀紊亂とか危險なる思想とか不健全なる感情と

か言ふやうな大ザッパな御大層な性質の者からばかり生ずるのでないと思ふ。是等の目安は恐らく其筋の目的を的確に言ひ現はしてゐないのでもあらう。今の法律家の頭は文藝問題に對しては尙頗る粗雜であつて其言はんとする所を言ひ得てゐないのではなからうか。彼等の意は寧ろこんな風な點にあるのではなからうか。曰く危險若くは不健全な意味に誤解せられ易い思想。曰く讀む者の意で曲解して自家の行爲を辯護するの料となし甚しきは放僻邪侈の口實にも供し易い作意。曰く既に何等かの惡傾向を具へて居る靑年などに讀ましむれば、意識的に又は無意識的に其惡傾向を煽動し募らしむるの緒口(ヒント)、暗示(サツゼツシヨン)、誘惑(テムプテーシヨン)になり易い作柄。即ち其作物の本來は決して不都合ではないのであるが、右の如き虞があるので現下目前の利害上より見て之を取締らざるを得ないと認定するとかう言はんどするのではなからうか。文藝家に取つては至極迷惑であるにも係らず、此解釋による時は、文藝家、批評家の見て何等の危險なしと認むるものも、又幾多の玩賞者が見て何の惧なしとする所の作も、或は場合によつては取締る必要があるかも知れない。當局者の眼から見れば、十人廿人の少數に弊を及ぼすばかりでも、時と場合とによつては等閑にはならないことがあるかも知れない。といふのは前の諸條の外にまだかういふ事がある。其作物自らは何れの點より見ても些の差支もない。不健全なヒントともならねばサッゼッションも與へないとする。而して如何な神經過敏の其筋もそれだけは認めたとする。而も其作を許した場合にはそれに似て非なるものが盛に續出する惧があるとする。或種の女風俗書や裸體畵や特に男女の間柄を寫した或種の小說類には此類ひのことがあらう。純正(ゼニユイン)なものと似て非なるものとの距離が明著な場合には、別を立つることも容易いが、繪畵又は有りのまゝを寫した文章などであつて見ると、時に辨別の附きかねることがあらう。田舍源氏の或插畵と梅曆の或插畵との距離は頗る接近したものだが、尙精しく觀れば距離がある。田舍源氏の畵を忌むこととなれば德川時代の草艸紙は殆ど

皆忌まねばならぬ。が其筋は田舍源氏をも禁じた。思ふに是は見分けを附ける標準に窮した餘りのワザクレてはあるまいか。梅暦式がすぐ接踵し來ることを恐れたのではないか。それはともあれ正純と似て非なるものとの距離は殆ど俗眼では辨別しがたい程であるゆゑ、若しやゝ寛大な態度を取ればやゝ非なるもの位は見のがしておかねばならぬ。すると其やゝ非なるものを標準にして更に一段非なるものが出ることになる。而して此二つの距離は僅ほんの一二歩だとする。そこて據なくそれの發行をも許して置くとすると、次第〳〵に其度合が高まり、同時に之に刺激せられエンカレージされて他の方面にも同傾向の作物が續出し、果はそれが一代の流行になつて底止する所を知らないとき其筋は取趣苦勞をすると見做す。何と此模倣者の輩出といふ事、作其物を模倣するばかりでなく、其傾向、其風潮を模倣する事の盛んになるのを恐れること、是れも亦暗に禁止の理由となつてゐるのではあるまいか。

惟ふに、一代の道義的標準や信念が鞏固であつて倫常が維持せられ、法律以外の制裁も程よく行はれて人心が輕薄でない時節や場合ならば如何な危險な文藝品が世間一般に瀰蔓しやうと元より聊かも憂ふるに足らない事だ。恰かも身體の健全な場合には、如何なる病毒をも恐るゝに及ばぬやうなもの。よしや身體が幾分か弱つてゐたとても切めても相當の醫者がゐるとか何等かの立派な解毒劑さへ具へてあるなら、是れまた些かも恐るゝに及ばんことである。是は所謂文藝品が眞に不健全で危險であつた時ですらも然う。況んやそれが其實質に於ては健全であり高尙であるが、單に曲解せられ若くは誤解せらるゝ廉があるといふのみの場合に於てをやである。畢竟するに文藝品は酒に比すべきものだ。中には非常に淡泊で、酒といつてもビールの程度、時には更に淡泊でサイダー程度のもないではない。然し又日本酒のやうな、シャンペーンのやうな乃至白酒のやうな蜂印何とかのやうな又はウイスキー、ブランデーのやうなのもある。それ等は酒を飲みなれ

ぬ、まだ餘り堅固でない腦髓の者が飲めばついグラ〱となることを免れない。酒は飲まずとも、わるい事をする奴はする、といふ議論も尤だが、酒さへ飲まねばといふ場合も屢々ある。そこがヒントたりサッゼッションたりテムプテーションたりといふ所以で、其筋の頭痛が果してそこにあるのならば一概には無理ともいへない。醇酒と混成酒の別は、前者が下等で後者が上等であつた時には殆ど見分けやうがないであらう。之を要するに、インテレストの相違が其筋の態度をして文藝家のそれと直反對たらしむるのであるとすると、他のインテレストで以て頭から彼等を批難する譯にも行かぬ。彼等の不當を責めんとするなら、かうすればよいといふ方法を講じてやるが最も親切な態度であらう。

處で、其方法を講ずるに先つて、一應文藝家の主張を考へて見る必要がある。今日日の事だから、文藝家の主張も色々だ。僕が今、當座の考で並べ立つるのはホンのその一斑を窺ふに過ぎぬかも知れんが、ホンの思ひ附をいつて見やうなら、詰り文藝家の第一義は、自己を發揮することにある。前人未發のオリヂナリチーが彼等の本領で、概して藝術絶對觀に住して居るものと見てよい。それを假に分類したら美のため專一の派と眞のため專一の派と人間のための派とで、其中美のため派も唯美是れ寫して現下の利害は顧みないから時に風紀と衝突する事もあるが、兎角取締問題に觸れるのは第二者と第三者とであるやうに思ふ。其「眞」と呼び「人間のため」と號する所に一種オーソリタチーヴな力があるので、其筋の神經を驚かすのであらう。眞のためといふ派は自然及び人間の眞趣若くは眞相を傳へて科學や哲學の缺陷を補はうといふ抱負に立脚するもの。"as it is" を本領とする文藝家と名づけてもよい。併し此仲間の中に、眞相を寫すと同時に暗に之を以て在來の謬想や謬信を破却するの用に供せんと望むものがある。所謂 'naked truth' を示して世間の迷夢を警醒せんとする手合である。是れは人間のためといふ事を暗に主張してゐるのである。かういふ作物は舊來字

皆忌まねばならぬ。が其筋は田舍源氏をも禁じた。思ふに是は見分けを附ける標準に窮した餘りのワザクレてはあるまいか。梅暦式がすぐ接踵し來ることを恐れたのではないか。それはともあれ正純（ゼニユイン）と似て非なるものとの距離は殆ど俗眼では辨別しがたい程であるゆゑ、若しやゝ寛大な態度を取ればやゝ非なるもの位は見のがしておかねばならぬ。すると其やゝ非なるものを標準にして更に一段非なるものが出ることになる。而して此二つの距離は僅ほんの一二歩だとする。そこて據なくそれの發行をも許して置くとすると、次第〳〵に其度合が高まり、同時に之に刺激せられエンカレージされて他の方面にも同傾向の作物が續出し、果はそれが一代の流行になつて底止する所を知らないとさ其筋は取越苦勞をすると見做す。何と此模倣者の輩出といふ事、作其物を模倣するばかりでなく、其傾向、其風潮を模倣する事の盛んになるのを恐れること、是れも亦酷に禁止の理由となつてゐるのではあるまいか。

惟ふに、一代の道義的標準や信念が鞏固であつて倫常が維持せられ、法律以外の制裁も程よく行はれて人心が輕薄でない時節や場合ならば如何な危險な文藝品が世間一般に瀰蔓しやうと元より聊かも憂ふるに足らない事だ。恰かも身體の健全な場合には、如何なる病毒をも恐るゝに及ばぬやうなもの。よしや身體が幾分か弱つてゐたとても切めても相當の醫者がゐるとか何等かの立派な解毒劑さへ具へてあるなら、是れまた些かも恐るゝに及ばんことである。是は所謂文藝品が眞に不健全で危險であつた時ですらも然う。況んやそれが其實質に於ては健全であり高尚であるが、單に曲解せられ若くは誤解せらるゝ虞があるといふのみの場合に於てをやである。畢竟するに文藝品は酒に比すべきものだ。中には非常に淡泊で、酒といつてもビールの程度、時には更に淡泊でサイダー程度のもないではない。然し又日本酒のやうな、シャンペーンのやうな乃至白酒のやうな蜂印何とかのやうな又はウイスキー、ブランデーのやうなのもある。それ等は酒を飲みなれ

ぬ、まだ餘り堅固でない腦髓の者が飲めばついグヲ〳〵となることを免れない。酒は飲まずとも、わるい事をする奴はする、といふ議論も尤だが、酒さへ飲まねばといふ場合も屢々ある。そこがヒントたりサツゼツシヨンたりテムプテーシヨンたりといふ所以で、其筋の頭痛が果してそこにあるのならば一概には無理ともいへない。醇酒と混成酒の別は、前者が下等で後者が上等であつた時には殆ど見分けやうがないであらう。之を要するに、インテレストの相違が其筋の態度をして文藝家のそれと直反對たらしむるのであるとすると、他のインテレストで以て頭から彼等を批難する譯にも行かぬ。彼等の不當を責めんとするなら、かうすればよいといふ方法を講じてやるが最も親切な態度であらう。

處で、其方法を講ずるに先つて、一應文藝家の主張を考へて見る必要がある。今日(けふび)の事だから、文藝家の主張も色々だ。僕が今、當座の考で並べ立つるのはホンのその一斑を窺ふに過ぎぬかも知れんが、ホンの思ひ附をいつて見やうなら、詰り文藝家の第一義は、自己を發揮することにある。前人未發のオリヂナリチーが彼等の本領で、概して藝術絶對觀に住して居るものと見てよい。それを假に分類したら美のため專一の派と眞のため專一の派と人間のための派とて、其中美のため派も唯美是れ寫して現下の利害は顧みないから時に風紀と衝突する事もあるが、兎角取締問題に觸れるのは第二者と第三者とであるやうに思ふ。其「眞」と呼び「人間のため」と號する所に一種オーソリタチーヴな力があるので、其筋の神經を驚かすのであらう。眞のためといふ派は自然及び人間の眞趣若くは眞相を傳へて科學や哲學の缺陷を補はうといふ抱負に立脚するもの。"as it is" を本領とする文藝家と名づけてもよい。併し此仲間の中に、眞相を寫すと同時に暗に之を以て在來の謬想や謬信を破却するの用に供せんと望むものがある。所謂 "naked truth" を示して世間の迷夢を警醒せんとする手合である。是れは人間のためといふ事を暗に主張してゐるのである。かういふ作物は舊秩序

や舊風俗や舊思想の維持者に取つては大分危險らしく思はるゝものである。扨其次に、頭から人間のためと名宣りかけてゐるのがある。それは前のよりは更らに一步を進めて、其所謂'naked truth'を材料として之に對する新らしき解釋をも加へ、時としてはそれを一種の主義に仕立て、進んで實際的に社會革新の活動をも計らんとする一派がある。前にいつたのは單に破壞的で消極的に止まる。是は破壞的であると同時に建設的でもある。プロパガンヂズムが目的である。トルストイや、ニーチエや、ゴーリキーや、イプセンや、シヨウなどの作には陽に或は陰に此傾向が見える。かうなると明かに廣義にいふ倫理的であるから、勢ひ舊倫理と衝突せざるを得ない。以上三類中最も其筋の神經に障はり相なのは第三と第二とてあるが、此等とても其本領からいへば決して危險とか不健全とか評すべきものではない。極端とか矯激とか評することは出來る。併し單に極端又は矯激と丈けの理由ならば、禁止は不當で、むしろ其極端な理由、其矯激な所以を說破する反對の議論を世に布いて道理に訴へたはうが民衆敎化の眞義に叶ひ、最も文明的政策てあらう。生半に壓迫し禁止するは一知半解の徒の好奇心を喚び起して益々曲解の緣を拵へるやうなものである。何となれば知識世界は之が爲めに邪說僻論の利害を公然研究するの好機會を奪はるゝからてある。况して第一類の、只有りの儘を寫すといふのは、いはゞ科學者の態度であるから、動植物の研究や、死體の解剖や、病毒の研究などに比すべきもので、成るべくは之を許して眞知識の傳播を計るべきてある。表向きからいふ時は少しも禁止すべき理由はない。然しそこが例の裏面の理由て、若し當局の惧るゝ所は主としてサツゼツシヨンにあるとすると、多少問題が變つて來る。專門家以外の公衆がどのやうなサツゼツシヨンを得るか、どのやうなジヤスチフイケーシヨンに曲用するかは其國の文明程度と其國民の人格問題て、豫め一定律て以て決することは出來まい。獨逸などは流石に進んだもので、文藝上の自由が大分ゆたかに與へられてあるらしい。彼の近頃評判

のウエデキンドの「春機發動」の如き、まだ普通の劇場では演ぜられぬやうだが、或劇場では屢々演ぜられてゐるといふが、脚本で讀んだ所では無論何のこともない作だが、舞臺では大分問題になる科があるとのことだ。文藝家側の主張によれば、斯の如き作も今は勿論許すべきである。智識の上中流に位するものは斯樣な劇を見たとても決して野卑な聯想などは起さない、穢ないサッゼッションなどは得やしないと主張するとの事だ。自然主義運動の初めに當つて、ゾラなどが唱へた所も同樣であつた。寧ろかゝる秘密を明白に、冷靜に發表することによつて在來の迷夢を破り、世を益することが出來るといふのだ。我近時の文藝家諸氏の抱負も大體其邊にあるだらうと思ふ。僕も此點には異存はない。然し或種類の作については尙些か疑がある。尤も危險とか不健全とかいふのではない。「果して其れ程必要であらうか」といふ疑だ。例へば今いつたウエデキンドの作だ。脚本としては勿論の事、舞臺で演じたとて劣情煽動などといふ惧があらうとは思はれない。然し本來誰に見せようといふのであらうか。其崇拜家のいふ所によると、性慾に關する知識を豫め子供等に與へておかないのが弊の源である、徒らに好奇の念を募らしめて、果は自他を殘害するやうな失行を敢てせしむるに至る。「春機發動」の如き作こそは恰かも此弊を寫したものだから在來の謬想を破るに足る、云々。それが果して作者の抱負ならば僕は甚だ疑ふ。十四や十五の少年男女が、舞臺で性慾問題で煩悶し、遂に罪惡を犯すに至る所をあり〳〵と演じて見せなければ、今の父母は悟らぬであらうか。今の智識の上中流は斯樣な劇を見ても決して惡るいザッゼッションは得ないといふ、如何にも得ないであらう。然し其れ程の知識のある手合がわざ〳〵此作を見る必要があるであらうか。かう考へて見ると是は抑も誰に見せる作だか分らなくなる。見せねばならぬ當人は、むしろ無學無智の然かも餘り年をとつてはゐない父親や母親や、或は同じ弊に陥り易い少年男女自らではないかな。果して然らば、さういふ手合は之を見て必ずしも正解を下し得

るとも思はれない。妙ならざるサッゼッションを得ないとも限られない。何だか要領を得ないことになる。崇拜家の唱ふる所は作者の本意ではなからうと思ふ。強ひて効能書を附けたのではないか。文藝家は矢張り有りの儘といふ所に住してそんな教育的主張や現社會に於ける利害問題は第二位第三位に斥けた方が當然でもあり立派でもある。併しさうなつた場合には、彼等の主張と現社會の利害を第一義とする其筋のインテレストとは方向が違ふから時に衝突することをまぬがれない。況んや舊秩序破壞若くは新秩序建設を第一義とする作物に至つては彼等役人連の神經を過敏ならしむるも無理はない。

話がだらしなくなつて來たが、詰り僕の言はんとする所は、假りに自分が當局者になつて見ると、大分標準の立て方に迷ふてあらうと思ふによつて、暫らく全く局外に立つて、公平に取締法を講じて見たらどうなるかといふ點にある。前にいつた三種の文藝家が、知識や趣味の上中流に鑑賞せられてゐる間は何等の不都合もないとして、扨其れが知識や趣味の下流にも鑑賞さるゝ場合には何としたものであらうといふ點である。又如何にして知識や趣味の上中流と分つか。中學程度以上の學問さへあれば知識の中流と見做すのか。或は身分や年齡で別つか。其中年齡て分つことだけは或は行はれないものでもないが、其以上は無法な話である。且つや知識のあるもの必ずしも趣味が高尚なのてなく、趣味の豐かなる人必ずしも識見の高い人でもない。斯樣考へて見ると、多少前にいつたやうな弊害があらう。所謂文藝批評家など稱する中にも、時としては存外見當の間違つたのもある。作者の寫した有りの儘を看取することさへ出來れば、よしや其作に寫されたる思想感情は矯激であらうとも極端であらうと、有りのまゝをさへ傳へれば必しも差支がないと思ふ場合に、往々原作とは大分違つた、寧ろ評者自身の分相應の解釋、甚しきに至つては自分の持論を強めんが爲めに牽強附會したやうな説を原作の本意であるが如く吹聽する評者、紹介者がある。偶像破壞家たる資格ある

近代諸作家の如きに對しては、特に此やうな例が多い。バアナード、ショウの英才を以てしてもイブセンを評した説の如きは隨分の見當違ひて、イブセンをショウに化して了ふて居る。其他初めて「人形の家」を譯した某女史の如き、「ブランド」の後段を小説に綴つたる某女史の如き、女とはいひながら、兎に角イブセンの精讀家だが、何れも見當は大違ひ。これらは見當違ひながら弊の無いはうだが、之に似て非なる例は内外に少くない。して見ると所謂知識の上中流ても餘り當てにならぬもの。蟹は常に甲羅に似せて穴を掘るのてある。批評家さへさうとすれば、飜譯書や雜誌新聞等によつて纔かに原作の面影を窺ひ、若くは何等かの他の動機をも加へて單に氣に入つた所のみ拔き讀みするやうな讀者等は、どのやうな解釋をするものか、取越苦勞をすれば限りが無い。即ち末派の弊、摸倣より生ずる弊、口實に利用するの弊等を之に加ふる時は、等閑視しがたいこともあらう。所詮はインテレストが違ふのだから仕樣がない。以上は至極大ざつぱに、普通公衆は濫用するもの誤解するものと假定し、其筋は神經過敏なものと假定し、文藝家は藝術絕對觀に住して勇往邁進するものと假定し、銘々勝手に己が信ずる所、己が好む所に從つた方がよいときめて了ふか。

一部の論者はいふ、所謂其筋はフイリスチンの集合だから困る。フイリスチンも人にこそよれ、薄給の屬吏などに一任してあるから無法だ、といふ。是は如何にも眞理てある、檢閲官の資格は今よりも數段改良されねばならぬ。又之を改良し得たなら多少今日よりは理に叶ふ取締法も行るゝてあらう。併しながら要するにそれは比較的の沙汰てインテレストの相違はいつまても附いてまはらう。名ある文藝の專門家若くは批評家連を其筋の顧問にてもしたらば此等諸弊を一洗し文藝の取締を毎に有理ならしめ毎に妥當ならしむることが出來るかといふに、僕は矢張安心することは出來ないと思ふ。何故ならば其顧問となる專門家にして若し全く文藝に忠ならば其筋とは全てインテレストが違ふものだから始終係官と衝突してゐて、其筋の目的は少

しも通らぬことゝなるてあらうから、トヾノツマリ退職するてあらうし、又其反對に其筋のインテレストに同感し、成るべく現社會に危害なからしめやうと思ふやうになつたら、いつとなく神經が過敏になつて、詰る所お役人肌になり兼ねない。且つ又他方からいへば、一旦取締が緩んだとなると、文藝家は之に氣を得て大膽にもなつて玉石眞贋一齊に勇往邁進を試みることゝならうから、如何な文藝家自負の顧問も、自家の職責上止むを得ず其幾分を取締らねばならぬやうにもならう。或は甚しきに至らざる先に防止政略として或一作を禁止することもあらう。犬を笞打つて獅子を誡むるの故智に倣つて大弊を未然に防ぐといふやうなことがあらう。其局に當ると早晩そんな羽目が生じさうてある。すると話が前に戻るが、何處からが限界といふことは詰りは認定に屬する、だから其認定の仕方が穏和黨の氣には入つても急激黨の氣には入らんといふ結果になり、矢張り其筋と文藝家との間には角づきあひが止むまいと思ふ。

要するに取締問題を是非するのは今の所無駄な事だ。むしろ文藝家は文藝家、其筋は其筋、各々其信ずる所に向つて充分に大膽に驀進させて置いて、イザ禁止となつた場合に、其作其者について問題を起した方がよい。此作を禁止しては實に文藝界の一大事、一大損失であると認めらるゝやうな大作物があつたならば其際最も深く損害を感ずる當事者及び其崇拜者(アドマイアー)が眞先に立つて之を主張し、廣く世間の同感者又は文藝家に訴へて(恰度メーターリンクの「モンナ、ヷンナ」を英國の檢閲官が禁止した時のやうに)一同連署して反抗運動を試み、輿論に訴へて禁止を取消させたがよいと思ふ。或は其やうな臆劫な事が一つ〳〵には出來ぬといふ人もあらう。然し其れ程の熱心が當事者並びに專門家側にさへ起らぬやうな作なら、詰りどうでもよい作かも知れない。其やうな作を禁止するのは不當でもあり馬鹿らしくもあるが、禁止問題を云々するは或はやゝ大袈裟かも知れない。禁止の當不當を鳴らさんとするならば、其唯一の手段として、禁止され相なドエラ

い作を作ることである。ドエライとは禁止さるゝ度合のドエライてはない、文藝品としてドエライのをいふのである。十人二十人乃至百人二百人に及ぼす幾分の弊害位は默過して貰はねばならぬと思ふ程の作をいふ。旅順一つ陷すに何萬人の人を犧牲にしたか、それを思へば文藝の傑作も若干の犧牲を要求する權利があるに違ひない。どう考へて見ても僕にはそれ以上の名案が浮ばない。由來文藝家は自尊心の强いものであるから、人によつては自分の作以外は、どのやうな作でもドエライとは思はないかも知れぬ。さういふ場合には一寸團結が困難だが、然し味方には勿論、競爭者でも、敵でも、フイリスチンでも感服させて了ふやうな作でなければ實はエライ作ではない。小さい譬だが僕は或一時、故團十郎の高慢熱の盛んな時分に、團十郎が憎くなつて嫌になつてゐた事もある。それでも其得意の或役或藝を見る段になると矢張り感心せずに居られず、褒めずに居られなかつた。さういふ事は文藝品の偉德だと思ふ。

畢竟するに其筋の近頃のやり方は殆ど全く當を得て居なくもあるし、禁止せられた作は、殆んど何れも差支のない作であるとは思ふが、以上述べた如き込み入つた困難があるとすれば、其筋攻擊を試むる人は、其筋の爲め、二つには文藝の爲め、何か策を講じて見る義務があらう。かういふ標準で取捨せよとか、斯く〳〵の作は取締れとか十分具體的に献策するのが實際的であると思ふ。從來見聞した限りては其筋のやり口も甚だ抽象的て漠然として不得要領てあるが、攻擊者の主張せらるゝことも茫漠としてゐるのが多かつたと思ふ。（談話筆記）

余が假住居



繞石生

門に一番近いのが——冬枯の今は定かには判らぬが——枝の樣子で銀杏かと思はれる。高さ三間とはまだ延びて居らぬ。その次に水仙らしいものがある。その次は薔薇。その次が葵。その次は菖蒲。その次が菊らしい。家に接しては、窓までの高さの薔薇が植込んである。今は綠の若芽をふきつゝある處だ。

家は二階造り。家までの道は、緣(へり)に灰色、卵色、石

石敷のサイド、ヨークに接して高さ二尺許りの煉瓦の壁がある。壁の上に殆ど同じ高さの一種の模樣を爲した鐵柵がある。その鐵柵と同じ模樣の門の扉を排して家の構内へはいる。

家の石段迄三間許り。右は唯の鐵柵に接した、平たく刈り込んだ生垣で、隣家と境して居る。左は庭で、道並みの煉瓦を壁に近く灌木や花物が植はつて居る。

竹色と三段に線をつけた一枚の人造石で、表面がガラスのやうに光つて居る。泥の跡など殆んど無い。尤も毎朝箒で掃いた後を雑巾で磨くのだ。

同じく人造石の石段を三段上ると家の戸口がある。戸は一枚戸で、その三分一許り上部は模様のある不透明な厚い色硝子がはめてある。戸に近く左右の壁に、推せば下女部屋へひゞく呼鈴がある。右側の壁のは訪問客等案内を乞ふ爲めのもの、左側の壁のは出入商人のそれである。尤も僕等は銘々此の戸の鍵をいつもポツケツトに入れて居るのだから案内を乞はずに、勝手に戸を明けて自分の部屋へはいつて行くのだ。

戸を明けてはいると、近く右側の壁に接して、鏡のはまつた帽子掛兼外套掛がある。その横に洋傘洋杖を入れる器もある。その横に縁や脚に彫刻のある黒檀の小机が置いてある。茶盆様の銀盤が載つてる。訪客の名刺受である。

左側の壁には大小いくつかの額が吊るしてある。カンタベリイ、カセイドラルのクワイアの圖と瑞西風景畫とがその中で殊に人目を惹く。戸口をはいつて六七歩で二階への階段が壁に接してついて居る。階段の下り口に、左側の壁に食堂への扉がある。階段へ上らずに戸口から眞つ直に十歩許も進めば客間への扉に到りつくのだ。台處への扉は階段の裏の左側の壁にある。

二階への階段は大理石だ。戸口から客間まで、また階段全部、左右少し殘して、草花模様の厚い絨氈が敷いてある。

階段を上りて左側の壁に便所へのドアがある。その次が浴室。浴室の次に、上つて突當に僕の部屋がある。二階の奥坐敷になるのだ。

階段を上つて廊下を階段と反對の側に進むと右側に出窓のついた部屋が一つある。こゝに僕と似た身分の獨逸人——ヘルマンといふ獨逸人が寄寓して居る。廊下の突當りで、下の食堂の丁度眞上に當る處に、家族の居間がある。獨逸人の居る部屋のドア近く、二階への階段と同じ方向に、屋根裏への部屋への階段がある。屋根裏の部屋は此の家の書庫になつて居る。臨時

客の用にとベッドモ一つ置いてある。

扉を開けて僕の部屋へはいる。部屋の廣さは日本の十五疊に少し足らぬ。直四角だ。入つて突き當りの壁に大きな窓が一つあいて居る。僕の部屋には窓はそれ一つだ。窓は東向きだ。

部屋の南側は壁で、扉に近い壁の半分が爐になつて居る。マントル、ピースは大理製で、花壺と裝飾用の皿や貝殼や石膏の美人像が置いてある。大抵な家ではマントル、ピースの上の壁には大きな鏡が壁にくつついて居るものだが、僕の部屋では、誰の筆になつた繪だか田舍の風景を描いた油繪の額が懸つて居る。

マントル、ピースに並行して衣裝簞笥が置いてある。下に抽斗が一つあつて、上は扉になつて居る。扉の全面が鏡になつて居る。窓にはシャッターがある、ブラインドもあつて、サーヂでつくつた左右へしぼり得らるゝカアテンも附いて居る。此の窓に向つて僕は机を据えて居る。机の眞上に自在に上下し得らるゝ十燭光の電燈が吊るしてある。

北側の壁に接して、眞ん中頃に洗面臺がある。壁に淺い棚がついてゝ、小さな花立や飾の小壺や小皿が載せてある目下此の花立に、水仙が一莖入れてある。洗面臺の上には洗面器がある、把手のついた水入れがある。シャボン入がある。楊子挿しがある。いづれも獨逸製らしい陶器で、花薊模樣がついて居る。色は薩摩燒に似て居る。此の洗面臺の兩側に細い棒が吊るしてあつて、タオルが大小二つ懸けてある。洗面臺の下に使ひすての水を容れる、提手のついた器が置いてある。

此の洗面器と机との間に、部屋の東北の隅に斜に化粧簞笥がある。立つて腰から頭の上一尺許りの處迄見える大鏡が上に載つて、その鏡の臺に三つ小さな抽斗が並んでついて居る。鏡の前には歯磨粉入れの壺や、香水罎や、ブラシュや、ピントレーやを置き得る充分の餘地がある。この簞笥には三つ大きな抽斗がついて居る。

洗面臺に近く、そして西側の壁に接してベッドがある。固より一人用のだ。

部屋の中の道具はこれ切りだ。壁は四方共埃及模様の紙張りて、天井だけ眞つ白だ。床板には一面に花呉坐が敷いてあつて、四方五寸許りづゝ明けて唐草模様の絨氈が其上に敷いてある。

机の前には肱掛椅子が一脚ある。來客用の唯の椅子が三脚、一つはベットの横、一つは爐の前、一つは衣裝簞笥の横に置いてある。

窓から裏庭が見える。三十坪はあらう。四方に歩く丈けの道を殘して一面に英國特有の芝が綠色濃くついて居る。庭の後ろは鐵柵を境に空地だ。空地の先きに三階造りの家が建ち續いて居るのが見える。

僕の部屋は前述の如しだ。て、いかに起臥して居るか。英吉利の冬は夜の明けるのが至つて晩い。今日は八時五分に日が出た、此節は霧のこむ日が多いから日が出て居る時刻でも外面はうす暗い。窓にはカアテンを懸けて居るのだから日が照つて居ても左程明るくはならぬのだ。

「毎朝何時に朝食なさいますか」といつか下女が尋ねた。早く言ふのも遲くいふのも氣の毒と思つて、「さうさな――」と答へた。すると未亡人が「九時ぢや早う御座いますか」と言つた。「いつでもあなた方のなさる時分でやう御座います」と答へると、「私は極遲い、娘共は部屋で致しますから、あなたの御好きな時分に」と言ふ。九時ぢや遲いと思つたが、「それぢや九時に」と約束した。

處がどうして九時には食堂へ下りられぬ。僕の部屋が八時半になつても暗いと、下女が磨いた靴を扉の前へ置きに來序てにコッコッコッと敲く大抵は一度で眼をさます積りだが、さうて無いとがあるのかも知れぬ。「イエース」と答へる。トコ〳〵と階段を下りる音がきこえる。

僕はいつも起きる前にウンと脊延びをする。それから床を下りる。スリッパを穿つて、窓のカアテンをた

右へ開いて、シヤツターを上へ上げる。部屋が急に明るくなる。それから扉のボルトを外づして便所へ行く。歸つて來て寐衣のまゝ齒を磨ぐ。隣の浴室へ行けば、いつも熱い湯で顔が洗へるのだが、寐衣姿を見られる恐があるから部屋の中で顔を洗ふ。そして髭を剃る剃る程に髭も生えぬが、それでも頬から顋、顋から喉元と剃刀を當てる。それから髪を梳る。こいつが事だ僕の髪は眞直に立つてこわい髪だ。そいつを水をつけて無理に分ける。ブラシユと櫛を使ふので手のだるくなるともある。それからシヤツを着て、ネクタイを結んで、ヅボン、チヨツキ、上服と塵を掃つてきると仲々の時間を要する。だから太夫身仕度いよ／＼終を告げるのは九時十分乃至廿分だ。

時には、まだ寢て居るのかと下女が「ブレーキフアスト、イズ、レデイ、サア」と扉まで來て言ふことがある。

やがてトコ／＼と下の食堂へ下りて行く。

食堂は前に述べたやうに、家の入口の、通路の見える西向の部屋だ。扉を排して入ると、正面即ち北側の壁に大きな暖爐がある。マントル、ピースの上は一面の大鏡で、マントル、ピースの上には玻璃製の花立、對の蠟燭立、灰皿、時計などが奇麗に措かれて載つて居る。

暖爐の右に紫檀の書物箱が二つ並んで、その四段の棚には文學書がぎつしりつまつて居る。セレー、キーツ、バーンス、などの詩集も見える沙翁全集もある。ハイネの英譯書もある。バルザツクの全集もある。チヨーサーもある。此の本箱の上に大きな花瓶があつて蝦夷菊に似た菊が口一パイに活けてある。此の花瓶の横にメーテルリンクのゼ、トレジユア、ヲブ、ゼ、ハムブルが載つてる。これは妹娘がこの間買つて來たのだ。

爐の左にはピアノが一臺、いつも奇麗にふきこまれて、つや／＼して横はつて居る。

東側の壁に接して食器入れの大きな鼠入らずがある。前と左右とは鏡をはめこんだ黒檀の開き戸になつ

てゝ、上一面は斑入りの大理石が張つてある。此の大理石の上には左右に羊齒の植木鉢が載つてて、中央に硝子製の菓物入が置てある。蜜柑、葡萄、林檎、バナナがいつも山盛になつてる。そして此の鼠入らずの幅に、壁に大きな鏡がはめてある。羊齒の鉢、菓物入れ、部屋の中央の食卓が鮮やかに映つて居る。

之と反對の側の、即ち部屋の西側は部屋から二尺許りの出窓て、窓は三つある。夜はヱニシアンを下ろすが、晝は淡卵色のレースのブラインドを下ろして居る。眞ん中の窓の前にミシン臺がある。使はぬ折は機械を外づして植木鉢を置く臺の用を爲して居る。今は青桐が一鉢と杉が一鉢と置いてある。

南側の壁には中央に瑞西の雪景色の油繪がかゝつてて、その左右に一家の寫眞や、ターナーの風景畫、レノーヅの人物畫が額にして吊るしてある。壁に接して安樂椅子が一臺置いてある。

壁は三方とも、濃い蝦茶て天井は眞白だ。

部屋の中央に四尺に八尺許りの食卓が据えてある。この食卓の中央へ、天井から電燈が下つて居る。入燭燈が三つ叉についてゝ、羊齒模樣の、茶色の絹レースて、天蓋風に蓋ふてある。食卓の眞ん中に丈の高い花活がある。黄菊白菊その他の色の菊が花ばかり見へるやうに一パイにさしこんである。花瓶は七寶だ。その花瓶の前後に、佛壇の花瓶樣な花立が二つ、これには白水仙がさしてある。

僕は身仕度が終るとこの食堂へ下りて行くのだ。茶器牛乳入りの壺、ジャムの皿、ナイフ、フォーク、スプーン、砂糖壺、これらが程よく僕の席近く置き並べてある。

僕は先づ暖爐に近く椅子をひきよせて卷烟草をふかし初める。暖爐の前に大抵いつも猫と犬とがうづくまつて居る。犬はプリンスといつて阿麻色の毛澤山の犬だ。猫はプシイといつて、海茶色の大猫だ。

食堂は一面に絨毯が敷いてあるが、暖爐の前には更にその上に大きな熊の皮が敷いてある。犬と猫とはさも仲好さそうに居並んでぬくもつて居る。

僕がはいると、猫は眼をニッとおし開いて僕を見るがすぐとうつむいてしまふ。プリンスは尾を掉つてウン〳〵何か言ひかける。僕はプリンスの頭をなでながら、椅子を爐に引きよせる。そして烟草ふかしながら新聞を讀む。新聞はデイリイ、クロニクルとテレグラフとだ。日本に關したこととては滿鐵問題許り。大部分は眞近にせまつて居る總選擧に關する事件だ。

やがて下女――メリイといふ下女がポリッヂ皿を持つて來る。早速食卓に向ひ直ほして、牛乳をかけ砂糖をかけてスプンで啜る。ポリッヂの次に魚を持つて來ることもある。ベーコンを持つて來ることもある。バタ付きのパンとトーストが四切れ置いてある。好きな方を食ふ。玉子を此上に持つて來ることもある。パンをかぢつて居る間にメリイが茶をこさえて呉れる。僕は日本に居る間は茶は好まなかつた。殊に苦いナマヌルイ煎茶と來ると、乾度後で腹をいためたものだ。こつちの茶は旨い。腹をいためる憂は更に無い。トーストにマーメレードをつけてかぢりながら熱い茶を啜るのは頗るよい。

かくして朝食のすむのは十時をすぎる。

食後しばらく新聞を見てから手水に行く。

僕の部屋は寒いから（尤も石炭さへ焚けば暖かだが、馬鹿らしいから焚かぬ）本をよむにも、物を書くにも此食堂へ下りてくる。食後すぐとメリイがテーブルクロースを取りのけてサージの蔽をかける。て僕は暖爐を背にして暖まりながら仕事をする。

娘共が食堂へ顏を出す。暫く話する。娘共も多くは此處で仕事する。こゝで家の人々を紹介しやう。家婦は五十餘りの上品な英人だ。息子と息女が六人あるのださうなが、今家に居るのは末の娘の十九か廿のリイラといふのと、そのすぐ上の廿二三のミユリエルといふのとそれぎりだ。死んだ亭主といふのは牛津出身の印度人だつたさうで、娘は二人共、顏などは白いが、髪は眞黒だ。妹が下女を指圖して臺所を預つて居る。至つて內氣なやさしい娘――女だ。姉は話好きな、快活な、そしていかにもチャーミングな、ホスピタブル

な女だ。

晝食は一時半頃にするのだが、僕は外でやるとにきめて居る。わざ〳〵晝飯に歸宅出來ぬ場合が多いから斯うきめたのだ。

テーは四時半から五時頃にやる。此の時刻には大抵歸る。四時少し過には日が暮れるのだから、電燈の下でやる。バタ付のパンの薄片と御菓子とで熱い御茶をのむ。

夜食は七時半か八時前かに始る。夜食には一家三人それにヘルマン君と僕と五人が打ち揃ふ。、鼠入らずに近い方の食卓の一端に家婦が坐を占める。その反對の側にリイラ孃が坐る。暖爐を脊にして僕が坐る。僕の右側にミユリエル孃。そして僕等の向側がヘルマン君だ。

夜食の馳走は殆んどいつも同じものがないといふ程毎日變るから書きにくい。昨夜のを書いて見やう。

時刻になると下でチリン〳〵と鈴（リン）が鳴る。髮にブラシユをあて、手を洗つてから食堂へ下りる。ヘルマン君は朝九時前に出宅して、七時頃やつと歸つて來るのだから、グツド、イヴニングと挨拶する。そして新聞て見たとなど互に話し合ふ。

下女が家婦の前へスープ入りの壺と皿とを置いて行く。杓て汲んで第一の皿を僕に呉れる。サンキユーて受取る。第二の皿を家婦がヘルマン君に渡す。次の皿を僕が隣のメユリエルへ取つぐ。サンキユー、ミリヤツチて受取る。その次のリイラへの皿をミユリエルへ渡す。最後に家婦は自分の皿につぐ。吸ひ終つてから家婦はもつと上げませうかと聞く、僕は御斷りするとが多いが、ヘルマン君は能く「ぢや、も少し」をやる。

マントル、ピースの横についてる電鈴を鳴らす。下女が皿を下げて來て、次のヂツシユを持參する。ソースのかゝつたボイルド鯛だ。一皿盛つて僕に渡して、「これをあなたのに」といふ。「サンキユー」てミユリエルへ渡す。ミユリエルがリイラへ渡す。リイラは皿へスマツシユポテトーとカベジを添えてミユエリルへ

かへす。それをミユリエルから受取つて僕の前へ置く。スープ同様。僕は三度御皿の御取次をしなきやならぬ。そして色んな事を話しながら食べる。

更にまた電鈴を鳴らす。メリイが今度は大皿二つ、一つは兎肉入り一つは羊肉入りを持つて來る。そして模樣の別なプレートを五枚持つて來る。「どつちあげませう」ときかれる。骨の多い方は食ふに一寸困るから「羊の方を」と答へる。家婦が羊肉の大切れを入れて呉れる。皿を受取つて、例によつてミユリエル、リイラへ順渡しにして、リイラに野菜を添へて貰つて皿を頂戴する。御取次が又始る。話しながらばくつき終る。

更に三たび電鈴を鳴らす。メリイが今度はプデンを二種類持つて來る。名の分らぬ何とかいふのは斷つて、バタ、プデンを一切れ頂戴した。

プデンがすんでからビスケットチーズが出る。チーズは好きだが大分御腹が張つたから「ノー、サンキユー」をやつた。

最後に鼠入らずの上の菓物器を取つて來て、どれ上げませうといふ。葡萄を少しはさんで貰つて食つた。僕は日本に居る折には必ず晩酌をやつたもんだ。それが船中次第にいつとなく廢止になつて、今ぢやたゞの水を飲みながら食事するのが却ていゝやうになつた。水をのむと食べた物が早く消化するやうな氣がする。妙なもんだ。

昨夜可笑しかつた。家婦がミユリエルに「お前、チーズ食べるの」といふと、「エ、少し下さい」「小さい皿がないから之に入れて上げやう」と言つて、肉皿の隅に小さな切れを一つ、僕の手を經てやつた。「オヤ〱ドコにあるか分らないわ」と笑ひながら「あなたに見えますか」とへうげて言ふ。「眼鏡て見なきや見つかりません」と言ふと、みんな大笑だつた。奴さん食ふてから喉が乾いたと見えてグラスへ手をやつたが、飲み盡くしてある。ヘルマン君の前にあつた硝子製の水罎へ一寸眼をやつて、「オー、サッド」と小聲て言つたから、ハハハと笑つてやつた。すると「何て笑ふの」ときくか

ら「水が無くて御氣の毒樣」と答へる。「どうして知つて」ときく。「今サッドと言つたぢやありませんか」「オヤ、リイラ私しさう言つて」「きこえなかつたわ」「大谷さん、うそ〳〵」と笑ひながら自分て臺處へ水とりに行つた。歸つて來てから「御母さん、水は」「いらない」「ヘルマンさんは」「いりません」「リイラは」「いりません」「オヤ〳〵、大谷さんは」「エ、貰ひます」「ぢや、あなたが心の中てサッドと言つたんてせう」とてまたまた笑ふ。總て斯んな具合だから和氣溢るゝ許りて實に居心地がいゝ。僕はホスピタブルといふ語ホームといふ語の眞の意義を始めて此の英吉利て解した。

食後チエスをしませうといふ。やりかたを知らぬといふと、「ぢや母としますから見て御いてなさい」と言つて、駒の飛び方を敎へて吳れた。僕はもう覺えた。

一昨夜はピアノを彈いてきかして吳れた。ミユリエルは「汽笛一聲新橋を」の譜を知つて、「これは日本のマーチてせう」とやられたには驚いた。その前夜は澤山繪を出して吳れた。繪の話をしたが、コンステーブルがどうの、ターナーがどうの、ルウベンスがあゝ、エラスケッがかうと仲々繪のとを心得て居るのにも感服した。

十一時に互にグトナイトを言つて引込むが、僕の床は敷布團に鳥の毛のはいたのを敷いて吳れて、上へは毛布二枚を入れた掛布團と今一枚更紗の鳥の毛布團を添へて吳れて居るから、此の冬に、ネルの寢衣一枚て居て、暖かすぎる位だ。寢坊するのもその加減かも知れぬ。寢る前に靴をドアの前へ置いて、電燈のスヰッチを上げて、さぐり〳〵床の中へもぐりこむ。

三階の書庫へは一度行つて見た、ヂケンス全集もあつた。ド、クインセーも眼についた。エバレー、ノーベルスも眼についた。とにかく文學書が幾百冊もある勝手に取り出して見ていゝと言ふから、面白いのを順次借りて讀まうと思つて居る。

風呂はいつてもつくつてはいれといふ。ホットといふ栓をねぢれば湯が出る。コールドの栓をねぢれば水が出る。エーストの栓をねぢれば水がすたる。スキ・

チを下ろせば電燈がともる。シャボンもタヱルも備へてある。至つて便利だ。

この僕の寓居は倫敦も西南のはづれだから、頗る閑靜だ。でもタナングリン停車場へ五分で行ける、電車道へは二丁足らずだ。

（四十三年一月十二日、西區チズイク、エアデル、アヱニユー、五十九の寓居にて認む）

日本漢字彙を作らねばならぬ

文學博士　芳賀矢一

日本が漢字を使用して居るのは隨分久しい事で、今後とても急に廢止する譯には行かぬ。理想としては成るべく早く排斥して、知識の收得上、もつと便利な音韻文字を用ゐたいのであるが、歴史の上から、風俗習慣の上から、實行に色々な困難があつて、議論のある間はまだ容易には行はれまいと思ふ。急劇な假名論者羅馬字論者は結局空論家たるに過ぎぬ樣に思はれる。唯徐々と歩武を進めて行つて、世間の大體が音韻文字を使用する事の便利を認める樣になつて、始めて其論が實行されるのである。古い歴史を有して居る漢字は中々一朝一夕には追出すことが出來ない。當分は我等の用ゐなければならぬ文字である。さてかう考へるとどうしても漢字に關する正確な字書が必要になつて來る。

余がいふ正確な漢字の字書は支那人の拵へた字書をいふのでは無い。日本人の漢字彙が必要と思ふのである。漢字はもと支那から借用して使つたものであるが、千百年の久しき、我國民の慣用を經たもので、即ち日

本の文字と見做さなければならぬのである。日本人の永い間の慣用によつて字の畫などが多少變つて來て居るのもあり、正しい字義を離れて別の意義に用ゐる様になつて來たのも、もとより澤山ある。又音でも古音の殘つて居るのもあり、新しい音で讀んで居るのもある。今日漢字をまだ日本文字として使用して居る以上、國民敎育としてまだ漢字を課して居る以上、其字畫字音字義の明瞭に分るやうな日本的漢字彙が無ければならぬ。これは國家の體面よりいつても必要である。恰も國語の字書が必要であると同様に直接に必要な事である。

今日は漢字を論ずる人も研究する人も多くなつて來たが、どこ迄も學者的研究で、日本の慣用を許可しない。支那本來の根本字でなければ許さぬ様な傾が見える。字畫にしても、字義にしても、支那の字書にあるのを標準として、少しても之に外れゝば直ぐに間違だといふ。國語の假名遣さへ、時代によつての變化を許さうといふ論もある今日、あまりに窮屈なことである。つまり漢字をいつまでも支那からの借物だと思つて居るからである。日本字だと思へば、日本人の慣用を重んずるのが善いのである。英吉利語も米國では段々變化して行く。語の綴り方も英國と米國では變つて來たのもある。もとが英語だといふので、いつまでも英國通りにしなければならぬといふ理屈は無い。支那の字書とは多少違つても構はない。日本人の通俗に使用する字畫字義字音を基礎として標準字彙を作らなければならぬ。支那の字書から見れば間違でも、日本人の汎い用法を許可した字書が必要であると思ふ。字學の方面に明るい漢學者や國學者を集めて、標準的日本漢字彙を作ることは目下の急務であらうと思ふ。

日本人の作つた漢字はもとより此中に入れなければならぬが、日本人の普通に使はぬ文字は此の字彙には取らぬ様にしたい。康熙字典にある字を悉く入れる必要は毫も無い。簡單に言へば、明治の節用集が入用だと思ふ。民間で作つたのでは、人が承知しないし、十分にも行くまいから、國家事業として、編纂して、敎[illegible]

標準を示したいと思ふのである。明治の節用集といつても節用集通りの體裁にせよといふのでは無い。其編纂の方法や排列の仕方等に就いては色々工夫しなければならぬ。義務敎育にも澤山の漢字を敎へ、中等敎育にも尚一層多くの漢字を敎へながら、唯支那の字音を標準とさせて居ることはあまりに矛盾でもあり、不親切でもある樣に考へられるのである。

南瀛一瞥

大庭柯公

（一）

○北部臺灣に花を賞するもの、新埔山溪の梅林、臺北諸園の櫻花あり、二月降雪の旦、花信臺北の一友より到る。

○新埔山溪の旱坑仔、花あり水に臨む、春溪淡靄を籠め、流水暗香を浮ぶ處、脚下に青苔ありて溪間に微風なく、而も飛瓣自から下るの景、我が月が瀬に酷類す。

○內地の櫻花を移植せしもの吉野、嵐山、彼岸、枝垂の各種臺北に在り、花瓣年毎に小に、淡色漸く鮮紅に變し、花は梢上に萎みて亦風に散るなし。

○新埔は密柑を以て名あるの地、知らずして梅林を出て、識らずして密柑畑に入る、野趣眞に愛すべきあり。

○若し夫れ六七月の交、淡水附近觀音山より西南に亘る一帶の高原平地、滿目の茶園に數百の婦女、隊を成して蕃歌高く茶を摘むの光景に至りては、正に島地を美化するもの。

○樟は臺灣一部の生命なり、而も樟實の熟せんとする時、群を成して之を啄むもの白頭翁あり、貯へて室內

に蔵する時、好んで之を喰ふもの夫の鼯鼠あり。

○樟樹に臭樟黄樟青樟赤樟あり、赤樟最も腦分に富む、蕃境樟樹の老大なるもの、時價數千金を値す。

○製腦は鄭成功時代夙に其法を傳へ、植蔗製糖は早く之を蘭人據臺の當時に見る。

○臺灣の地烈日熱暑、而も露は重くして雨の如く、旱歲と雖も夜に過ふて萬物皆潤ふ、樹藝芃々として欝茂し、萬種の作物穰々として稔る、眞個蓬萊島なり。

○僕南洋廻遊の歸途、臺灣に寄航し、二週日を費して島地を縦斷す。萬頃の美田良圃遠く闢け、稻蔗豐穰相連るの狀を車窓に見、比律賓に於る鐵道沿線地の荒蕪際無きの狀に比して驚喜の狀を禁じ得ざりき。

○嘉義より阿里山に至るの途、竹頭崎附近の田圃原野相思樹、龍眼樹、檨仔(マンゴー)の果樹處々に散點す。龍眼肉マンゴーは南洋廻航者の獨り甘味を貪るの珍果なり。

○晩夏初秋の候、鱗毬狀の綠色果を結ぶもの釋迦頭あり、甘美賞すべし、凸柑雪柑金柑皆冬季の成熟、多漿甚だ甘味に富む。

○街上に榕樹あり、街道に桂竹綠竹の美林あり。脩竹の數十竿一叢を爲すもの純乎南洋の景なり、而も一度び高山に登る、乍にして溫帶寒帶の植物帶を現出す、樹種の豐富想ふべきなり。

○僕濠洲タウンスヴイール滯在の一日、馬車を郊外に驅る、濠洲大陸の平野眼前に展けて一望際なく、雨後の市外亦寸塵を揚げず、行くと二里許、忽ち仙人掌の廣野に入る、笏狀の幹六七尺直立成人の如く、倒卵形の枝相參差し、欝茂道を狹む、乃ち馬を右すれば枝頭の細針馬耳を刺し、左すれば老根の硬針蹄を刺す。而も車上の僕は一種の奇觀に打れて亦身の窮地に陷れるを忘るゝこと少時。

○打狗に綠珊瑚あり、地方代表の特種植物をして優に誇るべし、高さ丈餘、眞綠色の細枝無數に樹幹より茂生す、十步にして之を望む、寔に地上の綠珊瑚樹たり、仙人掌科の一植物なり。

(二)

○臺灣の媽宮は滿洲の娘々廟と相似たり、島地到る處宮祠を見る。

○媽宮は猶ほ夫れ金比羅大權現の如し、媽祖一に天后と稱し、海神なり。古來臺灣海峽を航するの淸人、巨船小舟一に媽祖の冥護に依る、澎湖島の媽宮港は正に臺灣海峽航通史上の證跡たり。

○康熙三十六年淸人郁永河裨海紀遊の著あり、二百年前の臺灣探險志なり、其臺灣海峽を橫斷するの條「飆駭浪千山白、水接遙天一綫青」の句を見る、臺灣海峽の風浪昔猶ほ今の如かりしを證す。

○澎湖島が今日無木の禿土たる、亦海峽の烈風と海氣中の鹽分に因るなからんや、島民の矮屋を老虎石の高墻に圍みて、辛じて風伯の威を避けつゝある、狀甚だ憐むべしと爲す。

○而も一六〇三年澎湖島に於ける蘭人最初の上陸の圖、陸地一面の檳榔樹を畫き、淸人の古舊蘭人上陸の記事中「伐木築舍、爲久居計」の文字あるは、三百年前樹林の澎湖島を語るが如し。

○近者中將長岡の臺灣を巡遊して澎湖島に到るの一夕、談島地植樹の事に及びて、即時紀念樹の植付を決行したりしは美事とすべし。漫に沙磧の地種植に堪へずと倣し、米穀を需むる、升斗尙ほ必給を臺地に仰ぐを常とするは思はざるの甚しきなり。

○蓋し臺灣の文化は西南より到る、而して澎湖列島常に其衝に當る。

⊙澎湖列島は臺灣の門戶、昔時交戰に傳敎に通商に皆この門戶を通じて臺南と安平とに到る、今日南洋の聯絡豈に亦此方面に門戶を啓くなからんや。

○僕臺南市遊覽の一日赤嵌樓を見る、是れ蘭史に所謂プロヴィデンチア城として、二百六十年前蘭人の築きて屯營し、後鄭成功の占據せるもの、「臺地所用磚瓦、皆赤色、朝曦夕照、若虹吐、若霞蒸」、是れ乾隆の初年淸人の赤嵌樓記事中の一句。

○臺灣海峽の最も迫る處僅に六十二海里、群島六十三其間に碁布散點す、而して南すればバシー海峽を隔てゝ直ちに比律賓と相呼應す。

○臺灣の最南端岬鵞鑾鼻あり、白堊の大燈臺を岬頭に見る、樓下の水邊土民の常用するもの竹筏あり。竹筏は古代南洋土人水上唯一の交通具、今之を近世文明の大燈臺に見るに至つて、臺灣の地理的趣味も亦一掬を値するとせん。

○剝皮し灣曲せる蔴竹數竿を結ぶに籐蔓を以てし、辛じて船形を造り、中に桶型の座、四人を容るゝものあり、船房と擬す、竹筏即是れ。その物畢に原始的狀型を脱せずとするも、亦古代の馬來族が數竿の竹片に激浪を打つて遠征移植是れ事としたりしの雄風を想見するに足る。

○僕馬尼刺滯在の日、カヴイテ灣の對岸、カヴイテ、ビエホに比島の奇傑アギナルドを訪ふ、快談一夜、翌朝告別邸を辭するの時、家奴一兩名水邊に奔りて僕の爲めに小舟を艤す、舟甚だ小にして兩舷着搆するに竹竿大さ樹幹の如く、長さ舟に倍するものを以てす、蓋し竹竿は舟の本體にして、中間の函型は船房に過ぎず。我臺南土人の竹筏は畢竟南洋馬來族傳來の遺物たり。

○「獨幹凌霄不作枝、垂々靑子任紛披、摘來還共蔞根嚼、贏得唇間蒨染時、」是れ淸人郁永河の檳榔樹を咏するなり、我國往昔婦女の唇に紅し、縉紳上﨟の齒を染むる、九州族の南洋よりの渡來を證せんとする史家の說、亦必しも附會の臆斷に非ざるを想ふ。

○臺灣を知らんとする、其西南部を究めざるべからず、西南部を究めんとする、則ち對岸閩粤及び呂宋の島地より、遠く馬來半島を觀取するを要す。近時臺灣の南淸航路を廢絕したるが如きは、吾人終に其故を知らず。

（三）

○臺南に鄭成功の廟「明延平郡王祠」を拜し、廟後田川氏の小祠前に梅樹の老幹を撫するの時、吾人は鄭氏の時代に於て日本が旣に何等かの緣因を臺灣の地に有したりしが如く感ず。

○澎湖島馬公城外にクールベイ將軍の墓を訪ひ、淡水にマッケー氏の墓に詣ずる時、臺灣の今日ある、其負ふ處の廣くして久しきを感ず。

○マッケー氏の臺灣に在る四十年、土人の婦を娶りて感化薫陶理想の人と爲し、二女を擧げて高弟たる土人の二青年に配し、今や一對の新夫妻が父母の志を繼ぎて救靈の事に從ふある、吾人は其堅實なる氏が生涯に學ぶ所なくんばあらず。

○「高山國」の稱、文祿二年秀吉の臺灣に寄せたるの書に見る。鄭氏の入臺に先つ三十年、我に濱田彌兵衛あり、單身迫て蘭將の胆を奪ふ。

○島津齊彬夙に臺灣經畧の大志あり、其古文書として傳ふるもの「初に渡唐船の汐掛り場を定め往來每に汐掛りし後々は家をも拵へ絕へず在番人を置き土人を懷け人道を敎ふる手順にすべし」と言ふ。

○明治七年五月征臺の皇師、歸順の酋長に附與したるの日章旗「我皇國の御稜威に順ひ奉るあかしなれば假染にも汚すなかれと云ふことしかり」と記す、皇風の南瀛に薰する既に此時に始る。

○臺灣最古の地圖、一五九九年蘭人リンショオテン氏の見取圖あり、彼東洋航海の際、臺灣海峽を通過して畫せるもの。淸人の古書としては當に郁氏の裨海紀遊を擧ぐべし、淸朝の領臺後十四年にして、單身能く草昧なる蕃黎占居の區を巡廻し、東海岸を縱斷したるの雄志は終に沒すべからず。

○現代の人類學者鳥居龍藏氏が領臺後二年にして新高山に上り、絕頂に「日本の人類學研究は新高山の頂上に及べり」と書し來りたる、殿手の人梅陰伊能嘉矩氏が蕃境に踏入し、蕃狀を究めて「臺灣蕃政志」四篇を成したる以來、臺灣の史的研究に於て古今東西に冠たる、吾人は臺灣を語るに當りて二氏の意氣と勤勞とを多とせずんばあらず。

（四）

○乞ふ臺灣を以て徒らに焦熱の苦土と做すを休めよ、臺北古刹の首に居るもの艋舺の龍山寺あり、境內空濶、塵中眞に別乾坤を劃す。八芝蘭の芝山巖、々上一古寺あり、寺に隣するの樓閣、上りて放眸するに臺北の平野歷々眼に入る、淸境にして大觀を併せ得たるもの。

○大屯山界紗帽山上の風動石は小夜中山の夜啼石の類

か「山上有碎石、如梅花蕋瓣、風來即動、俗呼風動石、石窩有如花心、蓄水斗許、汲乾復自滿」淡水廳志の記事に見る。

○若し夫れ中部臺灣に到る、帝室御料林に編入せられたるもの日月潭の勝地あり、新高山東北山腹の八通關に入りては、臺灣の二大碑として「過化存神」「萬年享衞」の大字を自然の石壁に仰ぐべし。

○安平の赤嵌城、蘭人婦一王の搆築占據せる處、紅毛城の名之より來る。少しく北して蔴荳庄に至り、蕃仔田庄の郊外、雜草離々たる邊、一斷碑を見る、羅馬字を以て蕃語を碑面に刻せるもの、乾隆十七年(一七五二年)建つる所、蘭人敎化の蕃族に及びたりしを證す。文人史家の到りて此の古城と此の古碑とを見る、歌はざるを得ず、感ぜざるを得ず。

(五)

○僕臺北を發して臺中に向ふの日、偶々北部生蕃の一團、臺中の觀光に向ふものと列車を同ふす、乃ち好んで蕃人の乘車に移り、親しく手を把りて狀を見る。

○北部の蕃族獷狉猛獰と稱せらる、而も其少婦幼童の身を父母の體に倚せて喃々する所可憐の情あり。馘首は一種傳來の習俗、以て成年を證し、以て婚儀を行ふ、單に出草馘首の俗を以て獰猛の性、敎ふべからずと爲すは王者の志に非ざるなり。

○其婚儀の俗を見る、或者は鹿角釵脚を婦に贈りて成約を表し或者は薪材十數束を女家に贈りて成婚の證と爲す、而して兇蕃アタイヤル族の新郎新婦が婚後一定の期間、高架棧上に寢臥するの俗に至りては、戀の女神を蕃界老樟の邊に見るの心地す。

○乾隆年間上梓の書「赤嵌集」あり、言ふ「臺北諸山皆從蕃語譯出」と。艋舺の地名元と莽葛に作り蕃語バンカーに出づ、獨木舟の義なり、淡水河畔の艋舺が昔時蕃舟の寄泊せるに基く、八芝蘭亦蕃語パッチライヌに出づ、溫泉の義なり。

○吾人は我臺灣總督府が明治三十六年治蕃の大方針を立策したりしを記憶す、即ち北半部の生蕃に對しては威壓強制、南半に對しては啓發綏撫。焉んそ知らん「領

山絶交、開山撫番」は是れ康熙年間以降淸國治番の法策ならんとは。

○臺灣中興の爲政家藍鼎元が治番策として「以殺止殺、以番和番」と云ひ、光緒初年議定の撫番章程に、生番は撫に難からずして化に難しと言へる、生蕃敎化の爲に「化番俚言」三十二條を制定したる、我治番の法策は今尙淸人に學ふの餘地あるが如し。

○僕臺灣に遊びて蕃界踏査に意あり、臺北到着の翌、總督府の蕃通賀來警視、幸に僕の爲めに嚮導の勞を執る。

○桃園より輕便鐵路に搭して大嵙崁に至り、更に紅帳藍蓋の轎に坐して水を渡り丘に上り、時に水牛の熱脊を泥潦に浸すの狀景を路傍に目擊し、或は竹林を送り、相思樹樟樹を迎へ、阪路漸く急にして前轎擔夫の脚は後轎の頂よりも高し。

○此夜一行數人、角板山隘勇監督所に一泊す、山は大嵙崁溪の一水を隔てゝ蕃境羅々山に相對し、合吻、汚來、吶哮等、對岸蕃社の狀景肉眼能く觀取し得。顧れは隘勇線は鐵條網に劃せられて逶迤として山地を高低し、左方遙に插天山を望む。

○警皷なるものあり、圓材の中腹を空にせるもの、之を各隘寮に懸けて警音の具と爲す、夜半夢破れて遙に打皷の音を聞く時、感興の特に深きを覺ゆ。

○頃者歸順生蕃諸族の一團、遠く送られて倫敦に至り、日英博覽會の一隅に蕃境の生活を演出せんとするが如し、白人の觀客は以て其奇觀を珍とせんも、吾人は與せず。

（六）

○臺灣民主國なるもの恐くは多く邦人の記憶に存せざるが如し、藍色に黃虎を描けるの旗、方二寸大の「民主國之寶印」是れ臺灣巡撫唐景崧の劉永福等と我領臺に反抗して企てたりし所、亦史上一時の變象とすべし。

○而も我國十數年の治、監獄を改良し、阿片癮者を律し、水藥の服用を敎へ、澎湖列島三十有六の數を正して六十三島を計へ、而して領後十年完全なるセンサスを行ひたる、聊か以て日本人の植民地經營の能力を證

すとせん。

○吳氏笑女史、黃氏鶯女史は臺南出身の女性なり、臺灣島最初の女學生として東京に遊學し、三十七年明治女學校全科を卒へて歸臺し、後島民の敎育に任せる、以て士民の文敎に志あるを見ん。

（七）

○「臺灣名物何々か、砂糖に鹽に烏龍茶、年に御米が二度採れて、山には黃金の花が咲く」領臺後邦人の口にせる俗謠なり。

○南を論ぜんとする、先づ北を知らざるべからず。南北滿洲、韓國の西北、冬時の百餘日結氷の閑天地のみ、臺灣の一月、秋色僅に山間に到り、山岨溪畔雜木の紅葉を見るも、陸上の茶園花白くして芳芬浮動し、平野の稻菜油々穫々たり。

○基隆元と鷄籠の字を用ふ、光緒年間「基地昌隆」の意を寓して基隆の二字に代ふ。

○南か北か、大陸か島地か、吾人は南方膨脹の自然に待ち、北方伸張の人力に頼む多きを想はずんばあらず。

○前年卒先して樺太を視察したるの獨逸大使、今春臺灣全島を巡遊し、兩度北滿を通過して、東清沿線の風物に親めるの英鈴差、今復臺灣巡遊の程に上る。吾人今に於て根底ある臺灣研究の切要なるを想ふ。

我國の水力電氣に關する所見

理學博士　田中正平

近來工業に電氣を應用する事が非常に發達して來たが、其初は頗る新しい事て、僅々此二三十年間に斯かる著しい進歩をしたのてある、それ迄は電氣なるものの世に知られて居たとはいへ、其應用は僅に電信、電

話位に止まり、それに使用する電流とても、電池より得る極めて微弱なものに過ぎなかつたのだが、其後蒸汽機械を用いて電流を發生せしむることとなつた、即ち普通の動力を先づ電流に變へ、其電流を線を以て遠方に送り、再び又之を元の動力に變へ得ることになつたので、之が廣く電氣の工業に應用せらるゝ濫觴を爲したのである、斯くして得た電氣は非常に强いもので直接に之を燈火、即ち電燈にすることが出來る、私共が明治十四年未だ大學に居た時分に初めて西洋で電燈を點け出したといふ事で、此方でもそれに倣つて電池を澤山併列し、一つ橋外で電灯を點けた事があつた、その時分にはまだ前に言つた樣な動力を以て電氣に變へるなどいふ事は我國には起らないのであつたが、暫くして藤岡市助君及び其他の人々が大に電氣の經營に與つて力を致し、遂に今日の隆盛を見るに至つたのである。暫くしてとは言つても動力に電氣を用ふる事は其後まだ長く發達せず、漸く十年程後に西洋に於てそれが發明せられ、特に電氣鐵道の如きが盛に行はれる事となつて、今では既に凡ての事業に殆んど電氣の應用されぬものがない程に迄なつた、それは單に動力に用ふるのみでない、化學作用を發生せしむる爲に直接に其電氣を用ひたり、又高度の熱を作つて間接に化學製造業に用ふる等の事が起つた、けれども是れも初の中は皆蒸汽機械を据ゑて電流を起した事だから、其電流を動力に用ふる事になると、電氣は只中間に入つて媒介をなすに止まり、從つて多くの場合に於ては却つて動力を直接に用ふる方がよいといふ有樣であつた、併し此點に於ても泰西の專門家は非常の努力で遂に一方法を案出した、それは一度動力から得た電流をば、數十の線を以て大なる距離に送るので、送るには山の地盤の高低に關係なく、河川の上を渡すにも自在である、都合の惡い場所は地中にも海中にも通ずる、就中其最も便利とする點は地勢上の關係から動力を其場で直に用ふる事の不經濟なる處、若くは不便利なる處、若くは不可能なる處でも、電流の媒介でそれを遠隔の距離て便利の宜い處に送ることが出來るのである。

蒸汽機械を用ふる時でも電流を使用して便利の點は多くある、即ち電燈の如き、家毎に電流を起すことは不便でもあり又不經濟でもあるが、一個所に大なる發電所を設け、線で之を諸方に分配すれば、要する電力の多少を問はず、各處で自在に經濟的に用ふる事が出來るの類は之である、けれども此方法によれば、電氣を使用する場所の距離の餘り遠きを要せぬ處でなければならぬのであつたが、此頃では各地に存在する水力が利用せらるゝに至つたので此缺陷は大に補はれる事となつた、此水力なるものは重に山間僻地にある事とて、其場で直に利用し得る所とては極めて不足であるのだが、今は其力を電流の媒介に依つて最も人家稠密なる處、工業の中心地にも導き得るから、從來利用し得なかつた瀑布、急流、其他の水力も物の用に立ち、十分に使用せらるゝに至つた、西洋諸國でも此十數年來工業家は特に此點に注目して來た、例へば彼の亞米利加で名所と稱へるナイヤガラ瀑布の如き、瀑壺に落つる水量は半分以下になつたとはいへ其水力は何十萬馬力と稱する莫大の數で、附近は勿論遠く百哩程の距離にも傳へて、それより起る電力を點燈用並に諸般の工業に使用することが出來る、されば此ナイヤガラ瀑布も遠からず其水力利用が實現さるゝに至らんか、單に瀑布としては名所たるの位置を損する事にもならうが、其利用としては依然として世界の名所たるを失はぬであらう、其他倘ほ大なる水力を有する地を擧ぐれば、ナイルの上流に在るヴィクトリア、ニアンザ川とか又ペルー國に恰も一萬三千尺、即ち我富士山よりも高い處にチチカカといふ非常に大きな湖水がある、此等を利用するに至れば一ヶ所に於て數十萬馬力の動力を得ることが出來る、それで從來は一千馬力とか二千馬力とかいへば非常に大きな器械の樣に思はれたのも、此節に及んでは一躍して其十倍位のものでなくては世人は左程大とは認めぬ樣になつて居る、又支那の如きは工業的にはまだ開けて居らぬけれど、四川省、即ち蜀の國に上る處に非常に大きな急流があるが、若し其水力を果して十分に利用し得るに至つたならば、或は

支那全國の燈火は總て其恩惠に浴し得るやも知れぬ、以上列擧したる如きは世界中でも最も著大なる水源地のみであるが、各國諸所に散布し居るものに、或は一萬或は五萬、或は十萬の馬力を有する水利點は澤山にある、此點が歐米に於て大に工業家の着目する所となつて居るので、彼等は孜々として其開發に勉めて居る。

我國でも此事業は非常に發達して來たから遠からずして各人の用ふる燈火を初め、鐵道用の動力に至る迄、只船舶に要する動力を除くの外の動力は、凡て水力を利用するといふ氣運に向つて居ること誠に慶すべきの至り、我國の如き平原の無く、高地といへば殆んど全面積の十分の三位に上る國柄に在つては、農産物を得るの道の西洋各國其他の大陸に劣るところありとしても、若し此水力を遺憾なく使用し得る事ともならんか、此缺陷は幾分か補ひ得らるべきものである、我國の將來世界の大國に伍して立つ要素は、蓋し商工業に存すべく、從つて其方面に重きを置き勢力を集中せなければならぬのだが、近世の工業は何れとして動力に由らぬものはないから、それよりして思へば此水力なるものは國家に取つては非常な貴重品といはねばならぬ、けれども各地の工業はまだ比較的微々たるものであるから、諸所に存在する凡ての水力を十分に利用する迄の程度に達し居らぬは勿論である、又水源地一ヶ所に於ても其水力の一部丈の使用の出來ぬ事もない、が計畫としては將來其全部を利用する丈の計畫は立てて置かねばならぬ、何故かといへば小規模の水力を利用する設計が宜しきを得ぬ場合には、以後其水源地の水力を利用しやうとしても出來ぬ場合がある、之を國家の大經濟より見れば即ち非常なる國實濫費といはねばならぬ、

されば此水力を經營するものの政府たると民間の企業者たるとを問はず、凡て一國の富源を開發することであるから結構は結構に相違ないが、只一時の利益のみを見て其財源を十分利用するを怠つては實に國家に取つて由々しき悲むべきことと信ずる、成る程茲に一

人の企業者があつて或る水力を工業用に供するとすれば、附近に與ふる利益の莫大なるには相違なく、大に歡迎すべき性質のものには相違ないが、水力は決して無盡藏のものではない、假令水量が有り餘つたとしても既成の工事を擴張することは非常に困難なる場合が多いものだから、當事者は創業の當時より心して其設計を適當にすべく、これが一面國民に對して負ふべき非常に大なる責任ではあるまいか。

此等を考へると今期の議會で水力調査の事業を創立せしめたのは最も時宜に適したもの、歐羅巴各國では既に十數年來此事業に着手して大に功績を示して居るのだから、それより見れば今日に於て漸く此事業に着手し始むるのは既に大に機を失したるの憾ある程である、即ち此水力調査なるものはその國家に益を與ふる點より見るに陸地測量、地質調査のそれよりも尙ほ一層必要のものである、而かも事業としては又陸地測量及び地質調査よりも寧ろ大なる如くに見ゆる、何となれば、右の陸地測量、地質調査の如きに於ては、其一個所其當時の狀況を調査すれば宜いのであるけれども、水力調査となると左樣はいかぬ、重に各河川の流水量を測定するものであるのに、其流水量が降雨量の變るに從つて時々刻々に變る、其上に又季節によつても變る、年によつても變る、從つて苟くも其水源地に於て得らるべき動力の高を定めんとすれば、數年に亘る最も精密なる觀察を必要とする、當今では企業者が此水量を知る機會がない爲に、大に自己を過り、又世をも過るの憂があり、一種の投機事業に過ぎぬ場合もある、此の如きは實に遺憾とする所だけれど、何分一私人に任せては十分に出來る譯のものでない、即ち之を國家事業として徐々に其水力の眞價を測定するの必要あることは何人と雖も首肯く處であらう。

又之に關して大に注目すべきことは、之を一個の起業とする場合には、一年中永續して一定の動力の發生することの必要である、然るに前にも述べた如く、流水量は時々刻々に變るものだから、勢ひ其最低水量に應ずる設備ほか出來ぬ、此最低の水量は處によつて

違ふが、特に日本の如き地勢と氣候に於ては、此最低と最高、若くは平均水量との差は非常に大きいものである、多くの場合に於ては平均水量の五分の一も取れぬことがある、此の如きは非常に不利益な利用法で、殆んど水力の濫費と稱しても宜しい場合が實際に多い、此等を經濟的に經營するには大なる貯水池を設けて成る可く年中の平均水量を利用し得る樣にするがよく、斯くすれば即ち多くの場合に於て動力の收得が三四倍にも達する、此貯水池を設くる事は仲々の大工事、從つて大資本を要する事は元よりだが、永久に國寶を善用するには此道の外はないてあらう。

水力に關する流域の形狀、特に植林の狀況等は大に此水力の經濟に關するもの、降雨の際には非常に增水するが、常には涸れて居るといふが如き河川でも、其流域に植林の法宜しきを得るに於ては、自ら日々の流水量の平均を見るものである、之に反して創業當時には一定の流水量を得た工事であつても、其水源地に於て伐木或は開墾などをするに於ては、所定の水力に大なる減弱を來し、永久的に其効果を全うし得ぬ場合も生ずる、此等の點は其起業者の如何ともし難い場合もあることだから、國家は或る場合に於て此等に適當なる保護を與へる必要があるも知れぬ、此の如き場合に於ては仲々非常な大事業となる樣であるが、十分に且つ永久的に水力を利用して國家の財源を富裕にせんとする上からは注意を怠ることが出來ぬてあらう、此等は何れも國家的の大事業として其調査に勉め、適宜に之に對する國家的の處置を要する事てあらうと思ふ。

歴史學と理學思想

文學博士　久米邦武

歴史學に理學の智識が必要だといへば大業に聞こえるけれども、極見易く言へば物の理を心得なくてはならぬといふ程の意味て、大した事ては元よりない、が兎角大した事てないものが疎かになりたがるものあてる、凡て學問上の事は硬く話せば六かしく聞こえ易くて困る、先年上宮太子實錄を書いた時にも其序文に、「實を掇ひ華を去り、地理、物理、法理、教理、生理、財理等凡て社會自然の準尺に正し、五たび稿を改む云々」と書いて置いたが、斯うも理の字を並べ立てては、何だか私が偉い博學らしく、そして餘程八釜し相なことを言ふらしくも聞こえるけれど、何、其様な積りてはない、平たく言へば眞に尋常茶飯の事、それ等に對する實際の知識は、人が相交りて社會を爲し、衣食住を定めて生活し行くには是非共並一通り心得なくてはならぬので、學問の教育を受けた人てそれを知らぬといつては無教育者同然てある、其様な何人も心得なくてはならぬ智識を準尺として古來の出來事の歴史を研究し批評するのは元と普通の話てある、私の言ふ處は只之に過ぎぬ。

一體學問といふ事からして硬く耳に響くもので、其儘六かしく一般には解釋されて居るが、實際は耳目の見聞を通じて所有知識を吸入する丈の事、されば強ち讀書するばかりが學問てはない、とはいへ、善き知識を選擇して早く我腦裏に吸收するには讀書が最も捷徑てあるが故に、最も好き方便としてそれが採られるのてある、がよき書籍となると兎角綾飾がある、綾飾は獨り書籍のみならず談話にも同様て、能辯とてもいはれんには矢張りその必要がある。それの多く加はる

は、見聞く人に興趣を覺えしめて嬉しく思はせるものだ、それ故に話す人も書き綴る人も遂にはそれにのみ氣を入れて、そして實の無いことにも其綾艶を以て人を感動させんと勉めるから、演說を聽にせよ、書物を讀むにせよ、我心が浮いて居る折にはそれにのみ釣り込まれ、其座では偉き事の樣に思ひもするが、能く々々後で考へて見ると全く舌鋒筆尖に言ひくるめられて居る事が多いものである、即ち前にも引いた序文に於て「地理、物理、法理」などと理字を疊み上げて見ると文字上では如何にも八釜しげに見えるが、之れも一個の修辭、所謂文の綾艶で、私の歷史上に必要とし求めた處は實は平易淺俗の事に過ぎぬのである、元來學問を面倒に見るのが誤、學問といへば必ず善き書物を讀むこと、六かしき事を强うるが大切なものと考へるのは浮薄の考なので、實は自分の平生に必要な知識と稱するものは左る込み入つたものよりも極めて見易い卑近な處に見出さるゝものである、直接簡明に直に之に目指すのが即ち私の所謂華を去り實を拾ふといふ眞意なのだ。

併し日本民族は性質甚だ詩的精神に富むものと認められる、其證據には今でも田舍の村民の中に多少文字の扱ひ樣でも心得居るほどのものになると屹度俳諧位は嗜むで居る、其樣な人を頭にして男女共に暇々に寄り合ふと、謎々、物は、秀句、或は地口などと稱する詩的の遊をして嬉しがるが常だ、これが我日本民族の性質と思ふ、斯樣な氣質は支那の荊楚吳越の人民に類似を發見する處から私は日本民族の初は彼の苗族と關係あるものと考へて居る、又南支那の閩越から馬來半島の南洋群島に掛けて、凡ての民族の性質が歌舞音曲に特種の趣味を有して居るが、それが又我日本の風俗に類似して居る、それで又昔の常世の國といつたのは西大陸の意味と解釋すれば、それは即ち南支那を指したものであらうと認めて居る、此等の民族が日本に集つて最も好い風土に安樂な生活をして、其の上で作り成したものであるから日本の歷史は又自ら文學的である。

古事記は詩的に成り立つた上代の物語といつてよい、書紀も同様なる史料を支那風の文學的に書いたもの、風土紀も大分遲く出來て最も土地の記實を主としたものであるけれども、矢張り地名などに拘り理由などを書き出したのは、一種の「物は」、集句、地口の如き詩的思想から成り立つたもの、歴史といつても一向採るに足らぬものが多い、然るに律令が定まつてから國史も漸次に文書記錄に接近し、詩的興趣が大に減じ來るに從ひ、一方に物語なるものが流行し發達し初める、奈良朝の季からと思ふが、それより始まつて平安朝となり、推移して遂に德川の初代に至る迄、一般人の歴史思想は物語から得たものである、德川氏になり學問を勸め、それを經學即ち修身の學と詩文の學との兩課として修めさせる事となつたが、其中に歴史に諸子とを加へて、經史子集といふ四類の書を讀み擴ぐることとなつたから、只さへ歴史諸子類は昔より文學的材料を採るを主としたものを、更に修身の筋にも採り入れて行くといふ學風になつたのだから、つまり、歴史を物語にして讀むといふ範圍を脱したものではない。それが明治となり、西洋から種々の專門分科の學を吸入し學界が頓に廣くなつた所から、文科にも歴史を入れ科學的に研究せんなどと當時言つては居たけれども、つまる處哲學、史學、文學の三科鼎立して文科大學を形くつたといふ迄に止まる、哲學は修身、文學は詩文、其中に史學なるものが加はつては居るが日本人の性質習慣として、歴史の研究を科學的にするなどと言ひながらも自然と文學的の物語流に落ち込み相てある、或は落ち込んで居るかも知れぬ。

一體日本は生活が安全な國である所から、筋力を勞するにせよ腦力を勞するにせよ、餘り骨の折れる事は誰も嫌ひて、興味趣味といふ方は樂なものだから皆が嬉しがる、が安樂國が何時までも安樂國では居ぬ、段々と生活が詰つて來て今は世界的の競爭場裡に陷り、所謂生存競爭なるものを互に激しくやらねばならぬ事になつて、從つて學問知識の必要が一般に迫つて居るといふ事は誰も承知の事てはあるが、今言ふ如き見

上の性質と從來氣樂て居た習慣とに誘はれて自然骨の折れる所には氣が向かず、學問界を氣樂に遊ばうといふ風に陷り易い、とはいへ最早や今日の學問界は左樣な氣樂事てはいかぬのてある。何といつても生活の資料は物質てあるからそれを利用して此激しき生存競爭に打勝つ知識を得なければならぬ、此樣な事は今更辯ずる迄も無い事なのだが、それが矢張うつかりされ易く、事實學齡を過ごしていざ競爭場裡に飛び込んて見ると初めて自覺の眼が開け、過去を空しく遊戲三昧の仕事に送り今の用には何一つ立たぬを氣付いては、空しく後悔し空しく煩悶するものも必ず少くはあるまいと思ふ。

今茲に特に理學の二字を捻出して歷史學に必要なりといふ所以は、上宮太子實錄の序文に列擧した理字ある多くの學問の中、此學こそは最も長く我國には閑却されて居たものてもあり、又今日は物質的知識の必要に最も迫られて居る時代てあるから、旁た之を取り出して茲に論じやうと思ふたからてある。これには我身の經歷もあること、强ち理學を知り居るなどと壯語して六かしいことを言ふ考ては毛頭ないのだ。

私が學問の素養を受けたのは舊幕政の末て、矢張り修身學。詩文。此兩科目を修めた時代てある、其修身學中には歷史を讀むことが許されて居たけれども經書は例の朱子學てあつて、朱子の著した通鑑綱目を朱子流に讀むことをのみ老先生達が許して居たのてある、けれども、已に幕政も末てある、天保以後は書生が幕府の政治に飽き、改革の氣運が益々盛になつて來た事とて、左るまだるき迂濶な事を嫌ふ、所謂一種のレブリユーションが少しく才力あり氣力あるものには自然に考へらるゝといふ氣風になつた所から、老先生の說法に抵抗するといふ風が追々盛になつた、弘化嘉永の頃に私の生れた佐賀藩には副島蒼海伯の從弟に木原弘三郞といふ人が居つた、伯よりは少し先輩の秀才子て、此人が明の袁了凡の著はした夫の通鑑綱目を節略した綱鑑といふものを讀んて感發する所があつた、綱鑑といふ書物にはそれを讀む綱領が書いてある、其文は今

一々能く記憶もして居らぬけれど、何でも歴史は一代の總體を見、一世の總體を見そして一事の機括を見、一世の機括を見るといふ樣な意味が書いてあつた、それから考へ付いて歴史を讀むには地理を心得ねばならぬとし、水戸の赤水といつて日本の輿地圖を作つた人の著に支那歴代沿革圖といふものがあつたが、それを取り出して說明する、その圖は極御粗末なものだけれど、それによつて略ぼ某地より其地に至る何里、或は何處は山で何處は河といふ樣な事を知つて、それによつて戰略を說き或は要害を見るといふ樣な活潑なことを始めた、その學風が青年書生間に段々に行はれ、英雄豪傑の時の治亂興亡に成敗した跡を論究して遂には面々天下をも取り得る樣に、一時は思つたものも少くなかつた、私の成長したのは丁度其頃なので、木原氏は嘉永の頃に已に死んだのだから知りはせぬが矢張り其風に打たれたのが私の歴史を讀む端緒をなしたのである。

其頃は私の父は大阪に居たので留守であつたが、私の十五の時に戻つて來た、將來酒飲みて、私の讀書するのを極嫌ひ、或る日の事である、例の酒を飲んだ後て私に向つていふ、机に向はずとも庭掃除なりとせぬか、併し又學館で書物を讀んで居る學者の話を聞いて來て此樣な事でもいふんであらう、大丈夫當に天下を灑掃すべし、何ぞ一室に於てせん、庭前の草三尺云々と、それは止せ、一室が掃へなくて天下の掃除は出來はせぬ、昔豪家の息子に貴樣と同じ樣に本ばかり讀み本讀みの癖に又書畫骨董迄好きて金に飽かせて古めかしいものを買ひ集める、中には顏淵が裏店に住まつて簞食豆羹に命を繋いで居つた、其時に使つた簞といつて飯行李がある、それを千兩出して買つたのが第一の寶物としてあつた、その後又古い杖を捜し當て、之は孔子が七十餘國を巡つた時の杖だといふ事で二千兩て買ひ込み、追つて此の如くてあるから段々家計は左廻りとなり已むなく書畫骨董を賣つて生活するといふ境遇になり、遂にそれをも賣り盡すといふ赤貧に陷つたが、其顏淵の飯行李と孔子の杖とだけは命に掛けても

上の性質と從來氣樂で居た習慣とに誘はれて自然骨の折れる所には氣が向かず、學問界を氣樂に遊ばうといふ風に陷り易い、とはいへ最早や今日の學問界は左樣な氣樂事ではいかぬのである。何といつても生活の資料は物質であるからそれを利用して此激しき生存競爭に打勝つ知識を得なければならぬ、此樣な事は今更辯ずる迄もない事なのだが、それが矢張うつかりされ易く、事實學齡を過ごしていざ競爭場裡に飛び込んで見ると初めて自覺の眼が開け、過去を空しく遊戲三昧の仕事に送り今の用には何一つ立たぬを氣付いては、空しく後悔し空しく煩悶するものも必ず少くはあるまいと思ふ。

今茲に特に理學の二字を捻出して歷史學に必要なりといふ所以は、上宮太子實錄の序文に列擧した理字ある多くの學問の中、此學こそは最も長く我國には閑却されて居たものでもあり、又今日は物質的知識の必要に最も迫られて居る時代であるから、旁た之を取り出して茲に論じやうと思ふたからである。これには我身の經歷もあること、强ち理學を知り居るなどと壯語して六かしいことを言ふ考では毛頭ないのだ。

私が學問の素養を受けたのは舊幕政の末で、矢張り修身學。詩文。此兩科目を修めた時代である、其修身學中には歷史を讀むことが許されて居たけれども經書は例の朱子學であつて、朱子の著した通鑑綱目を朱子流に讀むことをのみ老先生達が許して居たのである、けれども、已に幕政も末である、天保以後は書生が幕府の政治に飽き、改革の氣運が益々盛になつて來た事とて、左るまだるき迂濶な事を嫌ふ、所謂一種のレブリユーションが少しく才力あり氣力あるものには自然に考へらるゝといふ氣風になつた所から、老先生の說法に抵抗するといふ風が追々盛になつた、弘化嘉永の頃に私の生れた佐賀藩には副島蒼海伯の從弟に木原弘三郞といふ人が居つた、伯よりは少し先輩の秀才子で、此人が明の袁了凡の著はした夫の通鑑綱目を節略した綱鑑といふものを讀んで感發する所があつた、綱鑑といふ書物にはそれを讀む綱領が書いてある、其文は今

一々能く記憶もして居らぬけれど、何でも歴史は一代の總體を見、一世の總體を見そして一事の機括を見、一世の機括を見るといふ樣な意味が書いてあつた、それから考へ付いて歴史を讀むには地理を心得ねばならぬとし、水戸の赤水といつて日本の輿地圖を作つた人の著に支那歴代沿革圖といふものがあつたが、それを取り出して說明する、その圖は極御粗末なものだけれど、それによつて略ぼ某地より其地に至る何里、或は何處は山で何處は河といふ樣な事を知つて、それによつて戰略を說き或は要害を見るといふ樣な活潑なことを始めた、その學風が青年書生間に段々に行はれ、英雄豪傑の時の治亂興亡に成敗した跡を論究して遂には面々天下をも取り得る樣に、一時は思つたものも少くなかつた、私の成長したのは丁度其頃なので、木原氏は嘉永の頃に已に死んだのだから知りはせぬが矢張り其風に打たれたのが私の歴史を讀む端緒をなしたのである。

其頃は私の父は大阪に居たので留守であつたが、私の十五の時に戻つて來た、將來酒飮みて、私の讀書するのを極嫌ひ、或る日の事である、例の酒を飮んだ後て私に向つていふ、机に向はずとも庭掃除なりとせぬか、併し又學館で書物を讀んで居る學者の話を聞いて來て此樣な事でもいふんであらう、大丈夫當に天下を灑掃すべし、何ぞ一室に於てせん、庭前の草三尺云々と、それは止せ、一室が掃へなくて天下の掃除は出來はせぬ、昔豪家の息子に貴樣と同じ樣に本ばかり讀み本讀みの癖に又書畫骨董迄好きで金に飽かせて古めかしいものを買ひ集める、中には顏淵が裏店に住まつて簞食豆羹に命を繋いで居つた、其時に使つた簞といつて飯行李がある、それを千兩出して買つたのが第一の寶物としてあつた、その後又古い杖を搜し當て、之は孔子が七十餘國を巡つた時の杖だといふ事で二千兩で買ひ込み、追つて此の如くであるから段々家計は左廻りとなり已むなく書畫骨董を賣つて生活するといふ境遇になり、遂にそれをも賣り盡すといふ赤貧に陷つたが、其顏淵の飯行李と孔子の杖とだけは命に掛けても

保存せなければならといつて殘して置いた、けれども最早や生活が出來ぬといふ段になつたから、其杖を杖いて飯行李を持つて、そして大學の治國平國平天下の章を暗誦しつゝ人の門前に立ち、食を乞ひ廻つて終に行き倒れになつたといふものがある、貴樣も其通り讀書すれば段々馬鹿になり、矢張り治國平天下の議論ばかりして乞食となり果つるであらう、學者で温い飯を食へるものはない、學問は止せと、それには私も逡巡(ひる)まず、何、讀み樣によると減らず口を叩いて濟ました、處が又其後算盤を知つて居るかと尋ねられたけれども私は知つて居なかつた、するとそれ見ろ、それが馬鹿になつて居るのだ、算盤を知らずに給祿を一年間如何扱つて飯とし金として生活を續けていくかと大に嘲られ、之には全く閉口した、そこで算法大全といふ書物を借りて來て加減乘除から後には平立法、測量算邊迄一時は躍起となつて記憶する樣になつたのでこれは褒められた、それからして學校でも歷史を讀むに傳記などにも算を採り、史記では八書、漢書では十志、其中にも平準書、食貨志或は刑法志などいふものを研究したが、同じ學友中にも此數理を考に入れて讀書することに贊成のものもあり、それから歷史中で最も實益の有り相なものは何かなどと頻に言つて見たけれども、左樣言つて見るも餘り支那歷史中にも佳いと言ふ程のものは見當らなかつた。丁度其頃西洋學が奬勵された爲に、醫者が蘭書から得た知識を振廻し、生理學でサンザ漢學を打毀した、即ち漢學者が其常套語として心膽とか肺肝とか力んでいふのを嘲り、それは只臟腑である、心臟は血を作るもの、膽臟は蒼い汁を包み居る嚢、肺臟は呼吸器である、肝臟はつちきもといふもので消化機に作用するだけだ、又胸臆などといふが一體人の心は何處に在ると思ふか、頭の中の腦なるものの内に存在する、腹の中に在る譯でない、斯樣なことからして早や知り居らぬとけなされる、それで氣付いて漢字の詮議に掛り、腦といふ字を調べて見ると有る、頭蓋骨と譯して成る程頭にある、それから神經といふものが全身に廻つて居るものだといふことを初めて知

るに至つた、今の人は最早や誰でも心膽若くは肺肝といふ字面を文學的にこそ使ひはすれ、事實として心的作用のそれより發生するものとは思はぬ、心的作用の根本の頭に在る位の事は夙に承知して居るが、僅か五十年前の昔は此樣なものであつた、それから愈よ益々西洋風が流行し一通り原文が讀めるに及び、格物窮理と稱して普通の物理書を讀むことになる、蘭學の氣運が大分高等に進み、其結果大に理學の說を以て漢學を縱横に論破するといふ景況になつて來た、之には漢學者も甚だ閉口したもの、今其頃の事を尙ほ少しばかり話して見やう。

先づ草木にも雌雄がある、互に孳尾し合ひて子を產むといふ說を聽いて驚いたが、成る程調べて見ると花には雄蕊雌蕊といふものがあり、又凡ての植物中に雌雄の分れたものもある、之には先づ一本參つた、それから又所有る物といふ物は氣體、流體、固形體といふ三類に分れ居ると聽かされた、けれども氣といふは只身體に感ずる許りて質分はないものとのみ思つて居たのを打笑はれ、それは眼肉に見えぬ丈である、氷は固形體であるが、それを鍋に容れて熱を加へれば流體となると說かれたから、それは無論だ、元が水の固まつて出來たものだから火を掛ければ元へ戻るんだといふ、すると其水に尙ほ熱を加へて已まぬと蒸汽となつて飛消し盡す、此飛消するものは如何樣になるかといふに、末は目に見えぬ氣になるのである、凡て此氣なるものは空であつて目に見えぬものだから、空氣と名づけては居れど其實は體質の存するもの、其體質の小なるもの分子と名けると說かれた、其處で香にも分子ありやと問へば、ある、糞の臭も花の香も其分子が鼻に付くから臭となつて嗅神經に感ずるのである、と斯樣に段々說明されて來ると、初めて感服して物には如上の三體のあることを承知する、それて理學なるものが全く難有なつた、段々と話を聞けば益驚く、此空氣中の存在する目に見えぬ分子が固形體を形くつて居るといふ樣な事をも聽く、又人にも鳥獸にも凡てに亘つて共通の性が七つ八つある、先づ第一には容性て、

質には皆之がある、即ち容積、かさなるものがある、空氣でも一つの分子は色々の形になつて居る、次には碍性で、其容積の有る位置には他の容積の一所に存在することを拒む、これがそれだと說かれたから、でも空氣などは何も他の物體の同位置の占領を拒まぬではないかといへば、それが未だ沒分曉なのである、碍性なるものは近く譬へれば芝居のマスど見て宜い、マスは四周が圍つてあるが即ち碍性を形どつた樣なもので、圍の中には自分の仲間なら一人でも五人でも入つて居るが、他のものなら入ることを拒む、それが即ち碍性である、定まつたマスなるものが無い放槃の見世物場であれば、其所に居る凡ての人が皆面々に自己の碍性を持つて立つて居る、他のものが一所に立つたとすれば、肩を押すか足を踏むかして押し除けなくては暫くも其位置に居ることが出來ぬ、それ故群集の場には推し合ひへし合ひと稱し動搖して已まぬ、之は互に碍性を發揮するからである、空氣の場合亦全く之と等しく、一方より空氣を壓せば其處の空氣は他方に押し遣られる、すると又其方面より押し返して來る、即ち風の吹くのは宛も群集の場の押し合ひへし合ひと同じ譯で、分子が互に碍性を發し合ふ作用であるのだと言はれて見ると成る程と感服せざるを得ぬ、更に又如何程小さい空氣の粒でも其實幾つも物質が集つて出來て居るものだから、間には孔が明いて居る、それをば孔性或は隙性とも譯して居る、物によつては其性が頗る廣い、即ち綿の如きは間の隙が餘程廣い、人にして力強きは力士であるが、力士も座蒲團を持つて居る、如何に力量非凡の力士であつても座蒲團の碍性一つを取り除けることは出來ぬ、それ故座蒲團の上に座るといふ事が出來るので、座蒲團は極力碍性を發して力士の膝に抵抗して居るのである、けれども何しろ一方の力が強さに過ぐるものだから座蒲團は力及ばず壓縮されて薄くなるが、之は何によるかといふに孔性がしめ付けられて孔が小くなるのである、此樣な事は誰でも皆段見て居る事だが、然らずして極めて孔の少いと思はれる黃金でも中には非常の孔のあるものである、それ

を搾め付けるのを稱して特に鍛へるといふ語を用ひる、即ち頻に叩けば孔が狹くなるのである、道理が已に斯樣なものだから、必ずしも強ひて幾回も叩かずとも宜い、非常の力を加へさへすれば一度で容易に鍛はるゝのである、それ故今西洋では一搾めに搾め付けて鍛へる事をする、即ちこれは孔性を搾め付ける譯である、空氣の粒とても亦之と同樣なものだ蒸汽が僅か許りの水から立つて非常に擴がるといふのも是れも只孔性の擴張したに過ぎぬものだと說かれ、是れも如何にも尤もなよと思つた、それから又物には張縮といふ事がある、之を稱して張性縮性といふ、大抵物質は熱を加へれば張性を發して膨れ、熱が減ずれば縮性を發して膨れしものが元の形に縮まる、此理を知らなければ物を用ふるに當り時々大失敗をするものだ、暑中に瓶を造れば張性を發して往々に龜裂れる、又其熱が減つて極寒に逢へば縮まつて時に割れる、凡て物質には張性縮性といふものが在るものだから、酒を壜に詰むるには一旦火を與れて溫めてからにすると、上の栓が固くさへあれば、間に隙が生じ中に無空氣の處が出來る。斯くすれば安全であるが此譯を知らずに自分では物を能く圍つて置いた積りで大切のものと一つに入れて置いても、それが實は寒中に詰めたものであると、暑中に及んで膨脹し、器物を打破つて溢れ出して大變な事になるといふ樣な事がある、これは皆張性の何たるを知らぬに座するものであると、斯樣に說明されるしこれも亦感服せねばならぬ、次には更に彈性といふものがある、之は物によつて餘程强弱があるけれども何にても備はつては居る、力を加へて扇を敷居の溝から柱に彈き當つると幾分か彈き返る、それは柱の方も當てられた部分が凹み、扇の方も當つた部分が凹み、双方共に一時に彈性を發し合つて本に復らんとする、そして何等の支へを持たぬ扇の方が負けて彈き返されるのである、即ちその返るは彈性の作用である、若しその的が木の柱で無くて綿ででも有つたとするならば、それは彈力を發せぬから、同一の力で彈いても其の場に止まるものである、此の理を利用して蒲團が甚

質には皆之がある、即ち容積、かさなるものがある、空氣でも一つの分子は色々の形になつて居る、次には碍性で、其容積の有る位置には他の容積の一所に存在することを拒む、これがそれだと説かれたから、でも空氣などは何も他の物體の同位置の占領を拒まぬではないかといへば、それが未だ沒分曉なのである、碍性なるものは近く譬へれば芝居のマスど見て宜い、マスは四周が圍つてあるが即ち碍性を形どつた樣なもので、圍の中には自分の仲間なら一人でも五人でも入つて居るが、他のものなら入ることを拒む、それが即ち碍性である、定まつたマスなるものが無い放樂の見世物場であれば、其所に居る凡ての人が皆面々に自己の碍性を持つて立つて居る、他のものが一所に立つたとすれば、肩を押すか足を踏むかして押し除けなくては暫くも其位置に居ることが出來ぬ、それ故群集の場には推し合ひへし合ひと稱し動搖して已まぬ、之は互に碍性を發揮するからである、空氣の場合亦全く之と等しく、一方より空氣を實せば其處の空氣は他方に押し遣られる、すると又其方面より押し返して來る、即ち風の吹くのは宛も群集の場の押し合ひへし合ひと同じ譯で、分子が互に碍性を發し合ふ作用であるのだと言はれて見ると成る程と感服せざるを得ぬ、更に又如何程小さい空氣の粒でも其實幾つも物質が集つて出來て居るものだから、間には孔が明いて居る、それをば孔性或は隙性とも譯して居る、物によつては其性が頗る廣い、即ち綿の如きは間の隙が餘程廣い、人にして力強きは力士であるが、力士も座蒲團を持つて居る、如何に力量非凡の力士であつても座蒲團の碍性一つを取り除けることは出來ぬ、それ故座蒲團の上に座るといふ事が出來るので、座蒲團は極力碍性を發して力士の膝に抵抗して居るのである、けれども何しろ一方の力が強きに過ぐるものだから座蒲團は力及ばず壓縮されて薄くなるが、之は何によるかといふに孔性がしめ付けられて孔が小くなるのである、此樣な事は誰でも普段見て居る事だが、然らずして極めて孔の少いと思はれる黄金でも中には非常の孔のあるものである、それ

を搾め付けるのを稱して特に鍛へるといふ語を用ひる、即ち頻に叩けば孔が狹くなるのである、道理が已に斯樣なものだから、必ずしも强ひて幾回も叩かずとも宜い、非常の力を加へさへすれば一度で容易に鍛はるゝのである、それ故今西洋では一搾めに搾め付けて鍛へる事をする、即ちこれは孔性を搾め付ける譯である、空氣の粒とても亦之と同樣なものだ蒸汽が僅か許りの水から立つて非常に擴がるといふのも是れも只孔性の擴張したに過ぎぬものだと說かれ、是れも如何にも尤もなよと思つた、それから又物には張縮といふ事がある、之を稱して張性縮性といふ、大抵物質は熱を加へれば張性を發して膨れ、熱が減ずれば縮性を發して膨れしものが元の形に縮まる、此理を知らなければ物を用ふるに當り時々大失敗をするものだ、暑中に瓶を造れば張性を發して往々に龜裂れる、又其熱が減つて極寒に逢へば縮まつて時に割れる、凡て物質には張性縮性といふものが在るものだから、酒を壜に詰むるには一旦火を與れて温めてからにすると、上の栓が固くさへあれば、間に隙が生じ中に無空氣の處が出來る。斯くすれば安全であるが此譯を知らずに自分では物を能く圍つて置いた積りで大切のものと一つに入れて置いても、それが實は寒中に詰めたものであると、暑中に及んで膨脹し、器物を打破つて溢れ出して大變な事になるといふ樣な事がある、これは皆張性の何たるを知らぬに座するものであると、斯樣に說明されるしこれも亦感服せねばならぬ、次には更に彈性といふものがある、之は物によつて餘程强弱があるけれども何にても備はつては居る、力を加へて扇を敷居の溝から柱に彈き當つると幾分か彈き返る、それは柱の方も當てられた部分が凹み、扇の方も當つた部分が凹み、双方共に一時に彈性を發し合つて本に復らんとする、そして何等の支へを持たぬ扇の方が負けて彈き返されるのである、即ちその返るは彈性の作用である、若しその的が木の柱で無くて綿ででも有つたとするならば、それは彈力を發せぬから、同一の力で彈いても其の場に止まるものである、此の理を利用して術劇が起

挿みかて鐵砲の丸を受留める道具をも作り得るのだ、鉛といふものは彈力が極めて乏しい、それ故上から墮しても自分が凹んで彈性を發せぬから彈き返る事は極めて少ない、象牙などはその彈性が大なるものだから三味線の撥にも使はれるといふ譯である、此等物體の普通性中の最後には惰勢なるものがある、今ては惰力といつて誰も承知の事だが、此の「惰」なる文字はうつかりして居るの義から與へられたもの、自分が車に乘り居るとすると、車の走り居る場合には身體の全部が又同じく走つて居るが、自分にはうつかり知らずに居る、それが即ち「惰」だ、て逸走し居る車から急に飛び居りると其時我身體は惰性を發して大怪我をすることがある、即ち身體は車を離れても猶ほ車上に在る時の如く馳走するものを、今はそれを支へるものなき爲、其車の走る方向に倒れて、兎もすれば即死する又之と反對に靜まり居る時に俄に我乘り居る車に動力が加へられれば、靜止の狀體に居たる我身體が惰性を發して車の走るとは逆な方向に同じく倒れる、又德利の口の上に歌牌を載せて、歌牌の上には更に錢を載せ、强い力で歌牌を彈くと錢は德利の中に墜つる、錢は上に載り居るものだから歌牌と共に行くべき筈だと思はれるが、餘りに突然て迂濶然して居る間に、歌牌だけが動力を得て駈け拔けて仕舞ふから餘儀なくカラリ德利の中に落ち込むのてある、斯樣なことを知らなくて只空論した所が、迚も天地間の物質を巧に用ひて過なき樣に此世は渡れぬものてある。それ故最早や漢學などは何の用にも立たぬ、早く止すが宜いとて盛に攻擊を受けたものだ、此處て初めて理學的思想の大切な事をしみじみと感じたが、といつて當時はまだ飜譯書も無し、又は醫學家なども幾らか聞き嚙つた位のもの、本人にもまだ珍しいから言つて騷ぐ位の事てあつたから仕方もなかつたが、其後一年二年と經る儘に其方面に智識の吸收を勉めるに從ひ、實に西洋の學問は實用的てあつて從來の文學的の慰みものとは徑庭の差あり、實際に必要のものてある、歷史を讀むにも此樣いふ方面に着眼し攻究し行くんて無くては、誠に父から

言はれた通り、後には顔淵の飯行李を持ち孔子の杖を杖き廻つて乞食をする樣な事になる、是非此理學の智惠が求めたいとて色々に苦心したけれども得た處は只の初心のことに止まつた、今茲に言つた物體の普通性などいふ如きものは文學ていふならば片假名のアイウエオ位の處てある、理學にはまた色々の普通の利用もある、即ち水學、重學(一に力學)、氣學、光學、熱學、の如きもので、更に深き處に進めば、磁氣學電氣學等もある、之を詳に知るには數學の力を要する、私の此等を知つたのは明治の初てあるから今頃は皆が利巧になつたてあろうと思の外理學が一般の間には發達して居らぬ、私の言つたアイウエオ、カキクケコ位の處さへ或は知らぬ人が多かろうかを恐れる位、それ故一寸此處に注意を促して置きたいと思ふ。

理學思想といつたからとて私の要求する所は實に大したものてはなく、大凡そ前述の程度位の處て、それ文ても知つて居れば、先づ文學て言へば平假名位を心得居るものが振假名て辿つて幾らかの言葉幾らかの漢文字を覺え、それて當用を書くといふ位の働きは出來る、誠にいつて見れば初心の話てあるが、必要なのはその理學的思想て、自己の腦中にそれを收めその態度て研究し行かなくては、凡ての學問に向つても今言つた惰性と同樣迂濶然して一般人の誰ても知り居る樣な事を氣附つかずに通すことが有勝のものてある、歴史を讀んて古來の人物の事蹟を考へて上にも、凡てが此物質に作用する天然の規則て運動し居る事だから、或る部分は必ず此理學思想て判斷せなければならぬといふ場合が多いものてある、その譬例を少しく玆に歴史の上に求めて語つて見やう。

先づ水學に就いてである、此水なるものは誰にも必要品て一日も無くてはならぬものだが、其水學中の極初歩の處に教えられてゐる中に潮の干滿といふ事がある、それは太陽と月との引力作用から生ずるもので、特に理學を修めぬものても海上生活し居るものなら誰も知つて居ること、即ち昔の太陰暦ていへば最も明白て朔、望が大潮、十日、二十日はいたからまゝ潮が引いて[illegible]

くなる義）と言つたものである、それは太陽と月との關係からなので月の出入はおきなからと私の國の船乘はいつて居る、おきなからとは沖に半分潮が滿つるといふ義である、㊂然るに太平記には新田義貞が稻村が岬の攻め口の條に、夜半の月影皎々と冴え居る時、海上を打眺めて我帶せる寶刀を脫し、海神に祈念を凝して海に投じた所が、かねては僅か計り潮の引く稻村が岬が見る〳〵二十丁程も減潮した、それで海岸より攻め込んだとあるのは世に隱れも無い話となつて居る、第一に其日を調べれば二十日の事である、即ちいたからまの日で亥の月といづて月の出が十時、十時は沖の半ら滿の時である、すれば弓張月がまだ高くは上つて居らぬ、其上最早やからまの潮が普段より十四倍も引くといふのは頗る恐ろしい現象で、必ず海面に電氣か何かの変[illegible]があり、㊃それが潮を引き付けての業であろうから乾度後には海嘯となつて押し寄せるに相違ない、其恐ろしい現象の海岸を軍勢を渡すといふことは之より馬鹿の骨頂は無い、併し之が即ち小說物語的文章といふもので何も辨ずに只作つたといふ證據である、少し理學思想のあるものには受け取れる話でない、でも梅松論を見れば何か其日には潮の關係があつた樣だから、之を上州人が見て神業と驚いた程の事はあろう。

㊄今一つの話は足利尊氏の謀叛の折、新田義貞が箱根口に破れて遁げる際に、之も太平記によると、天龍川の橋が中程十餘間ばかり板が切り落されて居たのを、安田入道と手を繫いてそれを飛び越して遁げたとある、人の飛び得る距離は先づ極長くて一丈位のもの、若し惰力を用いんとならば下り坂があるを利とする急坂を走り下れば足は下り切つても止まらぬもの、是れは惰力によるものだが、此惰力を利用したる上に更に自己の飛躍の力を亢奮させれば、人によりては普通一丈位が限度の所でも一丈五六尺位は越せるかも知れぬ、が人間の力としては十五六尺が其極度で、それ以上は如何樣な事を仕樣が飛べるものではない、特に二人手を繋ぐなどいふは危險の至りて步に着いたものが他の一人を引張る積りであろうか知らねど飛ぶ上には

互に害になる、それが又橋桁の上といふに於ては到底不可能の事である、是れ亦物語風の僞である事を示すものだ、梅松論で見ると左様ではなく、實は船橋を掛けさせて渡り、其處に番人を置いて尊氏が追つて來たなら拒まずに渡すやうにした、之れが武士の作法である、云々とある、此方が眞實であろう、

理學には數理の必要なることを證すべく、今一つ義貞の事歴に付いて太平記の話をしやう、尊氏が東寺に本陣を据ゑた時に義貞が其處を攻め、外より弓を彎いて尊氏の居間に射込んだ處、尊氏には中らずに柱にたつたとある、力學の道理で考へると、左様の事の叶ふものではない、矢の達する距離は大凡そ定まつて居る、そして其矢に効力あらしむるが爲には常に直線に射るものである、臼砲などとは違ふ、臼砲などであるならば距離を測つて斜に角度を定め、空に向つて放つ、すれば先に行つて又斜になり、落とし掛けに目的物を射る、それには必ず爆發彈か何ぞの仕込まれるものて、仕組まれる者によつてのみ効を奏せしむるものである、又矢の重さは一定して居る、それに鏃なるものは名刀を研ぐが様に刃を立てるものでもないけれど、それは先づ立てたとしても宜しい、が東寺には必ず外に塀のあるもの、尊氏の座所に直線には射込めぬ筈、それ故斯くても尊氏を射中てんとするならば臼砲に於ける如く斜に空に向つて放ち、それが又斜に落ち掛かる時に尊氏に中る様にと工夫して放さねばならぬ、力學には等加力等減力なるものがあつて割合が定まつて居る斜に射出した矢が空に向つて行くに從ひ、初は其進行の急速なものが次第に力が減じてのろくなる、遂には勢盡きて斜に下り掛ける、此勢の盡くる迄が即ち等減力である、此度は地球の引力によつて落下するが、前とは反對に初はのろくて後には急になる、其矢の重量に從ひ地面に近づくまゝに速力が遞加する、之が即ち等加力である、それ故射出した時矢に與へられた力は空中で一旦盡きて仕舞ひ、それからは只地球の引力で降下して來る丈のことだから、如何に鏃が研ぎ澄ましてあつたとしても、漸く肉體に觸れて五分か

づ二三分位も傷ける丈の力ほか持たぬものだ、人を射倒すなどいふ事は出來ぬ筈、若し左樣な事を本當としたならば馬鹿な事をしたといふより他なく、實際弓を射るものには誰も心得て居ることである、之を心付かず何人も無難で讀み通して居るのは物語を讀み習つた惰力の然らしむる處なのだ、

倚ほ此力學には等加力等減力の他に矢張り初步の處に敎えてある槓桿力なるものがある、秤には大の緒、中の緒、小の緒といふがあつて一貫目迄ならば小の緒それより目方が增すならば次第に中の緒、大の緒にかかるといふ事になつて居る、緒の處は之を倚點といつてそれより先端が長ければ長い程數十倍の重量をも掛けることが出來る、此理を利用して凡ての器械が作られて居る、即ち剪刀の釘をしめる處が倚點兩側の指を入れる處は槓桿で先端が短ければ短い程能く切れるのである、それ故其剪刀の目的から考へて、力を多く要せぬものに使ふならば刄を長くする、又同じ剪刀を使ふにしても僅の力で足りるものであれば刄先を用ひ、そうでなければ元を用ふるのである。處が太平記を讀むと楠正成が千早城に籠つた時に、長柄の柄杓に熱湯を汲んで寄手に沃けたといふ條がある、試にそれが出來るか出來ぬか、一斗入りの桶を作つて二間程の長柄を着け、一個の柄杓を作つて見よ、迚も一人や二人の力で水を汲んで沃け得られるものでない、好し假りに數人の力で沃けたとしても水は孔性が强くつて擴がつて下に落つるから、下に行き着く迄には善い加減の微溫湯になるであろう、喞筒でても沃けたならいさ知らず長柄の柄杓では駄目な話だ、此樣なことを平氣で書き綴るのは其の理學思想の如何に缺けて居るかが知れる、理學には必ず數理が要る、數は確實なもの故何事にも數を當て箝むるを要する、歷史を調べる上に於ては特に年月日を唯一の尺度として掛らねばならぬ、然るに書記の記す期限なるものは文學的で尺度を重んぜぬものだから、古代の歷史には數が隱れて譯が分らなくなつて居る、之も何れ何とか研究して數を以て年月日を割り出さねばならない。

又生理學から言へば、神功皇后の新羅征伐の事に就いてである、仲哀天皇御崩去の時には已に御懐姙の事が知れて居たのだから五月以上になつて居る、それから筑後より肥前の熊襲を征して、更に對岸の新羅に御越えになつた、新羅迄は大した距離でもないから二三日の御旅路であつたろうが、兎に角新羅にも永くは滯陣にはならなかつたことは數の上から自然に明かである、又肥前の松浦川で鮎をお釣になり、それが珍しいとて御思召に叶ひ、珍らの國と御命名になつたなどとあるが、矢張り物語り風の思想、言はば地口の類に過ぎぬ、之は三國史の魏史にも已に明に末羅と記してあつて「めづら」とはない、又月を調ぶれば四月であるから鮎も極めて小さく綠に上る程のものでない、それに鮎といふ魚は何處にも産するもの、珍しいとておもて騒ぎになる程がものではない、其上新羅御滯陣も短いのだから旁々取り集めて考へ見るに嘘である。

又眉輪王が安康天皇を弑し奉つた時は八歳だとある、僅か八歳の子供が如何樣な刄物を持つたにせよ人を殺すことは不可能である、是れ將た物語り風の作り話、其の時丈に面白い樣に書いたもので數が疎かに扱はれて居る、或は八の上に十といふ字が脱けたものだろうといふ説もあるけれど其穿議立ての仕方も無用唯人を殺し得る丈の腕力の具はつた年頃と想定すれば足りる、

又鵜草葺不合尊の御壽命を五百何十歳と書いてある、そして其皇子の神武天皇の御壽命はと見ると百何歳かになつて居る、昔の事は勝手に如何樣に取り擴げて書いてあつても構はぬとしても、數理と生理とを叩き合はせて見ると馬鹿々々しくなる、神武天皇の御長壽、これは先づ事實だとして見ても、それから推定すると如何しても御父尊の三百何歳かの時の御子でなければならぬ、其樣な事が有ろう筈がない、若しそれが世間並にせめて五六十歳の御時の御子とすれば、鵜草葺不合尊は其後尚ほ四百何十年も御存生の事になる迚も有り得やう話でない、此の如く古い時代の物語には其古ければ古い程理學思想がないから數字などは兎角亂

豚になつて居る。

かばかりの事の看破は只理學的思想といふ様なものさへあれば十分なのだけれど、全く左様な心的態度が缺けて居り、從來文學的に興味趣味のみを追ひ事實に當らず、物質に問はず、遊樂的にのみ書物を見て來た癖から、誰にも分ることが分らず、分つて論ずるものに對して却つて無用の疑を挿み自分で好んで惑ふのである、今迄我國には歴史が與へられてなく、實は物語が與へられたのであるから、從つて之を讀むにも遊樂的になり、又時勢が遊樂的でも許したのだが最早や今日の様に世が詰つて來、生活が困難となるに於ては舊慣を取除き有益實用の智識の吸收のみを勉めねばならぬ。それには書物ばかりではいかぬ、書物には綾艶が多い、其綾艶に釣られてばかり讀んでゐては學問が客になり、空疎になり物の用に立たぬのみかは、却つて實際に處するに害となるから、今より十分に警戒し、自分の頭腦の苦にならぬ様に吸收せなくてはいけぬ。これが歴史に理學思想が必要なりとて私が世人の注意を喚び起した所以である、私は理學を修めたなどと言へはせぬ、只前に言つた通りの僅かばかりの經驗に止まるものではあれど、しかもそれ丈でも歴史の研究上に大益を爲して居る、否却つて科學的に六かしい事を知ろうとすると知識が深遠になる丈日常の經驗とは距離が甚しくなり、其の割に實益は得難くなる、日常生活に處する實際的の利益は却つて淺薄な處に得られるから、決して淺薄なりとて侮らぬが肝要、興味趣味は自然に此の中に認められる、然し興味趣味を先にすると又これ迄架說して來た様な弊に陥るから注意せねばならぬ。

尚ほ最後に一言しやう、日本に歴史學を喚び起した近き話は斯うである、元と西洋人には日本の歴史なるものが空想ばかりで分らぬのであつたが、日本に來て見ると誠に目新しい、髮は盡く黑く眼は盡く黑く、此等が細長き島國に一團をなして居住し、盡く又同一の言語を操る、如何にも珍しく面白い感じがする、て其國柄を知らうとすると、古事記、書紀の類では一向譯が

分らぬ、處が北海道にアイヌ種族あることを發見した日本人とは又餘程變つて居るから、多分之が日本の原住民であつたらうと鑒定を着けて研究を始めた、夫のチヤンバレーン氏の如きは其尤なるものである、それから導かれて人類學の方面より考古的に、日本の古物を研究して日本の古を知らうと勉め、更に博言學をも開いてアイヌ研究を始めることとなつた、それ等が動機で遂に明治二十二年我帝國大學に國史科を置き、歷史を科學的に研究するといふ方針になつたが實は西洋より促された附燒刄に過ぎぬ、人類學は理學の一部ではあるが、發達せぬそれに又言靈學なるもの即ち國學があつて、古事記、風土記、書記て地名より轉訛つた語を頻に興味趣味て研究することをする、此言靈學と博言學とが馴れ合ひ、其考證て歷史を知らうといふ傾となつて居るから、歷史學は人類學から博言學と移り變つた、其中には本當の研究もあるけれども、根が長い間の惡習慣に養はれて居る事だから矢張り單純なる言靈學と大した相違を見ぬ、此氣運の促された初は理學よりてあるが、實際になると矢張り理學思想が減じて來て文學の歩く道と同じ道筋を取る樣になつて居る、そして只頭腦を苦めて研究し居る樣に見える、畢竟餘り高尙を求むるの結果遂には實際を離れて珍しき事のみを考へ出さうとし、自己の脚許の經驗を離れ、實際の必要を離れて浮誇なる虛榮に苦んで居るが、元と日本人の安樂に生活して來た爲の惡習慣の余殃と思はれる、之を悟つて十分注意を加へなくては、無用の學問て却つて自分から馬鹿になることと思ふ。

文藝保護問題

三月十三日、本社主催となつて神田錦輝館に於て文藝保護問題演說會を開けり。聽衆一千二百餘名、非常の盛會なりしが、左に掲ぐるは當日出演者諸氏の演說の速記也。文藝に對して動もすれば不當なる壓迫を加へんとする當局者及び文藝を輕視するに過ぐる或る一部の人士が、之によつて些かたりとも其蒙を啓くことあらば、本社の望は足れり。若し文章及び字句に誤あらば、其責は一に速記者及び編者にあることを斷り置く。（編者しるす）

文藝と道德との衝突

金子筑水

今日は文藝の取締の事に就て演說をしろと云ふことて强談を受けたのてございます、之に就ては久しい間始終いろ〳〵なことを言つて居るが、何時迄も盡きない問題てあらうと思ふ。吾々もそれに就ては始終言ひ古して居るし、他の人々も隨分之に就て言つて居るからして、實は殊更諸君にお話する材料がないのてあります。何か珍らしいことても言ひたいと考へて見たけれども、チヨツト好い考も出ないので實は困つて居つた譯てあります。けれども何か話さなければならないと云ふ譯て、故に題は大分大きな題となつて、「文藝と道德との衝突」として置きましたけれども、事柄は極く簡單てあります。

それて私の考へて居る所に據ると是は隨分むづかしい問題て、文藝と道德とは衝突するかしないかと云ふことは議論が大分あります。極端な人は文藝は文藝てある道德は道德てあるから何も衝突することはない、文藝の方の人は自分の思つたことは何てもやつて宜からう、道德に衝突しやうがしまいがそんなことは無頓着にやらなければならぬと、斯う云ふやうに考へて居る人がある。本當の趣意に於て道德と云ふものと文藝と云ふものとは元來本領が違つて居りますからして、趣意から言ひ本領から言へば成程衝突することはないのてあります。違つたものが衝突すると云ふことは可笑しな譯て、本領違ひなものてあれば元來は衝突する筈のものてないのてあります。其事は私は確く信じて居りますけれども、其理窟を此處て述べ立てると云ふことは諸君に御迷惑てありますから、理窟は拔きにしますが、此處てそれに就て述べたいことは、元來の趣意の上に於ては若くは本領の上から言へば文藝と道德とは衝突すべきものてはないけれども、實際の上に於て事實上衝突したり、若くは衝突するらしく見える場合があるのてあります。其場合を一つ二つ此處て擧げ

て考へて見たいと思ひます。

第一に衝突する若くは衝突するらしく見える場合は斯うであります。是は最も明白で諸君でも直ぐお分りになることである、即ち假に玆に小說を書く人がある、其人は唯だ賣るを以て目的として居る、何でも宜いから直ぐに好奇心を買つて面白いことを書かう、斯う思つて居る動機既に文藝的でないのであります。さう云ふ場合の人が何か頻りに危いことを澤山書いたとする、元來お互に吾々は此身體を見ても分るのでありますが、色々な部分に依つて成立つて居る、目ばかりではない、鼻ばかりでもない、大分近頃は鼻と云ふやうなことが八釜敷やうでありますが鼻ばかりでもない、口ばかりでもない、色々な部分から成立つて居る、頭もあり足もある。さうしますと例へば一つ身體を描くにしても、人間を描いて吳れるならばそれは差支ないけれども、どうかすると文藝家だと云つても中には碌でもない文藝家があるから、或一部分だけ唯だ目ばかり書くとか鼻ばかり書く、是が人間でありますと云つて鼻ばかり書いて人間であると考へて居る者がある、さう云ふ場合にそれが果して文藝と言へるかどうか、大分忙しいですが假に文藝として見る、斯う云ふ場合に道德と云ふものとぶつかる、ぶつかると云つても宜からうと思ふ。斯う云ふ明白な場合であるならば、吾々はさう云ふ小說なりさう云ふ詩なりが發賣禁止をされることは正當なることゝ思ふ、唯だ鼻ばかり書いて其鼻が是が人間の身體であると云ふ意味がない以上、唯だ鼻ばかりであると云ふならば、それは文藝の方面から言つても禁止して貰ひたい、餘りに優等なものとは言はれない、寧ろ文藝の方から放逐して貰ひたい、吾々文藝に携はる者の方から迫つて發賣禁止を請ふても宜い位である、是が極く明白な場合で殆ど問題はないのであります。

所が困つた場合がある、斯う云ふ場合はどうするか、今度は玆に假に小說を讀む人があるとする、其人は充分に文藝を味ふ能力を持つて居らないとする、是は隨分あることゝ思ふです。例へば小學校の生徒に戀物語はどうですかナ、或は今度は鼻ばかり書いてあるのではなく實際の全體の身體が書いてある、全身が描いてある、人間の生活が描いてあるけれども、見返へる人は其或局部ばかり何處か一部分だけ見る、斯う云ふ場合がある。其小說を讀む人は飛讀をして面白い所だけ讀む、全體に亘つて其詩なり小說なりの味を味ふことの出來ない者が幾らもある。さう云ふ場合に於ては道德と文藝と衝突したと云ふのか、實質に於ては衝突して居らぬが衝突して居るらしく見えるのであります。

もう一つ述べて解釋しませう、又斯う云ふ場合があつたらどうするか、是が最も困難な場合だと思ひますが、それは文藝家の道德の標準と、それからそれを讀む人、もつと適切に言へば檢査する人の道德の標準と違つて居つたらどうするか、更に言ひ換ると云ふと假に世の中が色々に進んで來て、在來の道德と云ふものだけでは間に合はない、道德はさう簡單に製造の出來るものではないのでありますけれども、假に在來の道德ではもう全體の世の中を考へて行くことが出來ない、何か新道德と云ふやうな要求のあつた場合、さう云ふ時世がある、今日の如きは明にさう云ふ時代であると思ひますが、時代の相違と云ふことから道德の標準を違へて考へる人が澤山出て來る。例へば昔の人であるならば――是は諸君に例を擧げて說明する必要はないのでありますが、昔の年寄であれば能く小學校の先生が例に擧げます通りに、子の方から親の方に孝行することばかりを强ゆる、それが一の道德の標準と看做されて居る、けれども今日の人は容易に承知しない、親の方が子に孝行を强ゆるならば、孝行を求むるならば、子の方からも親に求める所がある、どうか一人の人間として見て貰ひたいと云ふやうな要求を大分今日の人は持つて居る。

文藝保護問題

三月十三日、本社主催となつて神田錦輝館に於て文藝保護問題演説會を開けり。聽衆一千二百餘名、非常の盛會なりしが、左に掲ぐるは當日出演者諸氏の演説の速記也。文藝に對して動もすれば不當なる壓迫を加へんとする當局者及び文藝を輕視するに過ぐる或る一部の人士が、之によつて些かたりとも其蒙を啓くことあらば、本社の望は足れり。若し文章及び字句に誤あらば、其責は一に速記者及び編者にあることを斷り置く。（編者しるす）

文藝と道德との衝突

金子筑水

今日は文藝の取締の事に就て演説をしろと云ふことで强談を受けたのでございます、之に就ては久しい間始終いろ〳〵なことを言つて居るが、何時迄も盡きない問題であらうと思ふ。吾々もそれに就ては始終言ひ古して居るし、他の人々も隨分之に就て言つて居るからして、實は殊更諸君にお話する材料がないのであります。何か珍らしいことでも言ひたいと考へて見たけれども、チヨツト好い考も出ないので實は困つて居つた譯であります。けれども何か話さなければならないと云ふ譯て、玆に題は大分大きな題となつて、「文藝と道德との衝突」として置きましたけれども、事柄は極く簡單であります。

それで私の考へて居る所に據ると是は隨分むづかしい問題て、文藝と道德とは衝突するかしないかと云ふことは議論が大分あります。極端な人は文藝は文藝である道德は道德であるから何も衝突することはない、文藝の方の人は自分の思つたことは何でもやつて宜からう、道德に衝突しやうがしまいがそんなことは無頓着にやらなければならぬと、斯う云ふやうに考へて居る人がある。本當の趣意に於て道德と云ふものと文藝と云ふものとは元來本領が違つて居りますからして、趣意から言ひ本領から言へば成程衝突することはないのであります。違つたものが衝突すると云ふことは可笑しな譯て、本領違ひなものであれば元來は衝突する筈のものでないのであります。其事は私は確く信じて居りますけれども、其理窟を此處で述べ立てると云ふことは諸君に御迷惑でありますから、理窟は抜きにしますが、此處でそれに就て述べたいことは、元來の趣意の上に於ては若くは本領の上から言へば文藝と道德とは衝突すべきものではないけれども、實際の上に於て事實上衝突したり、若くは衝突するらしく見える場合があるのであります。其場合を一つ二つ此處で擧げ

て考へて見たいと思ひます。

第一に衝突する若くは衝突するらしく見える場合は斯うであります。是は最も明白で諸君でも直ぐお分りになることである、即ち假に茲に小説を書く人がある、其人は唯だ賣るを以て目的として居る、何でも宜いから直ぐに好奇心を買つて面白いことを書かう、斯う思つて居る動機既に文藝的でないのであります。さう云ふ場合の人が何か頻りに危いことを澤山書いたとする、元來お互に吾々は此身體を見ても分るのでありますが、色々な部分に依つて成立つて居る、目ばかりではない、鼻ばかりでもない、大分近頃は鼻と云ふやうなことが八釜敷やうでありますが鼻ばかりでもない、口ばかりでもない、色々な部分から成立つて居る、頭もあり足もある。さうしますと例へば一つ身體を描くにしても、人間を描いて呉れるならばそれは差支ないけれども、どうかすると文藝家だと云つても中には碌でもない文藝家があるから、或一部分だけ唯だ目ばかり書くとか鼻ばかり書く、是が人間でありますと云つて鼻ばかり書いて人間であると考へて居る者がある、さう云ふ場合にそれが果して文藝と言へるかどうか、大分怪しいですが假に文藝として見る、斯う云ふ場合に道德と云ふものとぶつかる、ぶつかると云つても宜からうと思ふ。斯う云ふ明白な場合であるならば、吾々はさう云ふ小説なりさう云ふ詩なりが發賣禁止をされることは正當なることゝ思ふ、唯だ鼻ばかり書いて其鼻が是が人間の身體であると云ふ意味がない以上、唯だ鼻ばかりであると云ふならば、それは文藝の方面から言つても禁止して貰ひたい、餘りに低等なものとは言はれない、寧ろ文藝の方から放逐して貰ひたい、吾々文藝に携はる者の方から迫つて發賣禁止を請ふても宜い位である、是が極く明白な場合で殆ど問題はないのであります。

所が困つた場合がある、斯う云ふ場合はどうするか、今度は茲に假に小説を讀む人があるとする、其人は充分に文藝を味ふ能力を持つて居らないとする、是は隨分あることゝ思ふです。例へば小學校の生徒に戀物語はどうですかナ、或は今度は鼻ばかり書いてあるのではなく實際の全體の身體が書いてある、全身が描いてある、人間の生活が描いてあるけれども、見返へる人は其或局部ばかり何處か一部分だけ見る、斯う云ふ場合がある。其小説を讀む人は飛讀をして面白い所だけ讀む、全體に亘つて其詩なり小説なりの味を味ふことの出來ない者が幾らもある。さう云ふ場合に於ては道德と文藝と衝突したと云ふのか、實質に於ては衝突して居らぬが衝突して居るらしく見えるのであります。

もう一つ述べて解釋しませう、又斯う云ふ場合があつたらどうするか、是が最も困難な場合だと思ひますが、それは文藝家の道德の標準と、それからそれを讀む人、もつと適切に言へば檢査する人の道德の標準と違つて居つたらどうするか、更に言ひ換ると云ふと假に世の中が色々に進んで來て、在來の道德と云ふものだけでは間に合はない、道德はさう簡單に製造の出來るものではないのでありますけれども、假に在來の道德ではもう全體の世の中を考へて行くことが出來ない、何か新道德と云ふやうな要求のあつた場合、さう云ふ時世がある、今日の如きは明にさう云ふ時代であると思ひますが、時代の相違と云ふことから道德の標準を違へて考へる人が澤山出て來る。例へば昔の人であるならば――是は諸君に例を舉げて説明する必要はないのでありますが、昔の年寄であれば能く小學校の先生が例に擧げます通りに、子の方から親の方に孝行することばかりを强ゆる、それが一の道德の標準と看做されて居る、けれども今日の人は容易に承知しない、親の方が子に孝行を强ゆるならば、孝行を求むるならば、子の方からも親に求める所がある、どうか一人の人間として見て貰ひたいと云ふやうな要求を大分今日の人は持つて居る。

さうすると此場合に於て明に道徳の標準は違つて居るのてあります、此道徳の標準が違つて居ることがあると云ふと、今の文藝問題に接して衝突若くは衝突するらしい感が起るのてあります。例へば今一篇の詩を讀む、小說を讀む人があるとする、假に其詩なり小說なりが在來の普通の道徳の標準とは違つて居る、併ながらそれはさういふ詩や小說が前に述べた鼻ばかり描いたものとは違ふ、確に人間を描いてある進んだものであるとする、其場合に於ては衝突せざるを得ないと思ふのてす。昔の流儀に考へて見る人と今日のものと、即ち古い道徳の標準を持つて居る人と新い道徳の標準をもつて描かれた詩や小說とは、必ず衝突すると見なければならぬのてあります。是は恐らく今後引續いて絕えず文學と云ふものと道徳と云ふものと、衝突する機會を與へることになるてあらうと思ふのてありまして、斯う云ふ場合が至極困難てあります。

そこで前の衝突の場合と併せて考へて見ると、即ち今述べた道徳の標準が異る場合と、もう一つは讀む方が若くは檢査する方が文藝を味ふことが出來ずに衝突したと云ふ場合斯う云ふ場合は實際衝突と云つて宜いか惡いか知らないけれども、之を假に衝突と名けることが出來るならば、斯う云ふものゝ裁判判決を如何にしたら宜いかと云ふ問題てあります。唯だ文藝と云ふものに就ては何等の智識を有つて居らない、謂はゞ素人にそれを委して置いて宜からうか、此處が問題だと思ふのてあります。批評家と云ふやうな人々が大分澤山にありますが、是等の人に取つてさへ隨分困難な問題てあるのてす、然るにさう云ふ困難な事柄を、唯だ一人二人の文藝を判斷することの出來ない人が、好い加減に是は風俗壞亂てあると云ふ風に言つて、直にそれを禁止して仕舞ふと云ふことてあつたならば、甚だ文藝の上から心細いことてあらうと思ふのてあります。それならばどうしたら宜いかと云ふと是はむづかしい、到底立派な解決は付くまいと思ふのてありますが、今日のやうに隨分むづかしい問題が出て居るのに、今述べたやうな後に擧げた二の衝突の場合を裁判しなければならぬと云ふ今日に於ては、國家と云ふものが唯だ好い加減に惡いものを探すと云ふやうな了見て、發賣禁止と云ふやうなことをするよりも、さう云ふのは寧ろ打棄つて置いて、批評家と云はれる人々に委せて置いた方が文藝の爲のみならず、全體の上に於て利益ではないかと考へるのてあります。それて若し出來るならばさう云ふむづかしい場合を裁判する時には、果して是が風俗を亂すものてあるか、若くは國家の上社會の上に寧ろ新しい智識を與へて行く文藝てあるか、何れか、さう云ふむづかしい問題を極めるには、何かさう云ふ智識を有つて居る人か、相當なる智識を有つて居る人の集つて居る團體、或は文藝院と云ふものでも宜しい、さう云ふものがあつて多少でも裁判して行くならば結構てございますが、併ながらそれとても餘り宛にはならない、けれども今日のやうに隨分困難な場合を無意味に發賣禁止をする、唯だこゝの所に鼻が背いてある、こゝの所にどうもあんなことが書いてある、是はいけないと云ふやうなことては甚だ心細いことてあると思ふのてあります、私の述べたいと思つたのは是だけのことてあります。

文藝取締に就て

山路愛山

私も極く簡單に申上げます、苦情を言ふのてはございませぬけれども、信ぜられて後に言ふと云ふ言葉が昔からあるが、自分を信じない者の前てものを言ふのは馬鹿な話だ、冷笑したり馬鹿にしたりする者の前

てものを言ふのは僕は嫌いだ。あなた方が僕を冷笑すと僕は罷めて仕舞ふ、だから非常な簡單な演說を希望するのならば今の中にお冷笑しなさい、さうすると僕は始めない中に終つて仕舞ふから……。

私は世の中に二つの力があつて働いて居ると思ふ、一つは現狀維持の力、一つは現狀打破の力、何時の世の中でも此二つの力が働いて居るもので、現形を其儘維持して行かうと云ふ連中と、それを打壞して行かうと云ふ連中と、此二つが何時でも働いて居る。是はもう世の中の歴史を見れば何時でも此二つの力が働いて居る。それで國家とか、政府とか役人とか云ふやうな者は現狀維持派に違ひない、何でも今の國家を、今の道德を、今の社會を其儘に維持して行かうと云ふ連中であります。所が文學と云ふやうなものになると、時々現狀打破の方になる、デ現狀維持派の方から見ると文學と云ふものは隨分厄介な奴で困り者である、文學と云ふものは世の中の秩序道德と云ふやうなものを時々打壞す方に加勢をし同情をする。其例を一つ擧げて見ると德川時代に淨瑠璃と云ふものが大變流行りました、あれも矢張り一つの文學であります。其時分には文學と思つて居らなかつたか知らぬが、今から考へると大文學である、近松門左衛門などは其時分には文學とも何とも思つて居ない、文學と云へば四角な字で書いた詩や文章と思つて居つた、あれも矢張り大きな文學だが淨瑠璃の流行つた時分に斯う云ふことがある。幕府に武具甲冑の奉行と云ふのがあつて、其人は舊幕から色々な武具とか甲冑を預かつて居る、さうすると其妻君が實家か何かで鎧が是非一つなければならぬと云ふことがあつたので、あなたは澤山鎧を預かつて居なさるから其鎧を一つ貸して下さいと言つた、所がそれはいかぬ、是は幕府から預かつて居るのであるから貴公に遣る譯にはいかぬ、それでもどうも親の爲だから是非頂戴したいと言つたが、其御亭主さん考へた、是は淨瑠璃にあるやうに盜出すが宜からう、俺が知らぬ振をして居るから貴公が盜むが宜しい、俺が知つて居て此甲冑を人に渡してはそれでは役目に濟まぬだから俺が知らずに居る所を貴公が盜んだと云ふことにすれば、是は親孝行の爲に泥棒をすると云ふことが淨瑠璃にあるから、俺は知らぬ顏をして居るから貴公盜んだら宜からうと云ふので、妻君に泥棒をさして甲冑を盜ませて實家にそれを運んだ、其事が露はれて大騷ぎになつたと云ふことが書いてある。是はたつた一の例だけれども淨瑠璃と云ふものが教へる道德が斯う云ふ馬鹿な結果になつたと云ふことの例になります。あなた方は天保八年の大鹽平八郎の亂と云ふことを歴史で御聽きになりましたらうが、あの大鹽平八郎の亂と云ふものは長い間幕府が天下泰平で居つたので、恰度幕府に向つて兵を擧げたと云ふのは、寬永十四年天草の亂以來ないことである、所が大鹽平八郎があゝ云ふ騷ぎをしたのをあれを唯だ大鹽一人の現象だと思ふと大間違である、段々あの前に流行つた文學を調べて見ると面白い、先づ文化文政の頃に一般に流行つたのは何かと云ふと水滸傳である、水滸傳と云ふものは何だ、泥棒の小說てあります、法律を馬鹿にしそれからして仁義道德を無視して、大きな盃で酒を飮んで大きな肉を喰ふと云ふ亂暴人の寄合、其亂暴人の寄合の水滸傳と云ふ小說が非常に流行りました。それから神稻水滸傳と云ふ泥棒のことを書いた小說も大分讀まれた、それから地雷也豪傑譚といふ、あれを地雷也豪傑譚と讀む人があるが間違つて居ります、地雷也豪傑譚、是も泥棒の事を書いたものだが、さう云ふやうな本が盛に行はれて居つた。恰度幕府の威力が段々衰へて來て、天下の人心常に亂を思ふと云ふ時だからさう云ふ小說が出て、段々人の心に何やらが出來た、其結果が大鹽平八郎の亂になつたものと想はれる。斯う云ふことを考へて見るとどうも現狀維持派たる國家の方から言ふと文學と云ふものは隨分厄介

ものて、あいつ山犬のやうにヒヨツトすると社會に喰付きに來るものてあると云ふことは已むを得ない、それは先程も御話があつたが道德の標準が違ふ、文學者の道德の標準はさう云ふものてはない、さうかも知れない、大鹽平八郎には大鹽平八郎の道德があり、水滸傳の英雄には水滸傳の英雄の道德があつたに違ひない。

そこて今の世の中が惡いと思つたら此世の中を打ち壞して、現狀を打破して新しい現狀を作る必要があるかも知れない。あるかも知れないけれどもそれは現狀打破派の方のかたがやる、苟も現狀維持の任を有つて居る國家はそれは出來ない、國家が自分で打破をやつては滅茶苦茶になつて仕舞ふ、國家と云ふ方から言へば現狀維持が責任てあるから仕方がない、仕方がないから現狀打破をやる奴に繩を以て縛つて、酷い目に合はせなければならぬ、是は致方はない、だから文學者は現狀打破が宜いと思つたらおやりになるが宜い。そこて國家は現狀を維持する、文學者は現狀を打破する、此力が相合致し相鬪つて新しい社會が出來るかも知れないから、ナニ構はずやる方が好いかも知れない、私は歡迎する、さうなれば玆に始めて新しい面白い世の中が出來るかも知れないと思ふ。けれども國家として見ればどうもそれを默つて居る譯にも行かない、僕か國家なら矢つ張現狀維持派になる、役人にならないだけに反對だ、苟も役人になつて責任を持つて居るならば現狀維持を欲すると云ふことは致方はない。それて現狀打破が必要てあると思つたらやる可し、我れ汝を妨げざるなり、どんなにてもおやんなさい。デ、僕は國家の役人たる立場から論ずれは仕方がない、どうもそれは退治しなければならぬが、併し國家と云ふもの丶位置から考へても、犬殺しが犬を殺すやうに文學を打殺さないても宜いと思ふ、此文學め怪からぬと云ふて殺して仕舞へばそれは譯はない、一本の棒を以て足れりてあるが、左りながら惡い文學を殺すにしてもそれが何の益になる、詰らぬ文學ても無闇に打殺してそれが何の爲になるか、私は決して國家の益にはなるまいと思ふ。文學の方は構はない、文學者が餓死しやうがそんなことは國家の問題てはない、現狀維持と云ふ上から問題てはない、けれども國家自身が文學を撲殺して國家自身がそれて宜しいか、そうてはなからうと思ふ。先づ第一に國家は斯う云ふことを考へなければならぬ、國家と云ふものは決して國家自身が眞つ直ぐに歩いて居るものてはないといふことを考へなければならぬ。己は眞直ぐに歩いて居ると思ふのは間違てある、失敬だが此處に人が斯んなに居る、此人が一人も眞つ直ぐに歩いて居る人はない、皆な螺線的に此方に斯う行き彼方に斯う行く、「生醉の道者を見れば大道を横すじかいに春は來にけり」て、こつちの方へ行つて見たがいかぬ、今度はあつちの方に行つて又いかぬから又向ふの大道を横すじかいに歩く、是が人生てあり國家てあつて、人間社會はあつちへ行つたりこつちへ行つたり、眞直ぐに歩いて居る者は一つもない、國家自身が横すじかいに歩いて居るものてあると云ふことを考へなければならぬ。之をむづかしく言ふと思想のリズム、リズムと云ふものがあつて人生が動いて居る、國家も其通り動く、國家は何時ても一の極端から他の極端に走る、人間もさうだ、國家は人間があつちの端からこつちの端に歩くのと矢張り同じやうに行きたがる。私は明治三十九年三月に自分の雜誌の獨立評論に「反動將に來らんとす」と云ふ文章を書いた、それはどう云ふことかと云ふと一體今の思想家はどう云ふことを言つて居るか、餘り極端なことばかり言ふて居らぬか、登張竹風と云ふ人がある、顔は見たことはないが大變男つ振の好いやうな名てある、其人の書いたものを讀んで見ると、男と女の交際はあれは畢竟戀愛の爲てはないか、戀愛と云ふものが潜んて居るから男女の交際は面白い、それがなければ面白くも何ともな

い、さうなると迂つかり人の妻君の訪問は出來やしない、どうです一つ芝居へお伴しやうじやありませぬかなど云ふと、俺の嬶は彼奴と芝居に行つてあれは戀愛ではあるまいか、けれどもそれが眞理だと書いてある。さうすると人が男と女と會へば直に戀愛と云ふことが出來る、それが愉快だ、それが人生だ、そうして其先生は文部省の直轄學校の先生であつたのだ。それから饗庭篁村と云ふ古い小説家があつて其人が斯う云ふことを言つて居る、其時分は明治三十九年三月、まだ生れない人があつた其時分にあの明治座と云ふ芝居があります、私は此間始めて往つたが、明治座と云ふ芝居で「モンナヷンナ」とか「ソンツヤモンツヤ」とか云ふ芝居があつた、それを觀て饗庭篁村と云ふ人が批評して、どうも驚いた間男奬勵のことを書いてある、今の芝居であんなものを青年が見るやうては困ると云ふ議論をして御座つた。どうも其時分の人の考は一方に行過ぎて居つて、男と女が會へばあれは吃度怪しいぞ、それが愉快だぞ、芝居へ行けば間男と云ふものは恰も成功者みたいなもので、他人(ひと)の女を取ると云ふことは鬼の首でも取つた如く成功である、非常に愉快であるぞとそれを奬勵して居る、斯う云ふ風だから是はいかぬぞ今に反動が來るぞと僕は言つて居つた。敢て先見の明を誇る譯じやないけれども三十九年三月に言つて居つた。そうすると世の中が段々變つて來た、青年諸君は變らないけれども年を取つた連中は變つて來た、現狀維持派の方が變つて來た、是ではいかぬぞ、何でも惡い文學を撲殺して仕舞はなければならぬと云ふ反動が起つて來たが、國家などは矢張りあれではいかぬといふ反動が今に又衝突して後悔すると私は思ふ、だからさうしない中に反動だと云ふことに氣が付いて、もうちつと眞ん中の方を歩いたら宜からうと思ふ。是は第一に國家に忠告する・國家と云ふものは玆に居ないから仕方がないが、國家と云ふものが具體的に玆に居たら斯う云ふ風に忠告したいと思ふと斯う云ふのです。

それから第二に申したいことは、國家と云ふものは獨力で、自身の力だけで惡文學を退治しやうと思つてもそれは出來ないといふことだ。國家は金がある、吾々よりも確に金持でもある、僕は未だ曾て二十億の借金をしたことはないが、國家にはさう云ふやうな信用があります、吾々よりも大きな金持であります。ナ何でも出來さうな者であり升けれども國家だけで惡文學の退治は出來ない、必ず援兵を乞はなければならぬ。先づ第一に文學者自身の援兵を乞はなければならぬ、金子さんのやうな極く穩健な文學者の助を藉らなければならぬ、又教育家の助を藉らなければならぬ、宗教家の助を藉らなければならぬ、今の宗教家はぼんやりして居るけれども併ながら宗教家の助を藉らなければならぬ、家庭の主人たる人の父たり母たる人の助を藉らなければならぬ。所でどうですか、どうもあの犬はいけぬ、あれは狂犬だからやつつけてやらうと言つて直に一本の棍棒を以て撲殺して仕舞ふと、今度は狂犬の方に同情がある、やるならばちつと相談をしてやつて呉れ、無闇にあゝ云ふ慘酷なことをして呉れては困ると云ふ風に、國家が餘り撲殺權を振廻はすと憎むべき惡文學に却て援兵をして人々が同情する、あれじや文學者の方が可憐さうだと斯うなる。そうなると發行禁止になつた小説を教育家がそうつと學校の隅で見たり、耶蘇の教會堂で牧師さんがあの小説は禁止になつたがあれは面白い、どうかそうつと僕に見せて呉れぬかと云ふやうな事になつて、折角禁止した功が更に無くなつて仕舞ふ、それだからどうも是は一人の仕事だと思はないでやつて貰ひたい、大勢の仕事だと思へばもちつと手加減があらうと私は思ふ。文學者の所論も聽き、教育家の議論も聽き、宗教家の議論も聽いて、國家がコオポレートして一緒に
いてやつた時に禁止したら効があるけれども、三十頁や三十五頁の

取が――近來三割ばかり上つたらうけれども、さう云ふ人が撲殺した文學では吾々でも却て禁じた文學を買つて見たくなる。皆と協力してやるのにはもうちつと手段があるだらうと思ふ。それは内務省自らが論文を出したら宜からうと思ふ、自分で新聞で今度出來た小說は甚だ不都合だ、禁止したのは斯う〳〵斯う云ふ理窟だと云ふことを、「國民新聞」にても「やまと新聞」にても何でも構はないからちやんと新聞に出したら宜からう、さうすると教育家も宗教家も皆共に議論をして、「請ふ天下と共に穢帝を殺す者を肘たむ」と云つたやうにやつたならば譯はないだらうと思ふ。だから此邊も今のやり方では變だと思ふ。

それからもう一つは本當にやるのならば新聞の三面の方からやつて貰ひたい、三面を征伐することが出來ないで唯だ雜誌などを征伐するのは、國家として甚だ意氣地がないことだと思ふ。僕が國家としたならば先づ新聞の三面を片つ端からどし〳〵退治して、さうして始めて國家の現狀維持派たる意見を立てる、現狀打破が恐いと思へば只縛るだけだ、さうして置けば互に好い處に行くだらうと思ふ。是だけが僕の簡單な意見であります。

喧嘩兩成敗

田中喜一

私が考へますのには文藝の眞の保護者になるものは、讀者社會でなければならぬと思ふのであります、何故なれば文藝其ものは何時の時代に發生しまするにしても、畢竟するに其社會の反響である、それでありまするからして、其社會の風紀とか習慣とかを寫すより外に致方がない、又其文藝の製作に從事致します所の所謂文士なるものはどう云ふものであるかと云ふと、大抵は――稀にはさうでないものもありますが、大抵は文藝の製作から得る所の收入に依つて衣食して居るものである、それでありますからどうしても文藝の製作に從事する時には其の自分の製作物が賣れることを希望すると云ふことは已を得ない譯であります、そこで文藝を眞に保護して、其健全なる發達を圖る所のものは、どうしても讀者社會でなければならぬと思ふのであります。固より稀には是まで肉だけは其の社會から取りましても、其精神は永久に亘る人間の眞相を現はさうと努めた所のセキスピヤのやうなものもありますし、全く自分の作物が其時代に賣れてもどうでも構はない、其の時代の弊を矯めやうとした所のトーマス、カーライルと云ふやうな者もありますが、併ながら是は澤山の文士の中の極く小數の例外でありまして、多數はどうしても其の時代の風潮に媚びると云ふことは免れないことであらうと思ふのであります、それでありますから眞に高尙なる文藝を望むならば、どうしても讀者社會の好尙、讀者社會の理想が高くならなければ、それは遂せられない譯であります。

併ながら事實として此社會の讀者は皆な高い理想や、好尙を有つて居るものでない、其の多數は遺憾ながら何時の時代にしても俗惡な文學を要求する人々でありますと、どうしても時には政文藝の發賣を禁止すると云ふことは、政府の當局者の趣旨よりして免れないものと考へるのであります、それでは政府の當局者はどう云ふ標準でも文藝の發賣を禁止しても宜いかと云ふとさうではない、それならどうして宜いかと云ふとそれは政府の職分から考へて見なければならぬと思ふ。政府と云ふものは社會の時代に從ひまして、必要に應じて色々と方針を變へまするが、或時代には比較的に人民の仕事に干涉しない、或時代には比較的により

多く干渉すると云ふやうなこともありますが、併ながら永久に亘りまして政府の職分と云ふものは人民の實力を増し、又聰明を増すと云ふ、此二つに歸さなければならぬと思ふ、啻に或場合に於て人民の幸福を増すと云ふことだけでは、政府の職分が充分でない、人民に干渉することを職分として居る政府になりますと、其結果は人民に聰明或は實力を増す、或は減らすと云ふことがあつても、さう云ふことには頓着なく、第一に政治として人民に干渉して、詰りオセッカイをやかうと云ふ所の政府がありますが、私はそれは政府の性質からして間違つて居ることと考へまする、どうも政府の仕事と云ふものは、人民に向つてどう云ふ方針を執るにしても、人民の聰明、人民の實力を増すと云ふことにならなければならぬと思ふ、さう致しますと此文藝に關して、政府の執る處置に對しましても私は注文しなければならぬのであります。

第一は文藝を禁止致します所の當局者が、此の時代の進運を始終見ることの出來るだけの聰明を有たなければならぬと云ふことである、此時代は始終變つて行く、從つて其の新しい時勢に應じて新しい文藝か起る、それてありますからして此時代はどう云ふ文藝を眞に望んで居るか、どう云ふ文藝が現代の社會生活を幸福にして行くかと云ふことを始終理解する所の聰明が甚だ必要であると思ふ、もう一つは此當局者がモウ少し寛容な態度を有つことである、即ち人民に充分に信用を置くことである、一體是までの政府は、何處の國の政府にしても人民に信用を措かないと云ふことが非常な缺點になつて居る、もう少し人民に信用を措いて、さうして譬へ理解出來ない所の文學が興るにしても、此興るには相應な理由があるてあらうと云ふやうな立場から、モウ少し文學を容れる所の態度に出なければならぬと思ふ。

それから私は今日の文藝に從事して居る所の方々に對しても、尙ほ此の政府當局者に對すると同じやうに注文があるのであります、一體先きにお話致しました通り、文藝は其時代々々の反響に過ぎないのでありまず、併ながら大體時代の道德と云ふやうなものを反射すると云ふことは已むを得ない話でありまず、文藝が社會に對する責任から云ふと、社會の道德、好尙を寫しながら同時にそれを導いて行く所の責任があると思ふ、併ながら實際文藝に從事して居る方々はそれだけのことをなして居るかどうか、先づ修養があるとして文學者は自分の出來るだけのことを、其の文藝に於てやつて居るかどうか、或は自分はモット宜いことを考へて居るけれども、一般の好尙が其程度にあるが爲めに、それだけのことを書いて居ると云ふやうな態度に出て居りはしないかどうか、それを考へて見ると、無論總ての文藝家はさうであるとは言へないのでありますが、文藝家の或者は自分はモット良いことを考へて居る、是は自分の理想としては充分なるものでないけれども、自分の衣食の爲めに或は外の事情の爲めに枉けて書いて居ると云ふやうな人もありはしないかと思ふ、文藝家は自分の職責から、又社會に於ける職分からさう云ふことは愼まなければならぬと私は思ふ。

それからモウ一つは文藝家が一方に普通の修養を積んで行くと云ふことである、私共始め無論一生涯此の世に立つて物を書くとか、或は語るとか云ふことをなして居る人は一生涯勉強して行かなくてはならぬのであります、文藝家も尙ほさうであらうと思ふ、若い時から筆を執り始めた人は自分の書物は賣れるから自分の修養を怠つて、そんなことはせんでも宜いと思ふのは、是は甚だいけないと思ふ、自分の書物を賣らうと努めた結果は、自分の經驗が狹くなる爲めに、兎角文藝と云ふものを社會から孤立さしてしまつて、さうしてそれが社會生活にどれだけの價値があつてもなくても、文藝は文藝として世の中に存在する所の權利が、

ると云ふやうな考へに陷ることがあるのでありますから、文藝家は最非とも一方の修養を積んで、さうして何處までも社會生活の上に於て、文藝の位置を認めて行くと云ふことが甚だ必要であると思ふ、それから文藝は文藝家に言はせると、文藝ほど此世の中に貴いものはない、外のものとどの位衝突しても文藝は尙ほ存在する價値がある、と云ふやうに言つて居るけれども、私共局外者から見ると、どうもさう云ふ風には見えない、文藝家が其價値を認める程價値あるものではない、外の活動と相俟つて、外の活動と齟齬しないやうに、外の活動と相伴つて行つて、初めて文藝の價値と云ふものは分るのでありますから、文藝に從事すると同時に、外の活動と、外の事件と矛盾しないやうに行くことの必要があらうと思ふのであります。

今日は妙に二つの相容れない所の主張が日本に行れて居りまして、是はどうにかして兩方相調和しなければならぬと思ふ、先づ一方は概して言ふと、實に老人方に依つて代表されて居る所の主張である、一方は即ち比較的若い人達に依つて取られて居る所の主張である、一方は全く昔の道德でやつて行かうとする、それがどれだけ現代に於て價値があるのか、さう云ふことは構はない、唯昔の固有の道德で以て行かうとする、一方は全く日本の固有の道德を無視して、さうして少數の文藝家などの鼓吹する所の生活を送つて行かうと言つて居る所の人達であります、併ながら斯う云ふ風に相容れない所の主張が二つあると云ふことは、甚だ望ましいことでない、是が爲めにはどの位教育や其他の事に於て勢力の消耗が起るか知れない、であるからして是はどうしても兩方共に理解すると云ふことの態度が必要であると思ふ、若し眞に理解出來ないならば、互に信用し合つて同じく社會を經營して居る所の人々であるから、理解出來ないまでも、互に此の社會を經營して行く所の眞心があるものと、志のあるものと假定して、さうして互に容れて行くことが甚だ必要であると思ふ、だからして當局者にありましたならば、もう少し寛容な態度を取つて、さうして自分の仕事は何處までも——假令どう云ふことをするにしても、何處までも其人民の活力、及聰明を增して行くことにせられて行くと云ふことを考へなければならぬ、又一方の方にしたならば——一方の新しい生活の方法でやつて行くと云ふ方にしたならば、其新しい生活と云ふものが唯空想にあらずして、果して此過去の歷史や習慣を有つて居る所の社會に於て實現されたるものであるかどうか、それが實現されたならば、果して今の文藝家が言ふ程結構な社會になるかどうかと云ふことを考へて、さうしてもう少し實際の社會に調和するやうな文藝を鼓吹することを望むのである。

文藝が屢々發賣禁止になると云ふことは、私は當局者の方ばかりから來るのでもあるまいと思ふ、是はそれを製作する所の文藝家にも大に責があると思ふ、併ながら此場合に於ては、兩方相容れないと云ふことになると當局者の方は實際の力を有つて居るのであつて、文藝家は長い間の思想の上に於て社會を改革すると云ふことは云へるけれども、兎に角法律の上に於て到底爭ふ勢力がないのでありますから、私は特に當局者が寛容な態度に出ることを注意するものであります。

吁小人國

巖谷小波

諸君、今日は大變面倒な理窟を言ふ會合であるかのやうに見えますが、私は理窟が大嫌ひであるから御免を蒙つて居つたのであります、然

るに引張り出されましたやうな次第でありますが、演題は吁小人國、又例の御偏癖をしやしないかと云ふやうに思はるゝだらうが、併し其御心配には及ばぬので、開くつて諸君のお顔が能く分りませぬから、御年配がどの位であるかと云ふことは分りませぬけれども、お偏癖をお聽きになるには少し年を老り過ぎていらつしやるやうに見受けますから、其お偏癖はお預りとして、即ち小人國と云ふことに付てお話しやうと思ひます。

二

小人國と云ふのは讀んで字の如く小さな人の居る國である、其の人はどう云ふ人かと云ふと先づ丈は無論餘り大きくない、足のコンパスも無論短いから歩き方も誠にのろい、目はと云ふと極く小さいから遠い所のものは見えないで目先ばかり見て居る、其癖小石に躓いたり何かすることもある、之に反して耳は遠い方であるから、隨分善い事を色々の人が話をしても之を聞くことが出來ず、又聞いても之を解釋することも出來ない、即ち頭腦も小さなものである、其他神經が誠に遲鈍であると宜いのだけれども、神經の方から云ふと頗る過敏である、是は無論小さいからであります、小さいから總て道具が誠に過敏である「大男總身に智慧が廻り兼ね」と云ふから、寧ろ大人國であれば其點に於ては誠に遲鈍であるかも知れぬ、後へ廻つて尻の穴などを見ると誠に小さい、針ほどの物しか出やしないかと思ふやうなケチな尻の穴を有つて居る、斯う云ふ人間が居る國が即ち私の所謂小人國であるのです、かるが故に斯う云ふ人間、即ち此國を形造つて居る分子が斯の如く小さいから、國其ものも至つて小さい、誠に面積も狹い、掃除などは存外行屆いて、重箱の隅を楊子でホジくるやうなことはするけれども、兎に角憐むべき國である、小さいから從つて貧乏である、それで財布などと云ふものは殆ど風船玉のしなびたやうな形位しか有つて居らない、さう云ふ國ではあるけれども、兎に角是でも國家の端くれであるから色々な機關が備つて居るけれども、やはり小人國相應なものである、過々戰をする、中々强いけれども、初めの方だけ强くつて途中からくたびれて仕舞つて、誰か宜い加減に止めが入つて吳れゝば宜いがと思つて居る、幸ひ止めが入つて來ると此機に乘じて宜い加減にお茶を濁して、後で話をつけるやうな始末で、外交の方を見ると、誠に是も所謂小さな人間でありますから、大きな人の前に出ると、腰をかゞめてヒョコ／＼頭を下げて居る、過々對等位の國に對してさへ其習慣がついて居るから遠慮勝なことをして居る、さうしてあれも內證、是も內證も內證ばかりして居るから人から馬鹿にされ過々外國へ出ると邪魔つけだとか何とか言はれて追出されたり、追返されたりするやうなことになる、胸の幅は至つて狹いから、人と交際をする上に於ても誠に偏狹な態度を取るのであります、其外其の國には無論敎育もあるけれども、其の敎育はどう云ふ敎育であるかと云ふと、大きな人間を造ると云ふことは國に甚だ不相應であるから、小さい人間ばかりを造らう、それで大きく伸びるだけの力の人間が鑄型に嵌められて押え付けられ、左右から詰めてしまつて、丁度稻垣の要を見るやうなとばかりして居る。斯う云ふ國であるから文藝はどうであるかと云ふと、無論文藝などに對して之を寛大に待遇するやうなことは知らぬのである、全體此の文藝と云ふものは贅澤品である、餘程國が裕かでなければ此文藝と云ふものゝ發展することは出來ない、家に譬へて見ると床の間のやうなものであらうと思ふ、九尺二間の裏長家に床の間はない、二十五圓位家賃を出すと、床の間が付いて可成の家もある、併し其日稼ぎの毎朝辨當を下げて、割引の電車に鮭のやうにブラ下つて來るやうな人間が住んで居るやうな家には床の間がない、又さう云ふ人間は住むことは出來ない、過々住めば即ちそれは下宿屋の床の間位なものであります。

斯う云ふ風でありますから衣食足て禮節を知ると云ふやうなもので、即ち國が裕かになつて、稍々其處に餘裕が出來てこそ初めて文藝と云ふものが認められ、之に對しての色々な所謂保護と云ふやうなものが出來るのであるけれども、其國が貧乏であると、其國がまだ十分に進んで居らぬと、丁度小さな家に僅かに鍋竈が出來た位なところでは、到底床の間に掛物を掛けることは出來ないのであります、先づ米櫃の底をスッカリ詰めて、さうして三度々々の御食がユックリ喰べられるやうにならなければ床の間に掛物を掛けて、どうだ乙だらうなどと云ふことは出來ない、唯今申しまする所の小人國は即ち其の感がある、併し此國中々馬鹿に出來ぬ國で、古い事に於ては隨分古いので、古いから所謂骨董品は中々ある、骨董的の傾きは充分にある、併ながら其の骨董を餘りに貴ぶが故に、自分の過去ばかりを考へて、現在若くは未來はどうであるかと云ふことに付ては餘り考へない、己の國は斯うであつた、己の家はどうであつたと云つて、昔の榮華ばかりを誇つて居る、そして現在未來に付ては注意が缺けて居るかの想がある、又未來のことに付て適に考へても所謂例の遠い耳、小さな頭には到底是れが解らない、成るほど歷史は大切なものである、過去に立派なことをなしたと云ふことは、非常な價打であるに相違ないけれども、過去はモウ一遍繰返してモウ一遍持つて來ることは出來ない、併ながら未來は是からどうにでも大きくすることが出來る、然るに後ばかり見て、過去の事ばかり考へて居るやうなことでは到底進むことは出來ない、況やコンパスの小さな、足の幅の狹い人間では到底前に進むことは出來ないのであると云ふことを考へて見ると、誠に此國は憐むべきものであらうと思はれる、國としても過去ばかりを顧みるが、家としても詰り此先祖若くは自分の家の一番古い者を土臺として總てのことを割出して居る、子供よりはお父さんが豪い、お父よりおぢいさんが豪い、と云ふことになつて來るから、總ておぢいさん本位、御隱居樣本位で割出されて來る、即ち政治をするにも若い新進の智識を有つて居る人の言ふことは通らずして、中流若くはそれ以上の元老の言ふことが通るのである、元老本位になつて來る、折角子供が伸びやうとすると、それでは老人に都合が惡いと老人本位に引戻して仕舞つて、お前はそんなことをするに及ばない、己の眞似をしろと云ふやうに、總て老人から割出すやうなことを勉める傾きが此國には見える、例へば國字と云ふものは成るべく簡易にしなければならぬ、國語も整理しなければならぬ、六ヶ敷い漢字は幾らか減さなければならぬと云ふ議論が起つて、是が即ち未來國民に便宜を與へる土臺であるのに、老人はそれを見て甚だ困る、こんなことをしてはいかぬ、己れ達の若い時には斯うであつたから、貴樣も斯うしろと云ふやうに、其處に進んだ考へが出て來ても、之を年寄本位に引戻して昔に立戻させるやうなことばかりして居る、斯う云ふことを考へて見ると誠に此國の前途は、足の進み方は心細い感がある、即ち文藝などに於てもさうである、成るほど今日文學と云ふものがあつて、其國獨特の文學のあると云ふことは何人も認むる所であり、又必要のことであるけれども、思想と云ふことになつて來ると、思想は世界共通であるから隨分他所の國の思想が其國の國民に適合して、之に十分に消化されるやうな場合もある、殊に此文藝の事に携はる人間は誠に自由な思想を有つて居る、かるが故に其筆に依つて往々にして隨分突飛な議論、或はいかゞはしいことを書く、即ち所謂此の筆の辷りてあるのです、けれども色々のことを書く中には即ち中庸を得られて來る、やつて見る間に初めて土臺が出來て來る、所がそれを保護しなければならぬ、取締らなければならぬ、けれども之を取締る方の側からは、成るべく自分の目安に依つて極めて、それもいかぬ、これもいかぬ、と言つて

止めて仕舞ふ、丁度子供が悪戯をする、子供と云ふものは非常に英氣滿ちて居るものであるから、したい時には悪戯をするのです、大人のやうに近所の手前を考へたり、人の顏色を見て遠慮をしたり、後の事を考へたり、するやうなことはしない、子供はしたい時にする、したい時にする中に随分亂暴なことがある、例へば今活けたばかりの花を引つくり返して見たり、買つて來たばかりのお菓子を直ぐに手づかみにして掻き廻して仕舞つたりする、大人の方から見ると誠に迷惑であるけれども、子供の方から云ふと是は矢張一の英氣の發作に過ぎない、滿ち充ちて居る所の英氣が手を動かし足を動かして色々なことをして居るのに過ぎない、それは大きくなれば決してそんなことはしやしない、悪い子供でも段々大きくなつて來れば成るほど客の前で以て足を投げ出すと云ふことは悪いことである、失禮である、許の出ない物に手を出すと云ふことは無禮である、床の間の花を引つくり返すのは不作法であると云ふことは自然分つて來る、そんなことをせずして矢張り行儀を良くする、子供の時代には色々なことをするのです、それならば大人の便利になるやうに、大人の都合の宜いやうに勝手が悪いからと言つて一々押え付けて、そんなことをしてはいけない、あんなことをしてはいけない、汝は巳のやうに行儀良くしろと言つた所で、是は子供に取つては甚だ迷惑で、其の子供は可哀さうに大きくなつて豪い者になりませぬ、子供の時に少し位横着して、隣りのおぢさんに叱られて歸る位の人間でなければ、他日有爲な人間には成れない、ちよつと其の例を引いて見ると、是は歴史に依つて明かに證明されて居るが、千代萩の芝居を見ると鶴千代君と千松と云ふ誠にこまつちやくれた子供が居る、是は誠に行儀の良い子供で何分間だか何時間だか知らないがあの事が終るまで、「お腹が空つてもひもじうない」などと豪さうなことを言つて居りますが、可哀さうにあの千松は死と云ふことが一つの忠臣と云ふ思想の犧牲となつて仕舞つた、鶴千代君はあの位おとなしいから如何なる人になるだらうと思つたが、あの鶴千代君はどんな豪い者になつたかと云ふと、不幸にして何にも見ることが出來ない、之に反して徳川三代將軍、子供の中には竹千代と言はれた非常ないたづらて屋根に巣をくつて居る雀を取つて見たり、戰さごつこをして見たり、石の投げつこをして見たりして、着物は鍵ざけだらけ、乳母やお母さんに随分心配を掛けた、其爲めに女親の御不興を蒙つて弟の國千代の方に世を讓られんとまでされた、或時正月の試筆の時に大きな字を一ッ――それは龍と云ふ字を紙に書かされた、そこで大きな筆に墨を一杯含ませて書き切めたが、愈々書き終る時に餘り大きく書き過ぎたものだから點の打ち所が無くなつて仕舞つた、其時に此邊へ打つと調子が宜いと云ふのでポカーンと疊の上に打ち付けた、所が見て居た者がマア大事の疊換へたばかりの疊の上に飛んでもないことをなさると非常に驚いたが、或人はそれを見て此方はキットえらい方になる、大切にお育て致さなければならぬと言つたことがあるが、果して徳川三代將軍となつて十五代の基礎を固めた位の豪傑になつた、それで是れが大人であつたならば疊の上に點を打つやうなことはしないが、しやうと思つた時に何の遠慮もなしにやつた所が此人の價値のある所で、點の打ち所がない、どうしやうと言つて小さな點を肩の所にチヨンと書いて置くやうな、そんな量見では迚も天下は取れないのである、其の樣に此若い國家は子供と同じである、即ちすべからざることもし、してはならないやうなこともどうかするとはづみてするものであります。

今私の言ふ所の小人國には古い歴史は有つて居るけれども、併しながらそれは古いと云ふことは表通りに出ない、古びきつた、何處ともお交際をして居なかつた時分のことで、それが今日ではかへつて一等國の交際

をするやうになつてからまだ極く日が淺い、日の淺い所に急に開けた店であるから色々なこともしなければならぬ、其間にはレールを走るやうなことも往々にしてある、其間は少し位大目に見てやらなければ本當の發達を見ると云ふことは出來ない、今日は外のことを論ずる日でないから文藝ばかりで言ふけれども、文藝は外れ易いものであるからして、尙ほ更其位な斟酌を以てしなければならぬのに、情けない骰髏玉の小さな尻の穴の細い人間であるから誠に之を苦にする、どうかするとそんなものはなくても宜いのだ、文藝などはなくても濟むものである、家には床の間が無くても雨は漏らぬと云ふと同じである、成るほど床の間がなくても雨は漏りはしないけれども、近所交際をする時に、お客樣が來て貴方の床の間はどうしたと聞かれた時に、仕方がないから物置にして置くと云ふそんな篦棒なことはない、兎に角表通りのおつきあひをしてえらさうな顔をしやうと思ふのには、自分の家は家相應に飾つて置かなければならぬ、然るに床の間へ持つて行つて、何にもなしにして物置にしやうとか、押入にしやうとか云ふやうな心掛では、迚も彼奴は話せない奴だと對等の交際はして呉れない、誠に情けない有樣である。

併しこんな國は何處にあるか私は知らない、若し不幸にして私がそんな國に生れたらどうか、併ながら生れたのだから仕方がない、さう云ふ時には吾々文藝に携はる者は、所謂文藝の力を以て其國民を濟度すると云ふ覺悟を有たなければならぬと思ふ、其間に於ては多少の衝突もあり、隨分壓迫をも受けるであらう、所謂泣く子と地頭と云ふこともあるからして、仕方がなしに長い者にはまかれなければならぬ場合があるかも知れないけれども、そこは當分辛棒して、度々疏通する中には自然と目が開いて來て、さうか、成るほど、床の間に飾をして、此處には掛物を掛け、花を活けるにはケチな勸工場で買つた花活はいけぬから、古い薩摩燒か何かを持つて來る、斯う云ふ風に何とか少しは趣味を開發してやられければならぬのであります。

私はさう云ふ國に生れるのは甚だ望ましくない一人であるけれども、若し不幸にしてさう云ふ國に生れたら同じ仲間の驥尾に付て少しは斯う云ふやうにしたいと思ふ、幸にして是れから先、即ち未來の國民を相手にする方の立場に立つて居るから、過去のことは構はない、おぢいさんおばあさんを相手にしない、其處の旦那よりは先づ坊つちやんから濟度してやらうと思ふ、さうすると此小人國も大人國になるであらうと思ふそれまでは殘念ながら吁小人國と言はざるを得ない。

一種の心理狀態

水野葉舟

私は今日此處に出まして斯う云ふことを致しますのが、是れが私が生れて初めての演說でございます、而して私は最近に事件を起しましたものも一人でございます、さて私が皆さんに御話しようと思ひますのは、皆さん方がお幼い時分から屢々御聞きになつたらうと思ひます話でございます。

私共が曾て小供の時に能く老人から聞かされた話の中に斯う云ふことがありました、それは昔或村に長者がありました、そこに一人の娘を養女にしやうとした、所で其の娘を養女にした所が、お父さんお母さんが言ふのには、家の倉に一杯棉が詰つて居る、其の棉を一つお前は紬いて呉れと言はれた、所が其娘は中々無性者でございまして、どうも至つてさう云ふことをするのはいやで堪らない、所で毎日考へ込んで居りまし

た、誰ら考へて見ても仕方がないので、或日の夕方門に立つて居ると、向ふから三人のお婆さんが棉摘歌を歌ひながらやつて來た、そこで其娘は其のお婆さんを呼び止めて色々聞いて見ました所が、其婆さん達が「さう云ふ事なら私達が其棉を紬いてやらう」と言ひました、それから其人達を倉へ連れて來て紬いて貰ひました、一晩經つて見ると云ふと、倉一杯の棉はスッカリ絲になつて居りましたので、其娘は非常に悦んで居りました所が、お婆さん達は何時の間にか見えなくなつて居りました、それてッマ〳〵と其長者の養女になつて大變氣樂な暮しをして居りまると云ふと、或日の夕方又角に立つて居ると向ふから棉摘歌を歌つて三人のお婆さんが來た、見ると自分の賴んだお婆さんである、是は大變だと自分の家へ逃込んで來ました、さうすると其お婆さんが家の戸を開けてズカ〳〵入つて來た、お前のお蔭で斯ふ云ふ風になつたと、お互に其娘を打つたり蹴つたりした爲めに、其の娘はとう〳〵氣絕して仕舞ひました、どう云ふ風になつたかと言ひますと、其三人の中の一人の口が非常に大きくなつて唇が非常に厚くなつた、一人の人は手の指が非常に大きくなつた、一人の人は足の指が非常に大きくなつた、と云ふやうな話を私共の子供の時分に能く聞いたことがある、

それからモウ一つ是は私が曾て出遭つた事でありますが、或時私が家に來ました客を送りました、夜晩く外へ出て、さうして其人の家まで送り屆けて晩くなつて歸つて來ました、そうすると私の家は町外れの郊外てございますが、淋しい所を歸つて來ると、或電信柱の蔭からスーットと人が飛出した私の前に立つて私を呼び止めて、そうして私の職業や、姓名や、年齡などを反問されました、私は其人の問はれるまゝに自分の事を答へました、其の人は私の答を聞いて直ぐに許してくれた、そして丁寧に失禮したと言はれました。私は其やうな事をされたのを當然の事だと思つて別段に何とも思ひませぬ、が、其時に私が其の人から受けた印象と云ふものは、一種言ふに言はれない陰鬱な心持を受けたのでございます、即ち此人々は總て世の中に生きて居るものを以て罪人と見て居られる、如何なる人でも罪人だ、法律の罪人となるべき人だ、唯其の人々が犯罪行爲があるかないかと云ふことに止まるのであつて、總ての人は罪惡を――法律的罪惡を犯すものと見て居ると云ふことを私は感じました、是は吾々世の中に生きて居る上の一種の心理狀態で、私が自分の職業の中に入つて居りますと、自然と其の中に沒頭してしまつた、神經が或一局部にのみ鋭くなつて、各方面のことを受け入れる力を缺いて來るものと私は思ふ何れの方面に對つてもさう云ふ事實が甚だ多いのであります。

所で教養があり、且つ趣味の廣い人は斯う云ふ弊害から免れる事が出來るけれども、多くの人々は自分の職業より外の世界に目の屆くとが非常に少ないと私は思ふ、是れ總て現時の發賣禁止問題を推測する所の一の鍵となるものではあるまいか、察するに近來頻々と行はれて居る所の發賣禁止と云ふことが、其當局者の感情即ち總ての自分の前に來るものが總て風俗を壞亂する、總て社會の秩序を破るもの、總て此幸福を破壞するものと見て居らるるのではないか、絕えずさう云ふものがありはしないかと云ふ心地を以て總てのものに望まれるのではないか、さう云ふ心境、さう云ふ自分の仕事にのみ沒頭して他を顧みるだけの餘裕がないものとしたならば、其人の面前に現はれて來るものにそう云ふ形を備へ、さう云ふ一種の色を帶びて居るものが甚だ多いと云ふことは、是れ免れざることであらうと私は思ふのであります、此の心理的狀態に對しては、それを解釋することを自分の心に思ひ浮べることが少しも不自然とは思はない、けれども此總ての事が其の人々に依つて行はれることが、並に第三者の前に事實となつて現はれる時にはどうてありますか、頗る不自

然なこととして見えはしないか、私は具體的のことに付て此處で言ふことを好みませぬ、併し兎に角此の當局の人々が斯う云ふ風な狀態で望んで居られると云ふことを、私は推測するに難からない事だと思ふ、唯斯う云ふ事實が何等の解釋を與へず、又さう云ふことをせらるゝ上に於て少しも特別に親切に其標準をも與へられないとしたならば、私共は兎も角、此出版をして居る人々の上から言つたならば甚だ不安を感ぜらるゝだらうと私は思ふ。

私は斯う云ふことに向つて、願はくば心を廣くされて――今の當局の方々が心を廣くされて唯單に敵に向ふと云ふやうな態度で之に望まれざることを希望して止まないのであります、私が今日此處に立つて衷心言はんと欲した事は是だけてございます

文藝保護問題

和田垣謙三

私は實は土曜日曜は大抵東京に身體を置かない、五月頃から。殊に家族の一部分が鎌倉地方に始終住つて居る、小さい子供も居る、又可愛い女房も居る、それてこちらに居ると云ふと色々な人がやつて來る、こちらは俗客が多い、デ或は七里ケ濱てあるとか、又は由比ケ濱てあるとか、に出て白砂青松の間に散歩をする、大いに精神を養ふ、誠に結構てある。それて十日程前てあつたが中央公論社の人が來て何か演說をしろと言ふ、日曜は何分東京に居ないのだからお斷りだ、が併し都合に依つては或は東京に用があつて向ふに行かないことがある。事によう云ふことてあつたら出ませう、それても辯士も澤山あるからまア宛にしない方が宜からうと云つて斷つて置いた。デ今一時から開會と云ふのだから大抵五時頃まてはあるものと想像して居つた、――人も來て居つたし、それて來ると云ふともう四五人歸る、是は餘程懸挺だと思つた、所が幸に諸君がまだ此處に居殘りだ、間髪を容れず、何か話をしなければならない。演題はと云つたけれども演題は既に極つて居る、所謂「文藝保護問題」て其外に問題は無からうと思ふ。デ私の出した問題てはない、即ち中央公論が出した問題てあるのです、けれども此問題はてす、前の辯士がどんな事を言はれたか知れないが、英語て言ふとデリケートの問題てある、デリケートと云ふのは好い言葉て日本語ては言へない、けれども何か好い言葉がありますか、デリケート、極く好い言葉てす、デリケート、クエツシヨン、それより好い言葉は無い。それてあるから大抵出鱈目を喋べる吾輩だけれども、今日はちやんと玆に書いてある、何が書いてあるか一向分らない、例の何とか云ふ近頃出て來た錢之助の何かのやうに何にもないかも知れない、あつた所が阿呆陀羅經のやうなものが書いてあるかも知れない。或は辯慶のあたかの關のやうにあたかも有るが如く讀むと云ふのかも知れない。そこて兎に角今日は如何なる日かと云ふと明治四十三年三月十三日てある、それだけ玆に書いてある。

そこて此明治四十三年三月十三日、斯う三が三つ重つて三年三月三日とは抑々奇體なことてある。三と云ふことは何と云ふだらう、英語てはスリーと云ふ、スリーと云ふ言葉に別に面白い意味もない、然し是はフリー(自由)と云ふ字と韻が合ふ、だからして或は此日には多數の人が文藝の自由とか云ふことを言つたかも知れない、又吾輩も言ふかも知れない、獨逸語ては三と云ふことをドライと云ふ、ドライと云ふことは英語ては無味乾燥と云ふことだ、ドライが三つも重なつて居る今日に於て

吾輩が極めて無味乾燥なことを言ふかも知れない。又佛蘭西語では三と云ふことをトロアと云ふ、能くは知らぬけれども多分さうトロアと思ふ、是はどうも何か取らうと云ふやうな怪からぬ音が表はれて居る。まア兎に角三年三月十三日、三つ合せて三三が九てくるしい問題かも知れない、又散々の話かも知れない、が兎に角演題は與へられて居る、即ち「文藝保護問題」と題は出て居る。私は隨分へんてこな問題と思ふ、私は文藝保護問題と云ふことは政略的に列べた問題であつて、人權保護と云ふことを言ひますが之を露骨に言ふならば文藝防害問題と思ふのです。文藝と云ふものは尚詳しく言ふと文學藝術と云ふこと、文學藝術の防害問題である、テ妨害されてはならぬ、だから文藝を保護しやうと云ふのが眞の意味だらうと思ふ。勿論文藝を保護する保護の裏は何かと云ふと先づ放任と云ふこと、打棄つて置くと云ふことだ。そこで吾輩は經濟學を專問として居りますが、經濟學上にも矢張り保護問題と云ふのがある、保護の裏は、放任、放任主義に保護主義。放任主義は一面自由主義です、保護主義は一面干渉主義である、自由主義は之を具體的に言ふと自由貿易論であつて、而して保護干渉主義は所謂保護政策、保護貿易と云ふものであるのです、經濟學では自由、保護或は放任、保護と言つて宜い。是は問題であつて學者が源平と云ふやうな具合にどちらかに旗を擧げる、其議論は甚だ盛であるけれども極く公平に考へて見ると云ふと、天下の事と云ふものは皆な時處位といつて、日本で言ふと時と處と場合と云ふものに依つて定まる、決して杓子定規を以て一を以て有ゆる場合を律することは出來ない、すれば杓子定規になつては必ず過まる、何故なれば社會と云ふものは活物であつて始終動いて居る、だからして矢張り死物的に所謂守株的の標準を以て此活世界に臨むと云ふことは抑々間違つて居る。そこで自由貿易とか或は保護貿易とか各々一理あるけれども、絶對的に如何なる時でも如何なる國でも如何なる場合でも、自由貿易がよいとか保護貿易がよいとか云ふことは偏狭に失する議論である。テ今日の最も公平なる進歩したる所の經濟學は即ち英語で言ふとレラチーブ、絶對的に非ず、相對的に考へて之を判斷せなければならぬとなつて居る、蓋し此自由と云ふことは理想である、アイデヤルである、經濟界でも何でも自由貿易は自由交際である是は理想である、けれども理想と云ふものは何時でも又何處でも手取早く直に之を現實することは出來ない。故に此保護と云ふことも時に取つて即ち一時的の手段である、方便である政策として一つは先づ正道である、一つは權道である、天下一日も正道なかる可からず同時に權道と云ふことも必要である。そこで公平に考へて見れば自由貿易を行ふべき時期もある又場合もある、又保護貿易を執るべき場合も時期もある、如何なる時に如何なる政策を用ゆるか、是は即ち方寸の裡にありと云ふことになる。此文藝の事でも矢張り同じとゝ思ふ、文藝と云ふものは元來神聖なものである、神聖にして冒す可からざるもの、それは文藝の理想である、最も高尙なる文藝は其處である、而して "The pen is mightier than the sword" と云ふことは「一枝の筆は腰間三尺の秋水よりも鋭利なり」、筆の力と云ふものは腕の力、腕力武力よりはもつと強いこともある。所で斯の如く此鋭利なものであるが故に非常に益を爲すけれども又或時には害を爲すこともある、即ち或場合に於ては一國の文藝文化文明と云ふ者がまだ其程度が低くして、政治上から言へばポリチカル、ブレーン、まだ國民の政治的腦髓が柔らかである、或は道德上から言ふとモーラル、パルスと云ふ道義的腦髓と云ふものが弱い、さう云ふ時には或種の文藝と云ふものは治安を妨害する或は風俗風教風儀を攪亂するのでさう云ふ場合には、どうしても相當の規定を設けて之を取締られればならぬ。是は最も公平な論である、即ち經濟界

於ても勿論自由を理想とするけれども、或場合には隨分それに保護税を課する。隨分窮屈な規則を設けると云ふことも必要である、併ながら前言ふ通りに是は所謂相對的の話であります。即ち時處位と云ふものを考へて行ふべきであるが故に、或は昨は是にして今は非なることもある、又此處では斷じて之を行ふ可きことも彼處では斷じて之を行ふ可からずと云ふこともある。一概に文藝の保護とか文藝の自由とか抽象的に獨斷的にアブストラクトにドグマチックに一を以て萬を律するといふことは是は穩かでない。そこで唯だ論理を此處で列べた所で左程面白くない、吾輩は幸に一つの實例を持つて居る、今言ふことを具體的に實例で話して見やうと思ふ。

それは諸君も御承知のことである筈である、即ち數年前まだ西園寺内閣の時代に存外世界の耳目を動かした一の發賣禁止の事件が日本の此東京にあつたのです。それは發賣禁止と云ふことは時々あることで、或は彼の讀んでは見ないけれども「都會」だとか、或は「懸ざめ」であるとか云ふ小說、或は飜譯などでは「モリエール全集、」是は文學士の某と云ふ人が非常に兎に角勉強して上中下と三冊になつて居る、是も私は見たことはないが其中卷か發賣禁止になつたと云ふこともある。「モリエール」と云へば佛蘭西のみならず世界で有名な文豪である、それが其飜譯が發賣禁止になつたと云ふこともある、其時も却て日本人よりは佛蘭西人が驚いて居つた。所が其後に即ち西園寺内閣の末路時代であるが、同じく佛蘭西の文豪の諸君も御承知であらう、彼のゾラ、其人の傑作は澤山ある、其中の一つの所謂「巴里」と云ふのである。其飜譯を骨を折つてした飯田旗軒と云ふ白耳義其他で學問した人、佛蘭西語も出來れば日本語も出來る、それで非常に苦心して飜譯した、而して之を總理大臣西園寺侯爵閣下にデヂケートした、奉獻した、西園寺さんは斯う云ふものが好きだ非常に悦んで誠に結構なものだと云つて一種の讚辭を譯者に贈つた、それを序にして後綱を出した、所がそれが發賣禁止になつて仕舞つた。それで其事がです、あなた方は覺えて居らぬかも知れないが二三年前のことであります、日本の文藝界に於ける一大現象である或は一大問題であると云ふことは、少しも驚くに足らぬことであるが、是が歐米の天地まで此問題が傳はつたのです、殆ど歐米の政治外交界の一大問題となつた。吾輩はちやんと此處に證據物を持つて居る、ル、タムと云ふ新聞を持つて居る、これにチヤンと其事を書いてある。何故僅か一つの飜譯書の發賣禁止が殆ど世界中、而も啻に文藝界のみならず政治界外交界の耳目を聳動さしたかと云ふと、是には一つの事情があつた。それはどう云ふことかと云ふと、ゾラと云ふものは彼此れ十年前程に死んだ、恰度其發賣禁止の頃はゾラが死んでから後約そ六年で生きて居る間は隨分毀譽褒貶相半した、あれ程思切つて自分の所信を述べる人であるから褒貶のあるのは當然である。併ながら此褒貶相半した文豪歿して六年目で、棺を蓋ふて名定まると云ふが、佛蘭西國民も此文豪の偉大なる功勞を認めざるを得なかつた。そこで當時の佛國の議會に於ては此文豪をパンテオンに改葬しやうと云ふことになつた、パンテオンと云ふのは「パン」はパノラマの「パ」で「テオン」と云ふのは神と云ふことです、南無觀世音と云ふやうなことで非常な敬意を表すので、英吉利で云ふウエストミンスターアベー、佛蘭西ではパンテオン、其處にはルーソーとかヴオルテヤとかラシーヌとかモリエルとか色々の人の遺骸が葬つてある。そこでゾラの遺骸を而も國葬の大禮を以て改葬しやうと云ふのである、其爲に數十万法の國葬費が要る、それを支出しやうと云ふことである、大分議論があつた、佛蘭西人は議論が好きで佛蘭西の議會は一番賑かだ、併ながら約そ五百人の議員を有つて居る佛蘭西の議會に於て、約三百五十の

大多數を以てそれを一決したのです、其案が通過した。併し茲に一つ面白いことはゾラの未亡人が當時存命である、是がそれを辭退した、態々書面を以て辭退した、是も多少の見識があるのでせう、けれども兎に角國民が擧つて彼を表彰しやうと云ふのに其厚意に背くも亦宜しくないと云ふので、枉げて遂に之に從つたのです。そこで國葬を以てゾラの遺骸を改葬する、なかなかの騷ぎ、萬民歡呼の聲天地も爲に動くと云ふ、尤も其間に彼のドレフユーを狙撃したピストルの音も幽かに聞へた天の一方に於てはゾラは其時大滿足で、反對黨に向つてぞら見たことか、と言つたかどうか、そら知らぬ。兎に角天の一方に於てはゾラ黨萬歲歡呼の聲天地を動かすと云ふ其時に於て、殆どそれと同時に東洋の一隅に於て其大文豪の其傑作其飜譯而も時の總理大臣が之に向つて讃辭を呈して居る、それが發賣禁止になつたと云ふことだから、佛蘭西の人は勿論世界の人が驚いた。それであちらでもこちらでも談柄に上つた、それが若もゾラが生きて居れば、——生きて居ればそんなことはないけれども若もゾラに耳があつて之を聞き、目があつて之を見、聞きましたならば如何に怒ずるだらう、唯だ呵々として大笑するだらうと思ふ。是は確に一種の喜劇、一種のコメデーである、ゾラ自身の筆でも出來ない所の大コメデーと云ふものが實際社會に演ぜられたのである。そこで西洋に「誰にも好いことを吹送らない風はよくせき惡い風である、」といふ諺あるが、風と云ふものは多少損害を生ずるものである、けれども一利一害で暴風でも何處かには何物か矢張り好いものを吹込んで來ると云ふことで、即ち此ゾラの發賣禁止と云ふことは書肆に對し又飜譯者に取つては一大災難であつたけれども、其時に非常に喜んだ人がある、喜んだ者が一二あるそれは本屋で東京横濱あたりの本屋ではゾラの原書は勿論のと、英譯書を取扱ふ丸善其他の本屋では非常なものであつた、其發賣禁止になりた、「巴里」を讀んで見やう買つて見やうと云ふのでゾラの著書が引つ張凧、あちらでも御用、こちらでも御用それで東京、横濱、神戸とそれぞれ電報で注文する、忽ちにして日本中のゾラの著書と云ふものは品切になつて仕舞つた。吾輩の友人の如きはそれは一つゾラを研究して見やうと云つて其時から大に發奮して佛蘭西語の研究をやり始めた、而して今日では大に熟達してゾラの著書を佛蘭西語で讀んで居る。ゾラの主義は臭い物には蓋をせずに之をさらけ出して天日に照らして、さうして世に彼の言ふ眞理と而して正義と公明で此暗黑世界、陥落世界を清め、之を照さうと云ふ、其高尚なる高遠なるゾラの理想、其抱負、それを見て吾輩の友人は非常に感服して居る、それだから佛蘭西國民は之をパンテオンに葬つたのである、パンテオンに葬ると云ふことは國の譽である。殆ど神である。今年の新年の御題は御承知の通り新年の雪と云ふので御製もありそれぞれある、高崎正風先生、男爵、高崎先生の歌は「空蟬の世を清めむと天津神雪降らすらし年の初めに」と云ふのである、這は高崎先生、最初の「空蟬の」が少し古臭いが「世を清めむと天津神雪降らすらし年の初めに」其精神である、ゾラは雪降らすなり日を照らすなりして此空蟬の世を清めやう、此暗黑の社會を照さうと云ふ、それが彼の抱負であつて、彼は其爲に生き、其爲に働き、其爲に彼は死んだのである。

そこで是はあつた事實だから御話するのですが　之に就て考へて見ると云ふと即ち吾輩の前に言つた放任とか或は保護とか云ふことは、どうしても是はレラチープ的の考を以て行かなければならぬ。即ち佛蘭西ではあの通りに歡迎し尙其德を頌し其功を思つて居る、日本では之を禁止する、即ち時處位と云ふものが違つて居る。併ながらです、一國に於て出版法と云ふものゝあることは是は已むを得ぬ話であるけれども、茲に

もお互に考へなければならぬことは其國の規定であらうと思ふ。それに依つて當局者はずん／＼禁止する、それは宜いけれども餘程心してやらぬと云ふと其結果が却て禁止した爲にそれが天下に歡迎される、秦の火は毫も聖賢の道を亡ぼさずして益々盛にしたではないか、「秦の儒者命なる哉」と云ふ句がある、デ生きた學者は世の中に埋めて仕舞ひ書物は燒いて仕舞つたけれども、火を以ても燒盡すことが出來ず穴を以ても埋盡すことの出來ないものが世の中に在る。それ故に所謂天下の事と云ふものは或意味に於ては古人の言つた「小鮮を煮る如し」小さな魚を煮る如く餘りいじくつては壞れて仕舞ふ。又或人の言つた「重箱で味噌を摺る如し」、重箱で味噌を摺つていけない、重箱のやうな角いものでやつて、それで隅から隅まで楊子でほじくるやうではいけない、其處に意味がある。そこで出版法などと云ふものは小鮮を煮るの志、重箱で味噌を摺るの手加減是が必要であらうと思ふ。即ち健全なる人間はお互の如く俗に云ふ清濁併呑む、毒藥併呑む、毒も藥も一緒に飲むがそれでもびくともしないと云ふのがそれが眞の健康體である。それはどうも駄目だ、それは硬いから駄目だ、これは毒だと云つてやかましく言つたならば、さう云ふ人は屹度青い顔をして居る、他處に行つて辨當を食つたが少しあの辨當は硬かつたと云つて直ぐ病氣だ、何處に行つて寒かつたかどうした、暑かつたからどうした、水を飲んだからと云つて直に腹を下して了ふ。だから貧乏人の子供は丈夫である、お互のやうに、――イヤ是は失敬金持の子供とか華族の子供は弱いと能く人が言ふが、どうも私は丈夫で雨が降つても傘も用ゐない、不養生だと云ふことになるか知らぬがそれが眞の養生である、吾輩は衞生家である、衞生に注意して居る、どうも氣持が惡い是はいかぬ、オイ何か藥を持つて來い、さう云ふ人は極く不衞生家だと思ふ、さう云ふ人に限つて直に腸病でありはせぬかなと云つて自分で病氣を拵へて仕舞ふ。だから病氣と睨めつくらしやう、さう云ふ勢であれば病氣などは逃げて仕舞ふ、それほど身體を鍛へなければならぬ、又それほど精神も鍛へなければならぬ、餘りお母さんが氣を揉んで子供を可愛がつて、さうしてどうも總てのことに、是はいかぬあれはいかぬと云つて御覧なさい、其人間は弱い胃の腑を持つて居つて物を食べれば直にあたる、生理的から言つてもさう云ふ風であるから、多少の不養生をしても、多少の不消化物などは食べても差支ないやうに子供を教育し、國民を導いて行くと云ふことが眞の衞生家のやる可きことであらうと思ふ、是は當局者に向つての希望である。當局は此處に居られるかどうか知らぬけれども、屬官か何かゞ暇だものだから是は危いと云つて自分が感ずる所で極めて仕舞ふ、其人が神經質の人ならば草の葉が動いて居つても直ぐお怪化だと思ふかも知れない それは危險な話で是は先づこゝまでで止めて置きませう。

それで終りに一言、或は半句でも宜い、文士の人が見えると云ふから文藝に從事する人にも私が注文がある。それは勿論文藝と云ふものは神聖なものである、又ある可きであるけれども、彼等が別に深い趣意もなく意味もなく、主義もなく、唯だ自然主義とか社會主義とか云つて左程必要のない事までも書く、さうして一時の人心に投ずるやうなことをするのは是は私は採らぬのです。それはゾラの如きは抱負目的と云ふものが高尚である、それであるから假令幾分か汚ないことを書いても目に付かぬのです。譬へば吾輩も歐羅巴で二三の美術裸體畫とか裸體像とかを見たが、ヴヰーナスであるとか有名な作品と云ふものは實に美なものであつた、其前に立つて見ると云ふと吾々は頭が下る位實に高尚で、少しも不潔の感は起りはしない、實に自然と帽子を脱る、實に敬意を表せざるを得ないやうなものである。デそれだけの手腕を有つて居る人には裸體畫も描けるし裸體像も作れる、又文章も赤裸々のものが出來る、それだけの腕もなく又それだけの理想もなく、唯だ是は今日は肉慾的が流行るからと云ふやうなことで、出鱈目にやると云ふことは面白くない、所謂鵜の眞似をする烏で、夫れ危い哉、先づ是位に一一御免を蒙ります。

濱尾總長と菊地総長

人物評論（四）



△東西兩大學總長

文學博士　三宅雄二郎

濱尾男及び菊地男は教育界の元老である、政治界に於ける元勳に較べられぬが、元老は元老である。併し教育家であるにせよ、特に教育家として認むべきかは疑はしい、ハーヴアード大學總長エリオット、シカゴ大學總長ハーパー、スタンフォルド大學總長ジョルダンが、米國三大教育家と呼ばれたのとは違う、教育家として如何なる特色あるかは急に分り難い。現在の處教育家に相違ないが、一帝國大學の統轄者と見做すべきである。今日學校に統轄者といふ者を要する、必ずしも學校關係の學問に通ぜずして、其學校の統轄者たることを求めらるゝ一種特別の事情の存して居る、正木氏の美術學校に於ける、湯原氏の音樂學校に於ける、澤柳氏の商業學校に於ける、皆さうである、手島氏の工業學校に於けるさへ、尙ほ幾分かさうである、而して手島氏は勿論、澤柳氏、湯原氏孰れも適任と認められる。帝國大學は所謂學術の淵叢であるが、是が總長たるものは學者でなくてもよく、時には學者で無い方がよいとも思はれる、帝國大學と改稱して第一に總長となつたのは學者でない渡邊洪基氏であつた、總長は學者でなくてもよいといふ事が自然に許されて居つた

のであらう。

濱尾男は學者といふ者で無い、順序を履んで教育を受けず、又獨學に骨を折つたとも聞かぬ、見たり聞いたりて多少の知識あるが、若し比較的纏まつたものがあるとすれば、教育制度に關し經驗から得た知識である、男自ら學者を以て居りはせぬ。菊池男は之と違ひ、確に學者である、學才があつて何でも學問のことの分る方である、數學は專門的に修めた丈割合に長じて居る。が專門學を專攻しやうとせず、專攻すれば如何の造詣があつたか、事不明に屬するが、現に男よりも專攻しつゝあるものは他にある。男は教科書の著述はあれど、理科紀要に論文のない處は北尾氏あたりと違つて居る、學才は豐かであつても學者として立つとはいはれぬ、其總長たるも學者としてよりは經歷よりして統轄者となつたのである。帝國大學はそれぞれ專門を修むる處、學術上の事は總長に於て彼れ此れ差圖するに及ばぬ、一通りの事務はあり、時によると繁雜なこともあるが、氣を附ければ隨分忙しく、荒目にして置けば置けぬでもない。中で最も重なる用事は文部省との打合せである、總長に貫目があれば局長次官を初め大臣も聽く、或は首相も聽く、貫目が無ければ局長次官に逃らるゝこともある、其點に於て濱尾男も菊池男も都合がよい、學者一方よりは文部の官吏に納得さすべき事が出來る。言ふことを聽かすといつて左程大した事も無いか、先づ押しが利くのである。

二人共に來歷に於て大學に關係多く、現に之が爲に盡しつゝあるが、本來大學を家とし大學と終始するの意があつたとは言へぬ、二人共に總長より大臣となつて、次いで職を去つた、菊池男は學習院長ともなり、後に大學總長となつても、東京より京都に移つた、一の方針を立て間斷なく之を指して進んだのではない。が今日大學關係の經歷に於て二人に及ぶものはない、古參の順序では加藤、濱尾、故外山、故矢田部、及び菊池といふ順である、辻男も關係あり、九鬼男も關係あり、其他にも幾分の關係あるものが有るが、さう言ふ程の事がない。ところで加藤男は老いた、外山、矢

田部、二氏は亡くなつた、濱尾男と菊池男とは誠に經歴の爭はれぬものと爲つたのである。矢田部氏は大學を罷めて高等師範に轉じ、到底大學總長になれなんだてあらうが、就職の順序に於て菊池男に先んじ、男の教授となる場合に議論を挾んだことがある。後に男が學長となり、氏が教頭であつた時、實に互角の勢てあつた、氏の罷められたに就いて面白くない事情の有つたことは、外山氏が其の追悼演説に述べたのである、とにかく矢田部氏が曾て菊池男と互角の勢てあつたことを記憶して置くべきてある。何に致せ今は就職の順序よりいつて濱尾男及び菊池男に及ぶものがない。

及ぶものがないが、二人は大に性格を異にして居る。濱尾男は所謂寛厚の長者てあつて、職員學生等しく敬服し愛慕する、思邪なき處は大に稱すべきてある。若し大學を念とし延いて國家を念とする者、「又は國家を念とし延いて大學を念とする者ありとせば、」第一に男を推さねばならぬ、男は實に此點に於て人に先ちて憂ひ人に後れて樂むのてある。而して人に親切て能く人の爲に謀る、學問の事を除き大學内に模範的人物を求むれば、差當り男てある、男は立派なる人物てある。菊池男も職員學生に敬服されて居る、併し愛慕さるゝこと斯うは往かぬ、孰れかといへば憚られる、怖れられる、今は漸く圓熟して鋒鋩の露はれぬが何程か氣味惡く感ぜられ、夫の矢田部事件の如きの何時起らぬとも限られんかに考へられて居る。が濱尾男にしても寛厚の長者てありながら、時として決斷する、容易に動かぬことがある、而して人を見ること先入主となるの傾向がある、一度惡いと思ふと何時迄も左樣思ふ樣になる學生時分の事は必ずしも何時迄も後に續かず、或は後に改まり或は大に變ずることもあるが、男は睨んだが最後仲々解けぬ、惡い者は惡いとして置く、併しそれといつてその進路を妨ぐるてもなく、妨ぐるならば先づ便利を與へぬ位の處てある。

濱尾男は決斷して容易に動かぬこともあるが、多くの場合判斷が明白て無い、一方より說を立て、又他の一方より說を立て、眞意の孰れに在るかの判明せぬこ

とがある、これ能く衆を容れ、人に長たる所以てあるが、早きを要する場合に間に合はぬ。菊池男は判斷が早い、事は先き行きする、先づテキパキして居る。しかし濱尾男は事を定めて後之を改め、曖昧になつても人に賤められぬ、却て寛大の處をよく思はれる、菊池男は判斷の宜しきを得ても、面白く思はれぬ事がある、が面白く思はれなくても、判斷が早い、して何事か筋道が立つて居る、何とか言はれながら重きを占めて居るのも偶然てない、相應に學問を修めて彼れ程事務の才あるのは多く例が無い。一得一失あつて各々一の帝國大學に總長たるは好い對照と謂ふべきてある。

若し双方共に思想の似たる所ありとせば、官吏に偏する處に在らう、濱尾男は官に阿るの意なく、常に公平無私を以て居るが、多年官に生活し、習ひ性となつて殆んど盡く官を標準とするに傾く、何ても官てなければならぬ様に思ふと見える。菊池男は之と趣を異にするが、官に重きを置くに於て略ぼ一致する。官は重んずべきに相違なく、官尊民卑といふが別段不思議のあることてないが、秩序の餘り嚴なる社會は進歩せぬ、進歩しても甚だ遲い、活動の盛なる米國の如きを相手にせねばならぬ時、官以外に目を塞ぐ有様ては物足らぬ感じがせぬても無い。自らは官に偏する心持はなからう、卒業生を多く民間に入るゝの必要をも認めて居らうが、之を鼓舞し、誘導するに於て到らぬ處あるといはねばならぬ。帝國大學をして、世界の競爭場裡に於ける日本帝國の須要に應ぜしむに於て、何等か不足ある、緩慢に過ぐる嫌ひがある。總長は單に統轄者たるに止まり、特に青年を導くを要せずとすれば其れ迄てあるが、成るならば最高教育を受けたるものをして十分に能力を發揮せしむる様に導いて然るべきてある。導いたとて目立つて効能の有るべくもないが、冥々裏に影響を及ぼすてあらうと思はれる。外に競爭なく、内に泰平て居れるならば、ひたすら温良に育て上げて差支ないが、競爭の年を追て激烈を加ふる際、今少しく各自猛進する様にすべきてある。青年が惰氣に掩はれて居るは喜ばしい事てない、大學總長の位置は、

之を鼓舞し激勵するに便利ならぬとはせぬ、濱尾男及び菊池男は性來明敏である、此邊の事の分らぬ筈がない、實は既に着手して居るのであつて、廣く知らるゝに至らぬ丈であらう。が併し世界に於ける民族的競爭は日に日に進んで來る、重ねて之を望んで置く。

△濱尾男と菊地男

寺田勇吉

我輩は今日の兩帝國大學總長には、文部省に在職中親しく接したが、菊池大麓男については餘り委しい事を知らぬ。學者で政治家で而かも敏腕家で、且つ神經質の人であると思ふ外、同男爵に對して彼是評論することは出來ない。之に反して濱尾新男は亞米利加の某大學の名譽博士か教授であるが、同男爵は學者ではない。且つ敏腕なる政治家といふ事も出來まい。一言にしていへば溫厚なる君子であると思ふ。

明治七八年の頃から我輩は濱尾男と知つて居る。其後も絕えず接する機會があつたから同男の人となりについて自分の感じて居ることを述べて見やうと思ふ。

扨、今の大學が極めて幼稚で、大學南校といつた時分に、濱尾男は幹事といつたか何といつたか今は其官名を忘れたが、我々は當時大學南校の生徒としてお世話になつた。其頃大學南校には英學部、佛學部、獨逸學部の三部分があつた。確か英學部には今の小村外務大臣、牧野伸顯男、鳩山和夫等の名士が居つた。佛學部には古市、櫻井等の人が居つた。獨逸學部には村岡範爲馳、和田維四郎、中澤岩太、中村彌六や吾輩などが居つた。當時濱尾男を我々が最も苦しめたのは、雇外國人の問題と、賄征伐の事であつた。就中外國人問題には濱尾男は隨分お困りの樣子で、下手な英語で、アイ、アム……、アイ、アム……、アイ、アム………といつて困つた顏をして談判して居つた事を今でも思ひ出す。それから獨佛の學部を廢止して、只一の英學部にすることになつた。我々は英學部に轉ずるのは素志でないから非常に苦情を述べた。さりとて

に行き處もなく、いろ〳〵難問題を提出して濱尾男を困らした。然し濱尾男は如何なることを申し出ても一遍も憤つた事はなく、諄々として佛と獨とを廢止するの止むを得ない事情を述べる。もう何時間でも懇々說諭された。今から考へて見れば、實に親切な人と思ふ。これは獨り吾輩のみぢやない、同男に世話を燒かした人はなか〳〵少くない。今日五十歲前後の人で、當時高い敎育を受けた人で、恐らく濱尾男の世話にならなかつた人は殆んどないといつてもよからうと思ふ。今の牧野伸顯男などは當時至てまだ小さくて、在學者の中で最も弱年であつた。之が爲めに濱尾男は特にいろ〳〵世話をした。其後濱尾男が大學をやめて文部省に入つて局長となり、終に大臣となつて、日本國の敎育行政にもなか〳〵骨を折られた。同男の頭には一番佛蘭西の敎育制度が氣に入つたやうに思はれる。特に大臣に就任された後直ちに佛國の學校に於けるが如く、小學校に至るまで、男女分離敎育が必要であるとの考を持つて居られたやうであつたが、在職の日が淺く、充分に其考を實行することが出來なかつた。後再び東京帝國大學の總長となられて現今に至て居る。昔、いろ〳〵世話になつた人の其子供が、今日又再び大學で同男の世話になつて居る。いはゞ子供と孫までも世話して居るといつてもよいのであつて、現在我輩が大學南校でお世話になつたが、我輩の息子は今日大學に居て復濱尾男のお世話になつて居る。

　要するに濱尾男は、至て公平な人で、よく親切に他人の世話をなし、又なか〳〵の勉强家である。又身體も健全な方で他の人の如く餘り旅行などもせず、別莊なども持て居らぬやうである。酒も飮まず、煙草も用ひず、實に敎育家の模範になる資格のある人と思ふ。然し委しい事は知らぬが、經濟の方面は無頓着なる方であつて富裕であるとは認むることは出來ぬ。又別段道樂もないが、書畫には大いに趣味を持て美術思想に富んで居る人と思ふ。我輩の意見を述ぶれば大略右のやうである。

△濱尾菊地兩總長

○學博士　草莽の人

濱尾といふ人は心の廣い人だ。誰ても容れる。人が濱尾を怒らすといふ事が餘程の困難だ。隨分無禮なことをするものがあつてもなかく怒らない。其人を諄々として説く。其點は實に卓絶して居る。濱尾には長所はいくらもあるが、其點が最も勝れて居る。心の廣い事ては恐らく日本の第一流てあらう。外に一寸あゝいふ人は見當らない。

それから誠心誠意を以て人に接する。これも亦珍らしい。人に惡るい事があれば一日かゝつても二日かゝつても何處までも其人を説く。説き伏せるまでは決して止めない。

又公事と私事と二つある場合には、公事に重きを措いて私事には構はぬといふ風がある。誰でも知つて居る事だが、彼の大學事件の際に、娘が危篤てあつたのを、其れにも拘らず大學の爲めに奔走し、遂に臨終の娘と話もすることが出來なかつたといふやうな事がある。

濱尾にも缺點はない事はない。小さい事は分らぬ人だ。大局を論ずることは敢て人後に落ちぬが細かい事が分らぬ。細かい事てよく人に欺かれ易い。

まア大體を批評すればさういふ風だ。濱尾の人を説く親切振りなどについて例證を擧ぐれば幾らもあるが、擧げれば説かれた人の缺點になるから、それは止めて置く。

菊地といふ人は餘程の才物てあつて、何でもよく分る。從て事務もよく執れる。何か事件があつて菊地に處理せしめると旨くやつて除ける。此點は珍らしい人だと思ふ。又學問には性質(たち)のよい人て、英國あたりても名聲を得て居る。矢張り日本有數の人物てある。

然し濱尾と比較すると人に長たる資格に於てずつと劣る。どうも人が餘り服せない。敢て德に缺けて居るといふ譯てなく、仕事する人の普通、若くは普通以上てあらうが、才が勝て居る爲めか到底濱尾程の人望

ない。これは天下の公評だ。濱尾程心の廣いといふ事もなし、又濱尾程誠心誠意人に接するといふ事もないから、人に長たる資格の劣るも止むを得ぬ事であらう然し才が勝て居るから仕事は出來る。だから京都の如き新らしい處で仕事をするには適任者だらうと思つて居る。然し若し人物の大小を論ずるなら到底濱尾とは比較にならぬ。比較せんとするのが己に間違つて居る。

一言にしていへば濱尾は德の人であつて、菊地は才の人だ。

此二人を合併したら非常にエライ人にならう。天下敵なしであらう。

私は二人共よく知つて居るが、外から見て居るのであるから、他の人の見て居る所と餘り相違はないであらう。然し其相違のない丈け、それ丈け天下の定評であらうと思ふて居る。

△濱尾さんと菊地さん

吉田熊次

濱尾さんは温厚篤實、謹直な、眞摯な人で、飽く迄赤心を以て事に當り、嚴正に公平の立場に立ち處理して行かうと勉むる人であります、此態度で自分に十分に考へた上、さて可なりと信じた事は其儘眞直に行うて行くのです、がそれに對して彼れ此れ意見をいふものがあれば誠心誠意耳を傾けて理由を聽き盡し、其上て又熟慮する、それでもまだ自信を飜すべき十分の理由が發見されなければ、矢張り斷々乎として最初の信ずる儘を守つて動かぬ、又學生などの處分に就いても左樣だ、如何なる事情があつたとしても先づ學校の體面に如何、全體の影響に如何といふ事を唯一の標準として處置されるので、其點から考へていけなければ思ひ切つて決行するといふ風、氏に對しては情實などいふものに何の力もない、情實を排するなどいふは人の上に立つものに取つて當然の事て、取り立て、言ふを

値せぬといへばそれ迄だが、併し左樣は言つても今の社會からすれば情實なるものは仲々力を持つて居て排し切られはせぬ樣だ、其間に立つて質は易い樣だが甚だ難い、此の情實病から能く免がれ得て居る氏の如きは特に推奬の値あると思ふ、曾て氏の大學南校に學長かなんぞをして居る時、何でも生徒が何かの費用の支出を氏に請ふて承諾して貰はうと思つたが、氏の嚴正にして容易に自我を枉げぬ性格は皆が知つて居る、それ故多勢總掛りて根氣で負かしてやらうと企て、交る々々に學長室へ詰め掛けて、甲去れば乙來り、乙去れば丙丁戊巳といふ樣にお晝からして夜の十二時迄も引つ切りなしに談判したが濱尾さんは怯まばこそ、飯も食はずに交る／＼應酬して論伏してやつた、到頭あべこべに生徒の方から根氣負けしたといふ話がある、之は早や誰も知つての話と思ふが、昔から大概ね此類であつた。

凡てが此態度だから教授に人を推選するなどいふことも仲々六かしい、第　に狙ふ所は其人の專門に就いて如何程の能力あるかを見、第二に其人の人格如何を見る、此人格を見ることが甚だ嚴正なので、其品行、德望を考へ、多少なり世間から非難さるべき素質を有し、原因を具して居れば、第一の能力が如何程であらうとも、教授となり師となつて人に臨むの資格なきものと見做すのである、又第一の能力といふ樣な事でも八釜しいので、側から人から誰々をも推選しても、それが果して其專門に於て當代一流の人物であるやといふ事がそもそもの着眼點、それで多少なりと疑はしいと思ふと、此東京でそれ以上の人が有りますまいかと質問する、左樣いはれゝば推選した人も何とも言つて見やう樣がないといふ樣な事がある、凡てが此態度で人選などとなつたら飽く迄價値標準を絶對に置き、それから割り出してばかり考へ、それ以外に何等の情實の侵入を許さぬ、教授會などに出られても常に此態度である、その一々の施設に就いては人々が皆滿足といふ譯には行かぬが、併し態度がこれであるから惡く思ふ譯にはいかぬ、又多少の非難の聲を發つものなきに

しも非ずといふも、元と彼れ丈の大局を取り締つて行く上には、一部々々の細かしい方面に迄萬遍なく行くといふ事は出來るものでない、兎に角總長といへば才氣よりも德望を以て立つべきものである以上は氏の如き人物は誠に其位置に叶つたものと見るべきてあります。古風な道學的など見える方の人、惡く言ふものは頑固で融通が利かぬなどいふも知れねど、私はそれで宜いと思ふ、融通の利く人物は融通を利くを要する位置があるから其位置に就けば宜い、大學總長などいふものは融通の利くを要せぬと思ふから氏の如き人物が其位置を占むる事は却つて望ましいのてある、氏に就いては面白い話がある、大學の裏門の方に理科大學の敎室を作るので地ならし工夫が澤山入り込んて居つたが、仕事をする際に俗謠を歌ひ連れる、何しろ彼等の事てあるから歌ふものも如何はしい猥らなものに相違ない、それが丁度總長の事務室の眞下に當るものだから總長は聞き咎めて、怪しからぬ事だ、苟くも多くの子弟を預かる一國學問の樞府たる帝大の構内に於て斯ゝる鄙俗な鄕聲を發せしめては行かぬとあつて、早速自分の知つて居る係りの技師に意を傳へ、それを止めさせ樣とした、が如何に總長の意思でも執拗に慣れ反情に慣れたる工夫の耳には沒交渉てある、却つて其翌日から一層、事務室の窓下に近く、亂倫聞くに堪えざる俚謠を聲張り上げて歌ひ囃いだといふ事てある、此等は笑へば笑べきだが、氏の品性の仄見えて甚だ敬すべく且つ愛すべき點が存すると思ふ、

それに濱尾さんは内部では仲々八釜しく敎授連を戒めて少しても生徒の利益になる學科なら設けやうとし、又勉強をも勸めるといふ樣に熱心に策勵されるが、外へ向つては先頃新聞にも徵兵猶豫の特典問題て石本次官に掛合つた云々の話が出て居つた如く、凡てが彼の通りて十分に大學そのものを保護し辯護して行くといふ態度てある、此等の點は甚だ總長として美はしい點と思ふ。

それに誰も亦感ずることは、氏は學生をして成るべく、市井の汚濁な空氣に觸れずに、品性を玉成せしめ

様との考から夙に學生集會所の必要を感じ、元との矢張り教師館の跡と思ふが裏門の方に一つそれを設け、其處て色々の集會の出來る様にし、茶を喫み辨當位は取れる様にしてある、更に此次は又池の端に二階建ての大きな集會所を設け、二階は色々な研究會とか、談話會とか、凡て其種類の事に生徒の使へる様にし、下は一寸辨當其他の食物を他から取り寄せて喰べれる様の裝置にしてある、それにも拘らず顧みて總長自身の事務室はと見れば元の教師館をその儘に今尚ほ使用して居られ、外觀からして見すぼらしい、中へ入れば一層穢ならしい處、永らく靴で磨り減らして兎もしたら下へ抜け相な廊下の床、取つ付の十丈が應接間で奥の十疊が事務室だが見るから憐れなものだ、此度は御殿のあたりへ新築されるとやら聞いても居るが、兎に角自分の事は扨て擱いて他の方面に先づ注意を向ける、此邊が何となく美はしい高い人格の發露だと思ふ。

　氏は趣味の人てある、フエノロサ氏などにも付いた人て美術を愛し、其方面の逸話は深く、鑑賞力に富んて居られる、岡倉覺三氏なども曾ては其方て氏の恩顧を受けられたものだ、又教育を愛し、餘程其研究には熱心てあり、曾て洋行された時にも審に佛國の教育界の状況に見て得る所あり、歸來其意見を洩らされた事もあるので、自らも教育の事に於ては餘程任ずる所あるらしく、境遇が許すならば自ら其講座を受持つても見たい位に話されたこともあるとの事だ。

　菊地さんの事はよく知りませぬが、英國て中等教育から受けた人だけあつて凡てが英國風に育ち、先づ英國紳士の好典型を傳へた人と思つて居ます、最初は倫敦てユニヷアシチー、カレッヂ、スクール即ちそれは寄留舍なしのパブリック、スクールてしたがそれに入り、後にはケンブリッヂに轉じてオノラル、コースをもやつた人てす、私の英國に居つた時に氏は日本の教育の大意を講演すべく渡英されたが、單に來賓としてのみてはなく、其趣味風氣の相合する所からとも思ふ、餘程彼地に於て重んぜられて居られた様に思ふ。

　氏は根が數學專攻の人てあるからか、誠に物事に緻

密な人です、教科書調査會なるものがあり、氏は折々京都から出て來られるが、私は修身書の起草を囑托されて居るのでその改正したものが調査に上る、すると氏は事細かに舊教科書と新教科書とを比較し、時には一字一句の相違にも、之は何の理由でといつた調子で質問され具さに其得失を査覈されるといふ風です、私等とて無論新舊の兩方を比較し十分に調べては置く積りなのですが尙ほ氏の摘發を受けることが少くないのです、氏は元は左樣でも無かつた樣だが近年はよく修身書起草所へなど來られては海外の實況などから說き及ぼして家族制度の重んずべく維持すべき由などを諄々として說かれるのです、此邊が一寸矛盾の樣に見える所、卽ち氏は個人の權利を最も重んずる人である、卽ち個人主義を徹底せしむる方面から考へれば團體を重んじ團體の爲に盡す家族制度とは兩立せぬ譯であるが、氏は一身にして共に此兩方面を主張する人、だがこれが矢張り英國流である、英國の紳士といふものが常に何處かに保守的の思想がある、一面に進步一面に保守、一面に個人主義一面に社會主義といふ樣な相反せるものを一身に收めるが、それで能く自分の頭で調和させ差支なく事に處して行くのです、氏も亦左樣いふ風の人ですから自分自身には何等の矛盾もないのです、氏は又一面貴族的な所があると同時に又頗る平民的なのです、之も亦英國紳士の面影あるものと見てよいでせう、私の矢張り修身書の起草を文部省から囑托されて居た頃の事、氏が新に文部大臣となられた時に、是れまでの大臣は皆大臣室で食事をするのであるが菊地新大臣は高等官の食堂へ出て來て我々と一所に卓を圍まれ、一人で喰べてはおいしく無いからなどと言はれた事を記憶して居る、又倫敦へ行かれた時も左樣である、大抵のものなら先づ我々を賴にし遣ふ氣になるが、菊地さんには其樣なことなく切符でも何でも一切自らされた、最も人を賴めばまだるい、それより流暢の英語の使へる身だからといふ考もあるか知らぬが、我々はあべこべに却つて氏の御厄介になつた次第でした、菊地さんに就いて知る處は先づ此位のもので

ほかない。(談話)

△濱尾と菊地

友人　某

私は兩方共よく知つて居る。濱尾とは御維新後からの知合だが、それでも、もう四十年餘りになる。其間極く親しい友人として交際つて居る。人物は實に立派な人物だ。あの人の人となりを簡單にいへば、總ての事を充分念入りに考へる、どんな些細な事でも苟もせぬといふ性質だ。それだから強いて批難をすれば、餘り考へ過ぎる、念を入れ過ぎるといふのであらうと思ふ。其代りには毫釐の過も滅多にないといふ事になる。さうしてあの人は極く物に篤い、人に親切な人だ。友人や或は書生などに對しては充分に世話をする人だ。且つ又極めて公平な人であるから、大學のあの澤山の人を纒めて行くことが出來る。又極く注意深い人だ。一言にしていへば所謂有德の君子であらう。

菊地は私は五十年ばかり前から知つて居る。ずつとあの人の少年時代からよく知つて居る。あの人は餘程の才子だ。矢張り極く注意深い人で、又人にも親切だし、度量も可なりあるから大勢の人を御して行くことも出來る。兩方共何れ劣らざる人物といつてよからうと思ふ。

濱尾はよく考へた上にも考へてやる方だから、物事に毫釐の間違はないが、いくらか物の決斷が遲いといふ事を免れない。菊地も充分行屆くだけの力をつくすが、いくらか鋭い所がある。菊地は先年英國に行て教育勅語を英語で話して、日本の教育をよく彼等に了解出來るやうに親切にやつた。今度は又亞米利加から頼まれて行つた。少年時代から英國に行て居つたから日本の事を外國に知らせるにはなか〳〵得意で、此點など特に我國に利益を與へて居るだらうと思ふ。餘り親しい友人の事で、却て話すこともないやうだから、此位にして置きませう。

△兩大學總長

佐々醒雪

どちらも能くは知りません、濱尾さんなども、只濱尾道路と言はれる位に、大學内の道路を善くしたり、樹木を能く植ゑ込んだり、庭園を能く手を入れる人てある位の事ほか知りません、だが温厚な君子人て且つ潔癖のある人なんてせう、潔癖といつたら、先づ例へば茲に人あり、曾て恩顧を受けた人に對し、今は打絶て無沙汰をして居るといふ丈ても、最う其者の人格を斷定して取るに足らぬ人物とし、如何樣な才能があつても決して左樣な噂のあるものをば用いはせぬといふ人てす、格別事務家といふてもあるまいが、其潔癖其德望が人を統轄して行くに堪えるのてせう、元來大學といふ所は他の諸學校とは違ひ、事務の才などがあつて、却つて已れを用ひ、機敏に働からなどとしたら行けぬのかも知れぬ、各教授が銘々絶對の自由を尊ぶといふ風だから、總長などが權威を振つて自家の意思の儘に律して行からなどといふ事は如何しても出來ぬ、それ故各分科は各分科て思ひ〳〵に働いて居る、各其各分科内とて十分の統　などは望まれぬ、學長其人の力て衆意を纏め樣などとしたとて無駄な努力て左樣行くものてはない、全く各教授の自由に一任するより他はない、從つて總長其人には腕を揮ふ人よりも德望の高い人の方がよい事になる、菊地さんとても同じ事、矢張り腕よりも德を以て駕御して行くのてせう、それは曾て大臣にもなつた人、大臣にもなれた人だから、腕から言つたら濱尾さんより上てもありませう、何と言つても兎に角腕を信じて腕を試みんとした人てすからね、併し京大に居つて重きをなして居る所以はそれよりも寧ろ德を以ててせう、京都といつたら仲々色々の人が居る、谷本富さんなどいふ一方の驍將も居れば前總長の木下謙二さんもまだ京都の地に居る、從つて其派の人も居る、それ等が樣々な主張をするからそれを旨く統轄しやうといふ事は尋常の事てはいかぬ、學長などといつても前に話したと同樣大した權威は振へ

ぬ、各教授の絶對の自由を少しなりとも檢束しやうものなら事である、曾て岡田良平氏が總長になつた時、教授時間に各教室を見舞はつたといふので、總長は我等の教授振りを迄監視せんとするのが怪しからぬ振舞だといつて憤慨し騒ぎ、岡田氏も大に弱つたといふ話、大凡そ此類だから手は着きはせぬ、でも京都は若手の歷々の寄り集りだから學長あたりて統一などと試みる向も有るか知らぬが、東京などでは、迚も行はれぬもので前に見越して斷念めて居るから試み樣などと思つても見ぬ樣だ、此樣なものだから矢張り菊地氏でも、只德を以て砥石になり、駕御して行くより外はあるまい、併し菊地氏の事もよくは知りませぬ、私の山口の高等學校に居つた頃氏が文部大臣てあつて巡回して來られた時に逢つた位のものだからね。(談話筆記)

△濱尾さんと菊地君

法學博士　和田垣謙三

菊地といふ人は一言にしていへばclever and smartな人だ、其外に吾輩は餘り評する言葉を知らない。

濱尾といふ人は度量の非常に大きい人で、ナカ〱六つかしい事をいひ兼ねない大學の諸教授を纏めて、心服させて行く丈けの德望のある人だ。菊地といふ人の人物にはなか〱議論もあらうが、濱尾といふ人には先づ議論はない。大抵の人は濱尾さんというて居る。人物からいへば二人は一寸段が違ふやうである。

濱尾といふ人は青年時代に、お母さんから着物など送つて來ると之を戴いてから着たさうである。さういふ所はなか〱感心だ。

又魚を釣つて居る時に、他の人が濱尾さんの釣場に來て、濱尾さんの釣つた魚籠を引くり廻したが、他の人ならば大抵火のやうに怒るだらうが、濱尾さんはちつとも怒らなかつたといふ話もある。

小村、鳩山、齋藤なども濱尾さんと餘り年は違はぬだらうが、極く昔から濱尾さんは矢張り兄貴分に立てられて居た。何となく人に長たるの德のある人だ。且つ人の事は極めて親切に世話する人だ。

又なかく\いろく\意見のある人で、自説は、どこまでも貫徹しやうとする人だ。

庭園などには餘程趣味があつて、今日の東京大學の正門眞直の途に銀杏樹を植えたのだのも皆濱尾さんのやつた事だ。

餘りよく知つて居るので、却て話がない。

△東西兩大學總長の人格

○學博士　倘左學人

東京京都兩大學總長の人格について比較對照して考へて見ますると、それく\長所もあり、又短所もあるやうに思はれる。濱尾總長はどこから見てもなかく\職務に忠實なる能吏といふべきであらうと思はれる。そして又熱心であるのみならず、本當に人の爲めによく計るといふやうな親切な所があることは誰もよく知つて居る所である。且つ度量が極めて宏い人である、隨分世話になつた人で迷惑をかけたやうな事もあり、又場合によつては隨分侮辱に類したやうな事をしたものもないではない。然しながらさういふ人に對しても濱尾總長は殆んどさういふ事を忘れたのか、若くは念頭に置かないのか——多分念頭に置かないのだらうと思ふが——矢張り事があれば、本當に其人の爲めに計るので、一旦濱尾總長に對して何だか面白からぬ感情を抱いた者でも、終には全く心服して了ふといふ有様である。そこで世間でもよく知つて居るやうに眞に寛厚長者といふ名が當つて居るのである。

一體東京帝國大學は今日では非常に複雜なる大機關となつて居る。そこで、大抵の人は總長の任に當ることは六つかしい。尤も初めは規模も狹小であつたから、左程でもなかつたが、段々大きくなつて、近年は餘程エライ仕事になつたから、大學總長の方が文部大臣などよりか遙かに困難な職務になつた。それは學識ある諸教授を統御するの困難はかりでなく、大學には事務を取扱ふ役人官吏が非常に少ない。文部省には次官、局長其他役人がドッサリ居るからして、それく\

仕事を命令(いひつけ)ることが出來る。大學はそれが出來ないので、總長の職分はなか〳〵容易ではない。事務も亦極めて複雜である。山川君なども數年間總長をして居られるけれども餘程面倒に考へられて居たやうに見受ける。山川君が罷められて後、一部の人は、大學總長といふものは矢張り教授の中から古參の人を選んでやつた方がよからうとの考があつたらしい。けれども教授の傍らに總長などをやれるものではない。傍らでなく專任でも今日の如き大學を整理して行くことはなかなか容易の業でない。濱尾總長は今の大學には年來關係のある人であるからして、又事務に堪能なる人であるからして、總長の職にあることが出來る。其上又前にいつたやうな寛厚長者であつて人望があるから事なきを得て居る次第である。

濱尾總長の短所ともいふべきものを擧ぐれば、第一に餘り話が長くなり過ぎるといふ事である。簡單に濱尾總長と相談するといふ事がなか〳〵六つかしい。餘程時間を備へて、話の長くなることを覺悟の前で行のでなければ濱尾總長とは話が出來にくい。此點は餘程困ることがある。然しこれも近來は餘程以前に比べては、よくなつて來たやうだ。今でも多少其弊はあるにはあるが以前のやうに甚しい事はないやうに見受ける。第二の短所は少し干渉し過ぎる。例へば學長のすることにも餘程干渉して來る。いくらか專制政府のやるやうな感じのする程に手を出し過ぎる。總長がせんでもよい事までもするやうな事で、隨分教授間の感情を害ふやうな事もないでもない。然しながら其れが大した事を起さずに至らぬといふのは畢竟濱尾總長の平素の德の高いが爲めである。人格の點に於て心服するに足る人であるからして、其惡感情も其まゝ消え失せて了ふのである。又濱尾總長の干渉するのは私心あつて然るにあらずして、大學の爲め、國家の爲めさうしなければならぬといふ熱心より來るといふことが分かつてゐるからして、隨分厚かましく干渉しても何等の事がなくして行くのである。それから今一つの短所——短所といふべき程のことでもないかも知れぬが——實は

餘り眞面目過ぎてゆとりがないといふ事てある。例へば嘗て或人が學士會の席て洒落を言つた所が、洒落などを言つてはいかんといつて矢釜しい議論になつた事がある、人の洒落をいふのまても嫌ひて何處までも嚴肅にやつて行く四角四面の人てある。簡單にいへば餘り嚴格過ぎる。然しこれも見樣によつては却てよい事かも知れんし、殊に大學總長としては此方がよいのかも分らない。然し當人も此頃は食卓演説(テーブルスピーチ)などに於ていくらか諧謔などを交へるやうになつたから此點も餘程改まつて來たのてあらう。最近青山胤通博士が支那から歸つて來た時に濱尾總長を初め大學諸教授などを帝國ホテルに招いた。其時の濱尾總長の演説は餘程よく出來て、諧謔などを交へて人を笑はせた。追々食卓演説なども簡單に出來るやうになつて時勢に適するやうに進歩して來たともいへやう。まアさういふ風にいくらか短所と見るべき所もなきにあらずだが、短所は何人にも免れ難き所て、概していへば缺點の少ない人といつてよからう。一言にしていへば事實に熱心にして厭くことを知らざる忠良の官吏といつてよからうと思ふ。

京都の菊地總長は元來、東京理科大學の教授をして居られた人て、學者てある。濱尾總長は學問もあるけれども、教授をされたやうな事はないのて、まア學識ある官吏てある。菊地總長は專門的の智識ある學者てあく。學者が段々事務の方に移つて行つたのだから其點は濱尾總長とは違ふ。濱尾總長は學者といふよりも官吏、事務官といふべく、菊地總長は官吏といふよりは學者てある。けれども段々事務の方に移つて行て、今では事務の方もなか〳〵よく出來る。元來數學家て、其數學に明るい頭腦を學校の財政などの方に向けるからして、なか〳〵旨い所がある。

菊地總長は常識に富んて居る人て、そして又矢張り溫厚の人てある。度量は濱尾總長程寛厚とは考へられないが、交際などにはなか〳〵拔目のない人て、人に接すること誠に穩やかてある。菊地總長はもと幼少の時に英國ケンブリッヂに行て學問をし、數年間あちら

に滯在して居つたから、餘程英國流の處がある。そして概して順境に生長つて來た人である。夫れ故に生活なども英國の紳士流のやうに思ふ。そこは濱尾總長とは大分違ふ。濱尾總長は着物などは隨分粗末なものを着て居らるゝ時がある。さういふ事には餘りかけかまひのない質素な人である。菊地總長の方は衣食住すべて體裁が立派で英國紳士流と思ふ。其代りには濱尾總長よりも、もつと愉快に打解けて話が出來る。つまり氣易い所がある。濱尾總長に至ては何處までも嚴格で、正々堂々と正面から押出す所がある。菊地總長も自分では餘り洒落などはいはぬやうだが、人が目の前で洒落をいつたからといつて、共に笑ふ位のもので別に差障りがない。濱尾總長のやうに嚴格一點張りと見えない。然し何處までも紳士の態度は保つて行かれるので、今日の社會に於ては誠に上品な性格といはなければならぬ。それに菊地總長はなか／＼融通の利く方で數學專門であるけれども、嘗て論理學の著述をされた事もあり、又英文に堪能で、英國の招待を受けて、英國で日本の教育勅語を講演され、又"Japanese Education"といふ可なり大きな本を著述された事もある。又今年は米國のジヒックフアーロンで、日本の文明について演說をするといふやうに、數學から餘程飛び離れた事も旨くやつてのける丈けの技量がある。それにさういふ事をするにしても、餘り駁擊などの起らぬやうにやる。餘程用心深い人で、危險な事をやらぬやうに綿密に計つてやる。これが菊地總長の圓滑に社會を渡つて行く所以だらうと思ふ。

濱尾總長は元來哲學などを好きであるが、總長である間は、忙しくてさういふ方面の研究などを遂げらるゝ暇が少ないであらう。然しさういふ事が好きで、藝術、殊に日本美術に對しては多大の同情を寄せられて居る。美術院派の美術に對しては餘程助を與へられたやうに思ふ。岡倉覺三氏や橋本雅邦翁などは隨分濱尾總長の恩惠を受けたやうに見受ける。一寸考へると美術などは濱尾總長の柄にないやうに思はるゝがなかなかさうでない。日本の美術にはなか／＼興味があつ

て、又一方ならぬ盡力をして居られる。菊地總長は今日までの處では美術の側には趣味あるやうには見受けられぬ。

日本の爲めといふ事には濱尾總長はなか〳〵考へて居らるゝ。而かも頑強に考へて居らるゝ。大和魂といふ言葉は總長の口から聞いた事はないが、まアさういふ風の精神で、日本の爲めなら何處までもやるといふ處が大いにある。そこは山川君と似て居る。山川君と濱尾總長とは大いに違ふやうに見えて、大いに似た所がある。「日本」といふことを頑強に考ふる所など最も似て居る。菊地總長も勿論日本といふ事を考ふる。然し頑強といふ處はない。妥協が出來易い。圓滿巧妙に事をやる。日本の敎育、殊に敎育勅語については菊地總長は大いに大事にせらるゝが、總て相談などに比較的妥協が出來易い。濱尾總長に至ると、說が違ふと妥協が出來ぬ所がある。自說を何處までも突き通すといふ所がある。濱尾總長も別に逆境を經られたといふ事はないやうだが、正直で、そして日本流で、實に職務に鞠躬盡瘁して行く人と見てよい。菊地總長は紳士として世に立ち、よく衆と相容れ、相交つて、甚しきことをなさぬ穩當なる性質の人で、これ亦人の長となつて衆を駕御して行く丈けの才幹は裕にあり、又今後社會に有望なる前途を有する人と見るべきである。(完)

豫約出版

新釋挿圖 近松傑作全集

正價金拾壹圓

坪内逍遙
幸田露伴
島村抱月 共選
水谷不倒 序論
校訂註釋 水谷不倒

菊版三千五百頁
總洋布製頗美本
附錄索引共五冊
本文四號傍訓附
鼇頭註釋圖畫入
寫眞版三十餘面
毎篇解題を附す

豫約規定

申込五月十日限 ◉送本六月より十一月迄に逐次發行

甲種 申込と同時に小包料と共に金七圓

乙種 申込と同時に證據金壹圓及小包料、爾後毎月壹圓七十五錢宛四回 ◉金八圓

小包料 東京市内二十錢内地五十六錢、臺灣樺太一圓卅七錢清韓一圓五十七錢

◉繪入見本 無代送呈

▲近松の評釋に關する空前の大著述也▼

近松の精華たる世話物の全部、時代物の傑作、歌舞伎狂言の代表的作物を網羅し之に綿密なる校訂を加へて總假名附と爲し故事難句狹斜語等は悉く註釋圖解し又古版本の版式、外題、奧附、繪番附等の有らゆる標本を鮮麗の寫眞版と爲す近松研究者の良友、一般家庭の好讀物、書齋の珍たり

▲數十葉の鮮麗なる寫眞版二百餘の木版優美なる裝釘は本書の異彩▼

◉豫約元 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部

取次所 各地書肆

早稻田大

新學年校外生募集

◉本大學講義錄の特色を見よ！

▲世界有數なる大學の監修に係るが故に其内容また卓絶完備す
▲教育界第一流の名士が責任を負うて執筆し懇切到らさる無し
▲教授法は本大學多年の經驗に基き最新式なると同時に最圓熟
▲趣味豐富、文章平易、假名付きなれは何人も容易く讀み得べし
▲正課以外に多くの參考課目を掲載して最新思潮の普及に努む
▲質問係を特設して親切に質義に答へ通信教育の職責を完うす
▲購讀者及び修了者は本大學の入學其他に多大の特典を得らる

入學金不要

(第五回)

早稻田中學講義

貳年修了

四月三日一號發行

▲新時代の青年に完全なる中等教育の素養を與ふ
◉每號の附錄として掲ぐる「新天地」には有益、斬新、多趣味多方面の記事充溢せり
◉現代和洋畫伯の苦心に成れる美麗なる圖畫及び講師肖像、地圖等を每號口繪として掲載す
▲文部省令中學校教授細目に準じて組織的に學課を編成す
◉講義錄中の難語、難句、術語、地名、人名等には懇切なる說明を附し獨習に便す

(第六回)

早稻田商業講義

壹年半修了

四月十日一號發行

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

學講義録

●美麗なる寫眞版又は商業書式（各種手形

▲商業教育の素養を與へ活商人を養成する機關

●實業雜誌に等しき有益多趣味の附錄「小天地」を毎號の講義錄に添ふ

▲商業經營に必要なる學課は悉く之を網羅したり

●詳細なる鼇頭註釋を施して難語、難句、術語等を説明し些の遺憾なからしむ

（第三回）

高等國民教育

壹年修了

五月十二日一號發行

●毎月諸大家の講演になる「課外講義」を別册として發刊し無代配附す

▲何人にも缺く可らざる常識と新知識とを供給す

●學者をも倦ましめず、無學者にも難解の歎なからしむる最新最良講義錄

▲廿世紀的紳士、模範的國民涵養の唯一教育機關

●軍人、宗教家、教育家、地方の素封家、會社員、商店員等に殊に切要

◎各學課表擔當講師及見本つき規則書申込次第無代送呈

政治經濟科　法律科　文學科

四十二年十月開始

大學部三科講義録とも去華採實の新案により壹年半を以て修了せしむ今や第拾參號を發行し益々蔗境に進む入學の好期逸すべからず

規則無代送呈

東京牛込

振替東京一一二三

電話番町三七四　二四二二

早稲田大學出版部

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は之を謝絶す

和歌

尾上柴舟選

○ 三浦暁村

秋の空かのはてもなき透明の國に走りてしみじみ泣かば

眼をとぢてしばし歩みぬ木々の葉のかげ靜なる丘のほとりを

別れ來し夜の寂しさや大海に流るゝ風のたえずきこゆる

うす濁る波にひたりて涙ぐむ曇れる夜のふねのともし灯

波の音悲しく寂しくれはてゝ窓のがらすの扉にひとり凭る

思ひ倦み眺むる窓の外面をばあなしづかにも流れ行く春

一日をからくも經へしかなしみをまたも味はふ夜とはなりぬる

暮れなやむ大河の岸船べりに黄いろくひかる波がしらかな

○ 本間清

緣すひ常にかくしてある時のこころ持ちをばしづかに歎く

野のくまのみどりの上に夕ざれば匂ふておつる物の波形

額へありかすかに海のとほ音あり波うつごとく暮れゆきし空

おだやかに波うねり居るさまをみてしづかに包む哀しみの性

風ふけど其處に落ちゐて月光の千筋みだれず木立にてれる

ひと筋といふに安んじ道をゆくをさなき我等手をとりてゆく

海よ山よ放恣なるたまものの其の廣大を如何にすべきや

なほひとつ海をも忘がく曉のうるむ綠をおもかげにして

○ 小澤柴紘

しづ／＼と桑の畑道を横ぎりきて山ざくら咲く遠の山みる

うつら／＼花の雫にぬれて立つものなつかしき春の夕ぐれ

夕かげの靜かにうごく草原のましろき花に泪流るゝ

いつしかにとらへがたかるうすなやみ胸に湧き來て三月に入る

河面にむかひてみゆる硝子窓夕ざりくれば淡き灯もるゝ

やはらかき春の日匂ふさみどりの野末あかるくなくひばりかな

一列の白楊(ポプラ)さやかに芽ぐみそむ如月朝のうす靑き空

○　　　　藍原小一郎

倦みつかれなほしみじみとあたゝかき日なたぼこしてこの冬をへぬ

あらためて「死」を思ふより痛ましき夕月空の靜かなるかな

水の色枯野流るゝ風の色なつかしう見る白雲のもと

月あかき雨の止みたる更けし夜の一切の事終りける時

そのひと日涙はてなくこぼれける柊の花山茶花の花

悲しめる月草の花靜かにも凋みて寂し白日のもと

○　　　　善波民藏

うら表見えもすきたる僞りを君もよろこび我れも語りぬ

人並の群れを追はれむおそれ故ようなき笑みも親しみもする（朋輩らに）

心をばあざむき慣れて今日は早や物も思はぬうら安さかな

泣くに慣れあざむくになれ生の道あはれこゝまで來は來つれども

かさなれる落葉の中に佇めば涙にうつる霜月の山

悌泣はなほかなしみの極ならず否感情を衒らひてのこと

泣くもよし口笛もよし冬の夜の月にむかふに默せるもよし

○ 橋口喜山

あかつきを海は風吹く櫛入れて君は素足に渚べをゆく

悲しみを味ふことにや、慣れし今宵しづかに冬來るらし

落葉す大樹に倚りて落日の鈍き光りに物おもひする

雨の音風の響きをきゝなれてやすやすねむる伴の君かな

まばらなる楢の木立に月光のあはきがほどをけむのながれぬ

あな野見ゆ青き森見ゆ海も見ゆ君見んとして汽車にわれあり

ひろき野と果てなる山にちりしける月の光りのなつかしき宵

風消えて天地またく死にける宵なり涙しづかにくだる

○ 伊達湖聲

生くるかひなき身ながらも心なほいさゝかものを欲りしてやまず

ありし日のあはき喜び今もなほわつかに殘り心うるほす

よろこびのうせたる胸はいさゝかの悲しみもえず靜けさに居ぬ

おもふまゝ歌はんとしてうたひえぬこの寂しさを人は知らざり

大地のいづこともなくくづるゝが如き音して雪ふり出でぬ

暗き灯のかげにたゞよふ靜寂の中に默してこほろぎをきく

○ 小島ます子

空耳かあらず鶯市の屋に赤き衣など乾しわたす頃

天地にうれしき事の滿ち〳〵て來るが如くも木々ぞ芽吹きぬ

晝近う春の日ざしの暖き藪のおくより鍬の音する

蕗の薹青みて見ゆるなよ竹の垣根さら〳〵霙など降る

春の風のとかなる日を山の土運ぶ馬など思ひいでぬる

○ 天野謙二郎

さながらに落葉のごとくさゝめきてやまぬ心のあ　ましさかな

紫の靄たちまよふ夕ぐれの野をゆく我れと君と語らず

ほのぼのと夜明けぬる頃白楊のならべる岸に君を思へる

世の人とわれの心を隔てたる大いなる川幻に浮く

白き雲たゞよふ杜にしめやかに眞晝の日降る五月一日

さながらに獸のごとくうごめける人の間に生きむと願はず

人みながさうどくごとくさうどきて日をし經ぬればわれ安らけし

赤き青き旗をば振れる踏切の男にも似てもだえをしらず

○　村田光烈

海を前に立てれば心おのづから安けきほどの生のさびしさ

電車待つあまたの人の中に居てふと思ひみぬ海のしづけさ

つくりごと少しばかりはまじへつゝ華やかにいふ君なりしかな

あゝ神よ異なる道を歩み行く性の二人をなどてえらびし

わが歌はまことかあらずいつはりかあらずたゞ／＼この性をうたふ

○　法月紫星

あやまちて朱を點じたる黑筆の穗先ながめて心刺さるる

惡臭の芥の上に人の子はなほもの得むと嬉々とむらがる

いさゝかは眼は近かりきしかあれど眼鏡をかけし誇わすれず

○　西井金羽

うれしさのかぎりをつくしわれはいま思ふことなくさびしかりけり

白き頬あかき唇うかび來ぬ眼とづるまゝに夜ふくるまでに

ほのぐらきちまたの宵のゆきずりの白きおもわのうかびてぞ來る

○　永田崇美

あれはてし家つくろふと木の片を幾度とはこびたらぬ哀しみ

汚れたる石ひろひてもすつる氣にならざるわれも君をすてぬる

よわきおもひ押せどもうきくる桶ふせて水遊びするごとくうきくる

○　高須賀薫

かた〳〵と枯れたる林鵯鳩なけば思はず浮ぶ悲しみの歌

はかなき生その一部なる青春のはや過ぎたるを驚きて見る

○　正木哲夫

少さき目に見し歌の海はるけきにすべしらぬ身はみ手にてそよれ（栗舟先生に呈す）

人みなは背をむけてあざけるをふたりの親は二なく思へる

○　芝野花

はた〳〵と砧うつ音となにがしと呼ばふ聲して秋の日くるゝ

顧みて野に何物か忘れたるこゝちはすれど思ひ得ぬかな

○　池山美穗

縁日の雜沓のがれ靜なる街にいてふとちやるめらをきく

あゝわれもこの天地にさまよへる一人と思ふ夜のさみしさ

○　尾崎渡水

默然と月てる丘に草をしき死せるが如くものを思へる

眞紅なる椿の花を見つめつゝ眞晝靜けき日の光すふ

○　本間鐵伯

迫り來る嘆きのなかに瞬きて雲まだらなる空を仰ぎぬ

山行けば霞にゆるく包まるゝ歡喜のなかの淡き悲しみ

○　嘉多紫濤

石崖の上にさびしき家の燈は干潟の砂の小石照らしぬ

○

知らぬひと燭をかざして我胸の中をひそかに照らしつゝ行く

○　粟田羽衣

嬉しさを嬉しさとせず悲しさを悲しさとする我れとなりにき

○　足立笑也

一しきり細き雨して落葉して柩ゆく道もまた落葉する

○　小野寺翠花

天地に生きて待つべき戀もなし寂しや一人街上を行く

○　上野杏村

喜びて笑ふ瞳もひた泣きて嘆く瞳も一つならずや

○　本山秀

秋晴れや測量小屋の風車ゆるうめぐるが川越に見ゆ

○　大岡綠雨

一もとの紅梅かをる春風にくまなく戸あけ髮結ひて居ぬ

冬の日は霜融け道に木柵の痩せ影みせて淋しく沈む

○

薫風や社の前の大鳥居くゞる緋の帶むらさきの帶

○　田口天水

夕ざれば窓に倚り立ち茫として君をおもふが癖となりぬる

○　寺田漁村

女性てふうすき幕をばすかし見るものゝすべての新たなるかな

○　粟山象光

樂しさは友と伴だちかへり來て火などともして相見たる時

○　菅原迫村

土凍る夜の氣ゆるがして幾輪の荷馬車に和して歌ひとき來る

應募和歌は東京小石川區南町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

朧

高田蝶衣選

草深に船首（ミヨシ）投げたる朧かな　夢筆
桃梗と土偶と語る朧かな　同
鶏を呼ぶ言をかしさの朧かな　同
何蟲を掃ふ馬の尾朧めく　同
おどろ垣交るとも見ゆ蝶朧　同
山驛の寂びを包める朧かな　同
汐さすや貝殻砕く白朧　同
釣船や鉤のむ魚介吐く朧　同
朧なる見えぬ佛にぬかつきぬ　如星
つなぎ馬失ふ馬子や暮朧　同
遠き間に箏の音や樓朧　同
泊らざりしを山路來て悔ゆ朧かな　同
物音は椿落ちしや水おぼろ　同
御鬮引いて迷ひもぞする朧かな　同
花の朧君と逢ふ夜の帷にも　同

花埃箒にたてる朧かな　同
何鳥の襲はん啼きや森朧　朱字樓
閑めける店々や人出朧にて　同
入るゝものに出す物に倉朧かな　同
隱岩にや汐躍る朧かな　同
遅れ秣巡り來て切る朧かな　同
旅人の目に町富める朧かな　同
出はなれて寮の朧や花の奥　嵐舟
裏口は鎖さずの木戸や家朧　同
乳離れに吼ゆる犢や牧おぼろ　同
僞文に女欺すや夜のおぼろ　同
風呂人の衣掛け垣や庭朧　同
法外に焚けば箒も朧かな　同
袖屏風して提灯つけぬ草朧　同
壁の蓑朧濕りのしたゝらん　同
ものゝ香を花とも斷ず朧かな　風水
放牛は何處へ去りし野の朧　同
自修時の默讀に塾の朧かな　同
舟幸を唄へども淋し水おぼろ　同
花人に不時の炊ぎや夕朧　同
繪天井龍の眼の外みな朧　同

長宴に侍して朧を灯せり　柳子
神馬なくと戸々相傳ふ朧かな　同
香に立ちて奇しき大樹の朧かな　同
埋立地底に貝鳴くおぼろかな　同
秉燭に及ぼす閑話庭おぼろ　同
手こたへものの逃げし網の朧かな　同
湖の水ふくるゝ思ふ朧かな　同
遠く呼ぶ人近く居る朧かな　江洲
そらどけの帯に驚く朧かな　同
目笊吊るも魔除事なり軒朧　同
秘して見ん文嘻しさや窪朧　同
戻る猫に歪戸繰ればおぼろかな　同
幻影の鳥飛ぶと見つ朧空　倨人
人魂の漂ふ空か朧照り　同
潮満ちて浮き上る堂の朧かな　同
大艦を海に放つ夜の朧かな　同
檣の灯の届かぬ果は朧かな　同
厨婦囀るが如き盛宴の宿朧　冬木
咿唔異派を罵る如く朧かな　同
花見茶屋洒氣一掃す夕朧　同
風邪藥隠し棄てたる朧かな。　同

干忘れある魚活きておぼろかな　同
旅葛籠底を切られし朧かな　甘泉子
とろゝ溶くごろ／＼摺りも朧かな　同
水門に鮎とる箱おぼろかな　同
間道の物見固むる朧かな　同
夜臼ひけば白う吐く粉の朧かな　不騒
浸しけるを豆の芽ふくや夜の朧　同
茶の出方濃厚をいふ夜の朧　同
家なきに人語めく聲森朧　同
月の暈吉見百穴朧かな　雪花
森の間の御靈屋月も朧かな　同
うもれ沼ありとは見えて野の朧　同
潮眠り藻屑流れぬ朧かな　同
檜襖の鶏刻告げし朧かな　弓堅
桁の蜘蛛衣桁に落ちし朧かな　同
甕破れば秘め證文の朧かな　同
貰ひ忌明けず首途の朧かな　同
橋銭を置かて過ぎ行く朧かな　蛙念子
農具馬具散らせし門のおぼろかな　同
消し忘れ寐し行燈のおぼろかな　同
船を吸ふ渦を恐るゝ朧かな　同

辻講義木の股に置く灯の朧　、恵多庵
鶺魚を落すや水に昏おぼろ　同
水草に細江の底のおぼろかな　同
馬挙けて朧野道を牽き戻る　咄々
雛かくす白さも顔の朧かな　同
居留守ぞと知れど去る門朧かな　同
嫁入りに不浄縄張る朧かな　同
引汐や岩の上なる松朧　月精
空に高く公孫樹の瘤の朧かな　同
瀟湘や一舟空に朧なる　同
洲乗り替え忘れもの呼ぶ舟朧　花扇子
里程半日に逢ひ得るも離情朧かな　同
ものゝ乞ひの下卑る謡や門朧　同
怯心昏く驚きの眼朧かな　幽堂
月夜提灯愚なりと消せば朧かな　同
蝶の夢蜘の幻我が朧　同
朧夜や蘇小が門を叩く人　春溪
何賢ふ桃李の人ぞ園朧　同
朧夜に光る根深の坊主かな　同
大炊殿忙しき夕朧かな　哲郎
水の隈漂ふものゝ漂かな　同

狭き路地を違ふ我家の朧かな　同
人垣の崩れ入りぬる戸の朧　耳山
鳥賣りて軒端に籠の朧かな　同
驛の口軒をおぼろに人だまり　同
棟上の扇に及ぶおぼろかな　珊仙
江にうつる出城の影の朧かな　同
遠き井を汲みに出る夜の朧かな　同
木を白げ詩など書きたる朧かな　素水
夜鳥の塒迷ふや塔朧　同
朧夜や祝き事の荷の先づ着きて　同
疣神に疣戻したる朧かな　坪谷
合言葉云ひて別れし朧かな　同
凧のうなり猶耳にある夜朧　同
先きゆれに石載する機の朧かな　明兮
浮島の風寄りもして朧かな　同
山沼の地震濁りして朧かな　同
うき人の構城めく朧かな　麻生
訪ひ悪き門をゆき來や朧の夜　同
天野邊の酒は心を朧にす　同
憧憬の去りあへず夜見ヶ濱朧　死雖
朧夜や嫦娥の戀もありぬべし　同

戯の神もおはさん朧の夜　同
朧ながら我見て笑みぬ樓の人　唐辛子
日昇るや朧うするゝ法隆寺　同
濱朧網や盗むと叫ばれぬ　同
子を産みし猫見まふ夜や納屋朧　鶴人
蛸壺を沈め廻るや海おぼろ　同
遊び暮れてわが足元や草おぼろ　同
足重き尻切れ草履や草朧　不寐庵
鳥屋迷ひしで鳴く家鴨庭おぼろ　同
繪絹張りし立て掛け框や壁朧　同
宴はてゝ歸れば妻の顏おぼろ　靜流
松原で贓物分けるおぼろかな　同
朧夜や騎馬の夫の美にほるゝ　同
賊頻り垣結ばんとぞ思ふ畑朧　鵜草
遲着きの荷揚げの唄や河岸朧　同
宮の神酒さらふ者あり杜朧　萩泉
子産むてふ石ある森のおぼろかな　同
亡者舟祈りに消えて波おぼろ　雲珠櫻
この瀬戸の渦巻き地獄朧かな　同
朧夜はうれし都の塵ほこり　子唐
朧夜に棹さす水の暑さかな　同

ほの白う動かぬ鶴や庭おぼろ　葭衛
にぶく鳴る海の面や月朧　葭衛
つまづきし狻狗も憂しや野路朧　狼子
朧夜や浮浪のとがめあらんかと　同
耕車見ゆ一望の畑おぼろなり　毬栗城
草むらに夜釣かけての朧かな　同
島札を落しゝ波のおぼろかな　春呂
朧夜や唄はずば馬進まざる　同
酢を買ひて置けば朧に濁りけり　保赤
朧夜を化物徑といふ過ぎぬ　同
彈琴を強ゆ君窓の朧より　牛丸
廢屋の壁白し樹木朧して　同
階前の花も守衛も朧にて　太古
戀といはんに憚もなき朧かな　同
柳の楕柳に返へる曉おぼろ　鳳城
里に來る馬追ひ返へすおぼろ哉　同
忘れ櫂などある平沙朧かな　夢吊
島習ひ夜の葬のおぼろかな　同
(歸郷)懐しや朧に見ゆる狭布の里　奇溪
陰謀の九分に破れしおぼろ哉　同
花朧大願も果てゝ眠りけり　柑鳳

鑄る鐘に水うてば人朧かな　同
通夜人の空泣もあり鐘おぼろ　翠雲
暮るゝ野に荷馬の眼おぼろ哉　同
木遣唄餓鬼も人數の朧かな　亥は生
朧夜を滿願の樽流しけり　同
風ぬるむ浮藻おぼろや諏訪の湖　卯月
鴎飛んで朧に入るや堰の夕　同
室の津や朧漕ぐ舟漕がぬ舟　鹿の子
渡し呼ぶは又狸よな朧なる　同
川に捨てし猫流れなく朧かな　叱竹
夜飯の石喰ひあてしおぼろ哉　同
風出てゝ朧の梢に物の音　痩骨
井戸に落ちし子に騒ぎせる朧かな　同
大寺の屋根の草から朧かな　破鐘
我妻も行燈へだてゝ朧かな　同
櫓から釣瓶下ろすや湖おぼろ　蟷郎
あたふたと朧鴉や雙林寺　同
遠ひゞく晩鐘きくや倚廬朧　宇宙生
茶煙に妻折る花のおぼろかな　同
塑像師像うち毀つ夜のおぼろ　叱咤郎
上げ汐を佃にこぐや月おぼろ　同

酒座避けて濱道歸る朧かな　白雀
酒造るいろは藏とて朧かな　碧潭
焚けばゞしと物呉れ捨てぬ朧夜に　釜洋
江の朧樓船遠くへだたりぬ　青蛙
浄め布橋木にかけて水おぼろ　糸遊王
廻し文垣ごしにやるおぼろかな　秋邨
朧夜や薬うち終へて濕り遣る　里外
知遇得て旅装を解けば窓朧　其蜩
追はれ乞食又來る堂の朧かな　綠童
評もなき人さらはれの沙汰朧　旺癖城
裏木戸や入れ忘れたる牛朧　式山
朧夜にことたくみたる女かな　夏葉
乘り逃げの馬盗人や厩朧　紫竹露
跡かゆし又灸すゑん朧の夜　寸江
阜頭より朧の人の來る見ゆる　長鯨
朧夜や種井の水を見に出づる　翠雨
叩く戸に期せざる人や月おぼろ　芝水
朧夜や三本松にわたり合　水馬
郵便を投げ入れし音や戸朧　鯨醉海
眠たさの史に朧なる浮繪かな　岳童
湖おぼろ渦紋動くに巨魚と知る　夕影

女下駄はいて緒きりし朧かな　平水
朧夜や鴨流れゆく水明り　北海
眞夜中や厨の窓の朧して　宇宙
吾が作の試演見にゆく途朧　茨花
高浪に舵取られけり船朧　不知老

募集課題

木瓜の花　四月十日〆切
粽　五月十日〆切

○規定

一、應募句は淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛郵送の事
一、一人三十句以下の事

正誤

寺響聞けば導師唱ふや大根引　狠子
日殺過ぎて遊ぶが如し大根引　鳴子
おほれ洗ふ音も江漆の月の宿　鯨水

評論

果して違憲なりや

政府は四十二年勅令第二百三十五號を以て、三十九年法律第五十六號(韓國司法事務に關するもの)を廢止したり、日韓協約の結果此の法律を廢止せざる可らざるがために、緊急勅令を以て斯くしたりし也

之に對して議員花井卓藏氏は、政府が議會に事後承諾を求むべきものなりとし、未だ之を提出せざる所以を質問せしに、政府は議會最後の前一日、即ち三月廿二日を以て、法律の効力を持續すべきものは、素より

議會の承諾を求めざる可らずと雖も、廢止の場合には左る必要なしと答辯したり

而して衆議院は翌廿三日、即ち議會最終の日に於て、憲法上政府に於て當然議會の承諾を求むべきものとして速かに之を提出すべしとの政友會提出の決議案をば、全會一致を以て之を通過せしめたり

衆議院の見解によれば、政府の措置は憲法違犯也、而して是れ實に重要なる問題也、政府と衆議院と兩者の見解果して孰れが非なるや

且つ本問題に對して、學識の淵叢たる貴族院が曾て何等の説をも爲さゞりしは何ぞや

法律第五十六號は條約の結果當然廢止さるべきもの也、此の事實に於ては、衆議院平素より一人の異議者あるとなし、但だ政府が議會に事後承諾を求めざるを違憲と做すのみ、即ち手續上の爭ひ也、法律上の爭ひ也、衆議院のいふ所を押詰むれば、若し法律を廢止するに勅令を以てし而して議會の承諾を求むるを要せずとせば、政府は其の欲する每に恣に法律を廢止するを得べしといふに在り、又政府側の言ひ分によれば、議會に於て幸ひに此の法律廢止の勅令を承諾せば可なるも、若し之を承諾せざらん乎、即ち勅令は取消さるゝを得ざるが故に、法律は玆に復活すべくして、條約の結果當然廢止すべき法律をも廢止すると能はざるに至るべし

法律上、其の効力當さに法律の上にあるべき條約より生ずる法律の廢止は、議會の承認を要せざるや否や、今日の問題は玆にあり、吾人は世の學者が其の蘊蓄を傾むけて以て之を討究し解決せんことを望む

政府政黨の不親切

法律第五十六號廢止に就て、政府果して確乎たる信念を有せば、何が故に花井氏の質問に對して速かに答辯せざりしや、其の爭ふ餘地を存せざる閉會間際に答辯するが如き、實に不親切を極むと謂べし

政友會にして、若し政府の事後承諾を求むるを以て當然とせば、何故に早く政府に忠告せざりしや、屢々

交渉し妥協したる政友會にして、一點政府に友情の存するあらば、宜しく注意して可なるべし、花井氏の質問に對しては殆んど意に介せざる體を爲し、閉會當日に至て、咄嗟決議案を提出す、假令政府の答辯其の期に非ざりしとするも、政友會の措置また政府と齊しく不親切を極む、不親切と不親切、以て彼等が憲法上の問題に就ても甚だ不眞面目なるを看取すべき也、吾人は慷して以て慨す、唯だ花井氏のみ始めより此の問題に熱心して、憲法擁護の精神を支持せるは多とせざる可らざる也

議會の成績

第二十六議會は、三月廿三日終了し、廿四日閉院式を行はれたり

此の議會に於て、諸税約一千五百八十餘萬圓を減じ得たるは、吾人の認めて一成功とせざるを得ざる處也、但だ税制整理は、地租輕減のため實行に至らずして、次期まで宿題として之を殘せり、次期議會に於ては、必らず之を成就せしめんと、蓋し國民の希望なるべし

議會が其の議案を決定したりし成績は左の如し

△衆議院

△法律案

政府提出五十九件

可決　五十七件
否決　一件
未決　一件

衆議院提出二十八件

可決　九件
否決　八件
未決　十一件

貴族院議員提出案三件

未決　三件

△承諾を求むる件六件(全部承諾)

△豫算案及豫算外國庫の負擔となるべき契約を爲すを要する件

可決　十八件

△決算一件(可決)

△建議案(三件)

可決　二件
未決　一件

△動議一件(可決)

△請願　百六十六件

採擇　百六十五件

撤回 一件

△衆議員

△政府提出議案 八十一件

内

可決したる者 七十八件

但右の内事後承諾案に於て承諾を與へたる變額一件あり

撤回したる者 二件

未決の者 一件

△本院提出法律案 四十八件

内

可決 二十八件

否決 五件

撤回 六件

未決 九件

△上奏案 一件

可決

△建議案 四十九件

内

可決 四十四件

否決 二件

撤回 一件

未決 二件

△重要動議 二件

可決

以上を合計すれば

本院に提出せられたる議案の總數は百八十一件

内

可決 百五十三件

否決 七件

撤回 九件

未決 十二件

此外

△決算 二件凡て委員會の報告是認

△資格審査の件 一件(同上)

△貴族院の回付案 三件(内一件は同意し二件は同意せざるに決す)

△同院協議會の成案 二件(内一件可決、一件否決)

又請願者の提出せられたるは總數四千二十八件

内

△法律案として可決 一件

△採擇すべしと決したるもの 百二十一件

△政府參考として送附の分 千六百三十七件

△委員會に參考送附 千九百八十件

△委員會に於て否決し又は取下若くは受理せざりしもの 五十八件

△未了のもの 十四件

△又委員會を開きたる日數五十四日委員會開會度數 四百六十六回

内

速記を附したるもの 三百四十四回

質問總數 三十一件

内
答辯(書面)したるもの　十九件
同口頭に依るもの　十二件

普通選擧法否決さる

衆議員は普通選擧法案を否決したり、普通選擧法の可否は實に今言ひ易からず

選擧人の資格に若干の制限を附さんとは、何人も異論なき所とす、制限の第一は年齢也、第二は男女の性也、第三は智識の厚薄也、智識の厚薄は教育の有無に依て多く徴知するの外なきが、教育の外、尙ほ若干の恒産あるを要すべし、玆に於てか財産を以て此等の標準とし、第三の制限を納税額とす

我が國の政治機關には、未だ普通選擧を實施したるものあらず、町村會議員にすら未だ普通選擧を行はずして、市町村公民にすら、尙ほ若干の制限を存する今日、直ちに衆議院議員に普通選擧を行はんとは頗ぶる考慮を要すべし、先づ市町村會に之を試みて然る後、府縣會議員に及ぼし、最後に衆議院議員に及ぼすを順序とす

財産制限を以て、教育を無視するものと做すが如きは、一片の矯語のみ、常識ある人の口にすべき所ならず、衆議院か普通選擧法案を否決したるは其の當を得たりとせざる可らず

電氣事業法成立せず

政府提出の電氣事業法案に對し、衆議院の多數黨たる政友會は、其の第六條を削除して通過せしめたる、第六條は電氣業者が其の料金を變更せんとする等の場合に於て、監督官廳の認可を要すとする個條にして、獨占業の利益壟斷を豫防すべき一方法に外ならずして、本法中最要の條文とす

貴族院に於ては、此の第六條を復活し、而して兩院協議會に於て貴族院五に對する十四の多數を以て通過したるも、政友會は衆議院の本議に於て之を否決したるに由り、法案は竟に不成立となれり

政友會員の中に在ても、第六條存置說實は多數なり

き、然るに强ひて之を削除せるは他なし、其の總務原敬氏が遞信次官田健二郎氏と爭へる結果のみ、政友會員の或るものは、原氏が關係たる一次官を相手とするの大人氣なきを嘆惜せるも、然かも氏の面皮を損するに忍びず、强て之を否決したりしといへり、然れども多數を恃みて非を遂ぐるの誹は到底之を免かる可らず、政友會たるもの、原氏たるもの、深く注意せざる可らざる也

黨論の弊

政黨は議會をして議論倒れと爲らしめざる一種の矯弊機關たり、然れども事々物々黨議とし、黨議とす可らず、又黨議とするに足らざるものをも黨議とするも、亦一種の弊なりとせざる可らず

政治問題、殊に政府及び政黨の死命を制すべき重要問題に在ては、黨議を以て之に臨むと當然也、然れども單純なる法律問題の如きは、寧ろ自由決議と爲すを當然とす、彼の電氣事業法第六條の如きも、實に單純なる法律問題也、黨議とすべき性質のものに非ず、若し黨議とせずんば、優に衆議院をも通過して成立すべかりしもの也

政友會の如きは、殊に黨議の弊に鑑みて可也

外人土地所有權問題

議會は竟に外人に土地所有權を許すの法律案を成立せしめたり

本案が近く來るべき條約改正に於て、必要なる一の條件たるは論を俟たず、從つて政府が議會の通過に努めたるなど之を諒とせざる可らず、然れども早く之を提出して、學問と經驗とに富める貴族院をして、十二分に愼重なる討議と攻究とを盡さしめざりしは、吾人の切に遺憾とする所也

吾人は素より外國人に土地を所有せしむるに反對するものに非ず、之を外交資料として有力なるものとせんには、相手國に對して許否し、若くば制限するの自由を保留せざる可らず、即ち此の法に於て之を相互的

内
答辯（書面）したるもの　十九件
同口頭に依るもの　十二件

普通撰擧法否決さる

衆議員は普通選擧法案を否決したり、普通選擧法の可否は實に今言ひ易からず

選擧人の資格に若干の制限を附さんとは、何人も異論なき所とす、制限の第一は年齡也、第二は男女の性也、第三は智識の厚薄也、智識の厚薄は教育の有無に依て多く徵知するの外なきが、教育の外、尙ほ若干の恒產あるを要すべし、玆に於てか財產を以て此等の標準とし、第三の制限を納稅額とす

我が國の政治機關には、未だ普通選擧を實施したるものあらず、町村會議員にすら未だ普通選擧を行はずして、市町村公民にすら、尙ほ若干の制限を存する今日、直ちに衆議院議員に普通選擧を行はんとは頗ぶる考慮を要すべし、先づ市町村會に之を試みて然る後、府縣會議員に及ぼし、最後に衆議院議員に及ぼすを順序とす

財產制限を以て、教育を無視するものと做すが如きは、一片の矯語のみ、常識ある人の口にすべき所ならず、衆議院か普通選擧法案を否決したるは其の當を得たりとせざる可らず

電氣事業法成立せず

政府提出の電氣事業法案に對し、衆議院の多數黨たる政友會は、其の第六條を削除して通過せしめたる、第六條は電氣業者が其の料金を變更せんとする等の場合に於て、監督官廳の認可を要すとする個條にして、獨占業の利益壟斷を豫防すべき一方法に外ならずして、本法中最要の條文とす

貴族院に於ては、此の第六條を復活し、而して兩院協議會に於て貴族院五に對する十四の多數を以て通過したるも、政友會は衆議院の本議に於て之を否決したるに由り、法案は竟に不成立となれり

政友會員の中に在ても、第六條存置說實は多數なり

き、然るに強ひて之を削除せるは他なし、其の總務原敬氏が遞信次官田健二郎氏と爭へる結果のみ、政友會員の或るものは、原氏が屬僚たる一次官を相手とするの大人氣なきを嘆惜せるも、然かも氏の面皮を損するに忍びず、強て之を否決したりしといへり、然れども多數を恃みて非を遂ぐるの誹は到底之を免かる可らず、政友會たるもの、原氏たるもの、深く注意せざる可らざる也

黨論の弊

政黨は議會をして議論倒れと爲らしめざる一種の矯弊機關たり、然れども事々物々黨議とし、黨議とす可らず、又黨議とするに足らざるものをも黨議とするも、亦一種の弊なりとせざる可らず

政治問題、殊に政府及び政黨の死命を制すべき重要問題に在ては、黨議を以て之に臨むと當然也、然れども單純なる法律問題の如きは、寧ろ自由決議と爲すを當然とす、彼の電氣事業法第六條の如きも、實に單純なる法律問題也、黨議とすべき性質のものに非ず、若し黨議とせずんば、優に衆議院をも通過して成立すべかりしもの也

政友會の如きは、殊に黨議の弊に鑑みて可也

外人土地所有權問題

議會は竟に外人に土地所有權を許すの法律案を成立せしめたり

本案が近く來るべき條約改正に於て、必要なる一の條件たるは論を俟たず、從つて政府が議會の通過に努めたるなど之を諒とせざる可らず、然れども早く之を提出して、學問と經驗とに富める貴族院をして、十二分に愼重なる討議と攻究とを盡さしめざりしは、吾人の切に遺憾とする所也

吾人は素より外國人に土地を所有せしむるに反對するものに非ず、之を外交資料として有力なるものとせんには、相手國に對して許否し、若くば制限するの自由を保留せざる可らず、即ち此の法に於て之を相互

としたるは甚だ可なるも、彼の米國の如き國柄に對しては如何なるや、是れ實に問題たらざる可らず

米國には、州毎に法律ありて中央政府も之を動かすことを得ず、中央政府の締結せる條約と雖も、竟に州の法律を動かすこと能はずして、往々ヂレンマに陷ることあり、而して各州の中、外國人に全く土地所有權を許さゞる所あり、殊に日本人を蒙古人として、其の歸化をすら許さゞる州に在ては、絕對に日本人に土地所有權を與ふるに至らず、此等に對して、我れは果して土地所有權を與ふべきや否や、當さに多く攻究を要すべき點ならずや

法律は既に成立せりと雖も、之を實際に應用することは、政府勅令を以て之を定むるの餘裕を有す、吾人玆に於てか深く政府の細密なる注意を求めて、以て悔を後に貽さゞらんことを促さゞるを得ざる也、既に條約を締結する以上、容易に之を變更す可らずして、弊害あるも竟に奈何ともする能はざれば也

日清親交の一兆

清國攝政王の同胞たる載濤貝勒殿下、外遊の途次我が國に立寄らるゝや、官民共に送迎に懇欵を極む、吾人は我が國民の多數が日清親交の必要を覺知して、彼の國皇室の懿親を迎ふるに、禮と情とを盡すに寸分の遺憾なかりしを悦ぶ、日清親交は實に國民的也、然り、清國民の多數は知らず、我が帝國々民は齊しく心より之を自覺せり、其の將來に好影響を生ずるや期して俟つべき也

我が實業界の名士は、亦南京博覽會を期とし、來る七月清國に到り、各都市を巡訪せんとす、是れ亦我が國民の誠意を隣交の友國民に表彰する好機會なるべし

韓國統監の不人望

桂系の譜代黨たる中央俱樂部は、韓國統監曾禰子の不適任なるを鳴らし、其の更迭を桂首相に迫る所あり、彼等の主張する所によれば(一)統監が二ヶ月に於

りて歸任せざるは曠職に近し、(二)、日韓合邦の建議を即時却下したるに拘らず、非合邦の建議を受理して本國政府の意向を聞くに及び、三ヶ月の後始めて之を却下したるは、統監府自から排日派に與せるに齊し、(三)米國コールブランが韓國王室に支拂ふべき七十萬圓を横領し、玉璽をさへ濫造したる形跡あるも、統監府が之を不問に措くは威信を失へる也、(四)宋秉畯が中樞院顧問に任ぜられたる手續に失當のとなきも、統監府が之を問はざるは、韓國監督の責任を空ふするものなりといふに在り、而して桂首相は『略々同感なるも、別に成竹あり、余を信ぜは姑らく貸すに時日を以てせよ』と答辯したりといふ、日韓合邦問題に斷乎たる威信を示さず、却つて地方政改革案を以てお茶を濁さんとしたる統監府の失體は、玆に至て掩ふ可らず

思ふに曾禰子は德餘りあつて斷足らず、部下に好參謀と順良なる吏僚とあれば、始て政蹟を擧げ得べしと雖も、然らざれば甚だしく失敗する掛念あり、伊藤公の後を承けては殊に然りとす、岡、石塚の諸僚は、竟に曾禰子を累まれるもの乎

第二回國債借換

政府は四分利附を以て曩に一億圓の國債を借換たるが、其の第二回として更に一億圓の借換を行はんとす、是れ亦成功すべきや疑ひ無し

但だ外國市場に於ける我が國債の借換は、未だ俄かに行はる可らず、英國の中央銀行たる英蘭銀行は、近く金利を四分まで引上げたれば也、然れども英蘭銀行の金利は隨時之を昂低して臨機に處す、其の四分率が永く繼續せられずして、應て三分に引下げらるゝ秋あるや言を俟たず、此の場合に至らば、借換は竟に首尾能く行はるべき乎、吾人は其の機會の最も速かに現ぜんとを待望す

政界逸聞

▲我が畏き御邊には、始めて大臣に任ぜられた人々に對して、一種の試驗を行はせられたものだ▲素より

其の人々の履歴から性質や嗜好までも、豫め篤と御調査あらせられて、偕て拜謁を許させられる時、不意に其の人に應じて質問を御連發あらせられる▲伊藤公の如きは存知するものならば明白に奏答するけれど、知らぬとは、存知仕まつらざるゆゑ追て取調べの上言上仕つると奏して、退出後一生懸命に調べ上げて答奏する▲陛下には素より答奏する位ゐのとは御承知てあらせ玉ふけれど、伊藤の仕方は如何にも神妙て、大臣輔佐の體があるといふので、深く御信賴あらせられた▲大隈伯は御下問に對して、例の流義て、口から出任せにペラ〳〵奏上するから、跡て 陛下は、大隈はドウも當てにならぬ點があると仰せられて、伊藤公等ほど御信賴がなかッた▲今はさる御試みはあらせられぬが、併し御聰明は恐ろしい程て、西園寺侯が時に脱帽するとを失念して、御居間に罷出るとがある程、其れ程御親しくは在らせらるゝが、原松田の手合に至ては、時に御詞さへ賜はらぬとがある、是には流石の人々も恐れ入つて、奈何ともするとが出來ぬ、黨人原が宮中の御信任如何を眼中に措かぬなどは、實に政治の骨法を辨へぬものと謂て宜い▲政友會の張良陳平といはれる岡崎邦輔君曰く『桂侯は素より西園寺侯の如き堂々たる風度が無い、併し理財のとに精通し、八面に應酬して流るゝが如く、尙ほ且つ綽々として餘裕ある處、到底西園寺侯の及ばぬ所て、實に面憎い程てある▲他の大臣も小松原と岡部とを除けば、實に立派なものて、大浦などは實に敵ながら天晴れな大臣てある、此樣な内閣は先づ容易に見られない理想的に近いものだ』

(以上XY生)

南米獨立百年祭

軍艦生駒、萬里の波濤を蹴つて南米亞爾然丁に向ふ、說くもの曰く、是我國が亞爾然丁獨立百年の大祭に向つて祝意を表せんと欲する也と、

然かも顧みて想へば一九一〇年は北南米舊西班牙領一般の獨立百年祭期にして亞爾然丁一國の祝祭期にあらざる也、墨耳哥の叛亂も一八一〇年に在り、コロム

ビヤ、智利、委奈瑞拉等が義旗を揭げたるも一八一〇年に在り、就中エクエドア（コロムビヤより分離せる一國）の如きは巳に昨秋を以て百年祭を擧行せり、吾人は是時に當つて自ら思ひを當年西班牙の壓制政治に及ぼし、名將ボリヷー以下、櫛風沐雨、身命を抛つて民衆の救助に盡したるを欽慕せざるを得ざる也、

然りと雖も茲に問はんとする所一あり、何ぞや、南米人民は果して獨立を得、共和政治を得、立憲政治を得たるが爲めに亦其積年の希望たりし自由政治を得たる乎是也、乞ふ南米の學者（キヤムポ博士）をして自ら語らしめよ、

『亞爾然丁に在りては共和國的憲法も其運用の非なるが爲め專制政治同樣となれり、大統領選擧も、州知事若くば議員選擧も皆一種の芝居なり、大統領を選擧するものは多く前大統領なり、議員を選擧するものは其實州知事なり、其政治は實際に於て寡頭の專制政治也』

是建國當時の理想と精神とに比すれば洵に以て慘憺の極也、更らに恐らくは其獨り亞爾然丁の例たるに止まらずして南米諸邦滔々悉く是なることを、

敢て問ふ、最近絕大の經濟的發達を遂げ、就中世界無比の「アンデス」山隧道(トンネル)大工事を成就して舊世界を驚かしたる南米は獨り政治に於て昔年の理想を放棄して恬然たる乎、

露國新政黨組織

我國に在りては立憲國民黨成り、露國に在りては全露國民同盟成る、其共に「ナショナリスト」と稱するに至つては則ち一なり、數黨派の新合同たるに至つても亦た一なり、

露國ナショナリスト黨は舊來の極右黨、右黨（穩和黨）及國民黨等より成り下院議員三分一以上を含む、蓋し純然たる現政府の御味方黨と謂ふを得可し、其綱領に曰く、本黨は輿論を健全なる愛國心の結晶たらしめ、同時に露人ならざる露國臣民にも壓制を及ぼざるを期すと、左れど別約に曰く本黨員は猶太人、波蘭人、

等に均等の待遇を許すの主義に背く主張をなすことを得と、以て其主張綱領等が如何に矛盾撞着に充たされつゝあるかを知る可き也、
　吁嗟首相ストリキビン伯は、斯くの如き官僚黨を恃んで何事を遂げ得可しと信じつゝありや

レッドモンド

　英國政界は今や正さに愛蘭黨得意の時代也、従つて亦黨首ジョン、レッドモンド得意の時代也、
　レッドモンドとは誰ぞ、彼はパーネルの如く名門の出たり、演説に長せざれども精緻の眼識、透明の頭腦を備へ、加ふるに黨首第一の重要資格たる「組織力」を有す、二十年前パーネル姦通事件あり、愛蘭黨四分五裂するや之を調和し、合併し又々有力なる一黨となさしめたるものは實に彼の力也、然れども常に公明正大を旨とし、妄りに小策を用ゐず、是則ち彼が味方に敬慕せられ、敵に尊重せらるゝ所以にあらざる乎
遂真、愛蘭自治運動の成否に到ては自ら別問題たら

ざるを得ず、何ぞや英倫人民は之を好まず、否な之を許さんよりは寧ろ再總選擧を可とせんも知る可からざればなり、

普魯西選擧法改正

　普魯西代議院、選擧法改正案を通過す、其内容を傳ふるもの曰く、依然財産額を標準として選擧人を三級に分つの制度を維持し、又間接選擧法を繼續せり、唯重大の變更を加へたるは記名投票を無記名となしたる而已と
　無記名投票を定めたるは太だ善し、普魯西政府が記名制に乘して官吏を壓迫し、御味方黨に投票せしめつゝありたるは實に獨逸憲政の一大汚點也、就中宰相ホルウエヒ氏が今春議會に於て波蘭人に投票せる官吏の免黜を公言して憚らざりしが如きは近來の醜怪現象也、然かも同議會の多數黨たる保守、中央兩黨は何が故に百尺竿頭一歩を進めて三級選擧制を打破し、市郡議員數分配割合を變更せざりしぞ

之を詮するに今日の普國議會は農民の議會、郡村の議會にして、商工業者と都市とは殆んど與らず、將た富豪の議會にして平民は與らず、左れど是豈獨り普國の例と曰はん哉、

巴爾幹同盟

巴爾幹同盟說紛々たり、曰く露勃兩帝會見、曰く塞國外相君府行、曰く勃塞調和、曰く墺土兩國憤怒、曰く何々と、世人は寧ろ其報道の煩しきに耐え得ざらんとす、

若し此同盟にして成立せんか、是墺國東進の勢を防遏するの効果偉大ならむ、雖然過去に於て嫉視、鬪爭是れ事とせる諸小邦を合一する亦容易ならざる可きを奈何

埃及首相暗殺

埃及首相ブウトロス、パーシャ、靑年埃及黨員の爲めに暗殺せらる、刺客辨じて曰く、彼は英國に買はれて埃及人を壓制し、其自由を賣り、國民を售りたりと

借問す、埃及に「自由」なるものの存ぜることある乎、

モルガンの活動

近來目覺ましきは米國財界の王、モルガンの活動とす彼や新たにエクエタブル生命保險會社を支配し、三大信托會社を合併して「ギャランテー、ツラスト、コムパニー」を組織し、極力金融準備を謀りて、徐ろに那邊にか雄飛する所あらんとす、

那邊とは何處ぞ、是野暮臭き詮議也、記憶せよモルガンは米國對淸シンヂケートの發起者兼總大將たることを、更らに記憶せよ、頃日盛んに排日說を稱へたる猶太人資本家シイフの如きも、今春モルガンの大風呂敷に包み込まれたるクーン、ロブ銀行の重役たることを

何處までも露國

佛國洪水は歐洲近來の大禍厄、家を失ひ飢に泣く

民人萬を以て數ふ、然かも其同盟國の首府、聖彼得斯堡市會は之が爲めに義捐金の募集をなさずして却て言ふ「巴里は著名なる富裕の都會也、吾人は其容易に此災難に處し得るを疑はず」と

若し之を以て倫敦市、若くば佛國と仲善からぬ獨逸首都伯林市會が逸早く救濟金を醵集し送附せると比較すれば、抑も何等の奇なる對照ぞや。吁嗟露國は何處までも露國也、

（備考、露都市會が如上の決議をなしたる後、世論の攻撃あり、依つて其後止む無く音樂會を開催したの其純益を巴里に送ることゝせりとの說あり）

印度財政難

印度豫算發表せらる、其内容を檢するに銀輸入税の新設、酒税、煙草税、石油税、株式取引印紙税等の増徴あり、又一千萬圓の公債募集あり、財政係ウヰルソン氏演說して曰く、印度は富國にあらず、多數の人民は貧窮也、政府は此案を出さゞるを得ざるを悲む、唯立法參議院議員諸君の同情を仰ぐ而已と、

何ぞ其聲の哀々たるや、

（備考、印度財政困難の原因は重に、對清阿片輸出減滅協約の結果年々政府收入減小するに在り）

西藏問題

西藏敎主達賴喇嘛、清兵の狂暴を憤つて印度に奔る沿道の人民簞食壺漿之を迎へ、其カルカッタ府に入るや、印度總督の馬車は實に其乘用の馬車なりき、

知らず印度政府は何が故に斯く迄に西藏敎主を歡待する乎、是多少印度が佛敎國たる關係にも基因せるならんが、吾人は寧ろその意の對藏貿易發展を謀るにあるに見ずんばあらず、蓋し一九〇四年ヤングハスバンド遠征隊が些細の口實を捕へて長驅喇薩に入りたる、將た一九〇七年英露協商中西藏問題を含めたる、是皆英人が貿易の自由的發展を熱望したる結果のみ、然かも今回の歡待を見て直ちに英國政府が敎主の爲め對清談判の依頼を容る可しとは中々思はれず、少くとも今後西藏の騷擾烈しく、累を商運に及ぼすが如きことと之

なき限りは先づ以て難からむ、
然りと雖も淸國が駐藏大臣趙爾豐、同恩宗堯の徒に命じて盛んに達賴喇嘛を威嚇し、全然其政權を剝奪せんと試みたるに到ては、吾人は其志を憐んで其行を卑しとせざるを得ず、思ふに西藏や歴露國の覬覦する所となり、密使幾回となく刺薩露都間を往事せり、其今日稍事なきを得るものは則ち英露協商の賜のみ、將た現露國外相イスウォルスキー氏の平和策の賜のみ、淸國が此好時機を逸せず其政權を確立し將來他國の呑噬を免れんとするは情正に然る可き所也、唯惜らくは妄りに不規律の軍隊を西藏に派し、亂業暴行、僧侶を殺し、民財を奪ひ、求められざるに態々民信を失ふの機會を造りつゝあることを、斯くの如くにして喇嘛の政權を收むとせんか、根底民心の上にあらず、何ぞ能く久しく平安ならん哉、
之を要するに淸國の西藏政策は目的に於て不可ならざるも方法に於ては大に誤れり、然かも今日に於て之を改むる未だ必らずしも遲しとせざるなり、

阿片禁止成効の機

昨年に於ける淸國阿片禁止運動、大に成効せりと傳ふるものあり、蓋し淸國の爲めに慶す可し、
唯恐る、英國公使館附醫師ゲリー氏報告の所謂「官吏禁烟者八割、平人禁烟者三割減小」は形式的減小にして實質的減小にあらざることを、將た阿片產地中最大の地位を占むる四川省に於て栽培減小の實蹟無きは是則ち淸國中央政府の命令が未だ普く地方官に遵奉せられざるの證なることを、然らば則ち誰か淸國阿片禁止成功の機會迫れるを斷ずるものぞや

新刊批評

▲屏風仕立世界地圖　三省堂藏版

世界地圖を丈五尺七寸二枚折の屏風に仕立てたもので、それには金箔表裝と緞子表裝との二種あるが何れも念入に出來たもの圖中の鮮かなる色彩と相映發する處、殊に實益を兼ねたる室内裝飾の一新意匠と信ずる

地圖は Andrees Handatlas; Stieler Grundatlas; Philips, Handy Volume Atlas; Times Atlas といふが如き歐米に專ら行はるゝ最近の地圖とそれに淸韓の實測圖とを根據とし、ステーツマン、エーヤブックを初め各種の統計年表、最近の諸報告書、並に學者、探險家の調査等を參考したるもの、斯くて成るべく最近の事實の網羅を勉めたる跡は明瞭に圖上に看取される更に親切なのは、世界現下の形勢に照して最も大問題の埋伏する處、五大州の視線を一處に集めて居ると見らるべき處、即ち西歐は地中海を隔てて亞弗利加亞細亞と相對峙せる一帶の地域極東は支那東部より滿州、朝鮮、日本を包める一帶の地域を特に別圖して擴大したものを添へた事、及び南北兩極圖、雨量、風位、海流圖、水產農產圖及び礦業商業發達圖等をも其上に加へた事である、これの成るには數名の專門家を聘して數年の日子を費した上に尙ほ聞く處では、綿密にも綿密を尊び一寸でも意に滿たぬ點があると思ひ切つて原版を破壞するといふ樣な事をやり、斯かる大英斷も幾回かを重ねて漸く圖を竣つたといふ事だから其精確の點に就いては先づ信憑を置いて宜かろうと思ふ（定價金仕立金拾貳圓、緞子金七圓）

▲世界地圖索引

右の世界地圖に屬すべきものでアルファベット並に五十頁の二種の索引があり、日淸韓の分には特に漢字の索引もある、ローマ字で經線、アラビア數字で緯線を示し、之によつて複雜な圖中より容易く求むる場所の發見し得られる樣にしたものである（定價五拾錢）尙ほ因にいふ三省堂では日本百科大辭典の第三卷を愈よ先月下旬に發行したので、今月上旬より配本に取り掛かる相だが、頁數千四百四十「き」よりして「こ」に迄一萬數千からの項目が含まれ居り、光琳派の木版其他彩色版等相變らず錦上花を添へらるものがあるとの事だ、委細は何れ見た上で詳する事になるだろうが、兎に角地圖といひ此大辭典といひ同堂の努力は學界の爲に喜ぶべき事である。

▲國民讀本　大隈重信著　丁未出版社

大隈伯の手に浩瀚なる開國五十年史の編述された事は既に何人も知る所だが、長所は短所と斯ういふ場合に言つてよいかは知らぬけれど、兎に角餘りに浩瀚なるが爲に、其敍述の趣旨、即ち我國體の大本を說き、國運の由來を明にし、外は外人に我實質の如何を認めしむると共に內は國民に吾人の取るべく定まれる自然の方途を敎えて過なからしめんとの趣旨も、普及の範圍の狹められる憂がある、伯此邊に氣付いて今又更に內容を四篇十八章二百頁の文字の中に十分にコンデンスしたものを、玆に國民讀本と名けて出版されたが、繙いて見るに能く其要を說き得て簡易明確である上に殆んど每節長くも兩陛下の御製御歌を揭げて書き起してあるのは、更に其所說をあたならしめず、身に迫る強き力を感ぜしむるものがある、只少しく首傾かるゝ點は、一般國民に讀ますものとしては、今少しは冗くとも寧ろ今少し文字の平俗に近からんことのそれである。（定價金四拾五錢）

▲萬年筆　長谷川天溪著　佐久間書房發行

天渓氏の文藝に關する評論を何くれとなく取集めたもの、自然主義に立てる氏の論據を知ると同時に、血性的明快なるそれに因る氏の文藝批評を聞くことが出來る、(定價金五拾カ錢)

▲商人の宗教　竹内甚吉遺稿　警醒社出版

商業道德の必要は頻に近時自覺ある商業家の間に唱へられる處、其道德の基礎を一層根强く築き固めんには此種の著書亦自らに無かるべからざる事であろう(定價金二十五錢)

▲涙と鞭　中村秋人著　實業之日本社發行

兒童教育のことを通俗に說きなせるもの也(定價金三十五錢)

▲出世の準備　山崎楞遠著　實業之日本社發行

現米大統領タフトの著を譯述したるものにして少年子弟の志を起さしむるに足る(定價金二十五錢)

▲諸流盆石指南　杉本文太郎著　實業之日本社發行

著者、號を拜石齋文雅といふ、盆石、盆山、盆庭、盆湖、盆景等について說くこと詳か也。(定價金六十錢)

▲漫畫百種　日高有倫堂發行

現今の漫畫家十數家の漫畫を集めたるものにして、興趣なか〳〵に深し(定價五十錢)

▲小品文集　白柳秀湖著　隆文館發行

秀湖氏の小品文を集めたるものにして淸高にして熱烈なる著者の意氣何れの篇にもあらはる。「入營に際して」「澁谷の煤煙」等朗々誦すべく

「文字者としての堺枯川氏」は勝れたる評論文なり(定價五十錢)

▲續一幕物　森鷗外譯　易風社發行

ワイルドの「ザロメ」メーターリンクの「奇蹟」ストリンベルヒの「債鬼」ウイドの「れんれえ族巡」、ダヌンチオの「秋夕夢」、リルケの「家常茶飯」等の飜譯にして鷗外博士の所謂に忠實なると意氣の壯なるとは驚嘆に値す。何れも歐洲近代の代表的戲曲にして、我劇壇を益すること尠少ならず(定價一圓五十錢)

▲髮　眞山青果著　今古堂發行

ズーデルマンの「フラウ、ゾルゲ」を大甘ものに飜案したるものにして文藝的作品としての價値は甚だ高しといふを得ざるも、一般の讀者には可なりの興味あるやうに書きこなされたり。(定價九十錢)

▲操　柳川春葉著　今古堂發行

藝術に批判すれば春葉氏近來の作物は、其文藝的價値の高きもの殆んど之れなきが如きも、一種纖麗なる筆致は所謂家庭的小說に適するものなきにあらず、此篇氏の最も得意の作の一つなるべく、婦女子の好讀物也(定價金一圓四十錢)

▲關ヶ原　福田琴月著　日高有倫堂發行

關ヶ原の合戰を興味あるやうに敍述したるものにして、歷史と小說の合の子の如きもの見ゆ(定價金八十錢)

▲南朝と北朝　伊藤銀月著　千代田書房發行

銀月一流の面白味なきにあらねど、只筆に任せてなぐり書きせるやう

跡の見ゆるは慊らず(定價金六十錢)

▲海舟と南洲　伊藤銀月著　千代田書房發行

全上の批評を下さざるを得ぬものなるが、時代の近き丈け吾人には前篇より興味多く讀まる(定價金六十錢)

▲煤烟　森田草平著

昨年の文壇を驚かしたる小說の最初四分の一ばかりを收む。漱石氏の序文にも見ゆる如く、此あたりは「煤烟」中最も傑れたる出來榮にして、著者獨得の筆力深く人を魅するものあり(定價金八十五錢)

▲白鷺　泉鏡花著　春陽堂發行

一種の調子づいたる文章にて、一種の幻想を叙する所鏡花氏の檜場なれども、吾人は最早や氏の描きたる幻影に向て深き感興を惹起すること能はざるを惜む。(定價金壹圓)

▲日韓兩國語同系論　金澤庄三郎著　三省堂發行

金澤博士の著にして日韓兩國語の同系に屬することを說述せしもの也勉めて通俗を旨とし、我國人一般に書中の事柄に興味を持たせんとしたる努力の跡著し尙英譯をも添へたり(定價金壹圓)

▲相聞　與謝野寛著　明治書院發行

與謝野鐵幹氏の短歌一千首を集めたるものにして、卷狀に鷗外博士の序文を載せたり。中には左程秀歌と思はれざるものもなきにあらねど、概して佳良なるもの多し。作歌に志ある人の一讀すべきもの也(定價金壹圓)

▲覺めたる歌　金子薫園著　春陽堂發行

短歌三百五十首ばかりを集めたるものにして、一家を爲せる著者の歌風亦見るべし(定價金四十錢)

▲社會政策と近世科學　樋口龍峽編　金港堂發行

前編はフエリーの「社會主義と近世科學」を譯述したるものにして、後篇は著者が「社會政策と社會主義」について自說を述べたるものなり。社會問題に興味を有するものの一讀すべきもの也(定價金四十錢)

▲遺稿病窓雜筆　梁川　綱島梁川著　杉本梁江堂發行

嘗て本誌に出でたる氏の絕筆「勞働と人生」を初め、氏の晚年の文章を多く集めたり氏が次第に「勞働」といふ如き實際問題を思考するに至れる傾向と、文章を通俗にして飾りを少からしめんと志したる跡とが最もよく此篇にあらはれたり。附錄として道德的理想論といふ長論文あり(定價金壹圓)

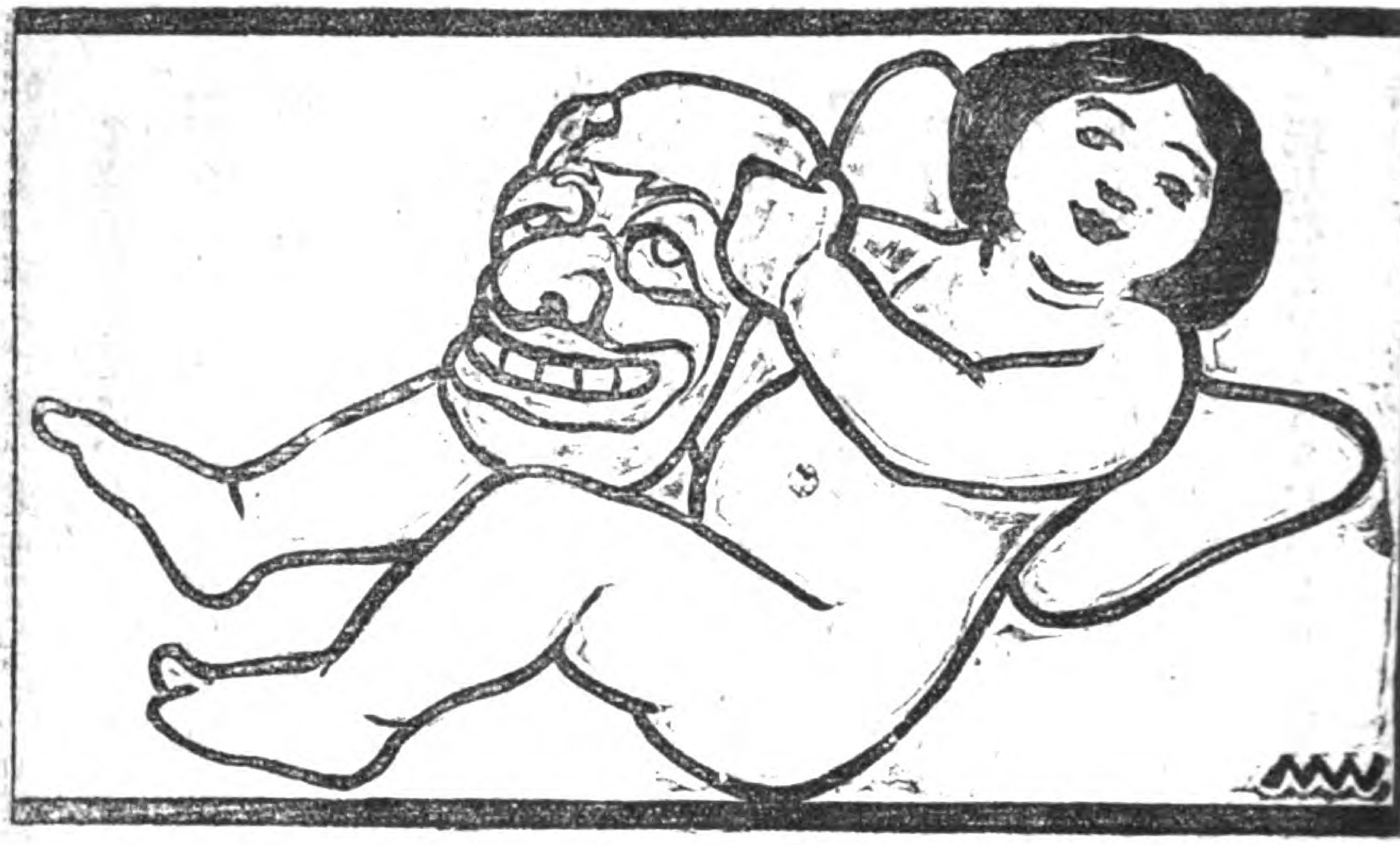
▲景情小品　鹿島櫻巷編　日高有倫堂發行

現代各家の小品文四十四篇を收めたり。皆とりどりの風情ありて面白し。(定價金三十五錢)

▲復活　內田魯庵譯　丸善書店發行

二葉亭逝いて後、現代飜譯界の最も老實なる人を求めば、いふまでもなく本書の譯者魯庵氏なるべし。而して魯庵氏は最もトルストイ研究に熱心なる人たるを思はゞ、本書の價値に於ては殆んど吾人の喋々するを須ゐず(定價金壹圓八十錢)

春期大附録



幼兒

田山花袋

一

多喜子は此ころ肥つた兩足を立てゝ、膀くらかゞみといふことをした。

そして廻らぬ舌で、

『ねんね、ねんね、ねんね』

母親は蒼い顏をして居た。『もう、後が出來たと見える。餘り早いと、多喜ちやんが可哀相ですがねえ』などと言ふものもあつた。姉に當る人は、『お前、またお目出度いね、……好いさね、出來るものなら今の中にたんと拵らへて置く方が

好いよ、あとで樂が出來るから」と言つて笑つた。

多喜子を見ては、

「何うも不思議さね、後が出來ると、何處でも、屹度ねんね、ねんねッて、あゝいふ眞似をするからねえ。不思議さねえ。……矢張後が出來たのが、こんな小さな兒にも解るんだねえ」

二

多喜子は漸くつかまり立ちが出來る位であつた。莞爾といつも笑つて見せた。あ――とか、む――とかまだ言語てない言語を常に立てた。何方かと言へば、丈夫ないたづらな兒で、一時も手足を動かさずに居ることはなかつた。

それについぞ人見知をしなかつた。よく誰の手にも抱かれて行つた。

「チヨンキナ、チヨンキナ、チヨンチヨンキナキナ、チヨンガナノハデ、チヨチヨンガチヨン――」

母親が膝の上に抱いて、かう歌つて、搖ぶつて見せると、多喜子は嬉しさうに躍り上つて、小さな手を合せて、チヨウチチヨウチの眞似をして高笑をした。

カイグリカイグリも出來れば、トウトウノメも出來た。パ、パ、ア、ア、タ、タなどと意味もなく語つた。イヤイヤと母親が言つて見せると、機關人形のやうに頭を矢鱈に振つた。

玩具などをもうじつとして見ては居なかつた。てんてん太鼓などを持つて遊んで居るかと思ふと、何時の間にかそれをメチヤメチヤに壞して居た。毀ふことに熟練した兒は、鳥渡も眼が離されなかつた。今、

其處に居たかと思ふと、もう何處かに其の姿が見えなくなつてゐる。時には高い緣側の處に行つて、危ないなどといふことは少しも知らずに、平氣て下を覗いて居ることなどもあつた。

それに、障子を破ることと、抽斗を明けることとが大好てあつた。障子の棧につかまり立ちをして、おとなしくじつとして居る時には、乾度小さい穴を見附けて、それに小さい指を入れて、段々それを大きくすることに骨を折つて居た。バリバリと紙の破れる音を聞くのが子供には何よりもめづらしく感じられるやうに見えた。抽斗は火鉢の抽斗、茶簞笥の抽斗、裁縫箱の抽斗、凡そ引手のついて居るもので、自分の手に合ふものは、何れも是れも開けて見た。そして中から茶呑茶碗を出す、茶托を出す、煎餅の入つた袋を出す、古暦を出す、唐辛子を出す、鳥の羽箒を出す、母親が來て見ると、總ての物を出して了つた後に、肥つた足を無理やりに二本入れて、そして莞爾と笑つて居た。

時には裁縫箱の抽斗を三つとも殘らず開けて、紅だの、紫だの、茶色だの、紺だの、淺黃だのの小片を其處等一面に散らばして居ることもあつた。

「何て、まあ、いたづらな子だらう」

と母親はいつも呆れた。

「整子の時には弱くつて困つたけれど、今度の子はまあ丈夫なこと、いたづらなこと……これぢや今にどんなに御轉婆となるか解りやしませんよ」

などと父親に言ふことなどもあつた。

『女の兒と謂ふものは、初めは育て惡いものだが……矢張、多喜子は體が丈夫なんだねえ』

父親はかう言つた。

『けれど、初めは男の兒の方が樂てすねえ。勉ても清ても、生れてから百日位は滅多に泣いたことなぞはない位てしたからねえ。……それから比べると、整子……あれには本當に困りましたねえ。今てこそ、あんなに丈夫になつて、言ふことをきかなくなりましたけれど』

『それや男の兒の方が何處かサッパリしたところがあるさ』

『さうねえ、女の兒は一體ぐじぐじして、氣分に面倒なところがありますねえ』

『その代り、男の兒は成長くなつてからが育て難いさうだ。十六七になつてからが……』

『さうてすかねえ』

『整子の骨の折れたのは、氣分が難かしかつたばッかりてはないねえ。初めてて、まだなれなかつたといふやうな處もあるねえ』

『それはさうてすねえ』

整子は十一歲、勉は八歲、清は六歲になつて居た。

三

ある日の夕方、多喜子は泣いて泣いて何うしても泣止まなかつた。

今までにこんなためしはなかつた。何んなにむづかつても、母親が膝に抱き上げて、胸をひろげて、

白い大きな乳房を見せると、泣顔をそれに押附けて、すぐ泣き止んで了ふのが例てあつた。「ヤアい、母さんのお乳にだまされた、ヤアい」などとハイカラな十八になる此家の姪に嘩されるのが例てあつた。それが何うしたのか、其日は母親が抱上げてだましても後に反りかへつて聲を擧げて泣いた。乳房を宛がつて遣つても、それを押附けるやうにして顔を背けて了つた。

疊の上に仰向けになつて、肥つた兩足をじたばたさせて、いかにも悲しさうにして泣いた。

「何うしたんだらう、まあ、此子は。」

母親も終には呆れて了つた。

其處に婢が來てなだめ賺した。平常よく懐いて居て、いつもは自から進んで其背に負はれて行くほどてあるが、今日はそれも甲斐がなかつた。抱き起さうとすると、矢張後に反りかへつて了つた。

「さあ、多喜ちやん、私とおんもに行きませうねえ」

田舍出の肥つた大きな婢は、幾度となくそれを抱起した。その度に多喜子は火のつくやうに烈しく泣いた。

「構はんてお置きよ、何うかしたんだから……さういふ時には、却つてそのまゝにして置く方が好いよ」母親の頬には血が上つて居た。

夕方は忙しかつた。其處には茶湯臺が置かれて、煮た物からは湯氣がもう薄暗くなり懸けた室に白く立つて居た。今まで縁側の近くて西洋さしやごを彈いて居た子供等は、やがて母親に呼ばれて、茶湯臺の周

間に集つた。

整子が夕飯を終つて、いろ〳〵に賺して抱起した頃には、多喜子ももう泣き勞れて居た。『ねえ、好い兒だねえ、姉ちやんに負ぶしておんもに行きませうねえ』かう言つて整子は小さい妹を後に負つた。多喜子はまた歔欷げて居たが、それでも今度は素直に負はれて行つた。

『好い兒だねえ、多喜ちやんは……誰が泣かしたえ。母ちやんが。母ちやん、めんめして上げませうねえ』

こんなことをませた口吻て言つて、整子が縁側を下りて、下駄を穿いて行く氣勢が、多喜子の歔欷に交つて聞えた。

戸外はもう薄暗かつた。近所の牛舎で牛の鳴く聲がをりをり聞えた。垣について裏に廻ると、葉が落ちて幹ばかりになつた栗の林が烟むるやうに立つて居るのが見えた。向ふの家屋の引窓から夕炊の烟が颺つて、もう燈火のついた家もちらほらした。多喜子はまだ歔欷けて居た。

『もう、ねえ、好い兒だから泣くんぢやないの、』かう言つて、後に負つた子を見返るやうにして、『ホラ、上を御覧、お星様が……餘り泣くと、怖いよ。』

空には星がキラキラ光つた。

四

乳は段々細くなつて來た。乳房も次第に黒くなつて、今までのやうに張り切つたみづ〳〵しい暖かい

皮膚の色はもう見られなくなつた。腹の中の兒の大きくなるにつれて、母親の姿も形も段々衰へて來た。

母親の顏は靑い時があつたり、赤い時があつたり、厭に煤氣立つて艶が失せたやうに見える時があつたりした。非常にはしやいで面白さうに見える時があるかと思ふと、今度はすつかりふさぎ切つて、默つて一日口も利かずに居ることなどもあつた。多喜子のまつはつて來るのを殊にうるさがつて居るやうに見える時もある。

多喜子は以前よりも一層母親の後を追つた。母親の姿が鳥渡でも見えないと、すぐ聲を擧げて泣いた。

五

「本當に多喜ちやんの氣難かしくなつたこと、何うしたつて言んてせうねえ、奥さん」

婢も持扱つて時々こんなことを言つた。泣き出すと、何時までも泣き止まない。おとなしく遊んで居ることなどはもう尠くなつた。段々細くなつて來た乳でも、それに縋りついて居る中はおとなしくして居るが、それを離れると、ぢきむづかり出した。

ある親戚のお婆さんが言つた。

「本當にお可哀相ねえ。後が出來ると、乳が何うしても細くなりますからねえ。少し牛乳でも上げて見たら、何うですかねえ。お飯ももう柔かくして上げれば、上げても好う御座んすから、精出して上げて見るやうになさいましよ。後が早く出來ると、本當にお可哀相て」

父親はまた母親に言つた。

「お前、此頃、もう乳が出なくなつたんぢやないか。それで多喜子はあんなに難かしくなつたんだらう。此頃、何だか少し痩せたやうだ」

「まだ、出ないことはないんですがねえ」

かう言つて、母親は胸を開けて、乳房をしぼつて見せた。元のやうに多くは出ないが、しかし少しは出た。

「成たけ離して、乳を飲ませないやうにしなくつてはいかんよ。醫師に言はせると、後に子供が出來てからは、乳を飲ませてはいけないんだつて言ふよ」

「さうですつてねえ。ちつと、牛乳でも飲まして見ませう」

勉の時に使つて、不用になつて、藏つて置いたミルクの罎を取出した。罎と吸口とが何處に行つたか見當らなかつた。婢は多喜子を負つて、近所の場末の小間物屋に行つてそれを買つて、歸りに牛乳屋から牛乳を一合取つて來た。

多喜子は始めは、何うしてもそれを飲まなかつた。母親も婢もいろいろに勸めて見たが、矢張いけない。それを何うやら彼うやら飲むやうにするのは容易でなかつた。母親は成たけ乳を飲ませないやうにした。すると多喜子は火の付いたやうに泣き出す。兎に角牛乳の罎の吸口に吸付かせるまでには、尠なからぬ骨折が要つた。後には、多喜子は罎を片手に玩弄にして、母親の顔を見ながら、拙さうにして飲んだ。

『何うてせう、あんな顏をして？』

姉はかう言つて笑つた。『矢張拙いんてせうねえ。本當のお乳に比へてはねえ、多喜ちやん。……奥さん、お腹が空いたんてすよ。御覽なさいよ、そら、もう、あんなに飮んて了つて……』

『これから、成たけ牛乳とお飯て馴らすやうにしなければいけないからねえ。旦那樣もさう仰しやるし、身體にも惡いんだつて言ふからねえ』

母親はかう言つた。

六

『もう本當に多喜子には厭になつて了つた』

母親は時々こんなことを獨りてつぶやくやうになつた。疳癪持になる、氣むづかしやになる。何ぞと言つてはヒーヒー泣く。今まて種々な藝を覺えて、可愛らしく發達して來た子とは丸て別な子のやうになつて了つた。今までの子供にもそれはいろいろな變遷はあつた。可愛くなつたり、氣難しくなつたり、厭になつたりした。智慧のつく毎に、子供の心持の推移を常にいろ〳〵と其前に展けて見せた。しかし今度のやうな烈しいことはなかつた。

多喜子が晝寐をして居る時など、じつと靜かに裁縫の前に座つて居ると、腹の中の兒が頻りに動いた。しかもをりをりは針を留めて、じつと腹の處を見詰めて見るほどその動くのが分明と解つた。神經質になつた母親には、メリンスの帶の模樣が動くやうにすら思はれた。すると、まだ生れぬ兒のことが頻りに

想像されて來る。腹の中に居て乳を吞んで居る兒――まだ見ぬ兒！針を運んでは止め、止めては又運んだ。晴れた日の午は靜かで、日の光が流るゝやうに庭先にさし込んで來た。物音と言つては、雀の百囀があたりの靜けさを破る位のもので、いつも通る物賣の聲も聞えない。次の間に寐て居る多喜子の小さい鼾さへ微かにそれと聞取られた。

母親の心は絶えず動く腹の中の兒に引かれて居た。

其處に、小さい足音がして、遊びに行つた清が、『母さん』と言つて障子を明けて入つて來た。おとなしく長火鉢の前に座つて、母親のせつせと針を運ばせて居るのをじつと見て居たが、やがて茶簞笥の上にあるボール箱の中から西洋きしやごを出して、何か獨語を言ひながら彈き始めた。母親は子供等の順々に成長くなつて、段々世話の燒け方が違つて來ることなどを考へた。午になると、勉は學校から歸つて來て、肩にかけた雜嚢をドサリと緣側に音させて置いて、汚れた足でズカズカと座敷に入つて、

「母さん、何か」

行儀が惡いといくら叱られても、たしなめられても、決してこの「母さん、何か」をやめなかつた。

七

腹の兒が目に立つやうになる頃には、多喜子は常に險しい靑い顏をして居た。みづみづした頰の艶などはもう見たくも見られなかつた。乳が出ぬので、いろいろなものを食はせるやうになる。鹽煎餅、あんころ、菓物、くづ湯――とりわけ甘いものを好んで食つた。むづかる時には、わるいと知りながら、つ

い傍にあるものを持たせて機嫌を取つた。段々暑い夏は近づいて來た。

其頃多喜子は腸を惡くして居た。汚いものをしくじつては、よくヒイヒイ泣いて居た。母親も婢も此頃ではもうほとほと持餘して困り切つて了つた。いつそ里子にでも出さうかなどと母親は心から思つて、眞面目に父親に相談したこともあつた。

『物を食はせさへすりや好いと思つて、無闇に食はせるから、腸をこわすんだ。泣く方はいくら泣いたつて……子供は一體泣くもんだから構はんけれど、餘りいろいろものを遣つて身體を壞しちや大變だから、注意しなけりやいかんよ』

父親はこんなことを言つた。

癇癪は矢張強かつた。此頃ではもう覺束ないながらも立つて歩くことが出來るやうになつたが、しかし以前のやうに眼に見えた發達はしなかつた。『ねんね――ねんね』の次に、『うまうま――うまうま』を覺えて、次に、『かアー』から『かアちやん』と何うやら彼うやら母の名を呼ぶやうになつた。母親の厠に行つた後までも追ひ懸けて『かアちやん、かアちやん』と呼んで泣いた。瘦せたのが著しく目に立つて、曾て肥えて居た股のあたりも大分肉が落ちて居た。

ある日、體が燒けるやうに熱かつた。『奥さん多喜ちやんが大變熱がありますねえ』と婢が言つた。スヤスヤと寐て居るかと思ふと、不意に眼を覺して、けたゝましく泣き出した。『風邪を惹いたと見えるねえ、……てなくつてさへ喧しくツて困るのにねえ』と母親は暢氣なことを言つた。

下に寐て居ない時は、大抵は婢の背に負はれて居た。
母親の顔を見て、恨めしさうにべそをかいて居る時などもあつた。今まで何んな物にても手を出して、勉や清の持つて居るものをさへ欲しがつたのに、熱が出てから、ぷつつりと物を食はなくなつて、あんこを持たせてやつても、それを喜んで取らうとはしなかつた。
「多喜ちやんの體の熱いことねえ、奥さん」
婢は度々母親に言つた。
母親も夜抱いて寐て、
「本當にあついねえ、餘程熱があるねえ。粒甲丹でも飲ませて見やうか」
から言つて、寐衣のまゝで立つて、簞笥の底を搜し廻して、古い藥袋の中から、金色や銀色をした小さい粒を五つほどスヤスヤ寐て居る多喜子の口の中に入れて遣つた。
醫師にかけやうと思はぬでもなかつたが、晝の中—殊に午前は何うかすると、めづらしく機嫌の好い時があつて、獨りで何か言つて玩具をいぢつて遊んで居ることがあるので、その中には治るだらうなどと思つて捨てゝ置いた。
それでも母親は時々頭に觸つて見た。熱は矢張あつた。
月の明るい晩であつた。近所に、村の若者達がする茶番があつた。其處は村の世話役か何かの廣い庭で、稲荷さんがその一隅に祀られてあつた。新開地に住む官吏の奥さんや軍人の奥さん達は夕方からぞ

ろぞろ出かけて行つた。郊外の林を拔けて通る風は涼しく人々の袂を吹いた。酸漿提灯が二つ三つ樹の枝に釣るされて赤く見えて居る。婢は多喜子を負つて、丁度其時來合せて居たハイカラな姪と一緒に、涼みがてら見に出かけた。

見て居る間、婢は餘りおとなしい多喜子を氣にして、ゆすり上げるやうにして幾度か顏を覗いた。

姪に、

「多喜子さん、何うかしやしませんか……餘りおとなしいから」

姪は覗いて見て、

「何うもしやしないよ。顏を押附けてよく寐てるよ」

さうか餘りおとなしい。それに體もかなり熱いし、夜風に當つては毒だからと、婢は姪がまだ見て居やうと言ふのを強いて勸めて、夜の十時頃に月の明るい郊外の屋敷町を家へと歸つて來た。

家ではもう座敷に床が敷いてあつて、蚊帳の夜風に動くのが青く洋燈にうつつて見えて居た。母親はまだ起きて居る整子と緣側に涼んで月を見て居た。

庭の樹の影はくつきりと黑く地上に見えて居た。

父親は居なかつた。

婢は多喜子を寐かさうと思つて、そのまゝに座敷に入つた。さて、兒を背からそつと下して、蚊帳の中に入らうとすると、突然、多喜子は身を戰はして、アッと言つた。同時に抱いて居た婢の腕には、小

ない體の固く突張つたやうな一種の力を覺えた。
慌てゝ明るい處に來ると、多喜子は白く眼を釣上げて居た。
「奥さん――大變、多喜やんがひきつけて――」
けたゝましい聲で言つた。
四邊の靜けさは忽ちにして破られた。母親は唯その白く釣上げた多喜子の眼を見たばかりてあつた。抱いたまゝ婢が慌てゝ近所の醫師に走つて行くその後を趁つて、母親も姪も續いて走つた。
桑の繁つた影が黒く道に落ちて居た。ガサガサと玉蜀黍が夜風に戰いだ。小さな門の前に赤い軒燈が出て居て、衛生醫院――田野としてあつた。郊外の開けて屋敷町になるにつれて、此頃引越して來た醫師の家は畠の中にあつた。
中年の八字鬚の醫師は、玄關の三疊に洋燈を持つて來させて、慌てゝ懸け込んて來た小さい患者を診察した。
多喜子は其時はもう氣が附いて、眼を大きく明いて居た。
「流動物ばかり上るやうにしなければいけませんな、腸をこはして居るんてすから、……ひきつけたのは、腸の熱てひきつけたんてすから、腸を治すやうにしなければ駄目てす」
醫師はかう言つた。
「誕生位て後がお出來になると、何うしても腸を壞しますからな」

こんなことをも言つた。

多喜子はもうひきつけるやうなことはなかつた。しかし長い間腸を病んで居た。熱は除れたと思ふと出たり、出たと思ふと除れたりした。絶えず元氣の無い顔をして、大きな腹を抱えた母親の後を常に追つた。茶湯臺の傍にえんこをしては、母親が大急ぎて拵へて呉れるミルク罐の牛乳を待ち兼ねて泣いた。

八

夏も過ぎた。

秋も來てやがて暮れた。

落葉のある寒い朝、多喜子は婢に負はれて遠い處に行つた。途中のある牛舍て、婢はミルクの罐を出して、牛乳を一合買つた。其の牛舍の家の傍には、長く取廻した柵があつて、牛が五六匹モーモーと鳴いて居た。霜解の垣根道に薄黄い日が當つた。

ある家の格子戸を開けて入つて、婢は出て來た丸髷の莞爾(にこ〳〵)した女に言つた。『奥さん、急いて行つて下さいまし、産氣が附いたやうてすから』

「さうかえ、ぢや今すぐ行くよ。彼方には誰か行つてるのかえ」

「私が來る前、産婆さんが見えて居ましたツけ。それに、お袋さんが昨夜から來て居ました」

「ぢや、お前は今日は一日多喜ちやんのお守だね」

「傍(そば)に居ちや、お産婦さんも氣をもみますからなア」

婢はかう言つて長火鉢の前に座つた。

産婦の姉に當る未亡人は、支度をしてそこそこに出て行つた。

多喜子は未亡人の一人娘と婢とを相手にして終日長く遊んだ。牛乳も一合はぢき飲んで了つて、近所の牛乳屋から又一合買つて飲ませた。腸を病んでから、食物には嚴しく注意を拂つて居たが、消化(こなれ)の好いカステラや朝鮮飴などは常に食はせた。多喜子もいつの間にか段々食物にも馴れて來た。夏の頃のやうなヒステリツクなところは此頃ではなくなつて、今でも母親の後は追つても、以前のやうに烈しく泣くことはもうなかつた。子供の發達――いかやうな迫害の中に居ても、自然に發達して行く子供の力というやうなことを人々に思はせた。

次第に智慧もついて來た。

その一日は暢氣に遊んだ。其家の娘に負はれて、近所の牛モウモウを見に行つたり、娘の友達の家のお池の金魚を見せて貰つて躍り上つて喜んだりした。娘は歸りに、角の玩具屋でピーピーや人形を買つてやつた。

『もう、多喜ちやんは姉さんになつたてせうねえ……姉さんになつたらおとなしくするのよ。あんあん泣いたり何んかしてはいけないのよ。好いかえ、解つたかえ』

『うむ、うむ』

かう多喜子は頭を動かして見せた。

「よく解るねえ、多喜ちやんは。……多喜ちやんはもう姉さんなんだから、あんあん、いやいやよ」

「あんあん――いやいや」

多喜子は機嫌よく口眞似をして見せた。

「さうさう……御怜悧ねえ、おとなしくしますねえ、これからは。」

路行く人は、唯負ぶをした可愛い兒と頻りに無邪氣な會話をして行く庇髪に結つた色の白い娘を振返つて見た。

安産―女の兒といふ報知がやがてあつた。婢は午後四時過の日影を受けて、今朝來た路を家に歸て來た。下におろすと、母親を思ひ出すといけないと言ふので、矢張ねんねこて負つて居た。產室は奥の六疊にある。茶の間から通つて行く長い緣側の障子戸には、冬の夕日が一面にさして、庭の山茶花の紅白の絞りが美しく見えた。子供等は大騒ぎをして、一人々々產室の中を覗きに行つた。整子はまた產れぬ中から、障子を明けて伯母さんに叱られたり、『子供は彼方に行つて入らつしやい、今に好いねねさんを見せて上げますから』と產婆に言はれたりした。盥でお湯を使はせて居る時には、丁度勉が入つて來て、びつくりしたやうな顔をして、棒立に立つて、大きな枕をして寐て居る母親と、微かな啼聲を立てゝ湯を使はせられて居る赤兒とを比べて見て居た。整子は逸早く近所に吹聽して歩いた。

婢が多喜子を負つて、夕日の當つた緣側の處に立つて居ると、產室から出て來た清は、莞爾と笑つて其處に來て立留つた。

「清さん、い丶ねね樣が出來たてせう？」
婢が笑つてから訊くと、
「何てい、あんなあかんぼなんか」
から言つて、婢の袖の處をすり拔けて活潑に向ふに行つた。
やがて母親は耳敏くも多喜子の聲を聞きつけた。
「もう、歸つて來たかえ？多喜子は？」
「え、歸つて來たやうだよ」
傍に居た姉がから言つた。
「おとなしくして居ると見えるねえ」
「え、大丈夫ともねえ」
「鳥渡、此處につれて來て……」
婢はがやて呼ばれた。産室の障子を半開けて婢が入つて來た。
母親は笑つて見せた。
「ほら、かアちやん、居たてせう」
から婢は多喜子の顏を母親の方に向けて見せた。
「かアちやん」

と多喜子は身をもがいた。

姉は母親の枕元にあつた朝鮮飴を一つ取つてやつた。

「かアちやん、ねんねして居たてせう。かアちやん、キーキ」

かう言つて婢は縁側の方に出て行つた。多喜子は別にむづかりもしなかつた。

夕飯の時には、下におりて、おとなしく婢に匙でお粥をやしなつて貰つて居た。それに、機嫌も好かつた。

姉は産婦の用を足しに其處に來て、

「多喜ちやん、本當におとなしいね。……これぢや苦勞にしたほどのことはなかつたねえ」

かう言つて通つて行つた。

夕方は整子や勉などゝ一緒になつて遊んで居た。今日買つて貰つたピイピイなどを鳴して居た。

清と勉とは、額を合せて、熱心に西洋さしやこを彈いて居た。

整子は急に、

「多喜ちやん、ねねさんの處に行つて見ませうねえ」

かう言つて、多喜子を負つて、長い縁側を通つて産室に來た。産室には丁度姉も居なかつた。

母親の傍に寐かしてある赤兒の處に整子は多喜子を下した。

「ほーら、御覽なさい、好いねねさんてせう？」

多喜子は生れた兒と始めて相對した。しかし別に何の感覺をも起さなかつた。整子は、「そら、好い兒てせう。そら目を明いて?」

かう言つて見せた。

向ふむきに寐て居た母親は、子供等の氣勢を聞いて此方を向いた。母親の顏を見ると、多喜子はいきなり其方に行つた。『かアちやん、かアちやん』

其處に姉が入つて來た。

九

其前から、夜は婢が多喜子を抱いて寐ることにして居た。大分馴れては居たが、それでも夜寐る時と、夜中に眼覺めた時と、朝起る時とは常にむづかつて泣いた。

枕元にはミルクの罎が置かれたり、甘薯のふかしたのが用意されてあつたりした。泣き出すと、吸口を宛がつてやつた。それでも猶泣き止まぬ時には、甘薯を持たせて何彼と賺した。

それによく粗忽をした。家の人々が寐る時には、乾度一度づゝ起して小便を遣つてやるのが例になつて居るが、此頃では咽喉を乾かせてよく湯や水を飮むので、何うかすると、夜中にぐつすり遣つて居ることなども度々あつた。それも、其時は乾度身體を動かしたり、聲を立てたりするので、少し注意さへすれば、すぐわかるのであるが、眠い盛りの婢などに、さうした餘裕を求めることは出來なかつた。

物干棹にかけられた濡れた蒲團や毛布に朝日がいつも當つて居た。

子供の多い家では、お宮まゐりまでを暢氣に産室に籠るなどといふことは出來なかつた。二七夜を過ぎた頃から、産婦はもう茶の間に出て來て働いた。新たに生れた兒は、古い肩掛て昆布卷のやうに卷かれて、母親の腕に抱かれたり姉の背に負はれたりした。目をパッチリと開けて、指を遣つても目ばたきもせずに居る。『本當に毛の濃いお子ですことねえ』などゝお祝に來た人々が皆言つた。

母親が長火鉢の前に出て居ることなどがあると、多喜子は乾度『かアちやん、かアちやん』とめづらしい人を見付たやうに遣つて來て、膝の上に乘つて、いきなり懐の中に手を入れた。流石にもう口を當てやうとはしないが、それでも乳首をいぢくり廻したり、新に張り切つた暖い乳房に顔を押附けたりした。

母親は、

「これは、赤ちやんのお乳ね」

わざとこんなことを言つて、はだけた胸の襟を合せて藏つて見せる。生れた兒を抱いて、乳を呑ませて居る處に、多喜子がちよろちよろと遣つて來て、めづらしさうにじつと見て居ることなども時にはある。何うかすると、機嫌が惡く、疳癪を起して、母親の後を追つて困ることもあるが、大抵は平氣て、莞爾して居る。

「ねんね――赤ちやん」

などと言つて指して居る。

「よくしたものさね、赤ん坊が出來れば出來たて、何うか彼うか廻つて行くものだねえ……これて、

本當に、多喜ちやんが、この夏頃のやうに難かしかつたら、それこそ本當に里子にでもやらなければ仕方がないんだけれどねえ。』

手傳ひに來た姉はこんなことを言つた。

十

けれど幼兒の心は常に變つた。

滿足して居る時には、おとなしく遊んで居るが、寒くなるとか飢じくなるとかすると、すぐ母親を思ひ出した。

母親を思ひ出すと、其膝に抱かれて居る赤兒を續いて思ひ出した。母親が乳房をふくませて、赤兒を眠らせやうとして居ると、多喜子は其傍に遣つて來て、ぴしやりと頭を打つて行つた。

またある時は、パッチリと開いた赤兒の眼に、あぶなく指を入れやうとすることなどもあつた。

段々寒くなるにつれて、朝晩は可哀相であつた。朝は早く目を覺した。暖かい床の中でもまだ一人では寐て居なかつた。多喜子は衣物を着せて貰つて、母親の赤兒を抱て寐て居る枕元に來ては常に座つた。

『かアちやん、ねんね』

かう言つては泣いた。

大きい子供達を學校に出して遣つて、中の間の炬燵に母親が赤兒を抱いてあたつて居ると、其時も能

度、多喜子は其處に這つて來て、自分も一緒に抱かれやうとした。赤ちやんが居るからと、噛んでよくめるやうに言つて聞かせても何うしてもそれは解らなかつた。母親の體に寄りかゝつて、無理やりに膝の上に乗つて、冷たい手をその胸の中に入れた。

「しやうがない兒ねえ、本當に」

母親はかう言つて、赤兒を傍の小さい蒲團の中に寐かした。

多喜子は喜んで、躍り上つて、飛びつくやうにして母親に抱かれて來た。

ある日、多喜子は赤兒のいつもする紅色木綿の小さい枕を母親の傍に持つて來て、何かわからぬことを頻りに言つて居た。

「負ぶするのかえ？」

母親はかう言つて、抱いて居た赤兒を鳥渡下に置いて、其處にあつた結付紐を取つて、小さい枕を其の背に負せてやらうとした。多喜子はイヤイヤをして背を外した。

「何うしたのさ、此子は？負ぶしやうと言ふのぢやないのかえ。」

母親は再び赤兒を抱き上げた。多喜子は頻りにむづかりながら、その小さい枕を母親につきつけることを止めなかつた。

「何うしたのさ、本當に。それぢや、多喜ちやんが此の枕をして、ねんねをしやうと言ふのかえ？」

さうでもなかつた。母親にも、暫しは幼兒の心が讀みかねた。

其處に姉が來た。

「奧さん、それは、赤ちやんをその枕にねかせて、そして自分を抱いて與れろと言ふんですよ」
「まア……」
母親も呆れざるを得なかつた。
「本當に、多喜ちやんの賢いこと、……さうですね、かうするんですねえ、」と母親の手から赤兒を抱取つて、婢が其枕に寐かせてやると、多喜子は喜んで母親の膝の上に行つた。
「まア、ねえ、誰も敎へないでもねえ……何だか恐いやうな氣がするねえ」
母親は淺間しい人の心を見たやうな氣がした。
それから、多喜子はいつも其枕を母親の前に持つて來た。

十一

冬も過ぎて春が來た。
子供の發達には障るものがなかつた。馴れるといふことには、常に著しい發育が伴つて居た。
梅の咲く頃には、多喜子ももう餘程成長くなつてゐた。鶯の啼聲の眞似をしたり、物賣の聲に耳を傾てゝ居たりした。智慧も段々とついて來た。此頃では日當りの暖かい緣側で、長い間獨遊びをして居ることもをり〳〵はある。朝の飯の時など、大勢の子供に母親が手が廻り兼ねて居ると、多喜子は飯椀と匙とを自分で持つて、ぼろぼろこぼしながら獨りで食つた。



舊蹟

上司小劍

一

一時私の周圍の話柄は、木戸春吉が到頭其の妻を棄つるを得たと云ふことで持ち切つてゐた。善いことでも惡いことでも、互ひに人の身の上を噂さし合ふが爲めに生れて來たと云ふやうな、我々人間のたぐひは、木戸が一旦の好奇心から手に入れた女の爲めに惱み苦んでゐる狀を、十數年來の話の種として面白がつてゐたが、樂しかるべき青春の日をも、働き盛りの三十代をも、只、何うして妻を棄てやうかと云ふ苦勞の爲めに空しく費して來たやうな木戸は、白髮の殖える四十になつて漸く其の目的を達した。

「さアこれからは乃公の世界だ！」とでも云ひたさうな風をして舊い友達の家なぞを廻はつた木戸の顏には、もう小皺が多か

つた。友達等は皆囃し立てるやうに木戸の噂さを語り合つた。

人々の語るところは斯うてある。

木戸の舊友Ａの談話、——

私と木戸との交際はまだそんなに古くはない。木戸が三田綱町に、私が白金に居た頃からである。木戸はあの平家に後から二階を繼ぎ足したと云ふ、表を車が通つてもゆら〳〵と搖れる家に、あの妻君と二人て居た。私は其の頃まだ十八て、木戸と同じ雜誌社に助手を勤めてゐたので、時々尋ねて行く折があつたが、何時の間にかあの妻君とも懇意になつて、木戸の留守に木戸の歸りを待ちながら話し込むことも多かつた。

私が初めて木戸の家を訪ふた時、取次に出た色の黑い眼の大きな人を、私は下女だとばかり思つたが、其の妻君てあることを知つたのは、三四度も訪問を重ねてから後のことてあつた。木戸は誰れにてもさうだつたさうだが、私にも改まつて妻君を紹介することはなかつた。私は木戸の友人の誰れかがしたやうにあの人をはぐ〳〵の裡に此方から妻君だと決めて仕舞つた。

初めて會ふ人には、毎も意地惡氣な、鋭い、探偵のやうな眼の光を浴びせかけたあの人も、親しく附き合つて見ると、存外優しい、涙脆い、人懐つこい女てあつた。

古い衡門の、開閉の工合の惡い、鈴の喧しく鳴る戸を押し開けて入ると、玄關の横が直ぐ臺所口て、

緣ばかり目立つて新しく青い水桶や、まだ洗はずにある摺鉢や小鍋のごた／＼と取り亂して置かれたところから、夏なぞは茶の間までズッと透き通つて見えた。茶の間には大抵妻君が煙管を手に、獨りで退屈さうな顔をしてゐて、木戸がそれと對ひ合つて坐つてゐるのを見ることは極めて稀れであつた。

其の茶の間で、木戸の留守に妻君から、濕やかな身の上話——彼女の素性が旅藝人の果てであると云ふこと——を聽かされた時、私は驚愕よりも恐怖を感じた。夫の留守に妻君と差し對ひて、私一人がこんな秘密を明かされては、これからこの家へ足踏みも出來ぬと私は思つた。

「A——さん、これは貴方一人に云ふんやきに、誰れにも喋舌つてはいけないよ」と、にッこと笑ひながら、故郷訛りを混ぜて云つた彼女の聲は、厭やな／＼、氣味の惡い響きを私の耳に與へた。

其の翌日木戸と雜誌社で顔を合はした時には、眩しいやうな思ひをして私は顔をそむけたかつたが、それとなく同僚に聞いて見ると、木戸の家へ出入りする程のもので、妻君の素性を知らぬ人はなかつたので、私は奇妙なことに思ひながらも漸く安心はした。

其の頃私は白金志田町で座敷借りをして、寂しい起臥を續け、雜誌社へ通ふ外には爲ることもなく、遊びに行く家も無かつたので、殆んど毎晩のやうに綱町の木戸の家へ通つィ無駄話をするのを樂みにした。一週間の中に木戸が在宅の晩は三日ほどより無かつたから、妻君も私の行くのを待つやうになつて

「A——さんは毎晩來る人と決つてるやうな氣がするきに、たまに來ないと忘れ物でもしたやうだよ」と云ひ／＼した。

妻君は私より二十近くも齢が上であつたから、素性を明かされた時の恐怖が消えてからは、夜更けまで二人で話してゐたところへ木戸が歸つて來やうとも、私は何の懸念をも持つことがなかつた。妻君はまた初めから少しもそんなことを念頭に置いてはゐないらしかつた。夜おそく歸つた木戸を交へて、三人でまた暫く話し込んだ末、阿彌陀籤で蕎麥を取ることにして、私が寒風に吹かれながら注文に行つたこともあつた。

『君昨夜は伺候しなかつたさうだね。この女が寂しがるから、怠けずに毎晩伺候するんだよ』と、木戸が年よりは若い愛嬌のある惠比須顏に笑を湛へて戯れたこともあつた。

父母も兄弟も無い私は、木戸を兄のやうに、妻君を姉のやうに思つて、せッせと木戸の家へ出入りした。

『A――さんを家の養子にして、若い綺麗なお嫁さんを貰うてやらうかね。養子にするには年が少し多すぎるが、何うせ私は子宮が惡くて子が生れんから、養子を貰はんならん。……けども養子より先きに私たちが正式に結婚しなけりやいかん、秋色先生を媒妁人にしてな』と、妻君は戯談とも眞面目とも解らぬ調子で云つたこともあつた。

秋色先生と云ふのは、誰れも知らぬものはない、當時の文壇の大家で、木戸の先輩であつた。木戸はこの先生の勢力を借りて、雜誌社に可なりの地位を占めてゐた。

木戸夫婦が臥床に入つてからも、私はまだ其の枕元でさまざまの話をして、木戸の鼾が聞える頃に漸

く自分の宿へ引き取つたこともあつた。木戸はいろ〳〵のものをごた〳〵と座敷に並べることが好きで、本箱や簞笥や人形や碁盤や花瓶や机や脇息や、そんなものが、床の間から、窓の下から、疊の汚い八疊に古道具屋のやうな狀をして所狹く置かれた片隅に、夫婦の臥床が窮窟さうに敷かれてあつた。其の臥床から妻君が私の歸るのを送る爲めに起き出て、寢衣のまゝランプを片手に、

「寒い〳〵、こりや耐らん」と慄へた聲をしながら、門の掛金を掛ける音を聞いたのも二度や三度ではなかつた。

阿波を出た娘義太夫の一座の三枚目語りとして、大阪、京都から東海道筋を打ち廻はり、東京に來て寄席藝人となつてゐた妻君も、木戸に連れ添ふた初めのほどは、寄席など見向きもしなかつたさうだが、私の親しくした頃には、木戸や私と一所によく寄席入りをした。聽きに行くのは必ず義太夫で、誰れは巧いとか拙いとか、あの語り物のあすこが佳いとか惡いとか云ふことを、木戸と私とが度々聽かされてゐた。

鞆之助と云ふ十六七の細面の、瘦形の、影の淡い、一向流行らぬ眞打があつて、其の師匠で大酒を飲むと云ふ評判のあるデップリ肥つた脂切つた顏の婆さんを三味線にして、場末の寄席ばかり廻はつてゐたが、妻君は何處かで一度この鞆之助を聽いてから、

「藝があんなに巧いのに人氣がちッとも無いのは可哀いさうやないか。お前はん等も贔負にしておやり」と云つて、木戸と私とを無理に鞆之助の寄席へ引ッ張つて行つたが、私も若い女の顏を見るのが恥

じくて、しかもそれに飢えてゐた頃で、鞆之助の寂しい面影が妙に私を引き付ける力のあるやうに思はれて、妻君の手引きで鞆之助と親しくする機會もあらうかと云つたやうな初心な考へから、妻君の連れ出すまゝに、三度四度と同じ寄席へ通つて、終ひには新聞の寄席案內を賴りに、鞆之助のかゝる寄席へは道の遠近を問はず、十五日の間に少くとも五六度は出かけるやうになつた。

妻君に勸められて、鞆之助に初めて二圓の祝儀を贈つた折は、何うなることかと胸が轟いたが、こんなことには慣れ切つた妻君がツカ／＼と樂屋へ入つて行つて、やがてにこ／＼と笑ひながら出て來た時には、今までにない懷かしさを以つて私は妻君の顏を見た。

「宜しくツて云つたよ。あの娘の素顏の可愛らしいこと、お前はん地の色も白いよ。眉毛と眼元がよいね」と云ひつゝ妻君は、「お手富貴」と書いた細長い紙包みを私の膝の上に置いたので、私は四邊の客が皆私を見て笑つてゐるやうな氣がして、窃と手拭ひの包みを懷中に入れ、それを抱くやうにして溫い肌に押し付けた。

丁度中入後の簾が捲き上つて、靑い紋織に赤の裏の付いた肩衣のよく似合ふ人の白い顏が、場末の寄席の荒んだ色の高座に浮き出して現はれた。燻つた低い天井に吊り下げた空氣ランプの光が、急に明るくなつたやうにも思はれて、同じ赤い裏の肩衣を無恰好に付けた三味線彈きの婆さんの、肥つた膝の上から流れて來る撥音は、煙草の煙に充ちた重い空氣に漂ひつゝ、私は一種の微妙な感覺に醉ふた。

「取つて十六だッて」と、妻君は手にしてゐた細い煙管を袋筒に納めながら、

「素顔だと、もつて賑かな顔やが、高座へ上ると妙に寂しいな。それて人氣が無いのやらう」と私の顔を見た。

「平の長芋ッ！」と客の中から叫んだものがあつた。私の方ばかりに注目してゐたらしかつた新之助は、急に眼光を轉じて、惡口を云つた客の方をば可愛らしい眼を鋭くして睨んだ。

「あんなことをするから餘計人氣がないのや」と妻君は氣を揉むやうに云つた。

歸りには妻君と二人て寂しい川沿ひの町を寒風に吹かれて歩きながら、いろ〳〵と新之助の噂さをするのを樂んて、道の遠いのを忘れてゐたが、後から來た二三臺の人車を避けて溝板の上に立ちつゝ、暗に透して車上の人を見ると、第一の人車が肥つた三味線彈き、第二の人車が白い顔の人、第三の人車は黑外套の毛皮の襟に顔を埋めた中折帽の男てあつた。乘つてゐる人も曳ひて行く人も、私たちには氣もつかぬ風て、人車は夜更の町に騷がしい響きを立てゝ馳け去つたが、長く尾を引いたやうな提燈の光が町の角を曲つて、車輪の音も消えた時、私はホッと息を吐いて、果敢ないやうな、情ないやうな感じがむら〳〵と涌いて來るのを覺えた。夜の町はいよ〳〵暗くて、軒燈のある家は尠なかつた。

「あの一番後から行つた人車は何やらう。あんな人は樂屋にゐなかつたが、眞逆客ぢやあるまいし……

……客の附くほど人氣があるといゝんだが」と妻君も氣にかゝる樣子をした。

「客かも知れませんね」と態と平氣を裝ふたつもりて、私は斯う云つたが、妻君は私の胸の奧まで見貫いたやうな調子て、

「心配せいてもよいよ。私が探索してやるから」と、慰めるやうに云つた。

道の二叉になつたとこて妻君に別れて、宿へ歸つた時は、其の邊の家が皆寢鎭まつて、遠くに犬の吠へる聲が聞えるだけであつた。隙間から燈火の漏れる戸の前に立つて、こつ／＼と叩いてみたが答へはなかつた。暫く默つて樣子を窺つたが、木戸の家へ行つても餘分の蒲團の無いのは分つてゐるので、勇氣を出してドン／＼と大きく叩くと、中からは寢ぼけ聲で、「A――さんですか」と云つて、平常でも怖い顏をして居る婆さんが「あアあ」と唸きながら戸を開けに來る氣色がした。近頃斯うしたことが度々あるので、戸を開けるとゝもに、五分ジンの吊ランプの缺た石笠の下からパッと射した光に身を縮めるやうにして、私はこそ／＼と自分の室に遁れた。さうして戸締りをする音や婆さんの咳を聞きながら、自分の臺ランプを點けて机の前に坐つた。懷中から手拭ひの紙包みを出して披いて見ると、地の惡い木綿に蔦の模樣を染め出して、『柄之助』の文字も洒落れた字で小ひさく現はれてゐた。私は幾度もそれを疊んだり披いたりしてゐたが、果は窃と鼻にあてゝみた。

三番目の人車に乘つてゐた男の外套の色や襟の毛皮の樣が、あり／＼と眼の前に浮んで來た。

それから二日ほどは珍らしく木戸の家に行かなかつた。三日目の朝、私がまだ臥床にゐると、怖い顏をした婆さんが葉書を持つて來て机の上に置いた。私は仰向けになつたまゝチラとそれを見て、木戸の手蹟であることを知つた。

君の所謂天女の來降を迎へ候に付明△日夕方より御光來下され度委細は其の節申上ぐべく候。

第三の人力車は彼女と全く無關係の通行人にて偶然車を聯ねて走ることゝなりたるものゝ由に候間御安心遊ばさるべく候。

葉書には斯う書いてあつた。第三番目の人車が偶然通り合はせたに過ぎないものであると云ふとは、何うも疑はしいと思はぬでもなかつたが、強いて木戸の葉書を信用することにして、私は明日を待ち兼ねた。

翌日は夕方から湯に入つて、着物も他所行のに着更へ、日の暮れかゝる頃に木戸の家へ行つて見ると、木戸はにこ〳〵として長火鉢の前に坐り、妻君は皿や鉢をがちや〳〵さして御馳走の支度に忙しさうであつた。

『寄席から歸りやもの、何うせ十二時頃になるだらう。お客は二人やが主人の方が三人やから五人前拵へなけりやならんし、車夫にも出さんならんから、骨が折れること』妻君はこんなことを云ひながら蓮根を刻み始めた。

『何うだ嬉しいか、宛て花聟のやうに濟してるぢやないか』と木戸は煙管を叩きながら戯れて云つた。

『あなた、これが婚禮やとよいがなア、A――さんとあの娘を家の夫婦養子にしてさ。主人は代々雜誌記者、女房は代々藝術家て、……』

『生意氣なことを云やがるなア。藝術家てな何のことだい』と木戸は顔を顰める風をした。

『秋色先生がさう云つたよ』

「醉らんな」

文字盤の剝げかゝつた八角の柱時計を眺めて、針の進むのをもどかしがつてゐる中に、漸く十一時半になつた。門の外に人車が續いて停つた樣子で、三四人がドヤ〳〵と入つて來た。

「そら來た」と妻君は、手早く前垂を取り棄てゝ玄關に出た。木戸はペロリと舌を出して私を見た。何やら早口に喋舌りながら客は二階に導かれた。賴みつけの車宿の主人が來て、二人の車夫を接待した。

「行かうぢやないか」と木戸は衣紋を繕つて階子段に足をかけた。私も其の後から續いた。引き違へて妻君は笑ひながら階下へ下りた。

二階の六疊には、肥つた三味線彈きを上座にして、鞆之助は其の次に小ひさく畏まつてゐた。

「今晩は」と二人の女は嗄れたやうな聲をして私たちを迎へた。茶が出て、菓子には鶯餅が添へてあつた。其處へ妻君も上つて來て。

「ほんとによう來てお呉れなすつた」なぞと云つた。私は鞆之助の姿が高座で見るよりもまだ不景氣て、萎びたやうな風をしてゐるのに半ば失望しつゝ、妻君は何故素顔の方が好いなぞと云つたのかと思つた。脊中を曲げて差し俯いた彼女は、時々血の氣の薄さうな白い顏を上げて、偸むやうに一坐を見廻はした。妻君は階下へ立つ序に密と私の腰を突いた。

酒肴が窮屈な階子段から階上に運ばれて、小ぢんまりとした宴會が、天井の低い六疊で開かれた。

「お師匠さん一つ」と、いづれもの盃が三味線彈きの婆さんの前に集つた。酒好きのお師匠さんはそれ

を引き受けて飲み乾しつゝ、上坐からヂロ／＼と鞆之助の狀を睨むやうに見てゐた。鞆之助の爲めには別に白酒が用意されてあつた。

「今夜は此方へ御馳走になるので、大文字屋を春雨で切り上げて來ました」と、お師匠さんは、張り切れさうな顔の肉を薄赤く染めて、鐵漿の黒い齒を爪楊枝でほじり／＼云つた。

「道理で時間が割に早いと思ひました。………今夜は大文字屋でしたか、ぢやア行けば好かつた」と木戸の顔もほんのりとしてゐた。

「鞆ちやんの大文字屋がいゝッて私が云つたので、皆なが大文字屋／＼ッて騒ぐんですが、大文字屋は全くよく出來ましたね」と妻君は鞆之助の顔を見た。

「いゝえ」と鞆之助は俯いた。

「あれは私が敎へたのぢやないので、惡い癖が付いてゐて、直すのに骨が折れましたよ」

「さうですか、何しろ巧いものですね。あのほら――犬に追はれて一夜は稲荷の森で寝たわいな――と云ふところや、それから、あの醍醐節のところを、このA――さんなんかゞ毎晩のやうに眞似するんですよ」と妻君は白酒の盃を鞆之助に献して、酌をしてやりながら、

「妙法蓮華經、申すも愚かや、祖師日蓮大菩薩、龍の口にては太刀の下に直り給ひ、またある時は、佐渡が島に流され給ひ、難行苦行なされしも、彼の一物をせしめん爲めの御誓願なり、南無妙――」と流るゝやうに、節を付けて唄つた。

「巧い〳〵、この娘より巧い」と、お師匠さんは手を拍つた。鞆之助も遠慮するやうな風で輕く手を拍つた。

調子に乘つて躁いで來た妻君は、階下から古びた太棹を持ち出して、ペン〳〵と鳴らし始めた。

「お一ついかゞ」と、いぢけてゐた手を伸して、鞆之助はぬる〳〵した白酒の盃を私に献した。

『よう〳〵』と、三味線を彈きながら妻君は囃し立てた。お師匠さんを始め木戸も私も一座は皆笑つた。

鞆之助が三味線を彈いて、妻君が千本櫻鮓屋の一くさりを語つた頃には、小人數ながらに一座は亂れに亂れてゐた。

お師匠さんが、もう歸らうと云ひ出した時は、早や曉に近くて、昨夕ながらのランプの光がぼんやりと、喰ひ散らかした杯盤を照らしてゐた。

『歸るたッて、車夫がゐやしない、疾くに歸して仕舞つたもの』と妻君は飲み餘しの燗徳利の底を火鉢て溫めてゐた。

『それぢやアいよ〳〵飲み明しか、けども酒は厭やになつたな。………れこておやらうぢやないか、此處の家に道具は無いかな』とお師匠さんは食指で自分の大きな鼻を撫てた。

『れこ結構、おい彼品を持つといて』と欠伸ばかりしてゐた木戸も指で一寸鼻を撫でゝ、蘇生したやうに妻君を促した。妻君は階下から小ひさな函を取つて來て、札や石を數へ始めた。

ランプのシンを捻お上げて、一枚の座蒲團を眞ン中に三人は三角に坐つた。私は階下へ下りて雨戸を

一枚繰り明け、鮮しい空氣に、疲れた腦を洗はふとした。鞆之助も後から下りて來た。切れ〲に聞える階上の聲は私のまだ耳にもしたことのないテクニクの恐ろし氣な響を混ぜて、だん〲下品な粗雜な調子になつた。階下では、

「眠いでせう」

「いゝえ。……………あたし寒くて仕樣がないわ」

私は押入を開けて、褞袍なぞを引き出した。

* * * * * * * *

こゝから先きは、私と鞆之助とのことて、木戸夫婦には殆ど關係がない。この夜のことがあつてから何うしたものか、妻君の私に對する態度のガラリと變つたのを、私は不思議に思はずにはゐられなかつた。

妻君の足は、自然に鞆之助の寄席へ遠くなつた。自分の家のやうにしてゐた綱町の搖れる家へ、私は何だか行きにくゝなつた。

其の後、妻君は寄席へ出る源氏節の一坐の何とか云ふ名古屋種の女俳優を贔負にして、終ひには其の女俳優を搖れる家の二階に置いて、『あの娘〲』と云つて可愛がつてゐたさうだが、やがて木戸と女俳優との間に關係が結ばれて、一騷動起るかと危ぶまれたけれど、妻君は強ひて平氣を裝ひながら、

「斯う云ふことになつて見ると、私は餘計にあの娘が可愛くッてね」などと云ひ廻はつてゐると云ふ噂

「巧い〱、この娘より巧い」と、お師匠さんは手を拍つた。鞆之助も遠慮するやうな容で軽く手を拍つた。

調子に乗つて躁いで來た妻君は、階下から古びた太棹を持ち出して、ペン〱と鳴らし始めた。

「お一ついかゞ」と、いぢけてゐた手を伸して、鞆之助はぬる〱した白酒の盃を私に献した。

「よう〱」と、三味線を彈きながら妻君は囃し立てた。お師匠さんを始め木戸も私も一座は皆笑つた。

鞆之助が三味線を彈いて、妻君が千本櫻鮓屋の一くさりを語つた頃には、小人數ながらに一座は亂れに亂れてゐた。

お師匠さんが、もう歸らうと云ひ出した時は、早や曉に近くて、昨夕ながらのランプの光がぼんやりと、喰ひ散らかした杯盤を照らしてゐた。

『歸るたッて、車夫がゐやしない、疾くに歸して仕舞つたもの』と妻君は飲み餘しの燗徳利の底を火鉢で溫めてゐた。

『それぢやアいよ〱飲み明しか、けども酒は厭やになつたな。………いゝ、れこでもやらうぢやないか、此處の家に道具は無いかな』とお師匠さんは食指で自分の大きな鼻を撫でた。

『いゝ、れこて結構、おい彼品を持つといて』と欠伸ばかりしてゐた木戸も指で一寸鼻を撫でゝ、蘇生したやうに妻君を促した。妻君は階下から小ひさな函を取つて來て、札や石を數へ始めた。

ランプのシンを捻お上げて、一枚の座蒲團を眞ン中に三人は三角に坐つた。私は階下へ下りて雨戸を

一枚繰り明け、鮮しい空氣に、疲れた腦を洗はふとした。鞆之助も後から下りて來た。切れ〴〵に聞える階上の聲は私のまだ耳にもしたことのないテクニクの恐ろし氣な響を混ぜて、だん〴〵下品な粗雜な調子になつた。階下では、

「眠いでせう」

「いゝえ。………あたし寒くて仕樣がないわ」

私は押入を開けて、褞袍などを引き出した。

* * * * * * * *

こゝから先きは、私と鞆之助とのことゝて、木戸夫婦には殆ど關係がない。この夜のことがあつてから何うしたものか、妻君の私に對する態度のガラリと變つたのを、私は不思議に思はずにはゐられなかつた。

妻君の足は、自然に鞆之助の寄席へ遠くなつた。自分の家のやうにしてゐた綱町の搖れる家へ、私は、何だか行きにくゝなつた。

其の後、妻君は寄席へ出る源氏節の一坐の何とか云ふ名古屋種の女俳優を最負にして、終ひには其の女俳優を搖れる家の二階に置いて、『あの娘〳〵』と云つて可愛がつてゐたさうだが、やがて木戸と女俳優との間に關係が結ばれて、一騒動起るかと危まれたけれど、妻君は強ひて平氣を裝ひながら、

「斯う云ふことになつて見ると、私は餘計にあの娘が可愛くツてね」などと云ひ廻はつてゐると云ふは

さもあつた。

何かの用談で、私が久し振りの夕暮に蝙蝠の飛び交ふのを見ながら、揺れる家の門を潜つた時、用達しに出る妻君と入口で行き過つたが、妻君は、

『おや入らッしやい』と改つた口調で云つて、『あなたA——さんが入らッしやいましたよ』と奥に向つて叫ぶと、其のまゝ急ぎ足で門を出て行つた。

思ひ出の多い、古道具屋の店頭のやうな八疊の座敷に通つて、木戸と話をしながら私は、白粉焼けのした二十二三の女が、隅の方へ避けてキチンと坐つてゐるのを見た。

木戸がいよ／＼評判の妻君を離縁したことを耳にしたのは、それから半歳ほど後のことで、妻君が曾て正式の婚禮の媒妁人にお願ひすると云つてゐた文壇の大家秋色先生が、癌腫で亡くなつてから間もなかつた。

世俗の道德習慣に盲從するより外に何の能もない時代に遲れた評判倒れの大家の死去は、文壇の現在と將來とに些かの損失をも與へない。と云ふやうなことが、其の頃はまだ極く少數の新人によつて語らるゝのを小耳に挾んだ私は、秋色先生の死んだ爲めに最も哀はれな影響を受けるのは木戸の妻君一人てあらう、などと思つたこともあつた。

もう木戸とは勤める場所が違つてゐたので、會ふ時も無く、委しい樣子を聞く機會はなほ更無かつた。——

二　木戸の舊友Bの談話。

愛宕下の信濃館と云ふ下宿屋は、平常客が尠なかつた。私が初めて東京へ來て、新橋から人車でこの下宿屋に落ち付いた時は、郷里の家に比べて、柱の細いのや壁の薄いのが氣になつて、百五十里の彼方のゆつたりとした溫い家庭の狀が懷しくなつて、長い汽車の旅に疲れた身體も急には寢付かれなかつた。

翌朝、下女に敎へられた洗面所の前に立つて、流し板にこびり付いた靑痰を氣味惡く思ひながら、何うして水を汲むのかと途方に暮れてゐるところへ、荒い縞の褞袍を着た小肥りの身長の低い書生風の、長い散髪の男が來て、楊枝を咬へたまゝ齒磨き粉に赤く汚れた口元をもぐ／＼させて、眞鍮の捻口を廻はせば水の出ることを敎へて呉れた。

「東京は君初めてゞすか」

「えゝ勉強に來たんですか。………學校は何處へ入るつもりです」

「何か仕事をしながら夜學でもやりたいと思ひまして」

こんなことを話してゐる中に、私はこの人の云ひ知れぬ溫か味に抱かれてゐるやうな氣がした。

來いと勸められるまゝに、私はこの人の室に隨いて行つた。この人の室は丁度私の室の隣りになつてゐたが、廣くもあり綺麗でもあつて、新しい雜誌や多くの本箱の類が、下宿住居とは思はれぬやうに整

廻して、大きな瀬戸物の火鉢と、ふッくりした坐蒲團とは殊に私の眼を引いた。
この人はいろ〳〵のことを私に問ひながら、机の抽斗から小ひさな鏡と櫛とを取り出し、其の長い散髮を梳り始めた。
この人が木戸であつた。
私は別にこの下宿屋を名指して來た譯ではなく、停車場で頼んだ車夫が私の爲めに心當りの方角を探して呉れて、偶然「あきまあり」の白い貼り札をこの下宿屋の前で見たので、梶棒を此處に下したまでゝあるが、車夫の偶然の發見が圖らずも私に木戸と會ふの機會を與へ、洗面所の初對面を劈頭にして、長い間親しい交りを續け、木戸の周旋に任せて一生の方向をばこんな風に導かれたのを思ふと、私は人間の運命が一寸した眞似のやうな機みに依つて定るものであることを考へずにはゐられない。……
一月ほどの後に、私は木戸の勸めてゐる雜誌社の校正係に雇はれた。其の頃例の秋色先生はこの雜誌社の文藝部主任で、先生に對して門人と名づくる古風な關係を有つてゐた木戸は、雜誌社に先生の下働きをやつてゐた。
「君は木戸君の弟子で、木戸君は秋色先生の弟子だから、君はまア先生の孫弟子と云ふ譯だな。……田舍からポッと出たばかりで君はいゝ人にぶつかッたよ。全く運の好い人だね」と同僚たちは、戲談でもなく、冷評でもなく、眞面目に羨しさうな顏をして云ひ〳〵した。
私は雜誌社に居ても、秋色先生から直接に言葉をかけられると云ふやうな場合は尠く、先生が妙な帽

子を被つて來たり、變な形をした袴を穿いて來たり、絶えず異つた服裝をして出社するのを見ながら、其の快濶な高聲に私の耳には解らぬ歯切れの好い名詞や動詞を混ぜて、パッチリとした愛嬌のある眼を輝かし〳〵、編輯室を壓倒するやうな話し振りをするのを、心持よく聽いてゐるばかりであつた。

木戸に連れられて何かの宴會に、私が始めて東京の料理屋に客となつた時、胡座をかいて木戸と將棊を指してゐると、先生が芝居に出る町人の穿くやうな襠の低い袴を引き摺る程にして元氣よくやつて來たが、木戸は忽ち將棊を止めて胡座を解き、座蒲團を退つてキチンと坐つた。先生は上坐の方に女中の直した坐蒲團の上へ應揚に腰を下して、綺麗な小形の提げ煙草入れを拔き取り、二三服續けて煙を吐きながら、

『君、△△はまだ來ないかね。……電話をかけて見やうぢやないか』と云つて木戸を帳場に立たすと、今度は袂から艶々とした卷煙草入れを出して、其の中の一本に火をつけた。私は其の狀を偸み見つつ、胡座を解いて坐り直したが、座蒲團だけはツイ其のまゝに敷いてゐた。

良妻賢母孝子義僕の話。たとへば斯う云つたやうなものゝ好きであるらしかつた先生が、席上の談話に中心となつて、いろ〳〵と語ることは、辯舌の流暢と云ふ點を忘れて考へれば、郷里で神主をしてゐる私の老ひたる父の云ふところに比べて、多く異つた意義を含んでゐるものとは思はれなかつた。やがて先生は坐中の一客と篆刻談を試み、近頃『文章報國』とある關防を刻らしたと云ふことを得意氣に語つた。

ある新聞社で一般の投票を募集して、歌舞伎座の中幕に演ずる脚本を選定しやうとしたことがあつた。無論座附俳優も座の經營者も同意の上だと云ふことであつたから、新聞社の計畫は成功すべきものと豫想されてゐた。この時先生は木戸以下數人の門人を指揮して、自作の脚本の爲めに運動を始めた。投票締切の日は霙が降つて寒かつたが、先生は北極探險者の裝ひをして、自ら投票の貰ひ集めに奔走し、果ては新聞社に押しかけて行つて、投票の買ひ占めを試みやうとした。私も木戸の命令で厭や／＼ながら、穿き減らした足駄を引き摺つて泥道を歩き廻はつた。……

木戸は私をいろ／＼の場所へ連れて行つて、私の知らなかつた珍らしい經驗を積まして呉れたが、其のお蔭で私は半歳ほど後に稍都ずれのした男になつて、着物や持物にも氣を揉むやうになり、一人で廓下の廣い家へ遊びに行くことなぞを覺えた。

私たちの下宿の直ぐ近所の寄席に女義太夫がかゝつて、ある夕私と木戸とは散步の序でか何かにこの寄席の高座の直ぐ下に坐つて聽いたが、藝の巧拙の解らぬ私には、出る女も出る女も、不恰好な顏へ假面を被つたやうに白粉を塗つてゐるのが眼に映るだけで、唸る聲や三味線の音が五月蠅くてならなかつたけれども熱心に聽いてゐるらしい木戸の手前、歸らうとも云ひ兼ねて怠屈を忍んでゐると、四人目あたりに出た二十二三の團吉と云つた女は、簾が上るとゝもに、ギヨロリとした大きな眼に、睨み付けるやうな眼で聽衆を見渡した樣子が如何にも健氣で、一通りは整つてゐる淺黑い顏に白粉氣の無いのも珍らしく、引つ詰めて結つた頭髮には何んの飾りも無く、媚いた風が少しも見えなかつたので、私は木

戸と顔を見合はして、近頃覺えた『異だね』と云ふ言葉を眼と眼とて語り合つた。
「いよ——男嫌ひ」
「小野の小町！」
こんな懸聲が頻りに隅の方の書生の一團から起つた。この時の語り物が玉藻前三段目であつたと云ふことは、木戸がよく肥憶してゐて、後々まで話しの種にした。
閉場て宿へ歸る途すがら、先刻の書生たちが私等二人と前後して歩きながら、玉藻前を語つた人のことを噂さしてゐるのが、聞くとも無しに私等の耳に入つた。
「彼女ばかりは眞個に堅いんださうだね」
「さうだツて、………女たらしの△△も彼女には肱鐵の喰ひ通して、到頭諦めたと云ふぢやないか。………遣り切れないね」
「何んしろ男の匂ひは糞の臭ひより嫌ひて、男の顏さへ見れや腹が立つと云ふんだからね。耐らないぢやないか」
「何か特別の原因があるんだらうか、性質だらうか」
「不具ぢやないか知らん」
「素人の時分に一度嫁いたことがあるさうだから、不具ぢやあるまいよ」
「其の嫁いたのが原因をなしてるんだらうぢやないか」

彼等の云ふところを聞きながら、後からつゞく私たちの肩を並べての話も、ツイ彼等のと同じ話題に釣り込まれてゐた。

宿へ歸つた上、睡がつてゐる女中を呼び立てゝ火を運ばせ、木戸の室で茶などを入れて深更まで話し込んだのは矢張男嫌ひだと云ふ彼女のことであつた。

「なあに君、男嫌ひと云ふのは皆噓だよ。そんな理由が無いものね」

木戸は斯う云つて、熱心に眼を輝かした。彼れの續いて興あり氣に語るところを聽くと、彼れはこの前に下宿してゐた家の娘の男嫌ひだと云ふ評判の噓であつたことを確め得たさうて、其の結果として、彼れは今其の娘の懐に抱かれつゝある愛らしいものに、月々の養育費を送つてゐると云ふことまでを微笑みながら打ち明けた。

私は木戸のにこ〳〵とした顔が急に恐ろしくなつたやうに思つたが、この感じは直ぐ消えて、相變らず鷹揚な溫か味のある木戸を見ることを得た。

「ぢやアあの女も君の手で一つ何うかして見ないか」と私は戯談のやうに云つて、火鉢に赫々とおこつて來た堅炭の焰の赤く映る木戸の顔を見てゐた。

「うむ、やつて見やう」と木戸は今にも立ち上りさうな元氣の好い聲を出して、武者ぶるひをした。

其の翌晩も翌々晩も、私は木戸に誘はれて彼女の寄席へ行つた。て、行く度に木戸は幾らかを紙に包んで、出方を呼び、「萬升さんへ」と、周吉のことはおくびにも出さず、態と眞打の婆さんの名を指して

樂屋へ持たしてやつた。

これは後から木戸の妻君に聞いた話であるが、――この時樂屋から私たちも隙見して、あれは何者やらう、と云ふ品さだめになり、散髪を長く伸ばして馬鹿に裄の長い紋付の羽織を着た木戸と、無骨な身體つきに着物だけは安物の粋がつたのを纏うた私とは、何うしても、『あれは泥棒やらう』と云ふものが多かつたとのことであつた。――

それでも、四日目か五日目かの晩に、例の出方が『喜升さんからです』と云つて茶と菓子とを私たちの側に置き、

『毎度御贔負に預りまして有り難うございます。御挨拶に伺ふ筈でございますが、御規則が八釜しうございますから失禮致します。何うかチト樂屋へお遊びに入らして下さるやうに』と云ふ口上を取り次いだ。

其後暫くは木戸が、總べてのことを擲つて寄席通ひをやつてゐる模樣であつた。私も時々附き合つたが、木戸一人で出かけることも隨分多かつた。『今度は小石川の初音亭だ。行つて見ないか』と云はれて、まだ電車の無かつた其の頃、愛宕下から小石川まで、据ゑ足袋も塵埃だらけにして歩いたこともあつた。小石川の寄席で、圖らずも近所に住つてゐる社の同僚夫婦に隣り合つて坐つた時は、木戸も流石にキマリ惡い顔をしたが、『この近所に訪れる人があつて、B――君と一所に來たんだが留守でね、九時頃には歸ると云ふから、こんなとこへ入つて見たのさ』なぞと胡麻化してゐた。

彼等の云ふところを聞きながら、後からつゞく私たちの肩を並べての話も、ツイ彼等のと同じ話題に釣り込まれてゐた。

宿へ歸つた上、睡がつてゐる女中を呼び立てゝ火を運ばせ、木戸の室で茶などを入れて深更まで話し込んだのは矢張男嫌ひだと云ふ彼女のことであつた。

「なあに君、男嫌ひと云ふのは皆嘘だよ。そんな理由が無いものね」

木戸は斯う云つて、熱心に眼を輝かした。彼れの續いて興あり氣に語るところを聴くと、彼れはこの前に下宿してゐた家の娘の男嫌ひだと云ふ評判の嘘であつたことを確め得たさうで、其の結果として、彼れは今其の娘の懷に抱かれつゝある愛らしいものに、月々の養育費を送つてゐると云ふことまでを微笑みながら打ち明けた。

私は木戸のにこ〳〵とした顔が急に恐ろしくなつたやうに思つたが、この感じは直ぐ消えて、相變らず鷹揚な溫か味のある木戸を見ることを得た。

「おやァあの女も君の手で一つ何うかして見ないか」と私は戯談のやうに云つて、火鉢に赫々とおこつて來た堅炭の焔の赤く映る木戸の顔を見てゐた。

「うむ、やつて見やう」と木戸は今にも立ち上りさうな元氣の好い聲を出して、武者ぶるひをした。

其の翌晩も翌々晩も、私は木戸に誘はれて彼女の寄席へ行つた。て、行く度に木戸は幾らかを紙に包んで、出方を呼び、『京升さんへ』と、園吉のことはおくびにも出さず、態と眞打の婆さんの名を指して

樂屋へ持たしてやつた。

これは後から木戸の妻君に聞いた話であるが、――この時樂屋から私たちも隙見して、あれは何者やらう、と云ふ品さだめになり、散髪を長く伸ばして馬鹿に裄の長い紋付の羽織を着た木戸と、無骨な身體つきに着物だけは安物の粋がつたのを纒うた私とは、何うしても、『あれは泥棒やらう』と云ふものが多かつたとのことであつた。――

それでも、四日目か五日目かの晩に、例の出方が『喜升さんからです』と云つて茶と菓子とを私たちの側に置き、

『毎度御贔負に預りまして有り難うございます。御挨拶に伺ふ筈でございますが、御規則が八釜しうございますから失禮致します。何うかチト樂屋へお遊びに入らして下さるやうに』と云ふ口上を取り次いだ。

其後暫くは木戸が、總べてのことを擲つて寄席通ひをやつてゐる模樣であつた。私も時々附き合つたが、木戸一人で出かけることも隨分多かつた。『今度は小石川の初音亭だ。行つて見ないか』と云はれて、まだ電車の無かつた其の頃、愛宕下から小石川まで、裾も足袋も塵埃だらけにして歩いたこともあつた。

小石川の寄席で、圖らずも近所に住つてゐる社の同僚夫婦に隣り合つて坐つた時には、木戸も流石にキマリ惡い顏をしたが、『この近所に訪れる人があつて、B――君と一所に來たんだが留守でね、九時頃には歸ると云ふから、こんなとこへ入つて見たのさ』などと胡麻化してゐた。

歴史は繰り返へす、とかて、木戸のこの時代は、丁度後のA――君の鞆之助時代に似てゐる。A――君は木戸と木戸の妻君とに教はり、且つ感化されて、あんなことをやつたのであらうが、前後十幾年も距つた出來事だけに、木戸の遣り口には餘裕が多くて、興味中心の道樂仕事と云つたやうな趣きが見えるが、A――君のは何處となくシンケンで、自我的、現實主義と云ふ狀がありありと現はれてゐるやうに思ふ。時代の影はこゝにも明かに寫つてゐるではないか。………

霙の降る頃から思ひ立つて、絽の羽織の要る時分に、木戸は漸く喜升婆さんの周旋で、玉藻前を語つた人――團吉――を鳥屋ぐらゐに連れ行き得るやうになつた。

『こんなに骨の折れる仕事とは思はなかつた』と云つて木戸が、彼女と二人で茅場町の草津溫泉とかて泊つて來たことを、朝早く下宿に歸つて、まだ床の中にゐた私の枕元に立ちながら、疲れてゐるらしい中に得意の風を見せて告げたのは、暑い夏の最中であつた。

それからは時々彼女が下宿へ遊びに來て、甲斐々々しく、木戸の汚れた浴衣などを洗濯した。私の綻びも下手らしい手つきて縫つて異れた。

稍神經質らしい、勝氣な女だと思つて、私は丁寧に彼女を待遇した。彼女の阿波訛りが私の耳に珍らしかつた。

『いゝとも、いゝとも』力を込めた聲で斯う云つて、女にねだり物でもされた時に直ぐ快諾の意を示すのが木戸の癖であつた。私は木戸がさまざまの女に對しての『いゝとも、いゝとも』をやつてゐるのを

幾度も聞いた。彼女との會話にも無論「いゝとも、いゝとも」が繰り返へされた。

或る朝彼女が來て、一時間ばかり何事か密々と話して歸つた後に、木戸は微笑みながら私の室へ入つて來て、巻煙草の灰を落し〱斯う云つた。

「あいつめ、馬鹿な奴ぢやないか、廢業して僕と夫婦にならうッて、眞面目に云つて來たぜ。耐らんね」

「いゝぢやないか。あの女は藝人よりも世話女房に向きさうだよ。あれなら乾度身上持ちがいゝだらう」

と私は眞顔で云つてみた。

「ハヽヽヽ、僕は死すともあんな女と同棲するのは厭やだ。あれよりはこの前の下宿屋の奴の方が幾らいゝか知れやしない。…………兎に角僕は一人の女と永く同棲するてなことは出來ない。…………人が男嫌ひだとか、堅いとか云ふから、砲臺でも乘つ取る氣になつて當つて見たまでさ。僕の事業はもう終つてるんだ。これからまた新事業を見付けて、設計に着手しなけれりやならん。技師が鐵橋を架けたり、隧道を掘つたりするやうなものだね。………今更あんな女と夫婦になるなんて、ヒー耐らん。ヒー」と木戸は妙に鼻を鳴らして顔を顰めた。

「君が拒絶したので、あの女は怒つて歸つたらうね。………けどもよく無事に歸つて行つたね」

「僕は別に拒絶もしなかつた。面と向つて拒絶すると面倒だらうと思つて、いゝ加減なことを云つといてやつたよ」

「君のことだからまた「いゝとも、いゝとも」ッて云つたんぢやないかね。そんなことを云つとくと後が

却つて面倒だらう」

　木戸は笑つて答へなかつた。

　それから二日おきぐらゐには彼女が必ずやつて來て、木戸の身の廻はりを世話してゐたが、翌月の上席は喜升一座が横濱へかゝつたので、十五日の間彼女の姿を私たちの下宿に見ぬやうになつた。

　この間に木戸は急に築地へ家を持つことになつて、足元から鳥がたつやうに下宿を引き拂つた。

『彼女除けに家を持つんだ。いゝ婆があるさうだから、下宿よりは幾らか便利だらう。あいつめ、濱から歸つたら此家へ來て騷ぐだらうが、主婦さんにもさう云つといたからね、社用で旅行したと云つて引き越し先きは決して云はないやうにして與れ給へ。……今年中は歸るまいとでも云つて與れりやいいよ』と、木戸は鼻の頭に汗をにじませつゝ、運び出す荷物の取り散かつた中に立つて、事もなげに云つた。

　私は社用の都合で引き越しの手傳ひにも行かれず。其の後四五日はまだ木戸の新宅を見に行く機會がなかつたが、十六日になつて彼女が横濱から歸つて此處へ來たら、何う云ふ風に云つてやらうかと、そればかりが心配でならなかつた。下手なことをやつて、木戸に賴み甲斐のない男だと云はれるのも怖ろしいし、みすく嘘を吐いて彼女を當惑させるのも厭やで、胸の中に大きな凝塊が出來たやうな氣がした。

　彼女の手紙や葉書は横濱から續けて二三通來た。それに一々附箋をつけて築地の家へ送る度に、私は

安からね胸を痛めた。朝の中に着いた一通は社へ持つて行つて窃と木戸に手渡しゝたが、それには『みち』と彼女の本名を例のやうに淨瑠璃本を手本にしたらしく書いた上部に『木戸』の二字が遠慮したやうに小ひさく墨の痕を留めてゐた。

私も下宿を變へて、彼女の爲めに蹤跡を晦まさうかと思つたが、さうすれば五月蠅く社の方へ來られるのが厭やてあり、木戸のやうに受付係に命令して、『お出てになりません』と云はせる力のないことを思ひ煩つた。

社から歸りに初めて築地の新宅を尋ねて見ると、流に近い河岸の片側町て、前面の物揚場には自然石やら切石やら、石塔の形をした花崗石やらのごろ〱と置かれてあるのが、夕闇の薄明りに見えた。『隣りが石屋だから直ぐ分る』と云つた木戸の言葉を思ひ出した。

表口よりも勝手口の方が立派に拵へてある奇態な家で、入つて見ると長四疊などもあつた。此室を茶の間にして新しい長火鉢の横に木戸がゆッたりと長煙管を手にしてゐる狀は、下宿屋の時よりもまた鰭が付いた。眼を病んだ雇婆が團扇を持つて出て、急須を洗ひに立つた。

木戸に導かれて廣くもない家の内を見廻はり、家賃が割合に廉くて下宿屋に居るよりは利益てあることなぞを聞いた末、元の座に戻つて、汗を拭き〱蕎麥を喰べたが、それの濟んだ後て、私は爪揚枝を使ひながら、心配てならぬ橫濱の女のことを少しづゝ話したけれど、木戸は少しも氣に止めぬ樣子て、人事のやうな返事をした。

却つて面倒だらう」

木戸は笑つて答へなかつた。

それから二日おきぐらゐには彼女が必ずやつて來て、木戸の身の廻はりを世話してゐたが、翌月の上席は喜升一座が横濱へかゝつたので、十五日の間彼女の姿を私たちの下宿に見ぬやうになつた。

この間に木戸は急に築地へ家を持つことになつて、足元から鳥がたつやうに下宿を引き拂つた。

『彼女除けに家を持つんだ。いゝ婆があるさうだから、下宿よりは幾らか便利だらう。あいつめ、濱から歸つたら此家へ來て騒ぐだらうが、主婦さんにもさう云つといたからね、社用で旅行したと云つて引き越し先きは決して云はないやうにして呉れ給へ。……今年中は歸るまいとでも云つて呉れりやいいよ』と、木戸は鼻の頭に汗をにじませつゝ、運び出す荷物の取り散かつた中に立つて、事もなげに云つた。

私は社用の都合て引き越しの手傳ひにも行かれず。其の後四五日はまだ木戸の新宅を見に行く機會がなかつたが、十六日になつて彼女が横濱から歸つて此處へ來たら、何う云ふ風に云つてやらうかと、そればかりが心配てならなかつた。下手なことをやつて、木戸に頼み甲斐のない男だと云はれるのも怖ろしいし、みす〳〵嘘を吐いて彼女を當惑させるのも厭やて、胸の中に大きな凝塊が出來たやうな氣がした。

彼女の手紙や葉書は横濱から續けて二三通來た。それに一々附箋をつけて築地の家へ送る度に、私は

安からぬ胸を痛めた。朝の中に着いた一通は社へ持つて行つて窃と木戸に手渡しゝたが、それには『みち』と彼女の本名を例のやうに浄瑠璃本を手本にしたらしく書いた上部に『木戸』の二字が遠慮したやうに小ひさく墨の痕を留めてゐた。

私も下宿を變へて、彼女の爲めに踪跡を晦まさうかと思つたが、さうすれば五月蠅く社の方へ來られるのが厭やてあり、木戸のやうに受付係に命令して、『お出てになりません』と云はせる力のないことを思ひ煩つた。

社から歸りに初めて築地の新宅を尋ねて見ると、流に近い河岸の片側町て、前面の物揚場には自然石やら切石やら、石塔の形をした花崗石やらのごろ〳〵と置かれてあるのが、夕闇の薄明りに見えた。『隣りが石屋だから直ぐ分る』と云つた木戸の言葉を思ひ出した。

表口よりも勝手口の方が立派に拵へてある奇態な家て、入つて見ると長四疊なぞもあつた。此室を茶の間にして新しい長火鉢の横に木戸がゆッたりと長煙管を手にしてゐる狀は、下宿屋の時よりもまた鰭が付いた。眼を病んだ雇婆が團扇を持つて出て、急須を洗ひに立つた。

木戸に導かれて廣くもない家の内を見廻はり、家賃が割合に廉くて下宿屋に居るよりは利益てあることなぞを聞いた末、元の座に戻つて、汗を拭き〳〵蕎麥を喰べたが、それの濟んだ後て、私は爪揚枝を使ひながら、心配てならぬ横濱の女のことを少しづゝ話したけれど、木戸は少しも氣に止めぬ樣子て、人事のやうな返事をした。

私の歸る時に、木戸も一所に外へ出て、寂しい町の角を右と左とに別れた。

嘉升一座がいよ〳〵横濱から歸ると云ふ日、私は社に居ても何んとなく落ち付かなかつたが、例よりは二時間ほど早目に退いて築地に行くと、折からの滿潮て、なみ〳〵と湛へた河水が靜かに石垣を洗つて、濁つた綠色に木屑、藁屑、紙屑の浮いてゐるのを、私は木戸の家に近い橋の上に立つて暫く眺めてゐた。

河岸の片側町の眠つたやうな狀が、今日は白晝だけに一々餘すところなく眼に映つた。炎天のほとぼりのまだ冷めぬ石屋の石の色もハッキリと分つた。遙か向ふに塵埃の立つ往來へ打水をしてゐる人も見えた。

木戸の家の格子戸の前に立つと、開放つた障子の奥に、長四疊も坐敷もスッカリ見え透いた。白い手拭ひを姉さん被りにして掃除をしてゐる人を眼の惡い雇婆だと思つて内に入ると、それは思ひもかけぬ玉藻前を語つた彼女であつた。

私はギョッとして、我ながら顏の色の變つたのを覺えたが、彼女は手拭ひの下から大きな眼に彼女としては珍しい愛嬌を見せて

「おや、お出でなさい。……婆や任せだすよつて、一寸も片付いてやしまへんのや。歸り早々忙しいことッたら」と云ひながら手にしてゐた箒を横の壁に立てかけた。

「早くお上りなさいな。直ぐ戻りますさかい」と彼女は、土間に突ッ立つたまゝてゐる私を促した。

「木戸君はもう社に居ませんてしたが、まだ歸つて來ませんか」と云つて、私は狐につまゝれてゞもゐるやうに思ひながら、進まぬ足を茶の間まで運ぶと、四邊がスッカリ片付いて、前よりはまた餘程家らしくなつてゐるのを見た。

「いゝえ、もう先刻歸つてお湯にまゐりました」斯う云つて、彼女は薄い夏坐布團を進めた。

暫くすると、濡手拭ひを提げた木戸が顔を眞ッ赤に光らせて歸つて來たが、私の不思議さうな顔をして見返へるのを氣にも止めぬ風て、にこ〳〵しながら、

「何うしたい」と云つて背後から兩手て私の肩を押へた。

「今日は退けが早いね。引き越し祝ひに御馳走するから、緩りして行き給へ」と彼れは私の前に坐つて、ます〳〵機嫌の好い顔をした。其處へ彼女も來て、木戸の長煙管て煙草を吸ひながら、

「今婆やを見せにやりましたから、緩りしておいなはれ」と矢張りにこ〳〵してゐる。私は木戸の顔を見て覺えず笑つた。

「何が可笑しいんだね」と木戸も笑つた。

「私も、少して迷子になるとこてしたの」と云ふ前置て彼女は、

「横濱へ行つてる中に、私に默つてこんなとこへ家を持つてるんてすもの。……… この上席て廢業ると云ふことはお師匠さんにも話し、組合にも五厘にもさう云つてあつたんてすが、家は横濱から歸つた上、二人て見付ける筈にしといたんてすのに、私の居ない間に一人て決めて引き越しながら、何とも云

ふて來ないんですもの。ほんまに呑氣な人ッちうやア」と斯う云つた。

「昨夜横濱を閉場ると、終列車て皆なが歸つて、喜升の家へ泊り込んだんださうだがこの女は今朝皆ながまだ寐てる中に起きて、牛込の先生のとこへ行つたんださうだ。……　初めての家へ隨分圖々しいぢやないかね。……　先生もこんな奴にかゝつちやア耐らんな」と木戸は彼女の顏につく／＼と見入りながら、まだ笑顏を續けた。

「だッてお師匠さんとこから愛宕下の下宿屋へ行くには道順ですもの。……　いづれ秋色先生のお宅へもお伺ひしなけりやならんとお師匠さんも云うてゝてしたよつて、今日一寸寄つて見たんですの。けども何んだかキマリが惡うて入りにくかつたわ」

「先生のとこて此家を敎はつて來たんてすね。先生も隨分………」と私は謎の解けたやうな氣がした。

「えゝ、お蔭て愛宕下まで無駄道をするのを助かりました。……　それに最初奥樣に御目にかゝつていろ／＼お話しますと、先生も笑ひながら出てゐらして、お二人て親切に仰有つて下さりました………」

程なく刺身や茶碗蒸しが運び出されて、燗德利も一本附いてゐた。」

「おせッかいか惡戲か知らんが、先生が詰まらないことをするんて、僕は實に弱つて仕舞つた。

木戸は盃を手にしたまゝ、長い散髮の首を振り／＼斯う云つた。其の顏には依然笑ひを含んでゐた。

この時から私は彼女のことを、「木戸の妻君」と呼ぶやうになつた。……………

私は木戸に連れられて妙な場所へ度々出入りした爲めに、厭やな病氣に罹つてゐたが、それが稍直くなつたので、久しく雜誌社を休んだ。さうして病の癒ると殆んど同時に現在の社に入社する手蔓を得たから、それきり木戸の雜誌社の方を辭した。て、木戸にも會ふ機會が尠く、築地の家を訪ふことも暫く怠つてゐたが、妻君の無事に居ることと雇婆を廢して妻君がおさんどんをしてゐること。木戸が前よりも一層劇しく浮かれ出して、家に歸らぬ日が多いこと。こんな噂さは絶えず耳に入つた。それから、

秋色先生は初め一時の座興から木戸の妻君の尻押しをしたのだが、この頃では眞面目に木戸を意見して、妻君の後楯になつてゐるから、木戸も往生だらう。――

牛込の先生は江戸ッ兒だけに裁決も氣が利いてゐて何んとなく粹だ。………一旦夫婦約束をしたからには、一生見棄てゝはならないことを木戸に盟はした代りに、妻君の方では、女大學式に貞節を守り、嫉妬を起してはいけない。………と云ふことになつてるさうだ。何んても先生の宅へ夫婦を喚んて、斯う云ふ取り決めをしたとか云ふことだ。木戸はこの取り決めのことを『牛込條約』と呼んで蔭で冷笑してるが、幾ら冷笑しても、牛込條約に縛られては木戸も一生窮屈なことだらう。――

木戸がこの頃方々を浮れ歩くのは自暴の氣味もあるが、一つは妻君が愛想をつかして出て行くのを待つてるのらしい。……けども妻君は子供の時から執念深い質て、なか〳〵氣が勝つてゐるから、師匠や朋輩の手前、『殺されても木戸の家は退かぬ』と云つてるさうだ。――

こんなことを態々私に告げに來たものもあつた。

一年ほど後のことであつたらう。田舍に居た木戸の母が重病に罹つて東京の醫者にかゝりに來たと云ふことを聞いたので、暑い日に忙しいのを繰り合はせて久々て築地へ見舞ひに行つて見ると、家の狀が見違へるほど變つて、子供も無いのに甚だしく荒れてゐるのが眼に立つた。

病人は長四疊に萌黄の褪げた蚊帳を吊つて寐てゐた。木戸は留守て、妻君は十歲も齡を取つたかと思ふ程に老けて、

「病人が白晝も蚊帳を吊らんと聽かんので、餘計暑苦しうて、……』と云ひながら亂れた束髮を掻き上げた。

「少し氣が觸れてますので、看病がしにくうて困ります。それに私のことを仇敵のやうに云ふて、御飯を喰べてるところへ來ては、鼻ッ先まて首を伸ばして、「大層よく召し上りますな」と云ふんてせう。何んぼ正氣てない病人の云ふことでも、辛抱がし切れないぢやありませんか』と妻君はまだ低い聲て染々と訴へるやうに云つた。私は見舞ひの手土產を置いて、病人には顏を合はさずに暑苦しい家を出た。

「木戸は妻君を逐ひ立てる爲めに、あんな病人を田舍から態々連れて來たのではあるまいか」私は途々斯う考へて歩いた。

其の年の冬の初めに、木戸から黑框付の葉がきが來た。

葬式には、其の頃もう寄席を退いて、内弟子ばかりを取つてゐた喜升婆さんも來てゐたが、寺からの歸りに、枳殼垣に沿ふた細道て背後から私を呼び止め、「暫くてしたね」なぞと云つた末に聲を密めて、

『圓吉さんも稼業を廢めて堅氣になつたのは結構でござんしたが、あんなに苦勞するんてはね、與樓になるより稼いてた方がいゝだらうと思ひますよ。川立ちは川て果てるとか云ひましてね、私たちは矢ッ張りこれて終るのがいゝんてございませうよ。……圓吉さんにもねい、加減に諦めた方がいゝだらうと云つて見たいんてござんすが、子供の時から强情な娘てしてね、自分に斯うと思ひ込むと、なかく人の云ふことなんぞ聽かない質ですし、それに廢業る時にはあなた大變な鼻息てしたから、あの娘の氣象として今更木戸さんと切れちやァ面目ないと思つてるんてせうが、今度阿母さんを見送つたから、當坐の苦勞は遁れたやうなものゝ、これから先きあなた、木戸さんがあんな風ては心細いぢやありませんかね』と、氣の毒さうな顏をして云つたけれど、私の耳には幾分の興味を持つて語つてゐるやうに聞えた。

『尤もあの娘の藝ては、また寄席へ出ると云つたつて難かしいてせうし、……年ても少し若けれや別てすがね。……しかし木戸さんには幾ら邪慳にされても、……いゝとこがあるんか知れませんよ。ホヽヽ』と婆さんは黑い肩掛に埋つた口元に妙な笑ひを浮べた。

其の後三四年、風のたよりに消息は聞きながら、親しく木戸と往來する折がなかつた。兩三度途中て木戸の若々しい、にこくとした顏を見たことはあつた。

風のたよりに聞く消息は何時ても、木戸が月給の前借をして方々を浮れ歩くので、妻君は借金の言譯に困つて、雜誌社の會計室へ怒鳴り込み、『木戸に月給を渡して呉れるな』と云つたと云ふやうなことば

かりてあつた。

木戸が大阪へ行つたのは、それからまた三年ほど後のことで、私がそれを聞いた時には、木戸はもう東京へ歸つてゐて、A――君のよく話す三田綱町の搖れる家に、矢張り妻君と一所に住んでた。――

三

木戸の舊友Sの談話。――

秋色先生の紹介で私は初めて木戸に會つた。それは壁の汚れた雜誌社の應接室であつたと記憶してゐるが、愛宕下の下宿屋も、長四疊のある築地の家も、三田綱町の搖れる家も、私は皆知つてゐる。けれども私の最も親しく木戸と往來したのは、其の大阪に居た時であつた。私は木戸よりも少し早く大阪の雜誌社へ雇はれて行つたが、暫くすると秋色先生から手紙が來て、木戸が借金の整理に暫く田舍へ行きたいと云ふから、其の地で相應の地位を探して貰ひたい。他の場所なら彼れの爲めにならないと思ふが、大阪なら二三年居ても差支へはあるまい。東京以上のサラリーで宜しく頼む。と云ふことであつたから、新參の身の云ひにくいのを辛抱し社長に話すと、秋色先生の聲がゝりと云ふので、社長も社員の配置に都合をつけて、木戸の爲めに一個の椅子を明けて呉れた。それは兎に角一方の主任と云ふでとで、月給は東京の殆んど倍であつた。

木戸夫婦は曾根崎に座敷借りをしてゐたが、東京ではまだ從順であつたらしい妻君も、大阪では少しづゝ反抗を始めた樣子で、鷹揚な木戸もにこ〳〵とはかりはしてゐないらしく、時々夫婦喧嘩をする樣

てあつた。宿のもの丶話しによれば、喧嘩が劇しくなると、妻君が木戸の手足に噛み付くので、大抵は木戸の負けになると云ふことであつた。

小競り合ひのあつたらしい後へ私の尋ねて行つた時には、まだ怒氣の鎭らぬ風で妻君が、

『秋色先生はまだ若いし、弟子たちも皆二十歳代だから、僕だけ年を取つてるのは工合が惡いさに、二十九だと云つてあるから、其のつもりにして置いて呉れツて、この人は私が戸籍の謄本を見付け出した時に拜むやうに云つて頼むんですよ。それて私の籍は何時まて經つても入れないて、實印を隱し廻つてるんやもん、水臭いツたら……………』と木戸の苦笑してゐるのを睨み〳〵云つた。私はこの時覺えず木戸の顏をつく〴〵と見て、彼れの眞個の年を想像しやうとしたが、其の若々しい狀が、何うしても三十を多く越えてゐるとは思はれなかつた。

『散髮を長うしてるさかい分らんが、頭の眞ん中が禿げてるぢやないか』妻君はまたこんなことを云つた。

さうかと思ふとまた夫婦交情の好い時もあつて、妻君の口三味線て木戸が三勝のさわりを敎はつてゐることもあつたが、妻君の素性を知らぬ社の同僚なんぞは、夜店の歸りに木戸の宿を訪ねやうとして、門の前まて行くと、二階ては夫婦の掛け合ひて義太夫が始まつてゐたので、遠慮して内へ入らず、通りがゝりの立ち止つた四五人とゝもに、一段聽いて空しく歸り去つたと云ふやうなこともあつた。

其の中に妻君の姿が宿に見えなくなつたので、何處へ行つたのかと聞くと、木戸は、

「此處まで來た序でに郷里へ墓詣りにやつた。阿波だもの、川口から船に乘りや直ぐだ」と何氣なく云つた。

其の日だつたと思ふ。木戸は社へ出ると私を物蔭へ呼び入れて、原稿紙に書き付けた社に對する要求條件を突出し、「これを社長に見せて呉れ、容れられなければ決心がある」と云ふ意味を小聲で押し付けるやうに述べた。

初めから隨分優待がしてあるのに、入社後間もなくまたこんな要求を持ち出すのは、紹介者たる私の社長に對して忍び得ないところであつたが、直接談判をやられては私の顏が廢ると思つて、恐る〳〵それを社長に申し出ると、秋色先生を尊敬し、且つは木戸を信用してゐる社長は、翌日になつて悉く木戸の要求を容れた上、私と木戸とを網島の鮒宇と云ふ料理屋に呼んで懇親の晩餐を共にした。

其の翌日から木戸の姿は見えなくなつた。

後から能く〳〵聞いたり、考へたりして見ると、木戸の遙々大阪に來たのは、妻君を振り棄てる目的であつたらしく、墓詣りにと云つて妻君を阿波へやつた後で、自分が東京に歸つて仕舞へば、妻君も思ひ切つて郷里へ落ち付くだらうと思つて、念の入つた企てをしたので、社の方へは容れられないのを承知で、厚釜しい要求を出したところが、案外承諾されたから、餘儀なく鮒宇に晩餐會のあつた夜の汽車で、東京へ逃げ歸つたのである。

私は餘りのことに腹が立つて耐らず、上京して秋色先生に嚴談しやうとしたが、寛大な社長はそれを

押し止めて、知らぬ顔で濟すことにしやうと云つた。

木戸のつもりでは、妻君が久々で阿波へ歸れば、親類などに支へられて、二度と郷里を出ることが出來ぬやうになるかも知れぬと云ふやうなことをも頼みにしてゐたらしいが、一週間ほど後に妻君は大阪へやつて來て、其の足で梅田から新橋行の汽車に乘つた。

それからが三田綱町の揺れる家の時代で、木戸も仕方無しに因果の臍を固めたらしく、妻君も漸く落ち付くことが出來たとゝもに、夫婦で負けず劣らず我儘な生活をやつたものらしい。…………

秋色先生の死んだ時、私は東京支局詰になつてゐたので、先生の家で木戸と久々で顔を合はした。腹では久しく怒つてゐても、會つて話して見ると、肌觸りの好い男だから、ツイ文句を云ふことも忘れて、綱町の揺れる家へも訪ねて行くやうになつた。

強い後楯は亡なつたけれど、長い間の腐れ緣に粘着力もあるから、急には妻君の身の上も動くまいかと思はれたが、子のないだけに案外早く別れ話になつて、妻君も最早强情は張らず、八十圓の手切れ金で離緣は直ぐ行はれた。八十圓の中四十圓を即金で渡し、殘りは五圓宛の月賦とか云ふことだつたが、月賦を受け取りに來ては泊つて居つて、元の鞘に納りさうに見えたこともあつたさうである。………

今は木戸にも人並みの新らしい妻君が出來た。年が餘り若いので、木戸とは釣り合はぬやうにも見えるが、女學生風の濃厚な表情や物ごしが、家庭らしい家庭を作つたことのない木戸には珍しくて、四十男が今まで嗅いだことのない新妻の香に醉ふてゐると云ふことである。

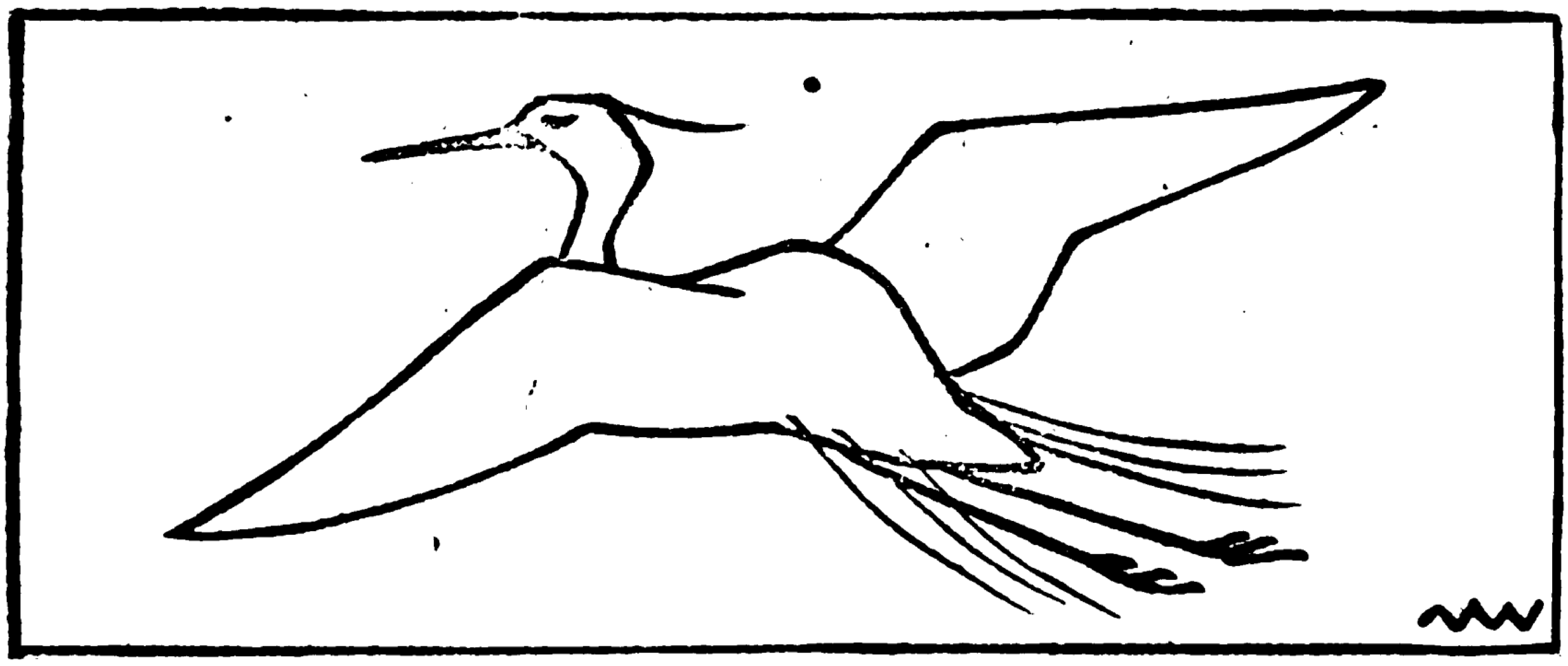
『もう先生が居ないから、飽いたらまた取り更へるさ。………』木戸はこんなことを云つてゐるさうである。――

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

愛宕下の下宿屋は代が更はつたやうだし、築地の家は市區改正で取り拂ひになつたし、三田綱町の搖れる家は、門を無くして町家風に建て變つたが、横の方へ廻はつて見ると、見覺えのある二階の戸だけが、昔のまゝに古びて殘つてゐる。

秋色先生の舊宅には、聞いたことのない名の人が、住んでゐるが、苔に荒びた門の柱は根が朽ちて、後から添木が打ち込んであるのを見た。

人々は皆漸く老ひんとしてゐる。



生田川　一幕一場

鷗外

人物

蘆屋處女
その母
菟會壯士
茅渟壯士
僧

攝津國菟原郡蘆屋の里なる民家。左手犬黄楊の垣の間に門口。そこに沓。一間の正面の中程より右壁。笠二つ懸く。壁の前に機を立つ。中程より左の方窓。火桶。柳筥やうの物。〇蘆屋處女、垂髮を紅の帶にて上げ、白き小袖に、紅の衣を襲ね、機を織りゐ

る。その母、薄き垂髪を白き平髻にて上げ、白き小袖に葡萄の衣を襲ね、手を火桶に翳しゐる。

母。もう春が近いと見えて、（窓の方を見る、）生田川の水がぬるんだと、髫髪(うなゐ)どもが云つてゐた。わたしのやうな年寄ても、どうやら炭櫃(すびつ)が疎ましうなつた。（少し火桶を押し遣る。）

處女。（機の手を停む。）ほんにさうでございませう。此間(こなひだ)の雷から時候が變つてまゐりました。どうしたわけか、わたくしは、かう頭(あたま)を押さへられるやうな心持が致してなりませんわ。

母。いや〳〵。それは時候のせいばかりではあるまいよ。血の道も手傳つてゐるかも知れない。それに年寄つて同じ事ばかり云ふとお思かも知れないが、あの毎日のやうにお出になる二人(ふたり)の方(かた)に、いつも曖昧な事ばかし云つてお置だもんだから、お前の氣の靜まる日はないのだよ。

處女。あ。その事だけは、おつ母さん、どうぞ云はないで置いて下さいね。その事だけは、わたくしは考へても見たくございませんし、申したくもございませんの。考へたり、申したり致すと、わたくしは頭痛が致してまゐりますから。

母。それ御覧な。お前の頭(あたま)の痛いのは、春先のせいばかりではないのだよ。お前の言ひたくないと云ふのを、何もわたしが無理に彼此云ふのぢやあないが、どうせ何時(いつ)迄も此儘にして置かれるものではないからね。

（處女眉を蹙めたるが、忽ち又思ひ返したる如く、素直に機を下り、母と向き合ひて座す。間。）

わたしも初の内は、お前が面白半分に、二人(ふたり)の方(かた)を袖にしてお出なのかとも思つたのさ。だが、何事

に附けても、輕薄がましい事の嫌なお前の事だから、まさかそんなわけでもあるまいと思つて、よく〳〵見てゐると、お前は飽くまで眞面目だらうぢやないか。わたしもねえ、かうなつて見ると、どうもお前の氣が知れなくなつてしまつたのだよ。それてお前の厭がるのを知つてゐながら、こんな事を云ひ出すのさ。一體お前はどうしようと云ふのだい。

魔女。さうてございますね。

母。さうてございますねぢやあ、分からないね。お前だつて何とか思つてお出だから、頭痛もするのだらうぢやないか。一體どうしようと云ふのだい。

魔女。それはねえ、おつ母さん、わたくしだつて思つてゐる事があるどころぢやございませんわ。思つてゐる事はございましても、どう致す事も出來ないのてすもの。

母。變ぢやあないか。二人の內どちらかにお前が極めなくちやあ、治まりつこはないぢやないか。

魔女。それはどうも極められませんの。

母。おや〳〵。それては矢張極めないて置いて、二人てあんなにおしのを、見てゐたいとお云ひのかい。

魔女。なんの、わたくしが、それを見てゐたうございませう。わたくしはそれを見てゐるのが、つらくてならないのてございますわ。

母。（少し聲色を勵ます。）どうもそれては分からないね。この津の國に、服部の女子は澤山ゐても、お前の織つた絹の値が一番好いと云はれる程、何に附けても器用なお前が、二人の男に思はれたからと

云つて、まさか意氣地がなくて捌が附かないと云ふわけてもあるまいね。

處女。　えゝ。おつ母さんがなんと仰やつても、どう思つて仰やるといふことが分かつてゐますから、わたくしは腹を立てたり拗ねたりは致しませんの。おつ母さんの仰やるとほり、わたくしにはあのお二人を釣つて置くの綾なして置くのといふ心持もございませんし、それかと申して、わたくしだつてあのお二人に彼此云はれるので、只途方に暮れて、ぼんやり致してゐるのでもございません。わたくしが極められないと申しますのは。

母。　ふん。お前が極められないとお云ひのは。

處女。　極められないと申しますのは、それはあの、(徐かに立つ、)人間の力に及ばない事てはございますまいかと、思ふからてございますの。

(二人暫く無言。○忽ち群鳥の羽音、窓のあなたに聞ゆ。處女窓の戸を開け、向うをぢつと見てゐる。)

母。　なんだい。

處女。　あの平張の打つてあるあたりから、鴉が立つたのでございます。(間。)

母。　お前が極められないとお云ひは、どなたかにお前が極めたら、殘る一人の方が、その傍にはゐられまいとお思なのだらうが、わたしはさうは思はないよ。(處女はぢつと外を見てゐる。)さうしたら、一人の方があきらめておしまひなさるだらうと思ふがね。(處女はぢつと外を見てゐる。)お前はさうはな

らないとお思のかい。

處女。（こなたへ向く。）それは大變な事になりは致すまいかと思ひますの。

母。はてね。そんならお前が殺されるとか、お前の極めた方のかたが殺されるとかお思のかい。どうもお二人ともそんな氣の荒い方のやうではないのだがね。

處女。えゝ。そんな氣の荒い方々てはございませんとも。

母。それてはお前に捨てられた方のかたが死んでてもおしまひなさらうと云ふのかい。

處女。（又母と向き合ひて坐す。）それは死んでおしまひなさいますわ。

母。（微笑む。）まあ。矢つ張利發なやうでも世間見ずだね。

處女。いゝえ。きつと死んでおしまひなさいますわ。

母。そんなら、お前の大變な事になるだらうとお云のは、その事なのだね。

處女。いゝえ。

母。はてね。（暫く考ふ。）その方に死なれては、お前達が濟まないとお云のかい。

處女。えゝ。それは二人の間に、亡くなつた方の影が立つて入らつしやるのですもの。

母。ふん。お前の考も大抵分かつたよ。わたしの考ては、少しお前が思過しをしてお出のやうだが、わたしだつてきつとさうてないとも云はれないのさ。併しそれはお前が出し拔けにどなたかに極めると云つゝなら、捨てられた方のかたが、あきらめにくいかも知れない。どうだね。お二人の間て極まつ

てしまふやうにしたら。

處女。 そんな事は出來ませんわ。

母。 （又微笑む。）何故。出來ないには限らないぢやないか。

（菟會壯士、茅渟壯士袖垣の外に現る。二人共烏帽子、狩衣、袴。菟會壯士は薄色。茅渟壯士は黄。いづれも人柄詞つき處女と母とよりは、稍時代なり。胡籙を負ひ、弓を持ち、鴨一羽づゝを提ぐ。）

どなたかお出なされたやうだね。

處女。 お二人ですわ。

菟會壯士。 （一歩下がりて、茅渟壯士に。）さあ。どうぞお先へ。

茅渟壯士。 いえ。あなたこそ。

菟會。 わたくしは此土地のもの、あなたは隣國のお客ではござりませんか。どうぞ御遠慮なく。

茅渟。 いつも同じやうな事を申すやうてはござりますが、さう仰やると、つひ愚痴な事も申したくなります。何故わたくしは思ふ人と、同じ津の國には生れずに、和泉の國に生れましたやら。

菟會。 これはお詞とも覺えません。道が遠ければ、お志の深さも知れるといふものではござりませんか。

茅渟。 志は劣らぬ積てござりますが、思ふ人とまだ片生の昔から、お隣合のあなたこそ、お羨ましう

ございます。

菟會。　いや馴れては目にも止まらぬ習てございます。珍らしく來られたあなたがお羨ましうございます。かう申してゐては、果てしがございません。兎に角お先へ。

茅渟。　そんならお許下さりませ。（柴の戸に手を掛く。）頼みます。

處女。（處女靜かに戸口に歩み出て、戸を開く。三人顏を見合せて思入あり。暫く無言。）
どうぞおはいりなさいまし。

茅渟。　御免下さい。

菟會。　御免下さい、

（二人の壯士、處女の母に目禮し、各弓を傍に置きて坐す。母の位置と三角形になる。處女は戸口に近き處に突居る。）

母。　これはお二人ともお揃て、好うこそお出下さいました。

茅渟。　丁度こなたへまゐらうと存じまして、あの平張の打つてあるあたりまでまゐりますると。

菟會。　和泉のお客と落ち合ひまして。

茅渟。　鴨一羽づつ取りましたのを。

菟會。　お土産に持つてまゐりました。

（二人鴨を母の前に出す。）

母。　まあ、揃ひも揃つた立派な鳥でございますね。娘。厨へ持つて行つてお置。

處女。　はい。

（鴨を取りて、右手へ入る。）

茅渟。（菟會に。）そなたの母刀自が、立派なと仰やつたので、あの鵠の事を思ひ出しました。あれはまだあの儘浮いてをりませうかな。

菟會。きつとあの儘をりませう。何處から飛んでまゐつたものか、今朝見たときからあの通りにぢつとしてをりまする。

母。　あの、鵠がゐると仰やいますか。

茅渟。　さやうでございます。先程二人で鴨を射ますと、近くにゐた鴨の群は一度にぱつと立ちましたが、直その向うに鵠が一羽立たずに浮いてをりました。小舟を出して射た鴨を取つてまゐりました時も、鵠は靜かに波を切つて、二丈ばかり退いたばかりで、矢つ張立たずに浮いてゐました。

菟會。　雪のやうに眞白な、大きな鵠でございます。

母。　それはまあ、珍らしい。（少し間を置き、思案したる様子にて、膝を進め）から申すと、なんとやら差出がましうございますが、あなた方お二人で、その鵠を射て御覧なさいませんか。二筋の矢に鳥は一羽。お中なすつたその方を娘の婿に致しませう。

茅渟。　はつ。これは何よりの仰でございまする。菟會のお方。いかがなものでございませう。

菟會。なる程。御尤な母刀自の仰でござります。わたくしも異存ござりませぬ。

茅渟。かういふ内も心が急く。直にこれから。さあ。

菟會。さあ。

（二人弓を取りて立つ。處女右手より出て、立ちたる儘にて、ぢつとこなたを見る。二人の壯士、同時に處女の顏を見、さて同時に目を母の方に移す。）

茅渟。後程お目に掛かります。

菟會。後程お目に掛かります。

母。お待申してをりまする。

（二人の壯士、柴の戶を出て、左手に入る。）

處女。（二人の左手に入るまで、ぢつと立ちゐて、徐かに母の傍に進み、向き合ひて坐す。）又お出なさるのですつて。

母。こん度お出なさるのは、多分どなたかお一人で、そのお方がお壻さんだよ。

處女。何故なの。

母。（微笑む。）何故だか當てて御覽。

處女。分かりませんわ。

母。（又微笑む。）好い思附があつたのだよ。（間。）實はね、さつき二人で持つてお出の、あの鴫を射なす

つたとき、大きな白い鵠が一羽、鴨が立つても舟が來ても、逃げずに浮いてゐたのだとさ。その話をわたしが聞いて、それを取つて來た方を聟にしようと云つたのさ。

魔女。まあ。そんならお母さんは、今朝から川に浮いてゐる、あの鵠を取つて來いと、お二人に仰やつたの。

母。さうだよ。今朝から川に浮いてゐるとは、それをお前は知つてお出か。

魔女。えゝ。ここから好く見えますわ。大きい白い鵠ですもの。

母。さうかい。

（間。○魔女心配らしき樣子。）

變な顏をお爲ではないか。又頭痛がして來たのかい。

魔女。いゝえ。

母。ではどうしたといふのだえ。もしかわたしの云つたことがお前の氣に入らないのかい。

魔女。いゝえ。

母。分からないねえ。そんならお前の出來ないと云つたことが不思議に出來て、今日一日に極まるのを、惡いとお思ではないのだね。

魔女。いゝえ。それが惡くはございませんの。只わたくしには久しい間、極まらないでゐた事が、そんなに急に極まるのが、恐ろしいやうでございますの。それにあの大きな鵠を、今朝ふいと見た時

から、なんだか氣に掛かつてゐたのに、あれが射られて極まるといふのも、恐ろしいやうでございますの。

母。なんの詰まらない。さういふ内に、その鳥はもう射られたかも知れないのだよ。

處女。(獨語のやうに。)ほんに鵠はどうしたかしら。

(處女徐かに立ちて戸を開け、外を見る。○間。)

母。見えるかい。

處女。(見返らずに。)えゝ。(語氣緩く。)緑に光る水の上に、固めた綿かなんぞのやうに、眞つ白に見えてゐますわ。

母。二人の方はどうなすつたのだらうね。(間。)川はつひ其所だけれど、道が曲がつて附いてゐるから、まだお出なされぬかも知れない。

處女。あら。

母。なんだい。

處女。白い鳥が大きくなりましたわ。(間。)羽を廣げたのでございませうか。(間。)又小さくなりましたわ。(間。)舟が出ますの。(間。)鳥が流れますわ。(間。)鳥の方へ舟がまゐりますわ。(間。)人が二人乘つてゐますわ。(稍長き間。)舟に鳥をいれますわ。(間。)こちらへ漕いでもどりますわ。(稍長き間。)鳥に矢が立つてゐますわ。矢が二本。

母。なんとお云だえ。矢が二本鳥に立つてゐるといふのかい。

處女。え丶。(間。)舟が着きましたわ。

(母も處女も暫く無言。○處女はぢつと窓の外を見てゐる。)

二人て鳥を中に置いて、動かずにお出なさいますの。

母。(心配らしき樣子。)まだ何か見えるかい。

處女。え丶。(間。)いつ迄も動かずにお出なさいますの。

(長き間二人無言。○處女はぢつと窓より見てゐる。○鐘の音。窓の外次第に夕映にて赤くなる。

○此時僧墨染の衣、受糧器を持ちて登場し、戶の外に立つ。)

僧。煩惱謂貪瞋
癡慢疑惡見
隨煩惱謂忿
恨覆惱嫉慳

母。おや。托鉢の坊樣がお出なすつたね。いつも朝の内なのに、こんなに遅くなつて。

處女。(靜かに窓を離れて、懸けたる笠を取る。)あの、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て來ますわ。

僧。依止根本識
五識隨緣現

或倶或不倶
如濤波依水

母。本當にその鳥に、矢が二本共立つたのなら、お前が行つたつて極まりやあすまいぢやないか。

處女。(戸口にて沓を穿く。)いゝえ、おつ母さん、あの鵠が死にましたので、今日はわたくしの身の上が、どうにか極まらなくてはならないやうに思はれますの。(語氣緩かに強く。)人間の小さい智恵で、どうしようの、かうしようのと、色々に思ひましたのも、夜が明けて見れば、燈火の小さい明りがあるかないか知れないやうなものですわ。

僧。現前立少物
謂是唯識性
以有所得故
非實住唯識

處女。おつ母さん、門に入らつしやる坊樣にお上げなすつて下さいよ。

(處女僧に會釋して、戸口にて意を決したる如く早足になり、左手に入る。○窓の外薄暗くなる。○母柳筥やうの物より錢を取りて手に持ち出て、僧に贈る。僧受糧器にて受く。)

僧。爾時住唯識
離二取相故

母。なんとお云だえ。矢が二本鳥に立つてゐるといふのかい。

處女。えゝ。(間。)舟が着きましたわ。

(母も處女も暫く無言。○處女はぢつと窓の外を見てゐる。)

二人て鳥を中に置いて、動かずにお出なさいますの。

母。(心配らしき樣子。)まだ何か見えるかい。

處女。えゝ。(間。)いつ迄も動かずにお出なさいますの。

(長き間二人無言。○處女はぢつと窓より見てゐる。○鐘の音。窓の外次第に夕映にて赤くなる。

○此時僧墨染の衣、受糧器を持ちて登場し、戸の外に立つ。)

僧。煩惱謂貪瞋

癡慢疑惡見

隨煩惱謂忿

恨覆惱嫉慳

母。おや。托鉢の坊樣がお出なすつたね。いつも朝の内なのに、こんなに遲くなつて。

處女。(靜かに窓を離れて、懸けたる笠を取る。)あの、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て來ますわ。

僧。依止根本識

五識隨緣現

或倶或不倶
如濤波依水

母。本當にその鳥に、矢が二本共立つたのなら、お前が行つたつて極まりやあすまいぢやないか。

處女。(戸口にて沓を穿く。)いゝえ、おつ母さん、あの鵠が死にましたので、今日はわたくしの身の上が、どうにか極まらなくてはならないやうに思はれますの。(語氣緩かに強く。)人間の小さい智惠で、どうしようの、かうしようのと、色々に思ひましたのも、夜が明けて見れば、燈火の小さい明りがあるかないか知れないやうなものですわ。

僧。現前立少物
謂是唯識性
以有所得故
非實住唯識

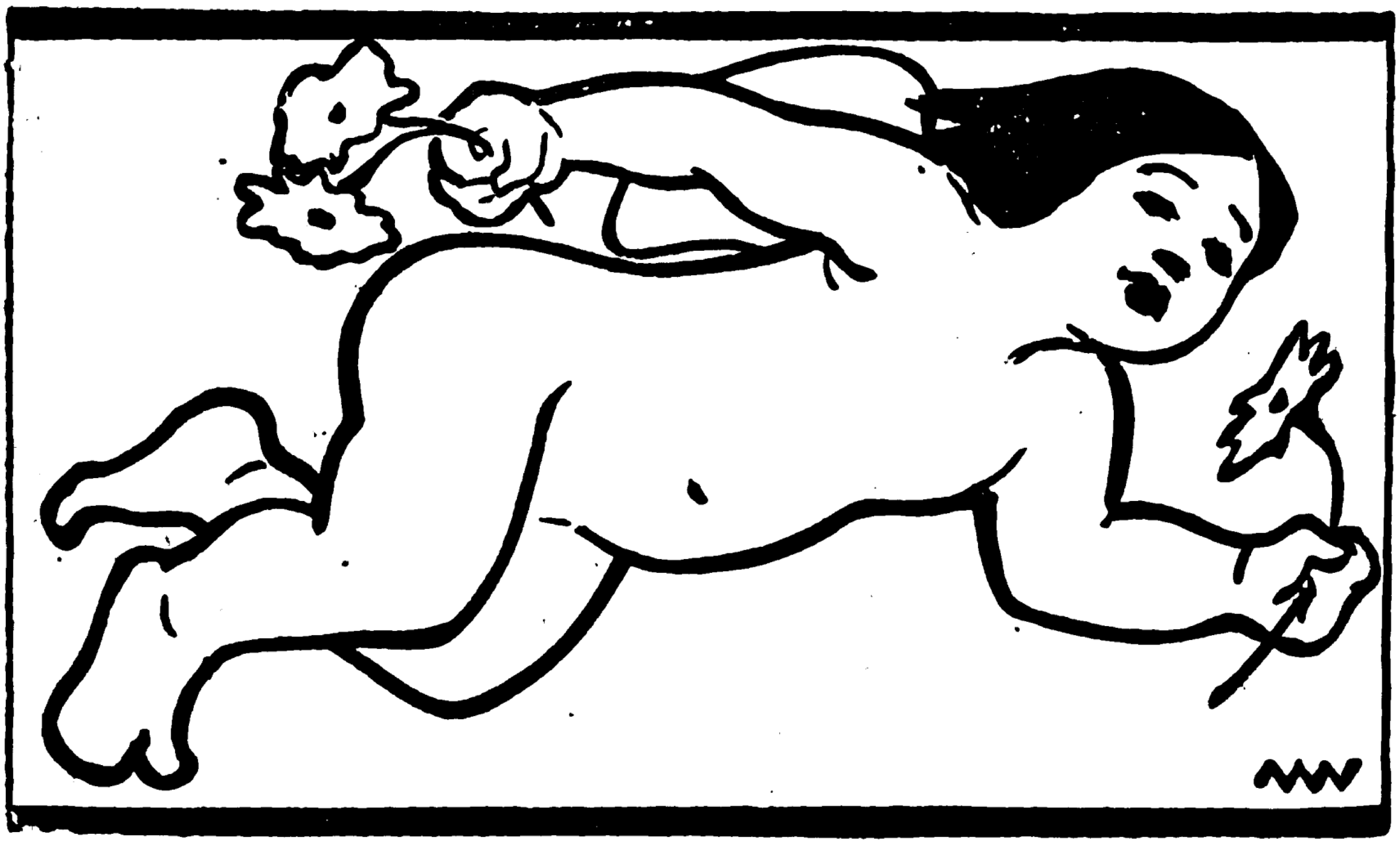
處女。おつ母さん、門に入らつしやる坊樣にお上げなすつて下さいよ。(處女僧に會釋して、戸口にて意を決したる如く早足になり、左手に入る。○窓の外薄暗くなる。○母柳筥やうの物より錢を取りて手に持ち出て、僧に贈る。僧受糧器にて受く。)

僧。爾時住唯識
離二取相故

無得不思議
是出世間智

（僧入る。〇鐘の音。）

母。おう。娘が門で云つたことは、どういふ心で云つたのやら。跡で思へば氣に掛かる。わたしもちよいと行つて見よう。（壁に懸けたる今一つの笠を取る。〇幕。）



壁畫

水野葉舟

一

夜、書齋の中をすつかり整理した。長く懸けて置いた字津さんの寫眞をはづして、井生の寫眞に挿し代へた。しかし、何方にしても今はもう生きて居る人ぢや無い。たゞ消えかゝつたやうな記憶がなつかしいのだ。

あの少女!

今夜も、室の中で一人、落ち付いて坐つて居ようとするとふと心に浮んで來る。一種、言葉では言はれない嫌な色に光つたものが目の前にぶら下つて居るやうなあの少女。今日歸

り道に前島と並んで歩きながら、僕は熱心に話して居たが、その時にもふつと心に浮んで來た。前週の土曜日に、城戸達と汽車で歸つたら、澁谷から二度目に乘り合はした。僕を見ると取つて付けたやうに聲を出して笑つた。そして、籠に人の顏がさし付けられた時の小鳥のやうに、一緒に居た女連と騷ぎ出したあの女。水色の絹レースの長いシオールを首に卷いて居た。あの女があまり騷ぎ立つたので、僕は思はず度を失つた。それを城戸達は意外な顏をして見て居た。

あんなに上品な、初々しい顏をして居るくせに、あの目は如何したと言ふのだらう。恐しいやうに濁つて、何か人を憚るやうな、さうかと思ふと、ものの隙から、人を覗ふやうに見て居る。僕は、こんな風に烈しく女に心を動搖させられた事はない。あれからは絶えず、僕は嫌な想像を心の中に描いて見る。

僕が全力をあげて、自分の或る勇氣を起して、あの女の手を捕へたら?!。あの女を自分の力で、自分の方に引き寄せて、女の心をすつかり見透した上で

「さよなら!」と言つて、歸つて來たら?!

僕はさうして見たい。此の次に逢つたら、機會を見付けてさうしてやらう。

だけど、僕は自分の嫌な心の底を友達や、あんな女達の前に晒してしまつた。あの時程、はしたなく度を失つた事はなかつた。その自分の馬鹿氣た顏が見えるやうだ。それを思ふと自分の事だが、身體がゾツとする。僕はあの淺ましい自分の見せた姿を消してしまひ度い。

何故、僕はかうすぐ心が騒ぐのだらう。如何しても冷い、重い、ぢつと動ない、石のやうな心は僕になないのだらうか。僕が年が若い故だらうか。

ても、不愉快だが、如何もあの女の顔は忘れられない。美しいけれど、濁つて泥のやうだ。その泥のやうな中に何かが隠れて居る。あの女は獨て何を思つてるだらう。あの女の目には、この世の中か……僕の顔が如何な心持をして映るのだらう。僕は如何かして、あの女を自分の力で捕へたい。一度てい丶、一度てい丶からあの女の心の奥が見たい。あの女と人の居ない處で二人だけて話して、その心の奥が見たい。あの女は謎だ。人の心を暗い處に引つぱつて行く謎だ。

二

前島が病氣ださうて、昨日學校に來なかつた。今日は朝からその見舞に行く。前島の枕元に坐つて、午後の二時まで遊んだ。

前島がこんな話をした。子供の時分に、前島は自分が阿父さんと言つて居る人の子ては無いと言ふ事を發見した……或る日、藏に入つて、何心なく祖父に當る人の日記を見て居ると、如何しても、自分の生れた土地が昔から住んて居る、その鄕里ては無い。如何しても、何處か別の處て生れて、この土地に連れて來られたと言ふ事が分つた。

「それから、暫くの間、僕は毎日學校から歸つて來ると、藏に入つてその祖父さんの日記を出して見ては、考へてばかり居た。そして、如何してもこの秘密を嗅ぎ出さずには居られないと思ひ出した。それ

からと言ふものは、兩親の一語言ふ言葉までに、疑り深く心をつけ廻した。如何な事でも、一寸の手懸りになる事があつたら、それから奥の奥まで入つてやらうと思つて居た。その時にはね、一時は身體が衰弱した程だつたよ……

「すると、或る時に、親類ぢや無いけれど近所で昔から親類見たいにして居る家に行つて居たのだね。その時に、そこの叔母さんがふつと、こんな事を言つた。妙なものだね、幾さんの阿父さんには如何して、一人も子が出來ないのだらうね。廣島の叔父さんの方には余る程、出來るのに……」と、それで僕はすつかり分つちまつた。それからは一緒に居る弟もやはり、阿父の子では無いんだと思ふと、前よりか一層可愛くなつて來てね。本當の阿父は廣島の叔父だつて言ふ事も分つたし……」と話した。自分は驚きながら、前島が十二三の時分に、暴風の中に捲き込まれたやうな、その事を聞いて居た。前島はその話をしてしまつても、案外平氣な顔をして居る。

しかし、僕はそこから別れて歸る途にも、この話が胸に刻み付けられたやうに殘つて居た。そして「もし、僕の兩親が本當の親でなかつたら？」と、ふと思つて見た。慌てゝ、「そんな事があつてたまるもんか」。とすぐ自分で打消した。

けれど一度こんな事を思つたら、心は何故かその方に走らうとする。何故か弟や妹達の中で自分の顔だけが、如何も、兩親に似て居ない。母が僕に對する態度は、何處か僻つて居る處があるのぢやないかしら。親子と言ふけれど、僕は今の母の子ではないので、別の女の人から生れたのでは無いかしら……

てなければ、母だけが自分の親て、阿父は他人か……と、方途もなく思つて見たが、そんな、僕の母の貞操に疑がある筈が無い。自分ながら、自分の想像が放縦なのが不愉快になつた。家に歸つて、母の居間に行くと、母は裁縫をして居たが、妙に青い顔をして、自分の入つて來たのにも氣が付かないらしく、ぢつと一方を見詰めて居る。僕はこんな時には、いつも母の身體が冷い青い臘て作つたもののやうに感じられるのだ。今も、それを見るとぞつとした。何か自分の家に恐ろしい、不測の禍が襲ひかゝつて來て居るのては無からうか……

「阿母さん！」と低い聲て後から呼びかけて見た。母は默つて振り返らうともしなかつた。僕はそれをぢつと見ると、心の中が、寂しく暗くなつて來る。

「ね、阿母さん」と二度目に呼ばうとしたが、ふと、「あれはこの阿母さんの子だらうか？」と疑つた。心の中て、何となしに「今だ！」と身體を押すやうにする。この後を向いて僕の立つてるのを知らないて獨て思ひにふけつて居るやうな母……今だ。この母が隱して居るものを見表はすのは……と思つた。そして、ぢつとその脊を見て見ようとした。と、母がふつと振り返つた。

「お歸りか？」とこれも低い聲て言つて、僕を見上げた。その顏！

僕は思はず

「母さん」と子供の時に呼び馴れた言葉て言つて、母の傍に坐つた。

母の顏は、青く皺がよつて、如何にも思ひ疲れたやうだ。その何かしらないが、悲しさうな顏を見る

と、自分の空想が破れてしまつた。だが、今日は夜まで、この嫌な想像になやまされた。

今日は小雨の降る陰鬱な日だ。伊東勝君が頻りに電話をかけて呼んだけれど、行かなかつた。人の顔が見度くない。

夜、羅馬書を讀み出した。其第一章にこんな節がある。これは大に吾々人間の肉慾から來る罪惡について、深い信仰からの叱咤の聲だ。羅馬の世の恐ろしく亂れて居た姿が見えるやうだ。

「自ら智と稱へて愚昏なる者となり、朽壞ざる神の榮光を變へて朽壞つべき人および、禽獸、昆虫の像に似す。是故に神は彼等を其心の慾を縱肆にするに任せて、互に其を辱しむる汚穢に付せり……此に緣りて彼等が恥づべき慾をなすに任せたまへり。其婦女さへも順性の用を變へて、逆性の用となす。此の如く男子は亦婦女の順性の用を棄て互に嗜慾の心を熾し、男と男と恥づることをなして、其悖戾に當るべき報を已が身に受けたり。……」僕はこゝを讀んで、靜かに思ふと自分の身が追ひまくられて行くやうだ。身體がほてるやうに熱して來る。僕等は一體、青春の情と稱して何をした。情熱は美し霧のやうに世界を包んで、燃えて居たか。目に見たもの、手に觸れたものは汚い、卑しいものであつたではないか。その汚いものの中に溺れて居るてはないか。肉だ、肉だ。人間は淺ましい汚いものだ!。汚い血と肉とて出來て居るものだ。口だけて、いくら如何な事を言つたつて、この目が見る處は、泥濘のやうな汚いものだ。

ポーロが言ふ通りだ。僕もこの言葉の前には言ひ逃れられない身だ。實に汚い事を僕のこの手はして居た。願くば、神よ！

◉

今日、前島に本郷邊の女學生の話を聞いて、その行爲があまり色めいて居るのに驚いた。自由な交際などと言ふが、あれは人を誤りやすいものだ。考へて見ると、何時か途で前島が敎へたS――なども、その仲間の一人なんだ。

だが、僕の濱子はそんな事はなかつた。僕等の戀は初めは極々、幼く長閑だつた。二人は仲のいゝ友達だつた。僕達は少しも、汚い心を動かさずに長い間交つて來た。平安な心が長く續いた。今、たとへ戀となつて、次第に二人の互に持つて居た境界線が消されて來ても、心の底は長閑だ。

あゝ濱子！……僕は今日何故こんなに種々な事を思つて來ながら、濱子を力強く思ひ出さなかつたらう。あゝあのふつくりと、花が咲かうとする時のやうに淸らかな頰！。あの黑い人を魅するやうな目！。そして何時逢つても春の花園の中で逢つて居るやうに、蟠りも無く、伸々として居る。……………濱ちやん！

……………………………………………………………………

僕は今から、電車に乘つて麴町まで行かうかしら？。戀と言ふものは美しいものだ。…………

……………………………………………………………………

………………………

けれど、あの日から……………あゝ罪惡だ。僕は自分のこの卑しい汚い心で、あの無垢の少女に汚點(しみ)を付けた。あゝ身體が沈み入るやうだ。一點の汚點(しみ)だけれど、濱ちやんの胸の中に固く堅い黒いものが、ちやんと置かれてある。しかも、僕は數限りなく姦淫の罪を犯して居る。あの水色のショールの女。前島が紹介したS――……僕の心はそれらの女を見るに從つて、罪を犯さうとする。罪深きものよ。罪深きものよ……

さらば、世の中は皆敵となれ!。おれは濱ちやんの手だけは離さない。

三

今日は晴れだ。

學校は大方休みになつたから、田中君の家に行つた。すると濱子がふつと入つて來た。田中君が此間病氣だつたから、その見舞に來たのだと言つた。

僕は嬉しくつてたまらなかつた。…………………………暫くそこで話をして一緒に出た。だが何故か、濱子は今日はひどく冷淡だ。如何したのだらう。歩いて居ても、何だか僕の傍(わき)から身體を退(ず)らして、知らん顔をして居るやうだ。何か言ひかけても、素氣ない返事をする。

僕は遂々たまらなくなつた。

「濱ちやん、これから何處かに行かう」。と言つた。

え?……私、今日は嫌よ。何てすもの早く歸いれつて阿母さんが言つたんですもの。それに歸つて吉村

さんに英語のお稽古に行なければならないんですから」。と斯うだ。僕は「だつて僕が頼むんだから、來たつていゝぢや無いか」。と言ふと、「それでも今日は嫌」と云ひ切つてしまつた。何故こんなに冷淡なのだらう。それに吉村の家に英語を習ひに行くと言ふ事を聞いたのも今日が始めてだ。

それから、二人はまだ暫くは並んで歩いた。

「何時から英語の稽古を始めたの?!」

「此間からよ」と平氣だ。

僕は余り冷淡だから、あの柳町(やなぎちやう)の角(かど)まで來た時に

「さよなら!」と言ふと、馳けるやうに來てしまつた。胸がかき廻されるやうだ。嫉妬が胸を突いて起る。何の爲めに僕に斷りしないで、吉村の家などに稽古に行くんだ!。濱子の英語位なら僕だつて敎へられる。濱子は僕の誇りを傷けてまで、吉村のやうな男にものを敎へて貰はなくつちやならないのか?。濱子は僕を忘れた!。僕との戀を捨てたのだ……と思はれる。今、あの女が僕から別れて歩いて居ると、あの女の心まで僕から離れて行く……僕は頭がぐら〱するやうな氣持がして歩いて來た。

夜、又この事を思ひ出して、苦しくつてたまらない。外では風が吹き出した。裏の寺の杉木立が、恐ろしい音をさせて居る。外の事を思ふと闇だなと氣が付いた。考へて見ると、何處もかしこも闇だ。濱子の居る周圍も闇だ。あゝ……風の音が、遠くの方に消えて行く。この宇宙の廣さ、おれなんぞは小さなも

のだ。
だが、僕がこんな思ひをしたと聞いたら、濱子は後悔するだらうか?。そしてやさしい暖い心になつて、僕の心持を取り返さうとするだらうか?
あゝ、おれは漂泊者だ!。心が始終漂泊して居る。しかし、如何しても近い中に濱子と逢はなければならない。

四

明日、又例の植物園で逢はうと言つてやつた。明日と言つたのは少し、氣が急ぎすぎるとは思つたが、僕の今の心持には、無理でも、それをのばす事は出來ない。
て、その手紙をポストに入れに行つた。「明日、々々」ともう胸が踊るのだ。暖い、海紅の花が目の前に咲いたやうだ。
その誘ひ込まれたやうな心持で、明日の事を思つて居る中に、ふッと濱子さんの事を思ひ出した。あの人の心は寂しからう。男が死んで戀が壊れて了つた。築き上げた石垣が壊れたやうにその戀がめちやめちやになつた。と思ふと、感情がずつと胸に集まつて來る。情を盡した手紙を書いて送り度い。僕は瞑目して、おりつと自分の感情の湧き立つて來るにつれ、歌でも歌ひ度いやうな心持になつた。哀しい歌

だ……

それで、手には濱子が一週間ばかり前にくれた手紙を開いて居た。「少女の戀する君」と初めに書いてある字が、石に大きく刻つた字のやうに目見えて居る。

と、そこへ不意に母が入つて來た。何時にもこの室になんぞ來た事も無いのにと思つて、その顏を見上げると、母はぢつと目を僕の手の處につけて居た。

「何？……それは」と低い重い聲で聞いた。

「手紙です」。僕はぼつとして居た。

「女から？」

「えゝ」

「どんな女、お前何かおしだね？」と言はれると、急に冷りとした。ぼつと蒸されたやうな心持が、吾に返つた。同時に胸が俄かに早鐘を打つやうになつた。

「何にもしません。大丈夫です。牧師の娘さんです。」——全く濱子は牧師の家の末娘だ。僕はこれだけは本當を言つた。その外は母の疑の解けるやうな事を——皆僞をついた。

それでこの事はすんだ。跡は珍らしく沁々と母と話をした。母が、その手紙を見せろと言はなかつたので、大助りに助つた。

幼く、美しき人よ。靜に眠りたまへ！。今夜は靜かないゝ夜だ。

のだ。

だが、僕がこんな思ひをしたと聞いたら、濱子は後悔するだらうか？。そしてやさしい暖い心になつて、僕の心持を取り返さうとするだらうか？

あゝ、おれは漂泊者だ！。心が始終漂泊して居る。しかし、如何しても近い中に濱子と逢はなければならない。

四

明日、又例の植物園で逢はうと言つてやつた。明日と言つたのは少し、氣が急ぎすぎるとは思つたが、僕の今の心持には、無理でも、それをのばす事は出來ない。

て、その手紙をポストに入れに行つた。「明日、々々」ともう胸が踊るのだ。暖い、薄紅の花が目の前に咲いたやうだ。

その誘ひ込まれたやうな心持で、明日の事を思つて居る中に、ふッと濟子さんの事を思ひ出した。あの人の心は寂しからう。男が死んで戀が壞れて了つた。築き上げた石垣が壞れたやうにその戀がめちやめちやになつた。と思ふと、感情がずつと胸に集まつて來る。情を盡した手紙を書いて送り度い。僕は瞑目して、ゆつくりと自分の感情の湧き立つて來るにつれ、歌でも歌ひ度いやうな心持になつた。寂しい歌

だ……

それて、手には濱子が一週間ばかり前にくれた手紙を開いて居た。「少女の戀する君」と初めに書いててある字が、石に大きく刻つた字のやうに目見えて居る。

と、そこへ不意に母が入つて來た。何時にもこの室になんぞ來た事も無いのにと思つて、その顏を見上げると、母はぢつと目を僕の手の處につけて居た。

「何？……それは」と低い重い聲で聞いた。

「手紙です」。僕はぼつとして居た。

「女から？」

「え丶」

「どんな女、お前何かおしだね？」と言はれると、急に冷りとした。ぼつと蒸されたやうな心持が、吾に返つた。同時に胸が俄かに早鐘を打つやうになつた。

「何にもしません。大丈夫です。牧師の娘さんです。」――全く濱子は牧師の家の末娘だ。僕はこれだけは本當を言つた。その外は母の疑の解けるやうな事を――皆僞をついた。

それてこの事はすんだ。跡は珍らしく沁々と母と話をした。母が、その手紙を見せろと言はなかつたので、大助りに助つた。

幼く、美しき人よ。靜に眠りたまへ！。今夜は靜かない丶夜だ。

五

朝、氣が氣て無いが、時間が少し早すぎたので、一寸神田の野川の處に寄つた。何だか話をしたやうだつたが、心が外の事で充ちて居るので、上の空だつた。

やがて、植物園に行つた。上から下をすつかり歩いて見たが、濱子の姿が見えない。

丁度四時間以上待つた。身體がすつかり疲れてしまつた。濱子は遂々來なかつた。その中に日が暮れさうになる。冷い、濕氣のある風がそろつと吹き出した。僕はそこを出た。濱子は遂々來なかつた。悲しいやうな、むしやくしやするやうな心持がして歸つて來た。つくづくたびれた。

六

此頃は何にもしないで日を送つて居る。何て言ふ事だ。今日學校て聞くと、下田は外務省の練習生になつて、ペーターースブルグに行くんださうだ。

おれは如何したらいゝんだ?。本當なら今頃はもう、一つや二つ位は、研究の報告か出來る問題かなければならないのぢやないか。おれの此頃思つてる事は、女の事ばかりだ。下田は行くのかなア。如何もあの目に强い處がある。

七

濱子からの返事が來た。阿母さんが[illegible]つて手紙を[illegible]の上に置いた儘忘れて居たので、行けなかつた

と書いてある。僕はそれを讀みながら、四五日前、あの疲れて歸つて來た、あの自分の姿が見えるやうだ。

何でもいゝ、近日の中に是非逢ひ度いと書いてある。日は僕に定めろと書いてある。この手紙でやつと氣が落ち付いた。何處を捜したつて、濱子と二人の間に、冷い心持があらう筈は無いのだからナ。

僕は早速、明後日やはり植物園でと言つてやつた。

八

例の約束の場所で待つて居た。一足おくれ濱子がやつて來た。僕があの廣い花園の傍の櫻の木の處に立つて居るのを見ると、濱子はパッと顏を赤くした。……………………………………………………………………」。女は目にも、頰にも、唇にも滿足しきつた喜ばしさが見える。何處を捜したつて他意（よそごころ）があるものか。僕は飽くまでも濱子の心を信ずる。濱子の感情に一點でも曇りがある筈が無い……僕だつて嫉妬も何もあつたものでは無い。二人は斯うして居られさへすれば澤山だ。世間から隱れて、斯う自分達の心の滿足だけが得られさへすれば……

歸る途に歩きながら、濱ちやんが斯う言つた。

「あのお清さんね。大變な事をしたのよ」。

「お清さんが？」

「え、此頃ね、家を飛び出して横濱に行かうとしたのですと」。

「横濱に行つて何をするの」。

「奉公をするんですつて」。

「馬鹿な事をするね。誰かに欺されたんぢや無いの？」

斯う言ふと濱ちやんは「さうなんてせうか？」と言つて、不安心な目をして僕を見た。僕もその目を見ると、何となく清子さんの身の上に危險な事があるやうに思はれ出した。女が一人で、あの墮落した横濱のやうな處に、奉公に行く。まるで深い淵の側を歩いて行くのと同樣では無いか。

僕は如何しても、この事を清子さんに思ひ切らせねばならないと思つた。濱ちやんも同感だ。濱ちやんは僕が、この事について不安を感じて居るのを見ると、一層、恐怖の念が強くなる樣子だ。

「如何しても、お清さんを助けて上げて下さいね」と、祈るやうに言ふ。僕はこの濱ちやんが可愛くつてたまらない。お清さんと濱ちやんとは子供の時分からの親友だ。それで二人相談をして、明日にても、お清さんによく話さうと言ふ事にした。

濱ちやんは繰返して、僕に禮を言つた。僕はきつとお清さんに思ひ返させると誓つた。

濱ちやんがお清さんに一寸でも逢ひたいからと言ふので、植村の家の門まで一緒に行つて別れた。

九

濱子から手紙が來た。二人の事が濱子の姉に漏れたらしい。姉さんが逢ひ度いと言つて居ると書いて

來た。もう終りだ！

僕は恥を蒙つて人の前に引き出される日が來た。朝、早速田中君の處に行つて、それを打明けた。すると田中君はぢつと僕の顔を見詰めて居たが「一體如何する氣だい？」「君は濱ちやんと結婚する氣かい」。と言つた。「結婚」と言ふ一語を聞くと、僕は飛び上つた。僕は八方から嘲笑の目で自分を見据えられて居るやうな氣がする。

「だつて、君今はとても駄目だよ」。

「それならエンゲーヂメント」。

「それだつて僕の兩親が許しやしない」。

「…………」田中君は口を噤んでしまつた。僕の心の中では何か急に狂ひ廻るものがあるやうだ。僕はまだ一人の男では無い。家庭の中に居る息子だ。阿父の顔がはツきりと目に見える。

それから、田中君に何とか彌縫策を賴んだ。

僕の心には黒い大きな蟠りが一つ出來た。家に歸つて來て、母の顔を見ると、この自分がもう靜かな單純な家庭の子としてだけの心持て居ない。僕は慄えて居る。母の決して知らない、干係の無い事で心が惑亂して居る……と思ふと、一言でも自由に言葉が出せないやうに思ふ。

僕は心が惑亂して居るのだ。僕は誰にも愛されないのだらうか？僕の一生はこの困迷した心の續きて終るのだらうか？……

濱子！僕の最愛の妻！

濱子は僕の心にとつて美しい花園だ。甘い果實だ。泉だ。僕は終りまで濱子と手は離さない。……夜室の中で又、その手紙を出して見る。この前に僕の送つた手紙を姉に見られた。それで昨夜は一晩、責められた。それ程、思ひ合つて居るなら、結婚をしろ。それが出來なければ、斷然、二人の干係を斷て……神樣に罪を謝して、二人の干係を斷てと言ふ。濱子は泣いて居ると書いてある。僕はそれを讀みながら不思議な想像を始めた。遠くにある濱子の家が、眞暗になつて見えた。暗黑な中にその家が次第に沈んで行く……と、濱子の母も姉も恐ろしく鋭い目付をして、ぢつと自分の來るのを待つて居る。

僕は、如何していゝか分らない。………たゞ目の前に迫つて來て居る問題に向つて、心が騷いで居る。

「勉强しよう！」暫くしてから、猛然として斯う思つた。そんな事ばかり思つて居ないで、僕には爲なければならぬ事がある。僕は女の爲めに生きてるんぢや無い。僕が兼て計畫して居る經濟史の研究は如何したのだ。

僕は濱子の手紙を抽出におし込んで、何もかも忘れてしまへと思つて立つと、書棚の整理を始めた。此頃は始終氣がそは／＼して居るので、落ち付いてこの室の中に坐つて居た事が無い。書棚の中の亂雜になつて居る事と言つたら、言語に絕して居る。先づ、日本經濟史の研究には、歷史類の書が第一着に必要なのだから、一番手近の處に置かなければならない………そして

十

此頃、頻りに心なやむは何故ぞ。何の深き處もなき言葉を吐くは何故ぞ。人を見て情の冷熱激しく起るは何故ぞ！

僕は心も身體も、多岐に苦しんで居る。自分はまるでたゞ刹那々々の刺戟だけて、心が躍つて居る。こんな事てはたゞ徒に自分の力が消滅されて行くだけだ。

僕は平生悲しい心持に取り付かれて生きて居るやうに思ふ。それは全くこの心の欠陥から來たものだ。

夜、

「兄さん遊びませう」と言ひながら、咲ちやんが入つて來た。僕は悲しい牢獄の中に居る人が、窓に來て鳴く小鳥の聲を聞いたやうに、寂しい自分が憐れまれたやうな氣がしながら、妹の言ふまゝに順つて、話をしたり、集めてある書を見せたりした。

咲ちやんが可愛くつてたまらない。咲ちやんの心が、何の蟠りも無く、柔かく自分に倚り掛つて來るのを見ると、僕は自分の寂しい心持にいゝ道連れが出來たやうだ。

十一

今日は學校は午後からだから、朝、田中君の處に寄つた。濱子の家からは、何の問題も起つて來て居なかつた。この默つた儘て――底にものを含ませて居ながら――捨てゝ置かれては、充分不安な心持が

する。

今日又、姉の手紙の事について田中君に相談したらば、一度教會に行つたらよからう。あすこで姉さんに逢つて見たまへ。と言はれた。僕は「さうしよう」と答へた事は答へたが、姉に逢ふのは嫌だ。女の前に行つて、僕は何と言へばいゝのだ。女の口から自分の罪を裁判されるなんて……そんな恥に甘んじて、何處にだつて行かれるものか？

だが、田中君は何故、あんな處に行けと言ふのだらう。

僕は何もかも、今が出發點だと思ふ。僕の經濟史の研究でも、今は Introductory の最初のページにも足が入つて居ない。今はまだ準備の時だ。思ふに、僕のこの研究は一朝一夕に解決を付ける可きものでない。僕の想像では、材料は恐らく從來の經濟學者の手を付けて居ない、或る處にあるのではなからうか？、僕はそれを發見して來るのだ。僕の仕事は發見だ。アメリカの發見だ。

だが、僕は今度の日曜日にはあすこに行かなければならないのだらうか？。その乙女の前で、恥かしいと思ふ顏を見せなければならないのだらうか？。

おれには未來がある！、おれはたしかに、或る處まで歩いて行く事の出來る天才がある。學問は、書を讀んで、その中から一つ二つ拾つて來たものを集めると言ふだけて出來る事ぢや無い。一つの問題の緒を發見する才能が必要だ……僕にはたしかにその才能を持つて居る。自己を信ぜよ。自己を愛せよ。

自己の尊き事を忘る可からず……。

僕はずつと廣い野の中に脊を伸ばして立つて居る一本の若い、杉のやうにならねばならぬ。凡てのものよりは、僕のこの生命は尊い。僕は美しい夢は愛する。あの濱子の心持のいゝ微笑はなつかしい。しかし、僕はこの身を一女子の犧牲に出來るか。あの女の爲めに、野の杉の頭が折られるか。何處までても伸びようとする杉の頭が折られるか。

僕は自分が歩かなければならぬ。と言ふ事を忘れてはならない。

十二

日曜日が來た。

僕は、朝目を覺すと、すぐ濱子の阿父さんの顏が目に浮んだ。肥つた、頰の赭い、そして祈るやうな鋭い目て、ずつと一順聽衆を見る……

「僕は今日あすこに行かなくつちやならないのか」と思ふと、急に心が曇つた。あすこに行くとすれば姉も居る。瘦せたヒステリーのやうな母も居る。その目が僕に集つて來るだらう。あの會の堂の中が冷い……自分を嘲笑つて居る目が集まつて居るやうだ。これは此間、田中君の處から歸つて來て以來、折ふし胸に浮んで來る心持だつた。

だが……僕は如何しても行かねばならないのか。何かしらぬが、僕はあすこに如何しても行かなつちやならないやうに思はれる。何か細い絲だが、胸の中に深く根がはつて、僕の神經にずん〳〵

て來る。僕は仕方が無く、從順に不安心極まる心持をしながら家を出た。戰場に臨むやうな、罪の裁判を受けるやうな……僕は濱子の顏などは心に浮んで來ない。自分の心の弱いのが、自分を食つてしまひさうだ。

會堂の前まで來た。僕はそれでも自分のこの心持に反抗する氣が出た。で、故と笑ひを含ませて、ドアを開けた。すると、中には學校がすんだ跡で日曜學校の先生達が四人ばかりストーブの周圍に集つて居ただけ。僕は、「早すぎた！」と思つた。自分の心が轉倒して居るのが、自分に見えた。僕はやりきれなくなつたので、そこに居たその友人——先生達に故とはしやいて笑ひかけた。だが、胸が波を打つて來て、落ち付いた、心持のいゝ笑聲が出ない。吾ながら聲が上づつて、自分の胸の中の騷いで居るのが人に見られはしないかと思はれた。

すると、尙自分の心持をごまかさずには居られなくなつて、その人達の中に割り込んで坐つた。

音樂學校の生徒だと言ふ、唱歌の先生がも一人の女の先生に頻りと話して居る。僕は坐つて見たが、男の友人達は、少し疲れた氣味で靜かにして居る。それが默つて傍から僕のする事を見て居られるやうな氣がして手持無沙汰になつた。

僕は仕方なしに、てれて默つた。やがて、そつと振り返つて、入口の方の柱に掛つてる時計を見た。まだ九時が十五分しか過ぎて居なかつた。僕はこの廣い會堂の中で一人默つて坐つて居る事はとても出來ないと思つた。ぢつとして居れば、居る程、自分の心がまぎらされない。……遂々兩手でぢつと顏

を覆つて、うつむいた。今、刑に逢はうとして居る罪人のやうだ。と、牧師館の方のドアが開いた。僕ははつとして顏を上げた。何だ濱子が立つて居る。僕の顏を見ると、思はずにッとした。平穏無事な顏をして居るではないか。僕もそれを見ると笑を含ませた。そして心が少しは凪いだやうな氣がした。

濱子は恐れ氣もなく、すつとストーブの處に寄つて來て、一同に挨拶をした。そして音樂生に

「根本さん、今日も一度さらつて頂戴な。お忙しくつ？」と言ふ。

「いゝえ、かまひません。お說教がすんでからこゝてやりませう」。

「如何ぞ。私あの歌は本當に好きだわ。聽いてると氣が浮いて來るやうなの。今朝ももう二三度歌つたの。そうして姉さんにうるさいつて叱られたのよ」。

僕はぢつとその顏を見て居た。何だか欺かされたやうだ。僕との事が姉さんに知れて、泣いて居る女が何處に居る……僕は、だんだん時が經つに從つて、氣が茫となつてしまつた。

處へ、入口の方てがや〳〵と三四人の聲がした。

僕は立つた。そして濱子に

「姉さんは今日此處にお出てすか？」と聞いた。濱子は不思議さうな目をして、僕の顏を見たが、

「姉さんはね、今日學校の方に少女の會があるのてすつて、それに行きましたわ」。と言つた。僕はがつかりした。それて一寸眉を顰らせたが、

「さうてすか……あ、田中君が病氣だつて言ふから、一寸見舞に行つて來ます」。と口から出まかせを、

誰にと言ふ事なしに、言ひ譯をして、濱子に目ですんだら來いと相圖をしてそこを飛び出した。「何が何だか、分りはしない」。と、自分が今朝から胸を荒した事が、ぼつと煙のやうになつた。道を歩いて行きながら、何にも心に殘るものがない。

田中君の處に行くと、丁度、田中君が家を出て教會に行かうとする處だつた。僕は無理に中止てもらつて、家に上ると、ほつとした。

「今、濱ちやんも來るから……一體今日は僕姉さんに逢ひに行つたんだ」。

「さうか。それて如何した？」

「姉さんは居なかつた。何處かに行つたさうだ」。

「さうか」。… 田中君は何時だつていいと言ふ顔をして居る。田中君は冷淡だ！

暫く無駄話をして居たが遂々、言葉が絶えてしまつた。あゝだるい！。不愉快だ。こんな事なら、僕は何もかもよしてしまふ。

二時半ばかりもして、濱子が來た。

姉さんはたゞ何日かその中に、一度、僕に逢ひ度いと言ふんださうだ。僕は自分の馬鹿がいやになつた。

十三

今朝起きて、ぼつと縁側に立つて庭を見て居ると、僕は自分がつくづく、何にも無い道を歩いて居るや

うに思はれ出した。

「お前は何をして生きて居る？」と誰かの聲が耳の傍てする。此間濱子に逢つてから、丁度五日經つた。

僕は近頃、一日でも正直に學校に講義を聽きに行つて居ない。月曜日には、目黑に行つた。次の晩には前島の家て遊んて更かした。水曜日には……あんなに、人の留守ばつかりに行つた事は無い。駒込から、森川町から、湯島から、末廣町……五軒も歩いて、一人も居なかつた。が、一體、僕は何を捜してそんなに歩いてるんだ？……

あゝ、心が常に騷ぎ狂つてる！。僕は何か無いか、何か無いかと思つては歩いてるんだ。否！。何かに追ひまくられるんだ。あゝ……戀の爲めだ。濱子を戀してる爲めだ。僕は心の平安を失ひ、自分の胸の落ち付く處が無い。Wandering soul！あゝ……

僕は……今胸の中に、何處をさがしたつて濱子の顏があるか？……僕は本當に濱子の事だつて思つてやしないんだ。僕は何と一つ決つて思つて居られない性分だらうか。

僕の心の中心は、まだ眠つてるのだらう。考へて見ると、僕の心の底には、まだ何にも色の染つて居ない境がある。そこが眠つて居る處だ。僕の泣いたり、怒つたり、慄えたり、人を戀したりする處は、その外側の部分だ。僕は何の力かて、その眠つて居る中心の核が、割れたる、その時には僕ははつきり目が覺めたやうになるだらう。

今、目に映つて居るのは夢だ。空にぽつと映つて居る虹だ。僕は夢の中て生きてるんだ。夢の中て、

泣いたり、笑つたりして居るのだ……戀も、夢の上に描かれた繪のやうな戀だ。
と思つた。僕ははてしもなく考へて見たが、要するにこんな水の上に浮いたやうな、自分の過去が嫌だ。て、最後に
「何もかも捨てやう！」と決心して、自分の室に入つてしまつた。今日は學校にも行かない。自分の眼前の仕事の整理がめちやになつて居るからだ。
朝の食事をすますと、弟達は氣が急くやうにして、學校に出て行く。それを僕はぢつと見送つて居た。と耳の傍て
「お前は學校は如何するんだ？」と言ふ父の聲が聞えた。
「今日は休みます」。僕はきつぱり答へた。自分ては何か深く信じて居る事があるやうな氣がした。父は默つて、冷淡な目をして僕の顏を一寸見た。僕は氣が苛ら立つやうになつて、自分の室の中に入つた。机の前に坐つて見たが、何から手をつけていゝか、一つも手がゝりになるものが無い。暫く茫然として居たが、先づそこにあるノートを取らうと思つて、その前にしやがんて見た。見なくつても、自分のした事はすぐ分る。何にもありやしない。どのノートを開けたつて、今と言つて、今手のつくのは一冊も無い。たゞノートの背に書いてある題目だけが、ちやんと嚴しく書いてあるだけだ。曰く社會主義研究。曰く經濟問題研究、曰く日本經濟史研究材料、曰くスペキユレーシヨン研究。曰く慾望論、曰く何、曰く何、中にはもう二年も前から立つた儘のがある。僕は或る計畫をして、それを置き放しにして置いて、

他の事を考へて居る中に、時が移つて行つてしまつてるのだ。僕はどれに手を付ける事も出來なくつて、たゞそのノートの背に書いてある字を眺めた。如何したらこの負債をはたす事が出來るだらうと思ふと、情なくなる。全く負債だ。首が廻らない程、たまつて居る負債だ。

身體がおちつと、ものの底に沈んで行くやうな氣がする。僕はベッたりとその書棚の前に坐つた。そして一つ一つ初めからの自分の計畫の計算をして見た。覺えず、研究史研究材料を抽き出して開いて見た。第一ページには丁寧に自分の研究の方針が書いてある。自分がこの計畫を考へた初めに、空想した方針だ。たつた一つ、古代の文學を透して、當時の生活狀態を研究すると言ふ事が、この研究の最初からの自慢になつて居る。その思ひ立つた時の心持を呼び起して見ると、あゝこれも一廻りの一寸立ち昇つた烟りだつた。

この計畫を立てた時、すぐその勢に乘じて、手の廻りにあつた書や雜誌の中から、五六種の書名がぬいて書き連ねてある。その儘であとは一行も新しい字が書いて無い。

その儘て、半年の時が經過して居る。

其外のノートも同樣だ。僕はこの半年の間、何をして暮したらう。何と定つた心もなく、あちらこちらとその瞬間々々の興味を追つて、自分の心をまぎらして居た。てなければ戀だ。女だ。僕の心が一番深く醉つたものは戀だつた。濱子の美しい目が傳へて來る力だつた。あんなに僕の心に重い響を傳へたものは無かつた。

なつかしき濱子!。あゝなつかしき濱子。斯して居る中にも心が自然と誘はれて行く。

否!

僕はこの執着心を、自分の仕事の方に向けねばならぬ。僕はその薄紅の夢で身體が包まれて居るから、心が反對にそは〳〵するのだ。僕は人から斷つ。人から斷つて一人で自分の道を進む。

僕にはこのやうな重大な仕事の計畫があるのぢや無いか。よし、この半年は誤つた。烟のやうに消えた。しかし前途は長い。僕はまだ廿一だ。今から、自分の心をこの一つに集めて歩いて行けば、自分の仕事は進歩する。既に、今日になつて見ると、半年前に立つた自分の計畫の愚かで幼稚な事がよく分るではないか。自分はまだ一歩もその學問の中に踏み込まずに居て、計畫を立てたのだ。一歩でも入つて見れば、その中の世界が全く違ふものである事ははつきりと分るだらう。道はそこから開けて行くのだ。

僕は今日から、歩きかへやう!。あらゆる人から遠ざかつて、たゞ一人この狹い書齋の中で、第一歩を歩み始めるのだ。

あゝ、頭が熱くなつて來た。僕はいつでも、今日のやうにものに熱中して來ると必ず、頭が燃えるやうに熱くなる。そしてぽつと氣が上つて來て、胸が波を打つ。この力で、僕は最後まで進み度いものだ。

今の時には僕の目標になるものは一つきりだ。

途々、ぽつと考へて居る中に晝になつた。母が茶の室の方から、飯を食へと言つて呼んだから、出て

行つた。室を出ると、頭に血が集まつて居るので、悪い酒にでも酔つたやうに顔がほてる。唇は乾いてしまつて居る。食卓の前に坐つて、飯を一口、口に入れると、心持の悪い程唾が粘つて居る。それでも腹は減つて居たので、急き込みながらよく食つた。

母は僕の興奮して居るのを見て居たが、

「お前、朝から何をしてお出でだつたい？」と聞いた。

「勉強をしやうと思つて、もう僕も大學ですからね。何か自分でも研究しなくつちや……」母は默つて僕の顏を見て居た。

食事がすむと僕はがつかりした。何となく疲れたやうになつて、三つも四つも欠伸が出た。で、外の風に吹かれやうと思つて裏に出た。裏と言つたつて十坪と無い。そこには僕が大切にして居る花壇がある。僕はその前にしやがんだ。もう三月も末だ。僕は幾日も朝出て、夕方歸つて來るばかりで、こゝに來て花に世話をしてやらなかつた。しやがんだ時、目を移して、植木鉢の並べてあるのを一順見ると、この頃氣候が干き切つて居るので、土がはしやいて、どれも生きて居さうなのは一つも無い。僕は急にいたましい氣がして、その一つを取つて見た。まだ芽は出ないのかと思つて、上の土を少しかき退けて見ると、小さい白い芽が、逞しく出て居る。

「これは櫻草だ」と言つたが、實は心底嬉しかつた。何となくぢつと、愛情が胸の中に湧き出て來るやうて、急いて臺所から水を汲んで來て、その上にかけてやつた。そして、

「まあよかつた」と思つた。僕の仕た事は何もかも荒れてしまはうとして居る處だつた。今一日でも二日でも遲からうものなら、僕は何もかも自分の周圍が荒敗し去つてしまつて居たのだ。その時に僕が心付いたとしたら、僕はどの位、泣かなくつちやならないだらう。それを思ひ浮べた時には、僕は何とも言へないやうな、嬉しさと悲しさとて胸が迫つて來るのだつた。

僕は如何しても、今まで追ひかけて居た凡てのものを捨て去つて、一念專心に自分の仕事の爲めにする。濱子の事も忘れる。學校も暫く缺席する事にする。

十四

昨夜、床に入つてからも、研究の事ばかり考へた。先づ今日は神田を歩いて岡博士の日本經濟史と、藤井博士の平安朝文學史とを見付けて來る事。それから僕は經濟學を研究する〳〵と言ひながら、"Wealth of Nations." を讀んで居ない。それやこれやがあるから、

阿父に話して、經濟の書を二三冊買つて貰はうと思ふ。それから歸りには上野に行つて、何か面白い書を見付けて來る。

心を靜かにして、心をぢつと重く沈めて、僕はこの仕事の道に上らねばならぬ。

十五

今日て僕は、もう十二三日學校に行かない。圖書館には每日行つて居るが、經濟の論文は面白くない。古代の風俗の研究の方がずつと興味があるので、そればかり讀んだ。

三日ばかり前に、濱子から手紙をよこした。しかし、僕は暫く濱子との消息を斷つ事に定めたから、開封しないである。

僕は今日、上野から歸る電車の中で、うと〳〵しながら頻りに、自分の仕事の事を想像した。

僕が學問するのは一體何の爲だ。何の目的の爲めに僕は斯して學問をするのだ。と思つて來ると、僕はたゞと考へが窮した。歴史の研究などと言ふものは、この生きた生活とは、どれだけ直接の交渉があるか……

僕は自分が間違つて居るやうな氣がした。僕が仕なければならぬ事は、人間の爲めにする事だ。ならば、古い世の中で、如何な生活をして居たかなどと、そんな事を考へたりするよりは、生きた今の世界を研究するがいゝ。僕は何處となく經濟史の研究がつまらなくなつた。

もつと、今の世界の事、今自分が生きて居る世界の事……と思つて來ると、僕は又自分の方向を失つたやうな氣がする。成程、僕の仕事には根據が無い。僕は心細くなつてしまつた。僕は失望した。何故、僕の心は猛然として一つのものに集まらないだらう。電車の中で僕は考へた。考へて見ると、やはり僕の心は空虛だ。僕はその情ない自分の心を眺めては、種々と思ひ返したり、思ひ廻したりして居た。その僕を載せて、電車はどし〳〵し走つて居た。

夜、ゲーテの詩集を開けて見て居たらば、"New Love, New Life." と言ふ短い詩があつた。それを讀

むと、僕はたゞ考へ込んだ。ゲーテは新しい戀人が出來て、この歌を作つた。僕はたゞ心が風に吹かれて散つて行くやうだ。

あゝ、この心よ！

僕はこんな事を思つて來ると涙が滲んで來る。僕は天才では無いのだらうか？。或は僕はこんな學問をして居るのが、間違ひかもしれない。僕は詩人かもしれない。もし、今無名の僕が一つ詩を作つて公にすると、天下の人が驚いて、天下の目が僕の一身に集る……僕の才能はそこにあるのでは無いだらうか。僕は詩人では無いのだらうか。抒情詩人……

十六

今日は久し振りで學校に出た。丁度十二日位出ずに居たので、級の連中は、僕が病氣でもして居たものと思つて居たらしい。前島とも久々で顔を合せた。

丁度學校の門の處に行くと、前島が木村達と一團（ひとかたまり）になつて立つて居た。久々で、制服を着た友達が一團になつて居るのを見ると、氣が晴々した。僕を見ると、一同

「や！」と驚いたやうな聲を立てた。何て元氣のいゝ聲だらう。

「如何してたんだ。病氣か？」と丈の高い木山が先づ聞いた。僕は一同の顔を見ると嬉しくつてたまらなくなつたので、思ふやうに口がきけない。と、前島が

「病氣では無いんだよ」と何もかも呑み込んだやうに言つて、僕の顔を見てくれた。

「病氣だつたのではない。家で思ひ立つた事があつたからね」。と、やつと言葉が出た。
「勉强か？」村瀨と言ふ眼鏡をかけた男が聞いた。
「なあに、この人は空想ばかりして居たんだよ」。と戲言らしく言ふと「ね、さうだつたらう」。と、前島は僕の肩に手をかけた。僕は心の中では苦笑したが、
「此間ははがきありがと」。と囁くやうに言つた。
と、ベルが鳴つた。この團體は言ひ合はしたやうに、緩々と動き出して、學校の庭を通つて敎場の方に步いた。僕もその仲に入つて、身體を一同の手で支へられて居るやうな氣がして、前島に肩をもたて步いた。僕は又、この心持のいゝ氣の伸々した連中の中に入り込んでしまつた。斯うやつて居ると、昨日思つた事などはまるで烟のやうだ。僕は元氣のいゝ、蟠の無い友達の腕で、身體を支へられて居るやうな氣がして、その日はレクチュアを聞いて居ながらも、夢を見て居るのでは無いかと思つた。敎場に入つた時に、僕はあゝ今日は金曜日だつたと氣が付いた。

學校がすむと、僕と前島とは、一緒に歸つて來た。午後一時少し過ぎた位だ。神樂阪の下まで來ると前島は何處かに遊びに行かうかね、と言ひ出した。僕も二つ返事で、では向島の花屋敷にでも行かうか。もう草の若芽が出てるぜと言ふので、二人は赤阪、麻布の方向に乘るのを、今日はお茶の水行きの電車に乘つた。

久々で逢つたので、前島とはきりが無い程、話がある。二人は電車の中でも、顔を寄せ合つて、逢はずに居た間の、種々な事について話し入つて居た。

その中に、前島がこんな事を話した。

「井上の奴に此頃、女が出來たんだぜ。それでね、よく二長町の方に出かけて行くらしいよ」。

「何だ?、相手は」

「何でも、何處かの學生だと、鄕里の方から來てる女なんだ。此間、君は來ないし、學校が晝ぎりだつたのでね。仕方が無いから、井上の家に寄つたのさ。すると、寫眞を出して見せるのさ。何でも××女學校の生徒が七八人寫つてるのだ。そしてね。井上が僕にどれがいゝと聞くんだ」。

「へえ!?」

「一寸美のが居たから、これと言ふと、井上が、その隣のを指してこれは如何だつて聞くだらう。その女さ」。

「如何な女だい?」と僕は面白くつてたまらないものがある様な氣がし出した。

「美かないや、ちつとも、あれならよく神樂阪通りで逢ふ女さ」。

「敎へ給へ、今度の時にね」。

「あゝ……………」

て、日の暮れかゝる頃まで、向島で遊んで歸つた。明日、學校で井上に逢つたら、おかしからう。

十七

今日は本當に暖い日だ。このはつきりと晴れた空を見ると、僕はぢつとして居られやしない。今日は午後はフランス語の會話があるんだが、下見もして來なかつたしするから、休んで遊びに行かうと思つて、前島に一緒に行けと口說いた。誰だつてこんな日には遊びたいさ。勉强家の前島まで二つ返事だ。「今日は何處に行く?」つて言ふ。雜司谷に燒鳥を食ひに行かうと言ふ事にした。

外交史の講義がすむと、すぐ學校を出た。前島はどうせ、雜司谷には甘い菓子なんぞはある筈が無いから、靑木堂で何か持つて行かうと言つて、馬場下の方から出た。

外に出ていくらも步かない中に、僕はもう春の日で蒸されたやうになつてしまつた。身體中が汗ばんで來る。前島は面白さうに話して居るのも、ぼつとなつて半分は上の空で聞きながら步いて居た。やがて矢來の中まで來ると、

「オイ!」と、前島が、突然低い叱るやうな聲で言つて、肱で僕を突いた。はつとして、見ると、橫通りから二人連の女が來た。

僕はすぐ「あれだ」と思つた。氣が改まつた。蒸されてぼつとなつて居たやうな心持がはつきりした。「right?」と聞いた。前島は極く低い聲で「left.」と言つた。

僕は心て頷いて、その女の顏を見た。髮の房々した、色の白い……頰が肥つて、血色がいゝので、目も鼻も平凡な顏立ちだが、若々しく人の胸にふれる顏だ。

その女達は僕達の二三歩先きの處を行く。僕は女の後付きを見ながら、井上の事を思つて居た。肩が圓く、ふつくらと持ち上つたやうになつて居る。その上を銘仙の着物が柔く包んで、…………………………………………僕はその心持を想像して居た。すると、「濱ちやん」と鋭く思ひ浮べられた。濱子とも久しく逢はない……

ふつと濱子の事が頭に浮ぶと、僕は前島と一緒に遊びに行く興味が心から消えてしまつた。自分から誘ひかけたのだが、もう嫌になつた。家に歸つて此間から封を切らずにある濱子の手紙を見度くなつた。前に行く女の肩のふつくらしたのを見て居ると、濱子のすらつとした肩から、腕にかけて、……………………………………

今日程、つらかつた事は無かつた。雜司谷なんぞは面白くもなんとも無い。僕はふつと氣が變ると、實に嫌な處に引張つて行かれるやうで、たまらなかつた。

歸つてから、早速、机の抽出の鍵を開けて手紙を出して見た、三通ある。初めのはたゞなつかしい手紙だつた。二度目のには一寸急に相談したい事が出來たから、日を定め逢ふやうにしてくれと書いてある。

「何が起つたのだらう？」と、胸に暗い疑が起つた。出した日を見ると、三月四日としてある。もう一週

間前だ。急いで第三のを見ると、非常に困る事だから、忙しいだらうが、一度逢ふやうにしてくれ、「濱子は毎日泣いて居るのよ」と書いてある。これは十三日に出した手紙。それからもう五日經つ。

僕の心はくると變つた。僕は惡い事をした。僕が默つて外の事を考へて居る間に、濱子の一身には大事件が起つて居た。僕は南のよく日の當つてる方に向いて、夢を見て居る中に、濱子の頭の上には吹雪が吹いて居た。

僕の心からは何もかも消えてしまつた。急いで僕は返事を書いた。幾度も書きかけては破つた。この返事を今日までしずに居たのは手紙を開封しなかつた爲めだとは、如何しても書けなかつた。て、たゞ簡單に、次の木曜日の午後一時までに品川の停車場に來てくれ、委しくは逢つた上てと書いた。書いて終ふと、きつと姉さんの一件だ。あの事は遂にあの儘になつて居たからと思つた。

あゝ敵が僕の身に迫つて來て居るのだ。

十八

今日も、學校の歸りに、前島と井上の家に遊びに行つた。此頃僕等は逢ふと必ず戀愛論をしないで別れる事はない。今日もそれだ。井上は戀神聖論者だ。前島は何時も常識論て、いつも調和的だ。僕は戀愛の門は人が必ずくゞらねばならないものだと思ふ。井上の議論を聞いて居ると、戀愛は崇高だの、美の極だのと言つて居るが、井上自身の意見では無い。誰かの書ても讀んだ議論だ。だが、僕は井上の議論を聞いて居る中に、自然と自分の事を考へて居た。少くとも、僕にとつては戀愛は美しい夢だ。しか

も夢だけでは無い。同時に僕の本能が命ずる慾望がその中にある。…………………………………………

て、この三人の戀愛論の終りは、つまり井上が自分の戀愛談をする事になつた。その話を聞いて居ると、青年は皆、戀愛の味をなめて居ないものは無い。

僕は歸り道に、前島と別れた。前島と別れると、すぐ道を轉へて、牛込見附から富士見町の方に入つた。そしてあの家……（Ueda.）の格子の前まで來たが、入らうとして、幾度となく躊躇した。

思ひ切つて格子を開けると、お淸さんの妹が出て來た。

「まあ、お一人」と言つた。

淸子さんは居なかつたが、僕は夜になるまで、此家で遊んだ。女の笑ひ聲程、僕の心をそゝのかすものは無い。僕は種々な事をよく話した。末ちやんは家の咲子とまるで同じ様だ。咲子そつくりな無邪氣な我儘を言ふ。僕はそれがひどく氣に入つた。

だが、それとも一つ、僕は今日、このお末さんを見て居ると、何處か濱ちやんに似て居る處があると思へた。何でもいゝ、僕はこの子が好きになつた。

十九

一時頃、約束の品川に行つた。そこから汽車に乘つて、目黒に。今日の事はこの日記に書いて置く必要は無い。

濱子の用事と言ふのは、斯うてある。姉さんの知り合ひの家から、嫁にくれろと言ふ相談が起つたのださうだ。

濱子はそれを言つて、如何しませう。私は他家にお嫁になんぞ行く位なら、死んぢまふ……と言ふのだ。そして僕をつかまへて泣いた。僕も驚いた。もしも、この濱子を人の手に取られるやうな事があつたら、僕は實に寂しい孤獨な生涯を送らねばならない。だが……濱子の言ふた事が、虛のやうな氣がした。僕には自分が愛して居る濱子の身の上に、そのやうな事があらうとは、如何しても思はれない事だ。

虛だ。濱子の言ふ事は濱子があまり、心が幼いから驚き易いのだ。それよりも僕は今日濱子が泣いてばかり居たのが、物足りなかつた。……………

……………………………………………………

二十

雨が降り出した。何時の間にか若葉が伸びて來た。

僕は又、十日ばかり濱子に逢はない。此頃はすつかり會堂にも行かなくなつた。僕はこの四五十日の間何を暮したらう？……………

考へて見ると、たゞぽつとして居る。心に殘つて居る事は、お末さんと夜おそくまで話した事だ。それとも一つ、十日ばかりの前の晩、電車の中で見た女のあの目だ……光と力との無くなつた目!。廿五六位の人の妻君らしい女だつたが、身體つきも、髮も何處にもしやんとして居るが、顏を見ると一時に大きな力で驚かされて、魂を持つて行かれてしまつた、其儘で生きて居るやうな顏……僕はその顏を時々思ひ出す。すると何かの力で脅されるやうだ。强い大きい力が何處かにある。その力が不意に來て吾々人間の心を打つ!僕はそれを思はざるを得ない。

それから第三には……斯うやつて靜かに思ひ出して來ると、種々な事が心に映ッて居る。しかし、日記を出して見ても、この四十七日間(四月五日から、五月廿一日まで)の間はまッ白で何の一句も無い僕は其間、何をして生きて居たらう。空虛か!?。僕の胸には何の形が映つて居た?……僕は烟のやうに生きて居たのか?

濱子からも手紙がもう十二三日來ない。五月もいつか末になつた。夏になつた。外に出ると日が赤味を帶びてカッと押へ付けるやうに照つて居る。身體が始終汗ばんで、何時も心持よく勞れたやうになつて居る。僕は此の頃、學校の往復、その他、外に出てこの日光の下を步いて居ると、絕えず赤土を切り下げた大きい崖が、夏の日に照らされて居る景色が目に浮んで來る。その堤の土が恐ろしい爛れたやうな色をして、日光を反射させて居る。その堤に處々、ひよろつとした草が、この日光に燒き付けられて、枯れかゝつて生えて居る……そのカッと目にやけ付くやうな、陰も、水氣も無い赤土の崖が、絕えず

目の前に横はつて居るやうだ。烈しい日の光の色を見ると。目も身體も旋風のやうになつて回り出すやうだ。

こんな心持をしながら、僕は道を歩いて居る。歩いて居る、町の兩側……埃で灰白くなつた屋根や、板塀は幻のやうになつて目に映つて居る。頭に始終輕く眩暈を感じられながら、生きて居るやうだ。

今日、晝二時間ばかり休みがあつたので、前島と二人で、學校の裏門から出て、戸山の原の方に散歩した。僕は歩きながら、あえぐやうな心持になるのを感じた。たしかに身體が衰弱して居る……

戸山の原に出ると、七八本松林になつてる處で、はるぜみが鳴いて居る。ジイイ、ジイイとだるい單調な鳴き聲だ。それを聞くと僕は

「あゝ……」と思はず、滅入るやうな聲を立てて吐息をした。足下からはもうむッむするやうないきれが立つて居る。前島はこの僕の吐息を聞いて、一寸振り返つたが、何とも聞かなかつた。

僕はこのはるぜみの聲と、やはり今頃よく高い聲で鳴く鶸の聲とが耳に入ると、すぐ身體中が慄え出す。全身の神經が細く波を打つて、悲しいなつかしい感じが、生き返つて來るやうだ。僕は毎年この頃になつてこの聲を聞くと、獨りで自分の心の震動するのを止める事が出來ずに、自然と涙が出て來る。

古い、古い、古い、古い昔の事が目に見えて來るのだ。その時に僕は東京から南の方の田舍に移つて行つた。そして、やはり、今頃の氣候の中で、この鳥と蟲との聲を聞いた。昔は何かなしに幸福だつた。幸福な深いやさしい息が僕の顔に吹きかけられて、僕はゆつくりと眠つたあげく、自然と床の中で目

覺ました。そして

「阿母さん！」と言つて、母の笑つた顔が目の前に出て來るのを待つて居るやうな……そんな心持で生きて居た。その時にこの鳥と蟲との聲が耳の奥に深く刻み付けられた。

十年經つた後に、僕はその聲を聞くと、昔の其幸福だつた事が、音樂のやうになつて身體中の神經と肉とを慄はせる………

夏！。夏！………………

あゝ、…………。僕は又、空に濱子の姿を思ひ浮べて居るのだ。…………………

……………………………………………………

「私……」と囁くやうな聲をして、…………………

あゝ、僕は飢えて居るやうに、女の美さを思ひ浮べて居る。僕は心が苛ら立つて來て、悲しくなる。當もない空な處に向つて、自分の幻を……美しい女を思描かうとして心が苛ら立つのを覺える。

僕は何にも無い空な處に向つて、…………。濱ちやん！。濱ちやん！。

二十一

濱子の美しさは、夢の中に咲いて居る花のやうだ。僕はその花を尋ねて、限りなく戀ひ慕つて行く旅人だ。…………………。イスラエルの人に降つたマナだ。神はこの清き愛を惠みたまふ。僕は昨夜、熟睡して居たが目がふつと覺めた。すると、すぐ……

……………………………………

「濱ちやん……」と言はうとして、初めて氣がはつきりした。

誰が居るものか！。僕は自分の室の中で相變らず一人で寐て居る。起きて電燈をねぢると、壁に沿つた書棚が目に入る。僕は身體を慄はせるやうにして

「……！」と思つた。このたゞ並べられてある書籍の中に何處に生きた人間の溫みがある。……
……………………。

僕はそのまゝ床の上に坐つた。目を閉つても孤獨の感にたへられない。

「……！」と又思つた。そして、矢も楯もたまらなくなる程、……………。

二十二

今日は淸子さんに濱ちやんを呼び出して貰はうと思つたので、學校の歸り途に淸子さんの家に寄つた。玄關の格子を開けると、すぐ腰ガラスの障子をすかして、長火鉢が見える。そこに淸子さんの後姿が見えた。淸子さんは一寸此方を覗いて見たが、僕が居るのを見ると、つッと立つて奥に入つた。と、お末さんが出て來た。

「お上りなさいな。」と愛嬌笑ひをした。僕は手持無沙汰な感がして立つて居たが、思ひ切つて上つた。おかしい！。今日は如何も變だと思ひながら、お末さんの後について行くと、下のお末さんの室(へや)に通された。坐るとお末さんがしかつめらしく

「あのね、姉さんは今日一寸用がありますから失禮しますッて」と言つた。

僕は一種言ふに言はれない不快な感がした。だが、その儘、お末さんと話をした。話をして居る中に、僕はお末さんの顔が、活々と何か非常に樂しいものでも待つて居るやうなのに、魅られて了つた。て、次第に熱心になつて話した。やがて、外に出た。町は冷々した夜氣を吐いて、身體が心持よく疲れて居るやうだ。僕は頭がぼつとなつて居るやうな心持がして、歩いて居た。

お末さんも美しい。あの人を吸ひ寄せるやうな目！……イヤ、不思議だ。思つて見ると、濱ちやんとお末さんとの顔には、何處か共通した處がある。僕がこの二人に對つて居て受けるチャームの中には、何處か相通じた處がある。そこだ！。そこが僕の戀の中心だ。僕は或る人を戀するのでは無い。何と言つて捉へられないが、女が持つて居るあの……濱子も、お末さんも持つて居る、あのチャームを戀するのだ。僕の戀の對象はそれだ！

て、僕は今日計畫して居た事は、駄目になつた。お末さんと話して居たので、少しは心が凪いだが、如何しても濱子に逢はねばならない。今夜手紙を書いて、二三日の中に例の處で……と言つてやらう。

二十三

僕は今日斯う思つた。……………………………………………

…………………………………………………………………………

…………………………………………………………………………

明日、濱子に逢ふのだ。僕は明日この心が飽きる程、濱子の美しい顏を見たい。

Sweet dream! Sweet dream!

二十四

例の木の繁つた處に來ると、濱子は立ち止まつてしまつた。…………………………。そして

「…………!。…………!」と、言ふて泣き出した。僕は驚いて默つてそれを見て居た。

濱子は泣く。今迄、引き締められて居た力が緩るんだやうに、見て居ると、次第に波を打つて來るやうに激しく泣く、肩て波を打たせて、身體を揉むやうにして居たが、その中に聲を立てゝ泣き出した。

僕は默つてその泣いて居るのを見て居た。が、終に

「…………」とやつと聞いた。

「…………、…………、……、……。」と、漸く泣き止んだ。

「……?」僕は濱ちやんの言ふ事が、すぐ受取れなかつた。

「……!」濱ちやんは怒つた目をして瞰んだ。

「…………………、……………………」

「…………………………」

「……。……………………、……」濱子は袖て顏を押へたなりに、頭をふつた。

つ「……」だが僕は、この濱子と逢はずに居た間をさう長かつたとは思はない。僕も堪へられない心持がした事があつたが、女と斯うして逢つて見ると、僕はその別れて居た間の心持は忘れてしまふ。濱子はもう心細く、淋しく小さい心が沙漠の中に慓えてても居たやうに、悲しがつて居る。僕はその容子を見て居ると、女の心が全く一つになつて自分に集つて居る事が思はれる。何處か心の陰になつて居るが、それが嬉しい。僕の心はこんな調子だつた。濱子の泣くのが、すぐ「現實」が迫つて來るやうに、心に迫つては來なかつた。

僕は種々と言つて、濱子を慰めた。濱子は僕が困つて居る樣子を見ると、泣いた顏からそつと笑つて見せた。僕はそれを見ると全身に何か光が閃いたやうて、

「濱ちやん！」と言つた。歯を喰ひしばるやうな心持がした。身體が「戀」て燃えるやうだ。

「僕は濱ちやん……」と言つたが口がきけなくなつた。僕は濱子の全身體に向つて、心が踴る……

濱子の話と言ふのは、結婚問題だ。前の時の問題は、有耶無耶の中に葬られたが、今度は姉さんの友人の従兄だとか言ふ人て、

「姉さんが聞いて來て、それはよからう。それに學校の成績も立派な人だし、家は財産家だと言ふ事だから……つて言ふのよ。」と濱子は言つた。僕はそれを聞くと、何故かカッとなつた。不快な感が胸に燃つた。

「それて、濱ちやんは嫁くつもり?」と言つた。濱子は又泣きさうな目をして、「だから私困つてるのだわ。」と言ふ。僕はその顏を見て居ると、姉さんが憎くつて堪らなくなつて來た。濱子はあくまで單純だ。濱子の心は何處までも疑へない。何もかもあの姉が考へた事だ。「最后！最后！」僕は氣がずつと遠くなるやうに感じた。て、默つてつツと立つと濱子を離れて、林の木の間を、往つたり來たりした。あゝ思ひ掛け無い間に、大事件が起つて身體に迫つて居るものだ。歩いて女の傍に近づくと、女は凋々として俯向いて居る。それを見ると、僕はもう最后の時が來て居るやうに思はれる。

「濱ちやん!!……」僕の聲は沈痛だつた。

「……」濱子は僕の顏を見上げると、懐しさうに笑つた。……………

…………………………………………………………

「…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

…………………………………………………………

……………………………

…………………………………………………………

…………………………

つ「…………………………………………………………」だが僕は、この濱子と逢はずに居た間をさう長かつたとは思はない。僕も堪へられない心持がした事があつたが、女と斯うして逢つて見ると、僕はその別れて居た間の心持は忘れてしまふ。濱子はもう心細く、淋しく小さい心が沙漠の中に慄えてても居たやうに、悲しがつて居る。僕はその容子を見て居ると、女の心が全く一つになつて自分に集つて居る事が思はれる。何處か心の陰になつて居るが、それが嬉しい。僕の心はこんな調子だつた。濱子の泣くのが、すぐ「現實」が迫つて來るやうに、心に迫つては來なかつた。

僕は種々と言つて、濱子を慰めた。濱子は僕が困つて居る樣子を見ると、泣いた顏からそつと笑つて見せた。僕はそれを見ると全身に何か光が閃いたやうて、

「濱ちやん！」と言つた。齒を喰ひしばるやうな心持がした。身體が「戀」で燃えるやうだ。

「僕は濱ちやん……」と言つたが口がきけなくなつた。僕は濱子の全身體に向つて、心が踴る……

濱子の話と言ふのは、結婚問題だ。前の時の問題は、有耶無耶の中に葬られたが、今度は姉さんの友人の從兄だとか言ふ人て、

「姉さんが聞いて來て、それはよからう。それに學校の成績も立派な人だし、家は財產家だと言ふ事だから……つて言ふのよ。」と濱子は言つた。僕はそれを聞くと、何故かカッとなつた。不快な感が胸に蟠つた。

「それて、濱ちやんは嫁くつもり？」と言つた。濱子は又泣きさうな目をして、「だから私困つてるのだわ。」と言ふ。僕はその顏を見て居ると、姉さんが憎くつて堪らなくなつて來た。濱子はあくまで單純だ。濱子の心は何處までも疑へない。何もかもあの姉が考へた事だ。「最后！最后！」僕は氣がずつと遠くなるやうに感じた。て、默つてツッと立つと濱子を離れて、林の木の間を、往つたり來たりした。あゝ思ひ掛け無い間に、大事件が起つて身體に迫つて居るものだ。歩いて女の傍に近づくと、女は凋々として俯向いて居る。それを見ると、僕はもう最后の時が來て居るやうに思はれる。

「濱ちやん！……」僕の聲は沈痛だつた。

「……」濱子は僕の顏を見上げると、懷しさうに笑つた。…………

……………………………………………………

「……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

……………………………………………………

………………

……………………………………………………

…………………………

僕はたゞ「運命だ！」と思つた。斯うして濱子ははてしなく泣いて居た。！

歸る途には、二人は如何かしてこの結婚問題を破らうと言ふ事を相談して來た。僕は胸の中て出來る限りの計畫を立てて見た。が、濱子が

「私は斯う思ふわ。あなたの方から、申込みをして下されば、私一生懸命になつて姉さんを說いてよ。」と言ふのを聞くと、僕ははつと思つた。僕は躊躇せざるを得なかつた。僕の兩親が、今、僕がまだたつた廿一にしかならぬ身で、結婚をしたいと言つたとしたら、如何な顏をするだらう。阿父があの鋭い目に冷笑を浮べて

「好一、それは本氣か？」と言ふのが見えるやうだ……僕の頭の中は混亂してしまつた。僕は默つて步いた。そして自分の力の足りないのが、情くなつた。もし、今ここて僕が濱子に、「では、二人て住まう」。と一言立派に言つてしまへたら！

僕には後を振り向くとすぐそこに家庭と言ふものがある。僕の父と母と弟と妹とは、僕がこの唐突な問題を持ち出したら如何な目をして僕を見るだらう。先づ驚くだらう。驚いて次にはそれが何に代る。冷笑に代るには定つて居る。僕は今、とも角正直に他意なく學問をして居る筈なんだ。それに女……戀……こんな問題はあの皮肉な一徹な阿父をすぐ怒らせるだらう。阿父が怒ると、それに母は堪へては行けない。母はそれ程弱い。それに弟達……第一きまりが惡いぢやないか。僕は今はまだこの家から離れては到底何にも出來ない……

て、僕は言葉を盡して濱子を慰めた。だが、何にも言ふ可き事が無かつた。たゞ強く堪へてくれ。この戀は決して破つてはならないのだ。二人の生命だ……だから強く堪へてくれと、願つた。僕は自分の力が及ばぬので濱子に願つた。

　そして、兎に角、お清さんに賴んでも少し僕等の間の仲介者になつて貰ふやうにし度いと話すと、濱子は一言の下に

「駄目！……あのね、お清さんはこの頃はもう、人の事なんかしてくれはしないわ。」と言つた。

「何故？」僕は驚いた。

「何故つて此頃あの家に宿（とま）つて居る人があるの。

「ラヴ！？」

「えゝ、私達のお友達で信州から來て居た人の兄さんなのよ。何處かの會社に行つてる人なんですよ。その人と……」

「その人があすこに居るのかい……さうかい。それだからだ」と、僕は此間の時のお清さんの樣子を思ひ出した。それてかと心に頷いた。

「もう男が出來たのか。福島の人つて言ふのが死んだので、自棄（やけ）のやうになつて居たのはつい此間ぢや無いか」と僕は言つた。

「だから、それを聞いた時には、私もあんまり早いと思つたわ。けれどあの人は人の忠告なんぞを聞

人ぢやないの。」と濱子は言つた。

「何だ。何處に節操があるんだ。死んだ人の心を蹂躙するのにも程がある。」僕は濱子の話を聞いて居る中に何故か自分の手の中にあつたものを落したやうな氣がした。そして清子さんの行爲が實に不快な感じを起させてならなかつた。

あれは實に賤婦だ！。深い高潔な愛情が何處にある。あゝ、僕は一句てあの女が死ぬやうに罵倒をしてやり度い。實に死んだ人には氣の毒な話だ。

二人は今日の話もまとまりが付かないてしまつた。濱子は妹が兄と並んで歩いて居るやうに、心置きの無い處がある。二人はあの××町の角て別れた。僕は江戸川の電車の停留場の方に行つた。

電車に乗ると、やがて飯田橋の處て僕の前に來て若い女が立つた。…………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

………………と思つて居る中に僕は何時か目を閉つて居た。

二十五

愈々夏になつた。この半月は試驗て目が廻るやうだつた。もう夏休みだ。僕もこの夏休みと言ふ奴が、チツトモ嬉しくも何とも無やうになつてしまつた。今年は何となく一層氣が急き立てられるやうてたまらぬ。

今年の夏は、何處にも旅行などはしないで、是非とも何か一つ論文を書き上げねばならない。

濱子からも、例の問題でやきもきして居る手紙を度々くれるが、田中君にも相談して見たが、如何していゝのか困つて了ふばかりだ。

二十六

今日は試驗の最終の日だ。今の學年は國際法をしくじつた。如何したのか問題がうまく腑に落ちなかつた……

今日は歸りに前島と一緒に來たが、お濟さんに一度逢つて濱子にことづけをして貰ひ度い事があつたから、別れて一人富士見町に來た。例の家の前まで來ると、格子の外に五六臺車が並んで居た。僕は何かあるなと思つたので、その儘引き返してしまつた。

暑いので電車に乗るとぐつたりしたやうになつた。如何かしてこの夏には一つ論文を書き度い。僕は一生の仕事として、經濟學の問題を心理的に研究して見たいと思ふ。これは從來の希望だ。人間の心理の狀態が、どの位、經濟問題の脊景（バツク）をなして居るか、これは考へなければならぬ問題だ。僕は生涯の中に、この問題について大きな著述をし度い。

この夏はこの研究の中の一問題について、論文を書かう。で、先づ心理學の著書を五六冊讀む必要がある。僕はまだ心理學と言ふものを知らないのだから、その方の豫備智識が必要だ。それからと……

考へて居る中に、僕は電車の中でうと〱としてしまつた。

歸つて見ると、濱子から手紙が來て居た。例の問題は破れたさうだ。で安心してくれと書いてあつた。
「Triumph!」……と僕は思はず踴り上つた。顔中で笑つて居たに相違ない。

僕はその勢て、すぐ通街に行つてノートを四冊ばかり買ひ込んで來た。これは今日思ひ立つた研究の覺えを書いて置く爲めだ。先づ題は
「經濟問題の心理的研究」とした。第一冊は心理學のノートだ。二冊目には經濟問題に關する諸家の論文の目次……と、第三冊は……僕はこの研究については非常に澤山問題が頭に湧いて來るやうに思はれる。第三冊は特に慾望の研究と書いた。

明日から朝起きると學校に行くと同樣に、圖書館に行く事と、それと、心理學と、何か經濟問題の書を二三冊づゝ買つて貰ふやうに、阿父を口說く事と……これは旅行せぬ代りと言へば買てくれるだらう。

愈々、研究に着手するのだ。

二十七

今日は書を買ひに出かけた。

書を買つて步きながら、今度の計畫を思ふと頻りに愉快でたまらない。

經濟問題の解決は如何しても、心理的の研究から入らねば駄目だ。人間の社會的の生存の根本は慾望だ。慾望の研究が徹底しないから、この學問が徹底しないのだ。僕は慾望の研究から入つて、經濟問題の根本的の解決を付ける……今日はその第一日だ。

慾望の心理的、哲學的の研究……僕はこの夏はその中の一問題として、第一にスペキユレーションの研究から始める。これは慾望の表れ方の烈しいものだ。と言ふやうな事を考へながら、前島の家に寄つた。前島は一週間ばかりの中に、伊豆の海岸に行つて、この夏は商法の勉强をする積りだと言つて居た。二人は互に夏中の計畫を話し合つて別れた。

夜、室の中に座つて、自分の周圍を見ると、種々な書籍が立つて居る。今、又その中に今日買つて來た書を七冊、並べて立てた。僕は人間の知り得る限りの知識を知り度い。僕は所謂文學者などが憧憬して居るやうな、自然の幻影なんぞを見て滿足はして居られない。僕は目に見るものに向つては凡て疑が起る。それを解剖點檢して見ずに居られない。僕は前に企てた博物學の研究ももつと深くせねばならぬ。僕にはまだ社會主義についても研究せねばならぬ計劃がある……

今夜は實に愉快だ。僕はこの室の中に座つて居ながら、自分の手が八方に伸びて行くやうな氣がする。未來は永遠だ。僕の未來は限りが無い。今日はその第一日だ。

二十八

丁度、また書を買ふと言つて貰つた金がまだ少し殘つて居たし、濱子が是非逢ひ度いと言つて來たから、今日は上野から汽車に乘つて、利根川のふちに行つて見ようと決めた。

約束の處で逢つて、利根川に行く事に決めて早速上野に行つた。

空一ぱいの雲が風に吹かれて、緩く流れて行くやうに、利根川の水は黑ずんで流れて居た。その岸を

歩きながら、二人は汗ばんだ身體を心持よく風に吹かせた。僕はこのなつかしい記憶を生涯忘れない！

濱子の今日の用事は、近い中に一ノ宮に夏期學校があるからそこに行く事になつた。と言ふ事と、僕が此頃教會に來ないのは何故だと言ふ事とを聞いた。僕は自分が今、計畫をして居る研究の事を詳しく話した。

濱子は二十二日に發つと言ふ事だ。今日は七月の十八日だ。あと四日經つと濱子は東京に居なくなるんだ。

それと淸子さんが結婚したと言ふ話を聞いた。僕は啞然とした。繰り返して僕は淫婦と罵つた。

二十九

今日で丁度一週間、圖書館に通つて來る。夏の東京と言ふものは、實につまらないものだ。何方を向いて見ても、灰白い埃ばかりが立ち舞つて居る。大抵何處に行つても見える學生は殆んど居ない。僕はその中を毎日麻布の奥から上野まで出かけて行くのだ。

今日、例の書を借りて讀んで居ると、もう濱子が一ノ宮に行くのは明日だナと思つた。前島も二三日前に伊豆に行つた筈だ。僕は何だか一人この東京の埃の中に殘されるやうな氣がし出した。濱子まで海岸に行く。僕はこの東京に殘つて居るのが、つまらなくなつた。

歸る道々、僕も何處かに行かう。と、歸つて又阿父を口說く事を考へた。

三十

あの日は、旅行の事を流石に阿父に持ち出せなかつた。今日(あれから九日目だ)はもうとても堪へきれなくなつて、二週間ばかり何處か山の方にやつてくれと持ち出した。「貴樣、又氣が變つたのか。此間は勉强するつて書を買つたぢやないか。」と皮肉をやられたが、最後には行けと言つてくれた。

よし、此間前島の從弟が行つたと言ふ赤城山に行く。赤城山！赤城山！

夜、早速濱子の處に赤城行きを知らせてやつた。明日の朝發つ。何を置いても發つ。あゝ氣が晴々した。

三十一

夜中、ふつと戸を開けて庭を見た。月が目の覺めるやうな色をして照らして居た。その光を見ると僕は胸が迫つて來た。あゝ……思はざる事がすぐ戸の外にある。

僕は今夜は眠れないのだ。二三日前に首に腫物が出來て、痛んでたまらない。僕は齒を喰ひしばるやうにして、この月の光を浴びて居る庭を見た。何とも名の付けられぬ哀愁が胸を襲つて來る。僕は「吾生幾何ぞ」と思つた。僕は死期が近づいたやうな氣がする。僕は何をしてこの二十一の秋になるまで、日を送つて來た？

濱ちやんにすまない。今夜は殊に僕と言ふ男が濱子に罪を負つて居るやうな氣がする。あの處女が全心を集めて僕を思つて居てくれるのに僕は、僕の心はそれに報いて居らぬ。

僕は近頃折ふしこの名付けられぬ哀愁が襲つて來る。

「死ぬんぢや無いだらうか？」と思はれてならない。「濱ちやん！、濱ちやん！、濱ちやん！」僕は此頃ひどく戀人に對して、冷淡だつた。忘れて居たのだらうか……

この月の光を見て居ると、僕はたまらない。神よ！と、涙をながして祈りをしたくなつた。神を忘れ、愛人を忘れて、漂泊して居た心よ！

三十二

突然！、然し突然だ。
濱子は結婚するのだと言つて來た。
僕はこれだけしか書けない。

三十三

その手紙を受取つてから二日經つた。
「そんな事があつてなるものか」と思つた。僕は兩方の手に力を入れて、濱子を人にやつてなるものかと、心にしつかりと思ふのだ。が、濱子の手紙に遂に犠牲になるのだと書いてある。
僕は猛然と立つて姉に逢ひに行かうかと思つたが、それも止した。萬事……皆すんだ跡だと言ふ氣もする。
如何したと言ふ事だらう……これ程、思ひ合つて居た二人が……僕はしかし思つて見ると、濱子

と、一月ももつと逢はないて居る。だがそんな事位は……
あゝ……僕は茫然として、濱子が奪ひ去られて行くのを見て居るばかりだ。

三十四

學校の方ては、僕にセミナリーの順が廻つて來た。僕は戀を失くした。しかし、其爲めに自分の計畫まで失してしまふ事は出來ない。僕はセミナリーの自分の問題には「スペキユレーシヨン」と言ふ事にして置いたが、問題が大きすぎるから、もつと小さいものを撰ぶ事にして、富籤論に代へて置いた。

濱子が嫁に行くと言ふ事になつたらば、僕は殘骸のやうな氣がする。頭が重い。消化器も惡いやうなので、此頃は毎日ひどく不愉快だ。

セミナリーの事て、又圖書館通ひを始めたが張り合ひが無くつてしようが無い。

「濱子！」時々、突然心が叫ぶやうに思ひ出す。

三十五

今朝も、食事をすまして家を出ようと思つて居ると、母が不思議さうな目付をして、何か妙なものを搜し出したと言つた樣子てしげ〲と僕の顏を見て居たが、

「好一さん、お前心持が惡かないかい？」と聞いた。

僕はたゞ「いゝえ」と答へただけだつたが、母はまだ執念深く

「お前、顏が大變腫れてるよ。とに角お醫師に見てお貰ひな」と言つて醫師に行く事になつた。僕は可

笑いやうな氣がして、かゝりつけの醫師の處に行つた。と、若い醫學士も僕の顔を見て一寸何か搜すやうな目付をしたが、やがて僕の順番が來たので、その前に行くと、平生のやうに無駄口も聞かないで「餘程、心持が惡いてすか?」とものものしく聞いた。僕はその調子てドキッとした。て、一度は默つて醫學士の顔を見たが、

「僕の顔はそんなに變てすか?」と問ひ返した。

「變てす。」と醫師はキッパリ言つた。

「さうてすかね。今朝ね、母が僕に如何かしやしないかと言つて、强いて見て戴きに上らせられたのてすよ。」

僕は何とも無いのてす。」と言ふと、醫師は僕の言ふ事にはろくに耳も貸さないで、尿をとれと言つた。て、僕の尿を試驗管に移させて、何かの溶液をその上にたらすと、

「ごらんなさい」と言つて、僕の目の前にさし附けた。尿水と、藥の液との間に白い結晶したものが見える。

「腎臟炎てすよこの白いのが蛋白質てす。もう一寸でも身體を動かしてはいけませんよ。いづれ後て伺ひます。そしてよく食物の事などをお話しますから、早く歸つて寢てお出なさい」と言つた。

僕は默つてその家の門を出た。呆れてしまつて何も思はれない。たゞ茫然と步いて歸つて來た。

「如何だつたい?」心配さうな母の顔が見えた。

「腎臟炎てすつて。」僕は茫然として答へた。

「腎臓炎!?」と母は叫んだ。僕は醫者が後に來てよく話すと言つた事を、母に傳へて自分の室に入つた。何にも考へられない……

三十六

僕はもうすつかり病人になつてしまつた。

身體は全體が水腫に腫れて居る。鏡を見ると、顏などは自分ながら恐ろしい程むくんで居る……その身體を今日も日當の緣に投げ出すやうにして、坐つたまゝ、半日茫然と時の移るのを見て居る。

日がぢつと沁み付くやうに照つて居る。あゝもう秋だ。木の葉も日光も沈んだ、凋れた色をして見える。僕は一日の時がずつと辷べるやうに經つて行くのを見送つて居るのだ。

頭から日を浴びて、病獸が鈍い姿をして轉がつて居るやうに、ぢつと身動もしないで居る。臺所で煮て居る、牛乳の臭がたまらなく不快な感じを起させる。

ふと振り返つて見ると、室の書棚の上に日が當つて居る。僕はそれをぢつと見入つた。此頃よくさう思ふが、僕は實に苦しい動搖した心で日を送つて來た。今斯うやつて居ると、初てこの日が、僕の心の核まで照らして居るやうに思はれる。

空虛な心だつた。僕はあれだけ限りなく種々な事を企て居たが、今になつて見ると何一つもして無いたゞ空な、色も形もない心だ。成程、今になつて、始めて僕のあの何にも通さない、何にも染まないと思つて居た心の核が割れて日に照されたのだ。

だが、さて斯うなつて見ると僕の心は空虚だつた。何にもしては居なかつた。僕がたゞ心で追つて居たのは戀だけだつた。いや女だけだ。戀とは言はれない。濱子の事は全く胸に泌々と忘れられないが、しかし、さう思ふのは自分のもので無くなつてからだ。僕はただ本能の力に驅り立てられて居た、それより外には何にも無かつた。そして今は獸が林の陰に病んで轉がつて居るやうな姿をして居る、

あゝ――斯うやつてぼつとした心で、自分の過去を眺めて居ると、だん〳〵その影が薄くなつて行く。丁度、古い寺の壁畫が雨に洒されて行くやうに……僕の空中に描いた壁畫も、次第に消えて行くやうだ。

そして、眼前の室の中にはたゞ其時々にカッとなつて、根もなく思ひ付いた自分の計畫の墓がある。まだページも切つてない書物と、序文だけ事々しく書いたノートと……それがだん〳〵埃でよごれて行く。

（をはり）

當局者の手加減が分らぬので、又々處々削除して……を附けました。讀者諸君に對しても濟みませんし、作者に對しては特に何とも御申譯がありません。然し今日の如き狀態に於ては是れ亦止むを得ぬのですから、何卒御寛恕を願ひます。（編者しるす）



動搖

正宗白鳥

高瀨眞一といふ名を初めて聞いたのは、今から七八年前てあつた。川村の洋行を橫濱まで見送つて、汽船の甲板に立つてゐた時、誰れかゞ「この船には外交官の高瀨が乘つてる」と云つた。任地は何處であるのか、職務は何であるのか、强いて訊きもしなかつたが、只その人が△△新聞社長の長男であることだけは、その折自然に耳に留まつた。

間もなく私は△△新聞の記者になつた。眞一氏の噂をも屢々聞くやうになつた。父に勝つた才物だ、日本語よりも英佛その他の外國語に熟達してゐる、大學に容れられなくて敎授

になれなかつたのが却つて立身の途を開いたのだ、如才のない人だ、磊落放膽の人だなどゝ、折に觸れて社の先輩が云つてゐた。しかし私には氏の人となりや顔形が、少しも明かに心に浮ばなかつた。緣のない道路の人としてゐた。折々諸新聞に氏の行動や意見が載つてゐても、ろくに目をつけもしなかつた。

「主筆の佐々山さんが幾ら焦つても、今の社長が死ななくちや、新聞も本當の發展は出來ないよ、眞一さんの物になつたら、屹度違つて來るがね」と、社の改革の企てられる度に、河本が私に話した。

「その時までは僕は社にゐないよ、新聞記者らしい新聞記者になつて一生を送りたくないもの」と、私はほんの一時凌ぎに社にゐるつもりで、骨身を惜まぬ一生の事業は、何處か外に求めやうとしてゐた。二年も三年もこの古ぼけた破れ傘の下に小さくなつてゐる氣はなかつた。絕えず今にも驅出しさうな心構えて、落付いて社の仕事に實を入れることはなく、一年毎に何か口實を設けては手間を隙いてゐた。時間の餘裕をつくつて、その餘裕には自分勝手の空想に耽つてゐた。

だが、その空想は何時も手の屆かぬ所で消えて、編輯局の埃だらけの床の上から、私を救出して呉れなかつた。三四年は辷るやうに過ぎた。その間に壯士染みた服裝をしてゐた社員が意氣な背廣に捩チョッキを着るやうになつた。地圖に手頼つて探訪に出掛けてゐた山出しの末派の記者が、三面主任に榮達して、金緣の鼻眼鏡を掛けるやうになつた。外樣とも云ふべき舊社員から安つぽく見られてゐた主筆にも鍍がついて、これまで佐々山君と呼んでた者も佐々山さんと呼ぶやうになつた。日露戰爭も首尾よく終つて、日々の戰報や號外の騷ぎも靜まつた。私は活々した戰爭事件には少しも係合はず、祝捷會や戰

後の動搖をも遠く離れて見て、只受持の閑文字を弄んで、二號活字や圏點の多い紙面の隅て、獨り泰平を樂んでゐた。

停滯した泰平を人にも羨まれ、自分でも知らず〳〵その中に溺れてゐたが、不意に社内に動搖が起つた。それは眞一氏の親友藤村が新に主筆になつて、佐々山が曖昧な後見役に變つたことてある。世上の取沙汰も樣々てあつたが、社員の心にもそれ〳〵に不安の念が湧いた。私もその渦卷の中に捲込まれて暫らく泰平の夢を破られ、自分の方針を考へねばならなかつた。「寛大な佐々山とは違つて、藤村は目先も利くし誤魔化しを見逃さんだらうから、あの人の下に働くのは面倒だ、どうせ僕等の天職は新聞記者ぢやないんだから、一日編輯局に縛られるのは馬鹿々々しい」と思つて、懇意な河本にも相談した。「その代り働き甲斐があらあ、まあ辛抱するさ」と、世間を知つてる河本は、輕々しく荒立つた考へを起さなかつた。

「だけど僕には働き甲斐のある仕事が外にありさうだから」と、私は尙自分の將來に懷かしい思ひを寄せてゐたが、それにしても眼前に差迫つた生活の法は外に見つからない。厭ても勤めねばならぬ氣がした。心を引締めて俗務を執るべき用意をした。

その時てある。私が眞一氏の顏形を目の前に見たのは。

新主筆歡迎會が麻布の社長の家て催されて、社員一同廣間に列席したが、その時社長の後の床の間に、眞一氏の肖像が立掛けられてあつた。遠目にもその顏立の田舍びてゐて、直ぐ側の藤村の品やかなのと

全て違つてゐると思はれた。胸には勳章があるらしかつた。頭が禿げて餘程老けて見えた。社長から悴々と呼ばれるのが、何だか不似合に聞えた。

「今日は皆さんにお出でを願つたんだから、悴もお仲間の一人に加へたいと思つて、此處へ連れて來ました」と、社長は紹介した。そして藤村と頻りに悴の噂を始めたが、席末の私にはよく聞えなかつた。

社長藤村佐々山、三人は簡單に演説をした。佐々山は女のやうな細い柔らかな聲で、事務多端で自分一人ては手が廻りかねるため、新主筆を迎へたことを述べた。決して自分の地位や權力がぐらついたのてはないと微めかした。しかし私にはさう信ぜられなかつた。佐々山の自己辯護らしい言葉を聞き、その不平を蔽ふてゐるやうな顔付を見ると、痛々しい感じがした。あの人は社のために骨身を惜まず盡せる限り盡してゐる、新聞を離れては自分の希望も慰藉もないのである、戰爭最中には自宅へも歸らないて、編輯局の机の上に大きな身體を横へて覺束ない睡を取つてゐた。――それほどにしてゐた人から故なく新聞を捥取るのは、母の手から愛兒を奪取るやうなものだ。

「だから人間は人に手頼つてゝは安心は出來ないよ」と、事務の或老人が私に囁いた。

「一體社長でも眞一さんても、佐々山さんを實價以下に見てる、昔ボーイ代りに使つてたから、何時までもその氣てゐるんだらう、あの人に任せときやいゝのに、」と私は答へた。

藤村の主筆時代には、私も可成忙しい目に會はされたが、それは半歳も續かなくて、再び佐々山の世

となつた。私は又泰平の遊民となつたが、最早以前のやうに空ばかり仰いではゐなかつた。その折々に相應しい仕事に目をつけて、コツ〳〵書き物をもした。編輯局の埃は手足に染込んでゐた。日常の行爲も記者らしくなつて來た。今の間に飛出さなくちや一生この惡臭を洗ふことが出來ぬと思はれた。ストーブを前に淫らな話に耽つたり、その日暮しの青木の道伴れとなつて酒色を嗅いで歩いてゐながらも、心では仲間の者を卑み嘲つてゐた。祿を食んでゐる自分の社の惡口をも云つてゐた。「新聞社にゐるといろんな經驗が得られるから、下らないけれど辛抱してるんだ」と、人にも語り自分をも慰めてゐた。しかし經驗には果てがない、一生こんな經驗のみ積んで、詰りは何をするんだらう。と、自分の經驗の中身を考へて、あまりに取柄のないのに呆れなどした。

社長の顏主筆の顏同僚の顏、二十年來精勤してゐる校正掛の顏、どれも〳〵ツク〳〵見飽いてゐた私は、不圖眞一氏の新しい顏を見つけた。氏は四五年の間に公使にもなり爵位をも得てゐる。半年の休暇を得て久振りに故國へ歸つて來た。私は物好きに停車場に出迎へた。特別仕立の列車の窓から公使夫人が上半身を出して、微笑を含み凉しい目を動かし、出迎の婦人と握手してゐた。

「あれが公使か」と、社長に似た顏を横目で見ながら、私は敦賀から同乘して來た佐々山と並んでプラットホームを歩いた。

「公使は元から文藝書類もよく讀んでゐましたが、今度の旅にもドッサリ持つて來て汽車の中で讀んで

たやうてす、折があつたら一日小説の話をして御覧なさい。貴下方の御存じない物も隨分知つてるてせう」と、何時もながら佐々山の言葉には情味があつた。
「聞かせて頂くと結構ですが、私など少しも外國文學の素養がないから、承たつてよく分らないてせう」
「そんな事はありますまい、同じ小説ても政治家と文學者とは自から目の着け所が違ふてせうけれど、多少御參考になるてせう」
「えゝ」と、私は輕く答へた。公使の文學談を聽く氣にもなれなかつた。
「貴下は入つしやつた事はありませんか、敦賀は實に景色のいゝ所てすね、私は非常に氣に入りましたよ」
「さうてすか、私は北國地方は少しも知りません」
「ぢや、この秋一緒に行きませんか、私は緩くり見物に行くつもりてず」
「どうぞお間違ひなく御隨行させて下さい」
「是非行きませう〳〵」と佐々山は首肯いた。
公使の馬車は動き出した。私共出迎ひの社員はその馬車の後から、外交官の華々しくてしかも氣樂な境涯を羨ましさうに語合つて歩いた。
「公使は此地にゐるとよく社へ遊びに來るよ」と、皆なが待設けてゐたが、意外にも一度も姿を見せなかつた。「豪くなつたから氣取るんだらうか、そんな人ぢやなかつたんだが」「いつそ來ない方が面倒臭くなくていゝよ」「今に紅葉館あたりて御馳走はするよ」と、てんてに勝手な事を云つてゐた。佐々山は足

繁く公使の邸へ通つた。

「見渡した所、諸君は皆お若くて活氣に滿ちてる、どの社會もこんなに青年によつて事業がなされるやうになつたら、日本はもつと著しい進歩を遂げられるんだ。外國では會社や銀行の重役に三十前後の青年が多い、政治家にしてもそうだ。最も氣力の盛んな時期に充分に働かすやうにしてゐる。それに日本では、やれ貫目が足らんの、經驗が乏いのと青年を侮つて、重役の地位は老人ばかりで占領しやうとしてゐる。この惡習慣は一日も早く打破しなくちやならん」と、公使は紅葉館の階上、胡座を掻き、片手を柱にもたせて、口を曲げながら平坦な調子で云つた。

「しかし閣下もこの前お目に掛つた時よりや、大分お歳を召したやうですね」と、誰かと眞面目で云つた。

「いや、もう僕等もそろ〳〵老人組になり出した。力量のある青年があれば何時でも仕事を讓渡すよ」と公使は快く笑つた。

そして立上つて簡單な演說をした。我新聞は健全なる思想を以て社會を敎育し、文明の指導者となることを、その本分としなければならぬ、と訓戒を下した。あまりに抽象的な月並の意見だと私は思つてゐたが、佐々山は一々雷同して、「公使のお說は我々の座右銘とすべきもので、これ迄も御說の主旨で新聞を經營して來ましたが、將來は無論の事です、少してもそれに違反するやうな考へがあれば一日も、社に留まつてゐられないので御座います」と、社員一同を代表して答辭を述べた。

しかしその頃私の受持の範圍は、公使や主筆の意見に違背した文字で埋つてゐた。社説や二面の記事については、些細な事にも非難の聲が主筆を通して社内に響いてゐたが、私の方面は相變らず天下泰平だつた。「讀んだつて分らないんだらう」と、冷笑してます〳〵己れの好みに任せて編輯し執筆した。社外の攻撃は屢々私と私の受持の紙面の上に注がれた。佐々山の知人で佐々山に向つて、「あれでは偏して、困るぢやないか、青年の暴論ばかり載つとるぢやないか」と注意を與へた者も二人や三人ではなかつた。

文明の指導者たる新聞に青年の暴論が出ると云はれては、佐々山も眉を顰めた。思想問題については盲目同樣の編輯長も、折々編輯會の席上で、「大村君(私)の遣口はあまりに亂暴ぢやないかね、あの人は自暴自棄してるやうに見える」と云つてゐたさうである。佐々山は一方ではそんな非難を辯解しながら、一方では度々私に向つて謎を掛けた。

「貴下にお任せしてるんだし、私はあれで結構だと思ふんですけれど、どうも社長が老人だから、いろ〳〵の事を云はれて困るですよ。だから中心は今の通りにして置いて、一部分だけ異つた通俗趣味を加へるやうにしちやどうでせう。無論今の特色を沒却してはならんけれど、讀者にはいろ〳〵の階級があるんだから、成べく皆なの嗜好に投ずるやうにしなくちや賣捌にも不便になるんです」と、社長の名を以て柔かい命令を下した。

私は大抵默つて聞いてゐた。默つて自分の遣りたいやうに遣つてゐた。三月や四月はそれで過て行く。世間には私が一つの主張を抱いて戰爭でもする氣で編輯してゐるやうに思つてる人もあつたが、私の心

は弛み切つてその日暮しに仕事をしてゐるに過ぎなかつた。編輯の二階では一時間二時間が堪へがたきほど長く感ぜられた。

間斷なく電話が鳴る。締切時間は編輯者を焦立たせてゐる。火事や殺人や世間の新しい事件は、明日の世間の噂の種となるべく、記者の耳や手に集つて來る。その間に居りながら、私の神經は新しい刺激を感じなかつた。周圍の騷しければ騷しいほど心の中は停滯した。

仕事を終へると、急いで戶外へ出る。雨の降つてゐる時もあれば、日の照付けてゐる時もある。柳の葉の枯れて散つてゐる折もあれば、青々と長く垂れてゐる折もある。寒かつたり暑かつたり、四季の變化は繰返されてゐれど、何時も心の躍立つ時はなかつた。午前と午後との光線の微妙な相違を味つたり、夏と秋との風音を聞分けて樂むやうな、藝術家らしい素質を全て缺いてゐる私には、目や耳に觸れる者が皆一樣にダラケてゐた。陳腐であつた。

「僕は今月きり退社するよ、△△へ入ることに定つた」と、或日同僚の小倉が悦しさうに云つた。

「△△は此處よりは働甲斐のある社だから、よく辛抱したまへ」と、私はその退社を祝つて、「次第に古馴染が減つて、僕も何時の間にか社の古顏になつてしまつたよ、皆がいゝ所へ飛んで行つたのに、僕ばかり後へ取殘されたやうだ」

「君はいゝ境遇だ、佐々山さんが我儘を許してるから。同じ事なら一つ所に辛抱するのがいゝんだよ」

しかしその頃私の受持の範圍は、公使や主筆の意見に違背した文字で埋つてゐた。社説や二面の記事については、些細な事にも非難の聲が主筆を通して社内に響いてゐたが、私の方面は相變らず天下泰平だつた。「讀んだつて分らないんだらう」と、冷笑してます〳〵己れの好みに任せて編輯し執筆した。社外の攻撃は屢々私と私の受持の紙面の上に注がれた。佐々山の知人で佐々山に向つて、「あれでは偏してゝ困るぢやないか、青年の暴論ばかり載つとるぢやないか」と注意を與へた者も二人や三人ではなかつた。

文明の指導者たる新聞に青年の暴論が出ると云はれては、佐々山も眉を顰めた。思想問題については盲目同様の編輯長も、折々編輯會の席上で、「大村君（私）の遣口はあまりに亂暴ぢやないかね、あの人は自暴自棄してるやうに見える」と云つてゐたさうである。佐々山は一方ではそんな非難を辯解しながら、一方では度々私に向つて謎を掛けた。

「貴下にお任せしてるんだし、私はあれで結構だと思ふんですけれど、どうも社長が老人だから、いろ〳〵の事を云はれて困るですよ。だから中心は今の通りにして置いて、一部分だけ異つた通俗趣味を加へるやうにしちやどうでせう。無論今の特色を没却してはならんけれど、讀者にはいろ〳〵の階級があるんだから、成べく皆なの嗜好に投ずるやうにしなくちや賣捌にも不便になるんです」と、社長の名を以て柔かい命令を下した。

私は大抵默つて聞いてゐた。默つて自分の遣りたいやうに遣つてゐた。三月や四月はそれで過て行く。世間には私が一つの主張を抱いて戰爭でもする氣で編輯してゐるやうに思つてる人もあつたが、私の心

は弛み切つてその日暮しに仕事をしてゐるに過ぎなかつた。編輯の二階では一時間二時間が堪へがたきほど長く感ぜられた。

間斷なく電話が鳴る。締切時間は編輯者を焦立たせてゐる。火事や殺人や世間の新しい事件は、明日の世間の噂の種となるべく、記者の耳や手に集つて來る。その間に居りながら、私の神經は新しい刺激を感じなかつた。周圍の騷しければ騷しいほど心の中は停滯した。

仕事を終へると、急いで戶外へ出る。雨の降つてゐる時もあれば、日の照付けてゐる時もある。柳の葉の枯れて散つてゐる折もあれば、青々と長く垂れてゐる折もある。寒かつたり暑かつたり、四季の變化は繰返されてゐれど、何時も心の躍立つ時はなかつた。午前と午後との光線の微妙な相違を味つたり、夏と秋との風音を聞分けて樂むやうな、藝術家らしい素質を全て缺いてゐる私には、目や耳に觸れる者が皆一樣にダラケてゐた。陳腐であつた。

「僕は今月きり退社するよ、△△へ入ることに定つた」と、或日同僚の小倉が悅しさうに云つた。

「△△は此處よりは働甲斐のある社だから、よく辛抱したまへ」と、私はその退社を祝つて、「う次第に古馴染が減つて、僕も何時の間にか社の古顏になつてしまつたよ、皆ながいゝ所へ飛んで行つたのに、僕ばかり後へ取殘されたやうだ」

「君はいゝ境遇だ、佐々山さんが我儘を許してるから。同じ事なら一つ所に辛抱するのがいゝんだよ

「よくも惡くも、僕は生きてる限り此處を離れられん運命を脊負つてるやうな氣がする、追出しても與れんし、出て行くにしても身の落付どころがない」
「だつて君なんか、いざとなりや何處へ行つても働きが出來るぢやないか」
「駄目だよ、これて以前はこんな仕事をしたいとか、誰其れのやうな事業をしたいとか思つてたけれど、今ぢや誰れの仕事も同じやうに見える。」
「そりや何をしたつて同じ事さ、つまり金を取つて味い物でもウンと食べる奴が得なのさ」
その夜私は小倉と別れの酒を飮んだ。誘はれるまゝに彼れの馴染の小待合へも入つた。それが緣て私一人其處へ行くやうになつた。凡そ二月ばかりは三日置ぐらゐに繁々通つた。眞晝中でも平氣で其處の閾を跨いだ。醜い女をも美しい女をも差別なく呼んて見た。小倉の馴染の女をも呼んだ。
「君の現今の理想は」と問はれゝば、「色魔たること」と答へたいほどてあつた。だが、その理想すら遂げられもせねば、遂げるだけの熱心もなかつた。社の仕事に冷淡てある私は、この唯一の理想に對しても冷淡てあつた。
知人の間には色魔たらんと志し、世間態よくそれを實行せんとし、或はその小成功を口にしたり、小說體の文章に書きあらはしたりして、心竊かに誇つてゐる人も二人や三人てはない。小ペチヨリンや小ペラミーは少くない。女子に弄れてゐても女子を弄んてゐると見せるやうだ。その空氣の中にゐる私は一層羞恥の念を鈍らすに都合がよかつたのだらう。私は何をしても心に耻づることがなくなつた。

去年の春の末頃から、私は底のない泥の中に引摺込まれるやうな感じがした。さう感じながら不足にも思はないで引込れてゐた。秋になると、最早其處から匐ひ上られぬやうになつた。そして「これで己れも行留りだ」と、自分でも覺悟したが、それと共に嘗て覺えのない力が身體に湧上つた。おすゑからの絶望したらしい手紙を讀終つた夜、却つて日頃になく落付いてよく眠れた。

富士見町の女髮結の二階で、最後におすゑに會つた時は、秋の朝日が鮮かに障子に差してゐた。女の痩せた蒼白い顏か際立つて見えた。こんな厭な顏だつたのかと、私は面を背けた。約束の履行を躊躇した、――今明ら樣に書く氣にはなれぬが――兎に角一寸のがれに言紛らせて其處を出た。原稿を整理する日であつたので、その足で社へ行つた。自分が社員として幾萬の讀者と關係を保つてゐることが不思議に感ぜられた。周圍のゴチヤ〳〵した騷ぎが、夢の中の音のやうに意味もなく耳に響いた。

「佐々山さん、去年からのお約束ですが、今年も敦賀へも入らつしやらんのですか」と、私はふと思出して云つた。何處か遠い所へ行つて見たかつたのだ。

「さう〳〵、お約束をしときましたね、この秋もとても行けさうぢやありませんよ、社長の病氣も氣遣はれますから」と、佐々山の口實に又社長が出た。

「ぢや、私一人でも旅行させて頂けませんか、十日ばかり京阪地方へでも行つて見たいんです、成べく寒くならん内と思ひますから、二三日内に行きたいんですが」

「よくも惡くも、僕は生きてる限り此處を離れられん運命を脊負つてるやうな氣がする、追出してもれんし、出て行くにしても身の落付どころがない」

「だつて君なんか、いざとなりや何處へ行つても働きが出來るぢやないか」

「駄目だよ、これで以前はこんな仕事をしたいとか、誰其れのやうな事業をしたいとか思つてたけれど、今ぢや誰れの仕事も同じやうに見える。」

「そりや何をしたつて同じ事さ、つまり金を取つて味い物でもウンと食べる奴が得なのさ」

その夜私は小倉と別れの酒を飲んだ。誘はれるまゝに彼れの馴染の小待合へも入つた。それが緣で私一人其處へ行くやうになつた。凡そ二月ばかりは三日置ぐらゐに繁々通つた。眞晝中でも平氣で其處の閾を跨いだ。醜い女をも美しい女をも差別なく呼んで見た。小倉の馴染の女をも呼んだ。

「君の現今の理想は」と問はれゝば、「色魔たること」と答へたいほどであつた。だが、その理想すら遂げられもせねば、遂げるだけの熱心もなかつた。社の仕事に冷淡である私は、この唯一の理想に對しても冷淡であつた。

知人の間には色魔たらんと志し、世間態よくそれを實行せんとし、或はその小成功を口にしたり、小說體の文章に書きあらはしたりして、心竊かに誇つてゐる人も二人や三人ではない。小ペチヨリンや小ペラミーは少くない。女子に弄れてゐても女子を弄んでゐると見せるやうだ。その空氣の中にゐる私は一層羞耻の念を鈍らすに都合がよかつたのだらう。私は何をしても心に耻づることがなくなつた。

去年の春の末頃から、私は底のない泥の中に引摺込まれるやうな感じがした。さう感じながら不足にも思はないで引込れてゐた。秋になると、最早其處から匍ひ上られぬやうになつた。そして「これで己れも行留りだ」と、自分でも覺悟したが、それと共に嘗て覺えのない力が身體に湧上つた。おすゑからの絶望したらしい手紙を讀終つた夜、却つて日頃になくよく眠れた。

富士見町の女髪結の二階で、最後におすゑに會つた時は、秋の朝日が鮮かに障子に差してゐた。女の痩せた蒼白い顔か際立つて見えた。こんな厭な顔だつたのかと、私は面を背けた。約束の履行を躊躇した、――今明ら樣に書く氣にはなれぬが――兎に角一寸のがれに言紛らせて其處を出た。原稿を整理する日であつたので、その足で社へ行つた。自分が社員として幾萬の讀者と關係を保つてゐることが不思議に感ぜられた。周圍のゴチヤ〳〵した騷ぎが、夢の中の音のやうに意味もなく耳に響いた。

「佐々山さん、去年からのお約束ですが、今年も敦賀へも入らつしやらんのですか」と、私はふと思出して云つた。何處か遠い所へ行つて見たかつたのだ。

「さう〳〵、お約束をしときましたね、この秋もとても行けさうぢやありませんよ、社長の病氣も氣遣はれますから」と、佐々山の口實に又社長が出た。

「ぢや、私一人でも旅行させて頂けませんか、十日ばかり京阪地方へでも行つて見たいんです、成べく寒くならん内と思ひますから、二三日内に行きたいんですが」

「えゝ〳〵」と、佐々山は首肯いた。

私は承諾されたと見做して直ぐに旅立の準備をした。

旅先からおすゑに宛てゝ長い手紙を送つた。拵えた文句を並べて、半歳一年は東京へ歸られぬ事情があるやうに書いた。汚い者を離れ、恐ろしい心の蟠りを拂つたやうな氣がしたが、そしてどうするんだらうと、この先を思つて見ると、新しい望みも目の前に見えなかつた。

「お一人でお淋しうおますやろ」と、京都の宿の女中が、電燈の下に萎れてゐる、私を見て云つた。

ろくに京都見物もしないで、大坂から有馬伊丹と忙しさうに變つた土地へ移つた擧句、私はつい歸るともなく故郷へ歸つた。父の白髮は殖えてゐる。弟や妹は私よりも丈が高くなつてゐる。髯を生した弟は分別臭くて、兄に意見でもしさうな面つきだ。母は舐めるやうに私を迎へて、「長く居るのかい、直ぐ歸るのかい」と訊いた。

「二三日しか逗留出來やしない、」私は遣瀬ない屈託のあつた折々故郷へ歸つたが、何時だつて五日とも留まつたことはなかつた。

「職務がありや仕方がない、月給を貰つてりや、一日だつて疎かにや出來まいから」と、父は父らし事を云つた。そして自分は年を取り子供は大きくなつたから、今の間に後々の事を定めたいと云つた。

だが、その時の私は財産で買ふべき快樂も心に浮ばず、眞面目に身の末を思ふほどの執着もなかつたので、父の話にも氣乘りがしなかつた。

何と云ふ當もなく踊つたやうに、又當もなく故郷を去つた。東京の家へ着いて後、友人等のよるやうに旅中の見聞記でも書かうと思つて心を凝したが、明かな印象はなかつた。身體は諸方をウロついてゐても、心は奧深く潛んでゐて、何物をも見なかつたのだ、聞かなかつたのだ、「お一人で淋しうおますやろ」と云つた女中の聲のみが、今も聞えるやうに耳に殘つてゐる。旅の中にも屢々それが神經に觸れた。おすゑの聲を思出させてならなかつた。

死んだやうな靜かな日が四五日續いた。氣抜けのしてゐる私は新年用の書き物を約束しながら、筆を執る氣になれなかつた。その折私の心を引立てゝ、世間へ目を向けさせた者が二つあつた。

社內では社長の病氣は今度こそ恢復の見込みがなささうだと噂してゐる。それが事實となつたら後はどうなるだらう、興味ある想像は頻りに私の胸に描かれた。どうせ社の方針や社員の身の上に動搖があるに定つてゐる。よかれ惡しかれその動搖は面白い。私は受持の仕事は投遣りにして置いて、耳を澄まし目を据ゑて微細なる社內の波動をも捉へてゐた。靑木五浦等の名醫も病人に望みを絕つたらしい。公使夫妻も歸國した。主筆は頻りに葵坂の社長邸　伺候する。

て、私は社長の病氣を氣に掛けて、ウカ〳〵日を送つてゐたが、その外に最一つ氣に掛ることがあつた。それは、

駒口の色話であつた。駒口は最も親しい友達であつて、仲間內の雜談にも雜誌の記事にも、私の名と

駒口の名と並んで出ることが多い。駒口はそれを厭だ〳〵と云ひながら、自分でも雜文を書く折に、屢私との會話や、私の行動を書き立てる。藝術的天分に富んだ感の敏い男で、態度が浮いてゐて話振りが面白い。私の近所へ越してからは毎日遊びに來て留度なく話して行く。私の旅行中に色女が出來たとかて、次第にその話で持切るやうになつた。顏や姿や態度を浮上るやうに話した。「笑ふと口の大きくなるのが缺點だが、非常に情趣がある、チャームする所がある」「着痩せのする身體だから僕は好きだ」「名はおふじ」「僕はこの女でもありや、當分淋しい境遇を忘れられるんだ」「駒口さん〳〵思ひ思はれだわねえと云つたよ」「僕はどうも忠兵衞見たいな所がある、梅川のためにや封印を切るよ」

私は默つて眞面目に聞いてゐたが、心竊かにけなりかつた。その頃の私は天下に名を唄はれた美人を見たいとも思はねば、他人の情話に興をも覺えなかつたが、只駒口の色女だけは見たかつた。て、新年物の筆を措いては二三度見に行つた。

やがて社長逝去の知らせが來た。葬式があつた。會葬者には社長の知人よりも公使の知人が多かつた。思ひなしか社長の影は薄らいて、公使の顏のみ目先にチラついた。主筆や編輯長を通して公使の小言は二面の政治外交教育記事に向けられた。最高の理想を以て、經費の少い機關の整はぬ新聞を批評して、記者を責めた。見出しの活字の大小など、黑人めかした苦情まで云つた。「今の組織ではとても御希望通りには行かない」と、忠實なる編輯者は苦澁の色をなした。「まあやれるだけやつて見るさ」と誰れかど慰

めた。主筆は板挾みて眉が顰み勝になつた。

「二三日公使を編輯の椅子に座せて編輯させて、模範を示して貰ふさ」、と私は横合から無駄口を利いた。

だが、私の受持の方は相變らず天下泰平だつた。このまゝ雨ともならずに過ぎては、あまりに張合がなさ過ぎると思はれて、社の仕事はます〳〵詰らなく退屈になつた。て、或日出拔けに主筆に向つて、

「私は今月限り退社しやうと思ひます、つく〴〵社の仕事が厭になりました、たつた一度貴下から小言をも云はれないで、氣樂に働かせて頂いてるんですけれど、それでも厭になりました。別に不平があるのでもないし、外にいゝ仕事が見つかつたのでもないんですけれど、理由なしに厭になつたんです、六年の餘も上りつけたあの階子段を上るのが如何にも怠儀でなりません。それに社の方から云つても、私を出して、もつと活潑に働く人をお使ひになる方がいゝんです」と、私は編輯を委任するの不利益を公平に說いた。だが、主筆は私の心持を解し得なかつた。底に何か不平があるのだらうと思つてるらしい。くどく柔しく說いて私を引留めやうとした。

「長年のお馴染甲斐に、もつと辛抱してゐて下すつちやどうです、傍で何を云はうとも私は貴下を信じてお任せしてるんですから、貴下も私を信じて此迄通りに働いて頂きたい。懇願します。……その代り決して貴下を束縛もしなければ、御擔任の部分に干渉は致しません、どうぞ退社云々の不祥な言葉はこの場きりお取消なすつて、誰れにも口外もなさらぬやうにして下さい」

勿體ないほど慈愛の籠つた言葉だ。私は押して我意を通せなかつたし、又通す必要もなかつた。束縛

もせず干渉もせぬと、よくも輕々しく斷言されたものだと思ひながら、私は雜作なく前言を取消した。主筆は晴々しい顏をした。

葬式後十日二十日立つと、公使の姿は頻りに社に現れ出した。新築以來殆んど用をなさなかつた三階の重役室も賑ひ出した。親戚の人を社長にして會計を委任すると聞いてゐたが、その人らしい人がチヨイ〳〵編輯へも顏出した、私はそれを傍目に見ながら、社の前途を占つて見た。

「佐々山さんも公使の信用はないんだらうな、もつと堂々と構へてりやいゝんだが、あまりに鼻息を窺ふからいけないんだよ」と、他所事ながら齒痒がつた。

一月は社長の葬式のスケッチを書いたばかりて、どうしても筆に親めなかつた。角力を觀たり玉突や圍碁を試みたりしても、力は再び返つて來ない。氣は滅入つて來る。そしてその滅入つてゐる側へ來ては駒口は獨りて三味線に乘つて踊るやうに、彼れの梅川の話をする。日々甘い讀物を讀上手に讀んで聞かされるやうでもあつた。

戀は他人に見せびらかすので趣が添ふのだらうが、駒口はあまりに剝出しに過ぎた。戀人の一語一句をも語らずにはゐない、それに仰山な批評をさへ加へる。

私は折の踊りに折々その女に會つて見た。口數の少い愕ぎ勝の女て、差向ひてゐてもさう話の種はなかつたが、駒口から詳しく聞いた女の過去の歷史や今の境涯を背景にし、駒口の熱愛をも思ふと、皆ら

くは飽かずにその女を見てゐられた。一度は戸外に連出して、眞晝の光に暴して見た。飯の給仕をもさせた。芝居の立見にも連れて行つた。時々誠しやかに情味のある口を利いて、女の涙をも誘つた。

さうして置いて駒口の報告を聞くと、何がなしに面白い。私の弛んでた心に螺旋がかゝつた。久しく覺えなかつた力が身體に巡つた。いろ〳〵の計畫が頭に湧いた。生きて居る目的が出來たやうだ。

管々しい道筋は除いて、――自分一人の胸の中に葬るべきことを、明ら樣に云ひたくはないから――私は或夜ふとした拍子で駒口に向つて、

「僕は先日あれに會つたよ」と、何氣なしに云つた。

「何時」と、駒口は今迄とは打つて變つて、穩かな顏をして靜かに問ふた。

「二三日前」

「昨日は家にゐたね、一昨日か一昨々日か」

「何日だつたかなあ」

「いや、一寸知りたいことがあるんだよ」と、駒口は上目を使ひ低い聲で、馬鹿に落着いてゐる。

「十八日の夜だつたらう」

「ぢや分つた、君にホッかれたんだ。必ず返事の來なくちやならん手紙が來ないから、どうも不思議でならなかつたんだが、それで分つた」

「だつて僕はどうもしないよ、君の話なんか碌にしなかつたんだし、女だつて何も云やあしないんだも

の。忙しいから返事も書けんのだらう、何ならこれから行つて訊いて見たまへ」と、私は眞心から云つた。駒口の失望が痛ましく見えた。

「いや、それはどうでもいゝ」と、彼れは疑惑に包まれてゐたが、やがてソワ〳〵立上つて、

「君にホッかれたかな」と繰返して、玄關へ出た。馴染の自働電話へでも行くんだらうと思はれた。

その夜私は江戸川端を散歩して、眠氣差すのを待つて、寂しい塒へ歸りかけると、坂の途中で、駒口の白い顔が薄闇の中に見えた。一寸寄つて行くよと云つて、二三時間落込んで話したが、その話は何時ものやうに浮いてゐない。思詰めた身に染むやうな調子だつた。

「僕は今彼女に背かれてもしたら、終生只獸の一字あるのみだ」

「又外の女を捜せばいゝぢやないか、女は幾らでもあるんだし、君は女に親み易い性分だから、直ぐ出來るよ」

「いや、さうでない」と、駒口は口元に力を入れて首を振つて「僕は一人の女に愛情でも財布でも投出してしまう人間だから、手易く外の女に轉ずることが出來ん。それに僕は歳を取つた、顔に艶がなくなつた、自信が次第に薄くなつたよ」

私は彼れの痩れた顔に薄い白粉のついてるのを見て、凄い可笑味を覺えた。そして七八年前に彼れが歯醫者の玄關の姿見の前に立つて、自分の顔に見惚れたと云ふ話を思出した。以後七八年、彼れが前の戀人と幸福な月日を送つてゐる間、私は見惚れる何物をも持たず、獨り心の中に憎々しい思ひのみを積ん

て來た。

「長らく交つてゝも、僕には君の心持が分らんよ」と、駒口は平生分り切つてゐる筈の私の單純な性格を兎や斯う考へてゐた。

ストリンドベルヒの「債鬼」の畫工の憐れさと、教員の憎さとをも語つた。イヤゴー、ヘッダ、八右工門などの批評もされた。して見ると、梅忠の芝居を演ずるには、差詰私は八右衞門の役を振當てられるのだらう。

駒口が嘗て、「君と青山とは一生岡惚れして終る男だ」と云つたことを、私は思出した。

その翌日は社に呼出された。公使が私に會ひたいさうだからと、主筆の名で通知が來たのである、私は電車に乘る前に自働電話へ寄つて、かの女を呼出した。

「お前が返事を出さんのを僕の所爲にして、昨夕駒口さんが大變怒つてたよ。おれはいゝ面の皮だ、何もしないのに邪魔物のやうに思はれて」と、さも困つてるらしく云つた。

「本當にどうしたらいゝんでせう、昨夕留守に駒口さんが來て、置手紙をしてるんですが、それに今夜是非家へ來い、來なければこれつ切りの緣だと書いてあるんですよ」

「ぢや行かなくちやならんよ、さうしないと僕が困る」

一時間後公使と火鉢を隔てゝ語つた。その顏は前社長に生寫して、目元には愛嬌があつて、何處にも刺がない。打解けた親しい口調で、世間話や西洋文學の話をした。嘗て名前さへ聞いたこともない最近の佛蘭西文學者の消息をも語つた。ゾラの未亡人には度々會つたが、極く質素な人だ。オクタブミルボーといふ男は面白い男で、此頃は自働車を買つて乘廻してゐる。ルネバザンの評判は大したものだつたが、此頃は下火になつた。

「日本の文學も大分變つたやうだが、我々が讀んで面白い小説があるか知らん」

「そんな大小説はないやうです」

「しかし小説は大抵言文一致になつたやうだね」

「えゝ」

「言文一致では誰れが巧いんです」

「皆な描いやうです」

「社でも懸賞で言文一致の文章を募集しちやどうだらう、文學奬勵のために」

「えゝ、△△新聞としては結構な計畫だと思ひます」

「今言文一致體の小説家として、誰れが一番有名なんです、西洋では三十前後で一流になる人が多いが……」

「評判はまち〳〵だから誰れと云つて一人二人取出すことは出來ませんが、この新聞に出してる「家」の

作家には私などは最も敬意を拂つてゐます」

「さうかねえ」と、公使はテーブルの上の新聞を引寄せて所々讀みながら、「忙しくて續けて讀んでゐないが、この人の文章には同じ事の繰り返しが多い。……『と斯う三吉は云つて』といふやうな文句はなくつてもいゝやうに思はれるがね、それに言文一致では物の形容などに困るだらう、美人にしても景色にしても」

「さうですとも、私など殊に文辭に乏しいから、物を書く時には、絶えず美文資典か何かを側へ置いてゐます、紅葉山人は古人の書物から名文句を寫取つて備付けてあつたさうです」

「さう云へば露伴はどうしてる此頃は」

「よく知りません」

「坪内逍遙や森鷗外は何か著述をしてゐるのかね」

「飜譯や創作を盛んにやつてゐるやうです」

「この新聞にも少し書いて貰はうぢやないか」

「しかし頼んでも容易に書いて頂けんでせう、それに私は訪問が嫌ひですから、原稿の催促が出來ません」

公使は胸に垂れた縮緬の襟卷を撫でながら可愛く笑つて、強いて大家訪問を勸めもしなかつた。

「私の受持の方面の御意見を、成べく早くお定めなすつて下さい」と、私は廻り遠い話を避けて、手早き結論を求めた。

「僕の意見よりも君達の意見を聞きたいんだよ、兎に角二三日内に君の改革案を書いて出して呉れ給へ」

「しかし私が編輯すれば、どうしても私の色がつきます、片寄つてゝもそれを取去ることは出來ません」

「それは誰れにしても止むを得んことだ」と、公使は再び西洋文學の話に耽り、ゾラの「夢」の批評も出た。

暫らくすると主筆も呼寄せられて、社の宣言書の起草を命ぜられた。私は立上つて玻璃越に、空風に吹亂されてゐる下界を見下しながら、公使の命令を聞いてゐた。指定される顧問や賛助員の名前は、私に改革後の新聞の色合を朧ろに思ひ浮べさせた。主筆は一々書留めてゐたが、屢々筆を擱いては編輯室へ驅付け、電話口へ走り、息も忙しさうだ。

「一先極りがついたら、君も暫らく休養したまへ、溫泉へ行くか、旅行でもして」と、公使は額に手を當てゝゐる主筆を見て、笑顔で云つた。

「え、是非さうさせて頂きます」珍らしく主筆の聲に力が籠つた。

二三度書直された草稿の略出來上つた時分、戸外は薄暗くなつた。私は駒口の事を思出して歸仕度してゐたが、

「汁粉でも御馳走しやう」と、公使の聲が掛つたので、再び椅子に寄つた。主筆は呼鈴を鳴して小使を呼んだ。

二三人新顏も加つて、汁粉待つ間に銘々の娯樂を語合つた。碁將棊玉突テニスなどの話が盛んになつ

た。社に俱樂部を組織して娛樂機關を備へやうと公使が乘氣になつた。

「今の所、私には一つも娛樂がありません。この秋から銃獵でもやらうかと、河本君と相談しました」

と、私は問に應じて答へた。

「そりや惡い思付だ、娛樂に殺生をするのはよくない」と、主筆は身體を捩向け、「公使も中々殺生がお好なんですよ、白耳義にゐらつしやる時分は、毎日獵にばかりお出掛けになるから、御忠告すると、かうして身體を鍊ゑといて、一朝事が起つた時分に奮闘するんだつて、口實が立派過ぎるんです」

「ハヽヽヽ、しかし獵は趣味の深い者だ、殊に野鷄打が面白いね、野鷄といふ奴非常に敏捷な鳥で、コソッと音がしても直ぐに逃げてしまう、容易に近けるもんぢやない。所がこの鳥は鳴いてる時だけは、自分の聲に聞惚れて周圍の事を忘れる、そこが獵夫の着目(つけめ)なんだ」と、公使は初めて椅子を離れて後へ退き、空間を眺めながら身構へし、「かうして一二三と三足歩く、三足歩く間に鳥は鳴き止む、ジッと待つてゝ又鳴出す時に一二三と歩く。鳥の聲とこの足取がピッタリ合はなくちやならん、その呼吸が中々六ケ敷い」

「自分の聲に聞惚れて身を亡すのは面白い、その鳥は幸福な鳥だよ」と、誰かゞ云つた。

强い風が安普請の三階に突當つて、重役室は船のやうに搖れた。

私は久振りに夜の編輯局を見て、社員の辛抱力の强さを思つた。社を出ると橋向うのビヤホールへ、

つて、汁粉の口直しにハムサラダを食つて家へ歸つた。途々改革案を立てやうとしたが、心はその方へ集らないで、公使の野鷄打の身振や、駒口の戀人の風情ある姿が目の前にちらついた。

手索りにマッチを擦つてランプを點け、机の前に座つて二三服煙草を吸つてゐると、聞き馴れた足音が階子段を上つた。駒口は顏を赤らめて、「コレも來たよ」と小指を出した。

「見せつけられるんだね」私は思ひ思はれた男女の差向ひの話を聞いたことがないので、物珍しい氣もした「どう極つたんだい」と女の座るのを待つて訊いた。

「駒口さんがいろんな事を云つて疑ぐりなさるから、貴下の前でしつかり約束を極めたいんです」

「僕は證人は厭だよ、勝手に二人で極めるがいいさ」

「さうだとも」と、駒口は女が無用な事を喋舌るのを厭がつた。

「だけとよく極めとかなくちやならんと思ふわ」

「何を」と、駒口の言葉は鋭かつたが、直ぐに目顏に媚を浮べた。

「私、自由を許して貰ひたい、たとへ家を持せて頂いても、さう毎日來られちや困るわ、」

「おれだつて仕事があるんだから、毎日行きやしないよ。今度は人の氣づかん所に家を持せて、誰れにも口外しないつもりだ」

「それがいゝ、君もこれて生活に張合ひが出來たんだから、心を落付けて勉强したまへ。僕はどうしても充分の慰藉は見つからんけれど、君はこの女（ひと）てもあれば、それて當分生活を樂めるんだから」と、私

は二人を見ながら、深く感じたやうに云つた。
「性格の相違だ、君は孤獨性が强いからだ」と、駒口は簡單に批評して、「近に家を持次第、君を何處かの洋食屋へ招待して、三人で飯を食はう」
「いや、それは御免蒙むらう、もう君の事件に關係したくない」
「隨分裏の裏まで見せて迷惑を掛けたね」と、駒口は欠伸をして、頻りに女を促して立上り、私をハムレットに對するホレシヨに比べながら階下へ下りた。
「ぢや、ふじちやん、僕はもう一生會はないよ、近々家も引越すんだし」と、私は見送りながらこれだけ云つた。

　一度纏つた話の又崩れたのか、翌日駒口は不穩の色を帶びて來て、火鉢を股で挾みながら、「女は反物の縞柄を撰好みするやうに迷ふから駄目だ」と忌々しさうに云つた。私は重ねて訊きもしなかつたが、芝居の豫想通りに運ばないのに飽足らなかつた。その夜女からの手紙に、
『駒口さんとのお約束は破談になりました。駒口さんは恐い方だと思ひます、貴下も御用心なさい。今朝樣子を紙に書いて、歸り途にお宅の格子戸から投込んでお知らせしやうと思ひまして、駒口さんに蜜柑を買ひに行つて貰つて、その留守に筆を執りましたが、駒口さんが急いで歸つて來たので、書く暇もありませんでした。今一度お目に掛つて委しい事をお話申したく存候』とあつた。

つて、汁粉の口直しにハムサラダを食つて家へ歸つた。途々改革案を立てやうとしたが、心はその方へ集らないで、公使の野鷄打の身振や、駒口の戀人の風情ある姿が目の前にちらついた。

手索りにマッチを擦つてランプを點け、机の前に座つて二三服煙草を吸つてゐると、聞き馴れた足音が階子段を上つた。駒口は顏を赤らめて、「コレも來たよ」と小指を出した。

「見せつけられるんだね」私は思ひ思はれた男女の差向ひの話を聞いたことがないので、物珍しい氣もした「どう極つたんだい」と女の座るのを待つて訊いた。

「駒口さんがいろんな事を云つて疑ぐりなさるから、貴下の前てしつかり約束を極めたいんてす」

「僕は證人は厭だよ、勝手に二人て極めるがいいさ」

「さうだとも」と、駒口は女が無用な事を喋舌るのを厭がつた。

「だけとよく極めとかなくちやならんと思ふわ」

「何を」と、駒口の言葉は鋭かつたが、直ぐに目顏に媚を浮べた。

「私、自由を許して貰ひたい、たとへ家を持せて頂いても、さう毎日來られちや困るわ、」

「おれだつて仕事があるんだから、毎日行きやしないよ。今度は人の氣づかん所に家を持せて、誰れにも口外しないつもりだ」

「それがいゝ、君もこれて生活に張合ひが出來たんだから、心を落付けて勉強したまへ。僕はどうしても充分の慰藉は見つからんけれど、君はこの女(ひと)てもあれば、それて當分生活を樂めるんだから」と、私

は二人を見ながら、深く感じたやうに云つた。
「性格の相違だ、君は孤獨性が强いからだ」と、駒口は簡單に批評して、「近に家を持次第、君を何處かの洋食屋へ招待して、三人で飯を食はう」
「いや、それは御免蒙むらう、もう君の事件に關係したくない」
「隨分裏の裏まで見せて迷惑を掛けたね」と、駒口は欠伸をして、頻りに女を促して立上り、私をハムレットに對するホレショに比べながら階下へ下りた。
「ぢや、ふじちやん、僕はもう一生會はないよ、近々家も引越すんだし」と、私は見送りながらこれだけ云つた。

一度纏つた話の又崩れたのか、翌日駒口は不穩の色を帶びて來て、火鉢を股で挾みながら、「女は反物の縞柄を撰好みするやうに迷ふから駄目だ」と忌々しさうに云つた。私は重ねて訊きもしなかつたが、芝居の豫想通りに運ばないのに飽足らなかつた。その夜女からの手紙に、
『駒口さんとのお約束は破談になりました。駒口さんは恐い方だと思ひます、貴下も御用心なさい。今朝樣子を紙に書いて、歸り途にお宅の格子戸から投込んでお知らせしやうと思ひまして、駒口さんに蜜柑を買ひに行つて貰つて、その留守に筆を執りましたが、駒口さんが急いで歸つて來たので、書く暇もありませんでした。今一度お目に掛つて委しい事をお話申したく存候』とあつた。

私はそれを讀んでから、急に思付いて、公使と約束の改革案を二三枚認めた。どうせ採用せれる見込みなしと定めて、主筆宛に「小生の地位は御自由に處分なされたし」と添手紙をして郵便で送つた。

翌朝身輕く鎌倉へ向つた。二三日沈默の中に過した。暖ければ砂の上、寒ければ火鉢の側に蹲んで、飯から飯の間を待つてゐた。駒口やおふじや公使は遠くへ離れて、最早心を煩はさうとはしない。螺旋は再び弛んだ。五日目の午後、

「東京から電話が」と女中に呼立てられて、社からの最後の言葉を聞くつもりで、電話口に立つと、主筆は慇懃に前口上を述べて後、公使が至急會ひたいさうだから成べく早く歸つて貰ひたいと云ふ。

「ぢや明日歸ります」

私はその電話を切ると共に、此方からおふじの家へ電話を掛けて呼出して、

「あれからどうなつたんだい」、心配だから要點だけ話して呉れと頼んだ。

「二三日前駒口さんが入らしつて、これ迄の手紙を殘らず持つて歸つたの。長々お世話になりましたつて、私もお禮を云つて別れたの。いゝでせう」

「さう早く別れられやしないさ、今に捻りが戻るだらう」

「だつて、私もうこの土地にゐないの、その事で一寸お目に掛りたいんですが、其處へお訪ねしちやい

けなくつて」

「……來てもいゝけれど、僕は急用が出來て今夜遠方へ行くんだから駄目だよ、何時東京へ歸るか分らんけれど、緣があつたら又會へるだらう。駒口さんにも會つたら宜しく云つて下さい、左樣なら」

私は駒口に離れたこの女に、何の興味をも持つてゐない。再び會ひたいとも思はない。

公使は私に向つてその受持の變更を知らせた。編輯よりも執筆して君の特色を發揮して呉れたまへと命じた。私は理由を明かにして公使の意見に逆らひ得なかつた。編輯者としての不適任は、幾年も前から自分でよく知つてゐるのである。しかし執筆者として私は何を書くんだらう、私は書くべき何物をも持つてゐない。公使は私の筆から何を豫期してゐるのだらう。模範的言文一致か、家庭の讀物か、文明の指導か。

私は明日は明日として、一先づ公使の命を奉じた。

翌日翌々日、爲すこともなくて心が腐つて來る。生活の鞭にさへ遠く離れてゐる身は、筆を執る勵みもつかなかつた。所在なさに折々社へ出ては、主筆に向つて、多年の言責を楯に啖呵を切つても見た。强硬に退社を申立てゝも見た。增俸をも迫つた。主筆は心で怒りながら、口では柔しく私を慰め私に媚びた。

おふじの媚に飽いた私は、主筆との似非元氣の論判にも飽いた。

もう何もない、何もない。
今夜又駒口君の詩化した戀の追懷談でも聞かされやうかい。（三月二十四日）

山路愛山主筆

獨立評論

四十三年第四號

目次

本號より下の通り記載の項目を定む。（一）時人論。現代の問題となりつゝある人物を研究す。（二）評論。現代の重要なる問題に就て記者の所見を開陳す。（三）訪問記。記者自ら一ケ月間、友人及び友人に非る人を訪問したる記事にして、現代の活きたる問題を活きたる人に依りて語らしむるものなり。其訪問の相手となる人には車を引く人もあり車に乘る人もあり。大政治家もあり。山中の坊樣もあるべし。一切平等なり。何れの所にも時代の血液の循環しつゝあるを見よ。（四）史論。古は猶ほ今の如し。今は猶ほ古の如し。本誌の史論は徒らに過去を語らんと欲するものにあらず、古今に通じて人事の通則を求めんとするものなり。（五）輿論。記者は嘗て何人の如何なる議論をも網羅して所謂輿論の何ものたるを知らんと勉めたることあり。今や此欄を再興す。寄書家の宿所、姓名を明記せられたるものにして、故意の讒誣、若しは猥褻に亘るもの丶外は其全文或は論旨を掲載して一も漏す所なかるべし。（六）思潮。本誌の思潮は T. Toe 君の擔任せらるゝ所にして其簡明の筆を以て精密なる論理を行るの手段は世自ら定論あり。（七）小說梗概。竹雨君の小說梗概には世間自ら異論なきに非ず。されど是れ概れ矮人觀劇の論のみ。小說の梗概を竹雨君ほどに書きこなすは決して易事にあらず。（八）其外詩壇に關する羽澤君の評論を掲載す。

四月三日發行

每月一回三日發行　定價壹部郵稅共金拾參錢
◎壹ケ年分十二冊金壹圓三拾錢▲外國ハ郵稅共金壹圓七拾八錢◎

發行所
東京中澁谷九百二番地
獨立評論社

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金八圓
一頁	一回	金拾五圓
表紙の二、三、一頁	一回	金貳拾圓
表紙の四	一回	金貳拾五圓

廣告一手取扱　神田三河町二丁目　博報堂

本號紙數倍加ニ付特價金四拾錢　郵稅金二錢五厘

郵稅拾錢（但清、韓兩國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢

以上郵稅共

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一 郵便爲替にて御送金の場合は**本郷西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東京東片町局**と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一 弊社振替貯金口座は**東京三十四番**なりこれにより御送金の方は**登記料貳錢**を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一 郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一 前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一 領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年三月廿六日印刷
明治四十三年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

クラブ
歯磨



姉妹品發賣

クラブ洗粉の姉妹品として三月中旬より發賣せる新化粧品とは何?

北米の歯磨より優る高等テンチフライス

クラブ歯磨

並に

日本白粉界破天荒の良品無鉛トイレット

クラブ白粉

との二種

即ち是れなり